

---

# Doors To The Another World

藍原 流星

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Doors To The Another World

### 【ZPDF】

Z0573M

### 【作者名】

藍原 流星

### 【あらすじ】

今日から大山第一高校に通う事になる俺こと大原拓真は入学式当日に思い切り寝過ごしてしまった。

学校に向け駆けていく最中、一人の少女と思い切りぶつかってしまう。

「大いなる風の精霊、シルフィード、我との誓約の下に標的を瞬く

間に切り刻め！ 真空の刃【エアカッター】！」

彼女は確かにそう言った。そして指差した。もちろん、何も起こらない。

その後、ソイツを無視して駆けていくが、ペア決めで再び会い、そのまま強制的にパートナーにさせられるわ、自室に戻れば態度が一変、スタンガンで強制的に襲われるわ、もう大変！

おまけにソイツこと大山香織は忽然と消え、自室にはさつきまで無かつた大きな扉が現れる。

好奇心のままその扉を潜り抜ければ、そこは上空一千メートルは下らない大空の中だった。

笑いあり、ハーレムありの主人公最強、並行世界を救う妄想まみれのファンタジー！

## プロローグ 大原家にて（前書き）

なんだかんだあって修正第一弾。後々の章も順次修正予定。

## プロローグ 大原家にて

ついに高校入学の当日か……。

俺は微睡む意識でそう思っていた、そんなこの家庭でもある瞬間を悉くぶち壊す闖入者が一人……。

「すーぱーいモーとぶれす！」

その声と同時に繰り出される微睡みに浸かっていた意識を完全に覚醒させるボディプレス、無論、黙つているはずがない。

「稜！　何度言え、お前は理解するんだ！　鳩尾に当たつてめちゃくちゃ痛い！」

「じやあ、あばら骨に当たつて、みーんな粉々つてのが良いのかな？」

と、とんでもないことをさりと口走る彼女の名は、大原おおはら稜りょう、俺わたくしの妹だ。

「それよりは鳩尾に当たつて、激しい腹痛の方がいいよね？　お兄ちゃん」

悪意が感じられないが、俺の為にしてくれているんだ、あまり文句は言つちやいけない。が……

「痛く無いよには出来ないのか？」

「何を甘つたれた事言つてんのー　お兄ちゃんー　これはね、すつごい痛みでお兄ちゃんこすつきり目覚めて貰おうとしているんだよ？　痛くなきやお兄ちゃん起きないもん！」

突如として声を荒げる棟、これは呆れるしかない。

ん？ 自分の寝起きの悪さを認めり？ ……知らん。

「ああ、そうかい、だがもつと平和的な起こし方は無いのか？」

「じゃあ、お兄ちゃんが起きるまでーーっとティーピキスしたりしちゃう？」

「いや、それは……、また機会があつたらやつてくれよ……」

「え、いいの？ やつた！ つて、ん？ ビーしたの？ お兄ちゃん？」

「いや、何でもないよ、うん」

はあ、なんて女だ……いくら俺しか愛せない、俗に言つ巴拉ザーコンプレックスとか言つやつだつたとしても、ここまではされるとするがに……いや、何でもない。

はあ、過去に起きたことを、記憶を整理しようつと。

何故かムラムラした感情を落ち着かせる為に。

時は少し遡り、十年前。

その時はまだ孤児院のお世話になっていた頃だ。

孤児院にはさらに一年前に、両親が交通事故で死んでしまい、養う人物がいなくなり餓死寸前の俺達をお隣のご老人が見つけて、しばらく養ってくれたが、やがてご老人方も亡くなり、近くの孤児院に引き渡された。

で、ある時その孤児院で事件が起きた。

孤児院の子供、そこで働いていた人が皆殺しにされたのだ。俺達は何とか生き残ったが俺の兄が殺され、妹を守る為、額に一生残る傷を負つた。

それからはあまり覚えていない。

まあ、こいつだけでも守つてみせる！ って心に決めたことだけは覚えているんだがな……。

で、彼女を安全地帯から一步も出でずひたすら通信教育を続ける毎日、休み時間には俺がありつけの愛情を注いだからな……、ブランコ娘になるのも仕方無いのかもな……。

「…………ちゃん！ お兄ちゃん！ どうしたの？ ポーっとして」

「あ、ああ……、昔の事を思い出していた」

不安そうな稜の顔が綻び、満開の笑みが咲き乱れる。次いで稜が顔を胸に預けてくる。

俺は優しく頭を撫でてやる、すると稜は我慢できずに唇を軽く重ねた後に、抱きつぐ。それも拒まず抱き締めてやると、すっかり安心しきった声で過去を振り返る。

「…………あの頃は大変だったもんね。それにしても、もう8時半なんだけど？」

いきなり素つ頓狂な時刻を口走られ、俺は驚き時計を見る、見事に8時半を指していた。

「おっ、おい！ なんでこんな時間になつていいんだよ！ 5時に起きたんじゃないのかよ！」

「それなんだけど、あまりにもお兄ちゃんの隣りが気持ち良くて目覚まし時計のアラームに気付かずに寝ちゃった！ 私、寝坊しちゃつたね」

彼女は「てへ」とか言って、誤魔化そうとしている、俺は完全に絶望した。何故なら絶対に遅刻するからだ。

「でもでも、朝ご飯はしっかり食べてもらひからね？　だつてお兄ちゃんがだい好きだもん」

「それは無理だと思うな。うん」

「なんでだよおーお兄ちゃんのい・け・ずー！」

？

「……お前はたまに俺ですら意味の分からんことを言つて困らせる。ま、それが稜の可愛い」ところだけどな。……よし、じゃあな、稜、行つてくる。元気にしてろよ？」

俺は離れてくれた稜にキスをして、うんと抱き締める。

そのあと急いで着替え、食パンを頬張り、玄関の前で見送る稜の少なくとも三年間は味わえないであろう胸の感触を手のひらで存分に味わった後、新しい学校、大山第一高校に向かつて猪突猛進の勢いでひた走る。

俺の激動に満ちた、高校生活が始まろうとしているのだ。

## プロローグ 大原家にて（後書き）

どうだったでしょうか。

次回から本格的に始動し始めます！ お楽しみ！

## プロローグ2 美少女との出会い（前書き）

注意！

この作品にはちょっとぴり過激な表現がありますが、決してR - 15 ,  
18作品ではないと思います。

## プロローグ2 美少女との出会い

とある街道、現在の時刻は推測して8時45分、三人組の女生徒とすれ違つ。

「わやあー エッチ！」  
「いやあーー ヘンタイー！」  
「なんてこと……ー」

その際発生した風でスカートが捲れたのだから、ドリル巻きの女生徒を筆頭にざわざわいざわい騒いでいるが、

「すまん！ そんなつもつはなかつたんだ！ 僕は急ぐ！ またなー！」

と軽く詫びを入れて再び駆け出す。

「ちよつー ハラフー 待ちなさいー！」  
「待て！ へんたいー！」  
「女生徒の敵！」

ふう、危ない、危ない。ああ言つのはすぐに離れるのが無難だよ、全く。パンツなんかにゃ興味ない……よ？

その他に、色々と考え事をしていると、曲がり角で謎の美少女とすげこ勢いでぶつかつた。

「いつたーいー ちよつとー 汚付けなさいよなー 平凡のくせに、生意気なのよー」

「「つるせえ！それはこっちの台詞だ！なあに貴族ぶつてるとか分からんが、曲がり角にさしかかつたら一度は確認しやがれ！」

自分はどうなんだって言つシッ ロリは禁止ね。

「「つ、つるせい！ つるせい！ つるせい！ いいわ！ こうなつたら貴族の……じゃない、私の恐ろしさを思い知らせてやるわ！」

うわあ……、また変なのに出逢つちまつた。今度は俺でもわかるオタクカラノベ中毒者かよ。

「……今、私をオタクだなんだと思つたわね？」

鋭つ！ 心読んだんじや……？

「あ、さあね？」

明らかに動搖した。読んだ。読みました。超能力者いました。

「バレたら仕方ない、始末するわ！」

えええええ！ ま、マズい！ 殺される！

「大いなる風の精靈、シルフィード、我との誓約の下に標的を瞬く間に切り刻め！ 真空の刃【エアカッター】！」

彼女は突然俺を指差す。俺は反射で身構える。しかし何も起こらな  
い。  
当然だ。こんな魔法も超能力も無い世界、何か起きたほうがおかしい。  
彼女は「ああ、昨日アニメ見て寝てなかつたんだつけ」と呟くと、

「ちらりに近づき一言、「ムカつく！」と、大胆にも水色の下着をさらけ出しながらのかかと落としを俺の脳天に喰らわせる。意外と強烈な一撃に混乱しそうになり、狩猟本能が表にでそうになる。

「てめえ、何しやが　」

「土下座」

俺は一瞬だけ、ほんの一瞬だけ思考回路が全停止する。

「もう一度言つわ、土下座しなさい。五秒以内にしないと次は蹴りが飛ぶわよ？」

怒氣が籠もつた謎のオタク少女の言葉に俺は訳も分からず、土下座した。なのに強烈な蹴りが飛んできた。

「何で蹴る！　土下座しただろ？！」

「土下座してなさい！」

オタク少女はそう言つて土下座している俺の頭を踏みつける。

……泣かす！　後で絶対泣かす！

「何故つて言つたわね？理由は五秒たつたし、なによりパンツを見られたからよ」

「2・5秒しか経つてねえよ…　それにパンツも…」

そこで俺は口ごもる。脳裏に鮮明に浮かび上がる水色の下着……。よし、ここは沈黙で通そつ。

「パンツもなんだって？」

「…………」

「パンツは？」

「…………

「パンツはー！」

……ダメだ、これ以上沈黙を続けると殺される……死にたくない俺は決心して真実を話す。

「…………見ました」

「あれ？ 何かしら？ 何かの声が聞こえるわ」

そう言つてるお前の足はさつきから俺の足をぐりぐりと踏みつけているがな！

「それはかかと落として攻撃したあなたが悪いと…………あべしつ！」

「あれ？ なんか空から声が聞こえるわね」

「いだい！ ちがうちがう！ 下！ 下！」

「蟻は黙つてなさい！」

言下、オタク少女の踏みにじる力が一段と強くなつた。

「ギィヤアアアアアアア！」

「くたばつたら遅刻するわよ？」

そう言いながら、美少女は頭、主に後頭部を蹴りまくつている。まさに殺りたい放題である。終いにや殺されるぞ……。

「分かつてん！ 分かつてんから！ 蹴るな！ ……ええいーこれでも喰らえー！」

頭に来た俺はさつきから蹴りまくつてる足を掴み、そのまま引っ張る。バカ女は案の定、倒れる。そのまま追撃しようとしたのにのし掛か

ると、これまた案の定、蹴り飛ばされる。

「ふん！ 私にのし掛かろうなんて平民！」と我が百万年早いのみ。

「誰が平民じゃクソバカチン！」

すぐさま飛び起き、制服に付いた砂を払つて走り去つとした、その瞬間、またしてもあの声が聞こえてきた。

「あーっ！ スカート捲り魔、発見！」

「下着覗き魔でもあるわ！」

「全校女子生徒の敵！」

はあ、さつきのあはずれ共だ……。

「本当に捲ったの？ ヘンタイ」

「やつた前提で話を進めるな！ やつてないから！」

香織にその時の状況を説明しようと思ったが、この状況じゃ何言つたって信じて貰えないだろう。

「覚悟しなさい！ か弱き乙女を傷付ける輩は！」

「月に代わつて」

「天誅する！」

彼女たちは、皆それぞれの方向からドロップキックを繰り出してきた。

「ちよつー まつひー 誤解だー！」

「「「問答無用ー」「」」

いや、避けようと思はば避けれたのだが、かわせば何か嫌なことが起こりそうだし……、受けようか、かなり痛しそうだけだ。

「ギィヤアアアアアアア！」

そのまま、色々な部位に当たり、俺は呆氣なく悶絶した。予想通りの結果だった。

## 第一章 始まりの扉（前書き）

注意！この作品はちよつと過激な表現がありますが、決してR-15・18作品じゃないと思います

# 第一章 始まりの扉

おこづかやん、今日もこつぱこつかうひしてくわる約束でしょ？

なあに、まだ5時だから寝たいだつて？

もう、そんなねぼすけなおこにこぎんたほお仕置をしなぐりき

卷之三

からね、ちやつ

う、お口にぶつちゅう、ってやっても起きないなんて～！

三

「...拓真！いい加減、起きなさい！」

「うわー、お、おせむりやります。あなたは誰ですか？」なん

「大山香織よ、よろしく」

二子、井ノ瀬流の寺子屋は題詠を着て

いや、よく考へるとみんな制服を着てゐる、つまりここは学校か。さすがは大山第一高校、と言つた所か、なかなかデカい体育館だ。その体育館は煌びやかな装飾をされてゐる、これがアイツの言つてたペア決めパーティーか。

ג עיר

「なんか言ったか？」

別に何も

あつそ、とつぶやき再び辺りを見回す。  
さつきからわいわいがやがやとパーティーらしくざわめきが続いて

いるが、そのほとんじが口説き文句なのである。男も女もみんな求愛している。

下らん。それが俺が最初に思つた事だ。まあ、羨ましくないって言えば嘘になるが。

「どうしたの？ 女を口説きにいかないの？」

「ああ。下らん、面倒、興味なし」

「つまり、あんたは金が欲しいのね。よくこるわ、そんな人も。これは異性も金も手に入れられるからね。欲望にまみれた学校つて言つても過言じやないわね」

「そりゃ、流石は現代社会を完全に引っ張つている大山財閥が作つたとされる学校、やることなすことハンパないな。あ、まだ名乗つてなかつたな、俺の名前は大原拓真、拓真つて呼んでくれ、でもつてあんたはどう呼んで欲しいんだ？」

「呼び方がわからないからつてあんたは無いでしょ。香織でいいわ」

「そりゃ、よろしくな、香織」

「ええ、よろしくね、拓真」

俺は、香織と固く握手を交わした。香織曰わくこれがパートナー契約の一一番控えめな表現らしい。

ちなみに、一番過激なのは……俺の口からは言えないことだ。

次の瞬間、不意に香織が引き寄せる。

そのまま俺は香織に抱かれる形になつた。

「えー？ エエエツ！？」

「あら、これだけで慌てちゃつて。可愛いわねえ」

「う……、うるせえ！」

香織はにやにやと笑い始めた。

……なんだろ？、凄く氣味悪い。

「ねえ、あなたに妹つている？」

「こるよ、それがどうした」

香織は「ふーん」と呟き、にやにや笑う。一体、妹がどうしたと言うんだ。

「ま、いいわ、って何やつてんの？」拓真

香織は自分から抱き寄せたくせに突き飛ばした、俺のせいにして。  
……理不尽も甚だしいと言つものだ。

「それにしても一樹の姿が見えねえなあ、一緒に高校に進学したん  
だけどなあ」

「一樹？ 一樹つて大山一樹のことでしょ？」

「ああ、そうだが、ってか、何で知つてんの？」

「同じ家に住んでいる家族みたいなものだからよ」

……へえ、そうなのか……ってええ！？

俺は驚きで田を見開く。

「うふふふふ。それより挨拶に行つてらっしゃい、その内に荷物を  
移しておくれ。見られたくないものもあるし」

「……そうか、じゃあまた後でな」

香織は自分の部屋に駆けていった。

そう、この学校は全寮制なのだ。

しかも、ペアとは絶対に一緒に生活せねばならないのだ。女と同居。  
面倒だし、ありえない。

そんな風に俺が悩んでいると、五人の集団が現れる。

「あつ！ 拓真さん！ お久しぶりです！」

「本當だな！ 拓真！」

「会いたかったわ！ ダーリン！」

「久しぶりだな、拓真」

「…久しぶり」

上から田野桜、大山一樹、谷川真理亞、榎原海斗、森野愛子だ。  
コイツ等は中学以来の友人だ。

特に真理亞なんか……、いや、今は止めておこう。思い出しただけで自己嫌悪に陥る。

「おお！ お前達か！ 久しぶりだな！ いやあ変わつてないなあ！」

「そんな！ 拓真さん1ヶ月じゃ何も変わりませんよ」

「そうか、そうだったな！ ハハハハハ！」

こつして五人と雑談に花を咲かせている内に時刻は六時を回った。

「おつと、もう行かなきゃ」

「そうか頑張れよ拓真！ 僕達はいつもお前の味方だからな！」

「おーい香織い！ いるかあ！ 入るぜ！」

しかし中には誰もいない。しかし、荷物は俺のも含めて片付けてある。トイレにでも行つたのだろうと思い、部屋に入る。  
と、同時に扉が閉まる。扉の鍵は掛けられ、そばには、香織もいて、  
その手には、スタンガンが持たれていた。

「そ、それってスタンガンだよな？」

「そうよ」

「シャレにならないよそれ！　今すぐその物騒な物を捨てろ…」

しかし、香織は「ヤーヤ笑うだけで、捨てよつとしない。

「いやよ。だつてこれは

」

香織はたつた三歩で近づき、抱き竦める。

「あなたの自由をいつましのよ~」

俺は必死で抵抗した。だが、香織の現実離れした力に全ては無意味に終わる。

「や、止める！　止めるんだ！　香織」

「お休み、拓真、良い夢を」

香織はその手に持っているスタンガンで俺の意識を奪った。

「くつそお……何だつたんだ？」

未だ痺れる体に鞭を打ちながら、辺りを見回す。

俺の部屋らしいが、正面にデカい扉がある。

その扉からはなんとも神々しい光が漏れ出していた。

「何だこれ？…俺の部屋にこんなのが、あつたか？」

いや、ある訳ない。だって光が漏れ出してるんだよ？  
こんな所に空間があるわけないし、あつたとしても光が漏れ出す程  
明るくないはずだ。

「じゃあどこに繋がってるんだ？」

宇宙？ 大空？ それともこことは違う世界？  
そう考えると自然と体が動き出す。  
好奇心がそうさせているのだろう。とにかく、入ってみたい。そんな気持ちに駆られる。

考えに考え抜き、謎の扉に入ることにした。

俺はゆっくりと扉を開き、入っていく。視界が真っ白く輝いた後に、地面が消える感覚に襲われ、大空が現れる。

「嘘つ……！」

俺は高度2000メートルから、真っ逆様に落ちていった。

## 第一章 異世界の竜使い（前書き）

注意！

この作品はちょっとびり過激な表現が含まれていますが、決してR-15・18作品じゃないと思います

遂に異世界進出！

これから拓真はどうなつてしまつのか！

## 第一章 異世界の竜使い

「そんなバカな事があるかよ！ う、うわあああーー！」

まさか好奇心が死を招くとは思いもよらなかつた。  
好奇心で開けた扉が天空に繋がつてゐるとは誰が思うだろ？  
誰一人思わないだろ。なにせ、現実では絶対に有り得ないからだ。  
そして俺こと大原拓真はそんな現実離れした状況で死に至らうとしている。

「ああ、俺は死ぬのかなあ、まだやり残した事が沢山あるといつのに。ああ、稜。なのに、これは無いだろ？」

はあ、もう喫くのやめよ。疲れる上に虚しくなる。  
にしても、何でこうなつたかなあ？ いや考へる意味無いか。だつて非科学的だからね。

そんな事考へてると地面が見えて來た。  
飛行機でも飛んでいるのかな？

そう思つたその時、何者かの咆哮を耳にする。

「ギィヤアアアアア！」

へ？ 何だあれ？ ドリフロン？

「ん？ あそこにはいる淑女諸君を助けたまえ！ 我が僕よー！」

おお！ 助けてくれるのか！ あのおっさん！ 何か女と間違えられてる気がするが、気にはしない、助けてくれ！  
そして、龍の背中に着地。

……やつぱり、エリのフトンタジーが眞面目に龍の鱗は固いな。

背中が痛いや。

「あ、ありがと」「やれこます！　おかげで助かりました！」  
「…………」

あれ、何？　この田線？　何か刺々しいんだけじ？  
俺が不可解な田線を感じたその時、龍使いのおっさんはとんでもない事を口にします。

「お前、女じゃない。落ちる」  
「はあ！？　何言つてんだよ！？　おひさんスケてんじやないの！？」

「ヌケてなどいない、自分は教師だぞ。お前が女の子だと思つて助けたのに……、はあ、女だつたらそのまま、下着姿にしてやつたのに……」

ええええええええ！　それ、性犯罪だよ！？  
しかも、教師て！　アカン、お前教師止めてしまえ。即刻！

そう思つてゐる最中、変態教師はむらにこんどもない事を口にします。

「落ちないんだつたら無理矢理にでも落とす」

もういいまで来たら人を辞めてしまつた方が良いと思つ。  
そして、変態教師は手をかざし一言。「レビテーシヨン」と呟くと、俺の体が重力のしがらみから解放され宙に浮いていく。そのままドラゴンの背から離れていく。

「落ちる」

変態ジジイがそう呟くと、俺の体に重力が戻り、また落ちていく。

「IJの変態教師！ 覚えてるよー！」

「男を覚える事など究極の無駄」

あの変態教師に“情け”の一文字はあるのだろうか？ いや、無い。あるはずない。

にしても、何なんだろうか、このファンタジーな生物たちは！ それに空飛ぶほうきやら絨毯やら、劇場版ドラ もんで見たような風景が広がっているじゃねえか！

「え、え？！えええええー？」

ふ、船が、飛んでるう！？ まるで、某ライトイノベルみたいじゃねえか！

「てか、迫つて来る！ うわ！ うわっ！ 止まれえ！」

すると、空飛ぶ船が何故か止まつたではないか！ この隙に……その時、轟音と何かが飛んでくる音、さらには、何かの影が迫ったため、その方向に振り向くと、絶望の厚い雲が心を覆つ。

「う、嘘…だろ？ 大砲撃つて来るなんて！ それも人間相手に！」

とか言つても状況が変わる訳じや無い。素直に落ちよつ。

「うおおおおおー当たつてたまるかあああー！」

爆音が重なる最中、俺はがむしゃらになつて落ちる。落ちる、落ちる、落ちる。落ちなきや弾丸の餌食になる。こんな半分ファンタジーな世界で死んでたまるか。

地面が眼前に迫る。なのにビリijoり、止まれない。このままだと死ぬ。

「うわああああああ！」

さよなら、俺の親友たち。さよなら、大山香織。俺、死にます。

「勝手に死なせないわよ！ バカ！ 烈風の息吹【ウインドブロー】！」

声が聞こえた瞬間、下から激しい風、確かに上昇気流が吹いてきた。そのためか、安全に着陸出来そうだ。

「・・・ってあれ？」

前言撤回。大怪我する。出力が足りない。

「おい！ もう少し出力を上げられないのか！」

「じ……ん……以上……は無理……よ」

風のせいによく聞こえなかつたが、言いたいことは分かつた。つまり、大怪我確定な訳だ。

「そんなの嫌だあああああ！」

そして、激突、全体に激痛が走る。

「いつつ……俺、生きてる？」

「ええ、生きてるわよ」

「そう……ありがとう……香織……」

「ちょつ！ 拓真！ へ……所さわ……き……へん……い……」

香織がギヤーギヤー騒いでいたが、ほどんど聞こえぬまま気絶した。

## 第三章 拓真の火炎魔法（前書き）

本文が長くなりました。  
まあ戦闘シーンあるから、仕方ないよね。

注意！

この作品では、ちょっとびり過激な表現が使われてあります、  
でも、今回はちょっとびりどころじやすまないかも。苦手なひとは田  
次に戻つて、次の話から読もう。

VS香織！魔法を使う相手に拓真、絶対絶命！？

## 第三章 拓真の火炎魔法

……誰かの声が聞こえる。頬に痛覚を感じる事から、俺は死んでないのか、良かつた。

さて、今、頬をペチペチ叩いてるのは恐らく香織だろう。アイツのことだ、しばらくして起きなければ殴つてでも起こすだろう。そろそろ起きなければ。

「……！ たくま！ 拓真！ 気絶しないで！ セめてその穢らわしい手を離してから気絶しなさい！」

「……、人様が気持ち良く気絶しようつて時に、なんだ？」

「違う！ アンタは人じやない！」

なつ……、まさかの人権損害発言！？

「はあ！？ どうからどう見ても人だ」

「あんたは私の奴隸でしょ！」

俺は言葉を失つた。あまりのバカバカしさに。

いつ俺が私有財産になつたんだ。

「それにして、俺がいつお前の奴隸になつたんだ？」

「私とパートナーになつた時よ、奴隸君」

……理不尽過ぎる、そんなバカなことが許されるのだろうか？ いや、許されない。もう捕まつても仕方ないのである。

「捕まる？ ナメンじゃないわよ。私は天下の大山財閥、その跡取

りの大山香織よ、警察なんてナンボのもんじゃい！」

「ああ、金持ちだったのね、なら今までの理不尽さも納得がつく。  
金持ちに口クな奴はいないって言つのは本当だったのか。  
香織も、「あ、言つちゃつた」みたいな顔してゐる……。

「今のはその……、そうだつたら」「

「嘘吐くの下手すぎ、それに、スタンガンのこと

「それは忘れなきや、だ・め・よ?」

「はい、すこいませんでした」

香織の笑顔に、どす黒いものが漂つていて……、恐ずぎる……

「しかも、アンタはいつまでお、押し倒してるの？　いつまでその穢らわしい手は私の神聖なる胸をこじら、手で包み込むように、もみじやない握つてんの？　こゝ、こゝのくンタイ……」

「馬鹿馬鹿しい、俺がそんなことなど……おふあ……」

香織は俺の股間を蹴り上げる。無論、俺は悶える。

「て、テメエ！　何す」

「誰に向かつて、『テメエ』つてこいつらのかしら？　奴隸のくせに生意氣よー」

香織は俺の顔を某ライトノベルのメインヒロインのように踏みつける。その時に制服のスカート丈が短いからか、ちりりと水色のストライプの下着が……つてあれ？　今、踏みつける強さが強くなつた気が……。

「……今、アンタの目線が私の水色のしましまにぶつかった気がす

るわ。見たわよね？」「

「……すまん」

「はあ！？ 私のスカート覗いといて『すまん』で済ませるつもりなの！？ 有り得ない！ 傍観料払いなさいよーー！」

さつきからげしげし踏みつけっていた香織の足は俺の顔を蹴り飛ばす。『てめえ！ 何すんだ！』と言つまえに、どす黒い『殺氣』というオーラが俺の背筋を凍らせる。  
いや本当に冷気が漂つているんじや……？

「女の子って怒らせると恐いんだよ？ 特にスカート覗いといてすまんで済ませるくせバカチンには情けなんて掛けないから」

直後、春なのに凍えるように冷たい風が吹き荒び、水晶のように透き通った氷の竜が香織の足元から飛び出し、頭上で蟠局巻いている。そのときの顔は驚くくらいに笑顔だ。香織は怒れば怒るほど弾けるような笑顔になるらしー。

「パンツさえ見なければ、ごめんなさいですんだかも知れないのにね……」

嘘だ。下着を見ようが見まいが凍殺するつもりだ。もうここまでキレたら逃げるしかない。逃げなければ生き残れない。俺は香織に背を向け、走り出した。

「やつこなくつちやつまらないわ

香織は不敵に笑っている、気味が悪い。

「我と契約せし大いなる氷の巨竜よ、わが声に応えよ。今こそ、そ

の姿我に示せ！ 吹雪の巨竜【ブリザード・ドラゴン】！

言下、香織の足元の魔法陣が一際強く輝き、そこから何体も氷の竜が追加で現れる。

その氷の竜は俺に猪突猛進の勢いで襲い掛かる！

「ちよつー！ まつー！ マジかよー！」

俺は焦りからか、派手にすつころぶ。それが幸いしてか、俺の前で轟音と共に巨竜が氷塊に変わる。あ、ありえねえ…

「運が良いわね。でも、次は外さないわよ！」

香織が俺に向かつて指差せば、一匹の氷竜が襲つてくる。退路を塞がれた俺はとっさに前転してかわす。まさに紙一重つてとこりだつた。

「さあ、お仕置きの時間よ、奴隸君。凍つて頭を冷やしなさい！」「悪いが、女に殴られて喜ぶほど変態じゃないんでね、香織。テメエに一発、拳骨を見舞いしてやるよ」

「だつたの一発よけただけで調子に乗らないで」

この時、香織は初めて怒りに顔を歪ませる、そして四方八方から氷の竜が襲いかかる。  
それをなんとか避け続ける。

「ええい、ちょこまかとうやつたー！」

魔法陣が更に強く輝き出す。氷竜の一秒」との射出が理不尽な程に増える。

それを避け続ける途中、氷の竜が右手を掠り、右手が氷に包まれた

が、気にせず駆ける。

「ワケのわからん魔法みたいなの使つてんじやねえぞ、コリ！」

氷に包まれた右手を香織に向かつて振り抜く。しかし香織は後方に飛び退き空振りに終わる。

何か冷氣を感じ、ふと上を見上げると、四体の氷竜が上空から襲いかかる。

それを前転してなんとかかわし、再び駆け出そうとしたその時、右足が動かないことに気づく。

「げつ！ わつきの氷塊に足を取られたか！」

それを良いことに香織は氷の竜を約20匹放ち、四方八方から襲わせる。

俺は死を覚悟した。絶対絶命つてこのことを言つのか？

そう思つてゐる間にも、氷の竜は一斉に着弾し、俺を中心につす高い、水晶のように透き通つた氷山が出来上がる。

クソ、意識が遠退く。息が出来ない。このままじや……、死ぬぞ……。

嫌だ、死にたくない。俺にはまだ、やらなきやならねえ事があるんだ……！

“ならば貴様は力を求めるか”

はは、遂には幻聴まで聞こえるようになったか。眼前にだんだんと

黒炎が集まり、人の姿を成す幻覚も見えてきた。  
俺も、もう終わりか……。

“ 我は貴様を氣に入つた。圧倒的不利な状況にも関わらず立ち向かうその心、貴様をこのまま死なすのは勿体無い、貴様に我の力を少しやろう、貴様になら扱えよう、その資質を持つが故に”

黒炎から成す人らしきモノの手が俺の頬に触れる。  
幻覚なはずなのに感覚がある。分厚い氷山に閉じ込められているのにも関わらずだ。

“ 我が力を求める者よ、心の内にて我が真名を叫べ。我が名は冥王 ”

力を分けやがれ冥王、ハーデース！

心中でそう叫んだ後、全身が炎に灼かれるような痛みを感じる。次いで全身から激しい炎が吹きだし、氷山が一瞬にして吹き飛ぶ。

「信じられない！ 有り得ないわ！ 拓真が！ 蜥蜴魔法【リザードマジック】使えるなんて！」

“ 次に炎魔法の基本中の基本、蜥蜴の尻尾【リザードテイル】を教える。基本的に魔法は呪文【ルーン】無くとも放てるが、呪文があれば威力は上がる。右手を突き出し、我の言葉を輪唱せよ ”

「 古より伝説として伝えられし炎の蜥蜴よ、今こそ我に全てを燃やし尽くす尻尾を与えよ、蜥蜴の尻尾【リザードテイル】！」

突き出した右手が恐ろしい程に熱くなり、右手に炎の球体が現れた

直後、とてつもなく太い炎のレーザーとなつて正面10キロを焦土に変えた。

香織は魔法で弾いたらしい。焦土と化した住宅地の中、香織の周りは炎を放つ前の状態のままだ。

そして、香織は感嘆の声を上げる

「しかも、超高位魔法の一つ、蜥蜴の尻尾【リザード・テイル】を呪文付きで出すなんて！ カなりの魔力を要するはずなのに！」

「これが魔法か。頭が割れるように痛いがとても面白い、蜥蜴の尻尾【リザードテイル】」

言下、赤い魔法陣が香織に向けて突き出した手のひらの先に現れ、そこから、赤い一筋の炎が吹き出す。

「舐めないで！ 天馬の翼【ペガサス・ウイング】！」

すると、香織の背中から翼が生えてきて、その翼が香織を守つたではないか！

「言つとくけど、さつき留得したばっかの小手先の魔法じゃ、私に傷一つ付けられないわ！」

「ならば、獄炎の剣【インフェルノ・ソード】！」

「インフェルノ？ 当てずっぽうで言つたのだろうけど、それって高位魔法よ？ 超高位魔法【リザードシリーズ】を放つたら普通の人は100%打ち止めよ？ そんな魔力残っているワケないわ！」

「ごちや」「ごちや」「つるさい香織を無視し、手にとてつもない炎を纏う剣を想像する。

一瞬遅れて炎が手にまとわりつき、剣の形になる。

「出来たぜ？」

「嘘！ 有り得ない！ 私だつて魔力増強器五つ使って三回が限界なのに！」

「出来ちまつた物に文句言われてもなあ……。じゃあ、俺の番だ。  
『宮本流剣技』！」

そう言つと、俺は空高く飛び、剣を構え、

「秘式一ノ型『一刀両断』！」

そのまま振り落とす。普通の剣じや、間違いなく粉々になるため、宮本流剣技に正式には書かれて無いが、秘伝の書っぽい本には書かれていた型である。

妖刀を使つたのか、これを喰らうと例外無く真っ一つに叩き斬るまさに必殺の剣技なのだ。

手応えを感じ、そのまま地面に叩きつける、その時の衝撃のせいか、剣にまとわりつく炎のせいわからんが土埃が舞い、香織の姿を隠す。

しかし、さつき言つた通り手応えを感じたため、俺の勝利は確実だった。

「勝負あつたぜ！」

だが、そこには血痕一つ無く、アスファルトがひび割れていただけだった。

「あれ？ 手応えあつたのにな？」

「後ろよー 天馬の息吹【ペガサス・ブレス】！」

次の瞬間、俺は激しく吹く風に吹き飛ばされる。

「んならつー！」

掛け声と共にバック転の要領で、手を付き華麗に着地する。それと同時に天馬の息吹【ペガサスブレス】が襲いかかるが、とにかく一本目の剣を作り出し、一本の剣を盾代わりにして防ぐ。

「香織、最初に言つたよな？ テメエに一発、拳骨を見舞いしてやるよつて、実現の時だ」

一本の剣を炎に戻し、拳に纏わせる。

そして、例のダメダメ主人公みたいに炎の勢いで加速する。

「その高慢ちきな態度、叩き直してやるあー！」

香織の前で一回転し、威力を上げた後、香織に渾身の一撃を放つ。が、あっさり受け流される。

「あら、アンタそんなことも出来るんだ？ でも及ばない。全然及ばない。全てにおいてね」

突然ニヤリと笑う香織、その不気味な笑いに恐怖心を抱き、表情を強ばらせる俺。

「な、ななつ、なつ、何をす、す、すつ、するつもりなんだ？」

「慌てちゃつて、この笑いが恐い？ 不安？ そうね、そうかもね」

言下、香織は突如として俺をガバッと抱き締める。

大きく柔らかいナニかが自分の胸の中で潰れ、鼓動が数倍早くなる。

「えつ、ちょっと、なんで！？」

「ふふ、拓真、アンタのその意外とカワイイところを見たら下着見られたことなんかどうでも良くなつたわ。アンタの意外とカワイイところ、嫌いじゃないのよ」

「…………」

「だんまりか……、ところで拓真、アンタは魔力の回復方法知ってる……、ワケないよね。私のように心が満たされれば回復する人もいれば、アンタみたいに女の子にキスされれば回復する人もいる、覚えておいた方がいいわね……。拓真……」

香織の声音が変わったと思つた次の瞬間、香織の大きな胸が視界いっぱいに広がり、柔らかい感覚に混乱させられる。

「今だけなんだから、私の大きな胸に包まるのは」

それも落ち着き、明らかに母性本能全開な香織の母親な一面に気付き、少し涙が出てきた。

幼ない頃に亡くした母親のぬくもりに似ていたんだろう。俺は香織の胸の中で、いつの間にか眠つてしまつていった。

## 第三章 拓真の火炎魔法（後書き）

感想、表現指摘、アドバイス等ありましたら書いて下さると幸いで  
す。

特に、香織がどうしたら、シンギレットぽくなるか。  
是非お願いします。

## 第四章 大山家の豪邸（前書き）

また長くなりました。頑張って読んでくださいね。ヒロイン大量入荷しましたお好みのヒロインが見つかりますように。

注意！

この作品はちょっとびり過激な表現があつたり無かつたりします。苦手な人は気をつけて。

## 第四章 大山家の豪邸

「お……おお、おはよ、拓真、私の胸で赤子のよつて寝つて、気持ち良かつたみたいね！」

目覚めて最初に見たのは、香織の母性溢れる笑顔だつた。とりあえず辺りを見回すとそこは見たことの無い建物の中だつた。

「おい、香織、いじはどうだ？」  
「…………」

香織は正座してぶつぶつ言つてゐる。正座してくると音がうるさいが、膝枕でもしてくれたのか。

「あー、いらん世話焼かしちまつたな、すまない」

「別にいらない世話なんかじゃ無いわよ。奴隸の管理も主人の役目だからね」

言動の割には顔が赤い、どうしようもない狼少女なんだな、コンチクシヨウー、と血口を結し、凄く清々しい笑顔で言つた。

「ありがとう」

「べ、別に感謝されるようなことしてないわよ！　あんたを心配したわけでもないし、ただ人として最低限のことをしただけ！」

あー、うん……きつとラノベの読み過ぎなんだよな、うん。元々の性格はきっと、まだマシなんだろうな、きっと。

「なんか『シンデレヤツホーリー』って心の声が聞こえた気がする

けど

「言つてねえよ。で、こいつはどーだ？」

「私の家よ、広いでしょ」

全貌をこの田で見たわけではないから、大まかなことしか言えないが、それでも「ディズニーランドくらいはありそうだ。

「いいや、一倍や」

不意に後ろから、女性の声。

声のした方向へ振り向くと、赤い髪に赤い目をした二十代前半の女性が、タオルを首に掛けただけの何もかも見えてしまっている、本当にあられもない姿でこちらに笑いながら近づいてきた。

「おう、香織も面食いになつたもんやね、なかなか格好エエやつ連れてきたやん、はい、アメちゃん。ポケットン中沢山いれとくさい、後でじつくり食べたつてな。にしても、ホンマに格好エエやつやな！ 夜な夜な襲つてやろうかなあ？」

「そんな価値無いわよ、紅音姉さん」

意外とナイスバディな露出狂、紅音はニヤリと笑い、

「またあ、取られまことに嘘をつく、やりしに奴やなあ！」

と、俺の背中をバシバシ叩く。

香織も負けじと笑顔で背中をバシバシ叩く。

その状態で雑談を始めるから金持ちは驚きだ。その内に俺の我慢も限界に達し……。

「ぬうああ！ 叩くな！ その赤い髪の人も、叩く前に雑談

に興じる前に、服を着てくださいよ！ 服を！

「えー、エエやん、めんどくさい。それとも何や？ あたしの裸がエロ過ぎて直視できないんか？」

そう言つた直後、紅音は肩に手を回し、頬擦りをする。

意外と大きな胸を押し付けられて、混乱する思考、マズい……、色々とマズいよ？

「そういやまだ名前を聞いてへんかつたな、わいは大山紅音、水属性の魔法が得意な香織の一つ上の姉さんや。自分の名前はなんて言うん？」

「お、大原拓真、火属性」

「へえ、火属性か……、どうりで簡単に手込めに出来そうな雰囲気を醸し出していたんやな」

「はあ！？ 嘘だ！」

「冗談やで、冗談。アメリカンジョークよ。It's A Joke！」

わ、笑えねえ……、紅音のジョークは現実になりそうで怖い。

「まあ、彼は見たところ免疫がないと思うわ、だから」

「拓真が寝静まつた時にやると」

「ユアンスが違うぞー。紅音さん、ユアンスが違うからねー？」

「エエねん、これでエエねん、じっくりといったぶるようじじくつて、最後はこつてりと搾り切る。ちゃんと付いて来てえな」

……今日は眠れそうにないな。

「ところで拓真、あんた、突然火属性の魔法使い始めたけど、一体拓真の体に何が起きたの？」

「わかんね。さっき思い出そうと思ったが、全然思い出せねえんだ」

「ふうん、せえなんや……、そりゃあけつたいな話やね」

いやいや、けつたいで話をつけられても困る。

こっちは日常生活の中で突然、炎が噴き出す恐れがあるんだぞ、楽天的になれねえよ。

「おい、そこの香織の彼氏！ 今から俺が香織の彼氏に相応しいか確かめてやるよ！」

次の瞬間、俺の横に風切り音がなる。振り向けば、土塊の矛がすぐ後ろの壁に突き刺さっていた。

頬に生暖かい感触がある。血だ。

奇襲か、汚え手使いやがって。

左腕で頬に付いた血を拭い、両手に炎の迸る日本刀を想像、見事に成功し某狩猟ゲームのように構える。

「上等！ 返り討ちにしてやるあー！」

言下、斜め右上に向かって一回、斜め左下に向かって一回、刀を振るい、四つの衝撃波を放つ。

かなり奥で衝撃波が爆ぜた感じがした。

その後、奥から棍棒をもつた茶髪の女性が飛び付いてきた。

振り下ろされる棍棒を日本刀で受け、鳩尾目掛け蹴りを入れる。見事にヒットし、棍棒を持つ女性は吹き飛び背中から着地する。

女性は咳き込みながらも、よろける足取り整えつつ立ち上がる。

「一人とも、喧嘩は宜しく無いわね」

次の瞬間、階段付近から、黒い髪をしたスタイルの良い一人の女性が現れた。

「あなたが香織の彼氏さんの拓真さんね。ようしきね。私は大山楓。おおやまかえで類い希な闇属性よ」

楓はこやりと誘うような微笑を浮かべる。

「おいおい、楓の姉貴、邪魔しないでくれるか?」

「ごめんなさい、詩音。続けて、でも、家の中を壊したら、私の足の裏を舐めてね?」

そう言いながら、一ヤニヤ笑う楓。

優しそうな雰囲気と裏腹に、かなりのドSらしい。

「分かつたよ。俺の名は大山詩音おおやましおん、大山家の次女であり、土属性使  
いだ。岩石の衝撃【スパイク・インパクト】おおおー!」

詩音と呼ばれた女の足元に魔法陣が現れ、そこから岩石が現れ、襲つてくる。

辛うじてかわしたが、全身切り傷だらけだ。

「くっ！ 火炎の矢【ファイア・アロー】！」

俺の手のひらから、無数の炎の矢が、放たれる。全弾命中してもそんなに聞いてないような……

「当然だ！ 土は全ての属性の中で、一番打たれ強いんだぜ？」

「なら、獄炎の飛刃【インフュルノヒッジ】…」

俺は燃え盛る一対の剣を振るい、2つの衝撃波を放つ。零距離からの衝撃波に詩音とか言つたやつも驚き、服が少し裂かれる。

「富本流剣技、攻式式の型、『疾風怒涛』！」

俺は、詩音が装備していた棍棒を田にも留まらず速さで切り刻む。あつといつ間に切り刻まれた己の武器を見て、詩音は愕然としている。『まあみる。

「は、はははは！ 面白い、面白いぜー！ この俺と対等に殺り合える男がいたなんてな！ この世界も捨てたもんじゃないな！ だが、こいつからが本調子だ！ 土巨獣の棍棒【ヘビモスロッド】！」

詩音が手を横に翳すと、土氣色の棍棒が現れる。そして、ニヤリと笑った後に振りかぶる。

そのまま頭にクリーンヒット、地面に叩き伏せられた。

「ぐつ……がはつ…」

ダメだ、全身がピクリとも動かねえ……。

薄れゆく意識の中、ぎゃんぎゃん騒ぐ大山四姉妹、その会話を早く治癒魔法でも唱えろよ、と思いながら聞くことにした。

「当たつた……？ は、はは、ははっはー！ ど、どうだ、俺の必殺技、脳天かち割りのお味はよおー！」

「バカッ！ やり過ぎよ！ 頭から血を流しているじゃないー！」

「しゃあないなあ、わいが治癒魔法を掛けたるさかい、待つてや…？ あれ、傷が無い？」

まさか、まだズキズキ痛むんだけどね。  
でも体は動くみたいだ、起き上がつてみるか。

「ちょっ！？ 拓真！？ 大丈夫なの！？」

「ああ、頭が少し痛むがな」

「良かった……、心配したんだからね！」

「そうか、ありがとな」

「な、何言つてるのよ、ここここ、これはひ、人として最低限の心構えよ！」ふん！ とそっぽを向く香織、よく見ると顔が真っ赤だ。あれだろ、素直じゃない。うん、所謂、ツンデレだな。

「まあ、一人とも、立ち話も難だし、応接室に行きましょつか？」

にっこりと楓さんが笑う、他のみんなも行くよつな雰囲気だったため、俺もついて行くことにした。

「なあ、さつき詩音が言つてた『この世界』ってどういふ意味なんだ？」

これは応接室に入つてからの第一声である。俺が詩音と戦つた時に生じた疑問だ。

「あんたねえ、本当に空飛ぶ絨毯や船とか、ドラゴンが存在すると思つてんの？」

まあ、いるわけ無いよなあ、普通は。

「はあ、本当に二ついわね、本当に彼女持ちなの？」  
「そんな話した覚えないよ！？ それに、とうせ彼女いない歴＝年  
齡だよ！」

「えつ、あ、そうよね、こんなのに彼女なんているわけ無いわよね

アレ？ 何故だろ？ さつき香織、一瞬だけ態度がしおらしく感じたのだが……？ 気のせいだろ？

「おやおや？ 顔赤いで、何に顔染めてんねや、言つてみ？」

「拓真のことが好きだからこそ赤くなるんだよなあ？ 香織」

先程までタオル一枚で、今は辛うじて明らかに見せるタイプの下着を着けてる紅音と、今までボロボロの服を着ていてついせつき新しい服に着替えた詩音に茶々を入れられる香織。

「ちがう！ 好きじゃないもん！ お姉様は」

「ハイハイ、女の子特性、照れ隠し。本当は『拓真にハグハグ、ペロペロ、チユパチユパしたいの！』って思つてるんだろ香織？ 好きなんだろ？」

「詩音さん、有り得ないですよ、こんなにも嫌われているんですよ？」

今だつて、歯をむき出しにして、威嚇してゐるんだよ？

「お前、可哀想だなあ、彼女いなかつただろ？、一度も。本心読めてない」

「悪かつたな」

「だがもつ悩む必要は無いぞ！ 拓真、俺が彼女兼支配者になつてやるからよ」

俺は詩音にえもいわれぬ怒りを覚えた。

コンニヤロウ、ミスつたと見せかけて燃やしてやるつか。

「そつ怒らないでください。彼女はあいう人なので。お詫びと言つてはなんですが、私が拓真さんに愛を込めた口付けを  
楓が俺とキスをしようと抱き寄せようとすると、香織は割つて入り、  
引き離す。

「ダメ！ 私が許さない！ ファーストキスは渡さないわ！」

「おや？ 好きじゃ無かつたんやないの？ ファーストキスを奪わせ  
ないなんて、ますます怪しいのぉ」

「うぐぐ……でもダメ！ きつと倒れる、うん。倒れるわー！ 刺激的  
過ぎるもの

「では、お任せします、香織さん

「え！ わ、私が、拓真に、き、キス！？」

いきなり任せられた謝罪のキスに先程より酷く慌てふためく香織。顔  
なんか真っ赤だ。

「いいのですよ香織ちゃん、嫌なら私が口付けを交わすだけですか  
ら

ああ、止めてくれ。俺は楓さんとキスがしたい。俺はビアガラかと言  
うとオトナのおねーさんがすきだ。

「烈風の一撃【ウインド・ブレイク】」

香織がそう呟いた瞬間、香織からものすごい風が吹き荒れ、大きく  
後方に吹き飛ばされた。

……「冗談の通じない奴め。

「…………とつつけたような言い訳を……やります、私にキ、キスを

わせてください』

『……ちえつ』

『『ちえつ』『ひめづり』?』

「ううん、なんでもないわ。じゃ、任せるわね、香織ちゃん」

わつか、楓さんが舌打ちしたよつな……

「拓真」

「はい、何でしようか」

「気になるところがあるだらうけど、今は私だけを見て」

香織は耳まで、リンゴのように真っ赤になつてゐる。なんだか可憐ひ  
しいな。

「可愛らじいじゃない、可愛いの」

「やうでしたそ�でした」

「じゃ、じゃあ、キ、キスするわね。言ひとくけど、このキスには  
お詫び意外の意味は無いんだから、本當だからね！　こんな事が無  
い限り、キスなんてしなかつたんだからね！」

と、『じた』たと御託を氣が済むまで語り切へした後に、ざつともよ  
かつたが、お詫びとしてのキスを交わした。

最初は本当に軽く触れるだけのキスだったが、時が経つにつれ、緊  
張がほぐれたのか、一度唇を離し、意を決したように深呼吸し軽く  
目を瞑ると、今度は情熱的に唇を押し付けたり……。固いような柔  
らかいような色気に包まれて、息が出来なくなる。  
まるで一酸化炭素みたいに意識をゆつくりとだが、着実に意識を奪  
つてい、く……。

## 第四章 大山家の豪邸（後書き）

感想、アドバイスなど是非、お願いします。  
特に香織がどうしたらシンハイレッぽくなるか。

## 第五章 真理亜の潜入（前書き）

ついにR-15規定しなければならなくなつた。  
真理亜がえつちいからだ。まあ、いつこうキャラは物語を引き立て  
てくれる……気がするから。

ついに物語が動き出します。ちと遅すぎやしないかね?  
真理亜の艶やかなるスパイが誕生?する。

## 第五章 真理亜の潜入

一方、拓真達が元いた世界では……

「うーん、ここにもいないわね、ダーリン。とついでに大山香織ちゃん」

現在、大原拓真、大山香織は行方不明とされ、特に香織は全ての警察が総動員で捜索に当たっている。

それくらいの価値が何故あるのかはまたいずれ話になるだろつ。まあ大豪邸を持つてているのだから理由は分かるだろうが。

「それにしても、変な機械がいっぱいあるわねえ。町じゃ見かけ無いけど、一体何に使うのかしら」

藤宮真理亜は見張りにかなり厳重に注意しながら捜索していく。それから数分、ふと一人の警備員らしき人物の足音が聞こえてくる。周りには見たことのない機械が隙間なく並べられている。真理亜は隠れることすらままならず警備員に遭遇した。

「そこにはいるのは誰だ！」

真理亜はブラウスの胸のボタンを2、3個外す。胸の谷間どこかふくよかな乳房すら見え隠れしている。

色仕掛けで警備員を誘惑し切り抜ける策のようだ。

「あら、すいません。迷子になつたみたいで……」

「ここは立ち入り禁止だ故に最新鋭のセキュリティーシステムを採用しているんだ。どうやって入ってきた？ それに、その服は何だ

? はしたない

「そんなこと言わないでください。 私はあなたのよくないい男を落とすために一生懸命なんだから」

「い、色仕掛けでオトそうといつ魂胆か！？ しかし、自分にはきかないぞ」

真理亜はふうん、と言いたげに、イタズラっぽく笑い、警備員に自らのたわわと実った果実を景気良く腕に押し付ける。

「なつ、なな、何をする！」

「おや、とても動搖している」様子。下半身もこんなにしちゃって……、いやらしいお方、いつもやっているんじゃありません？」

レ

真理亜は右手の親指と人差し指で輪つかを作り、その中に左手の人差し指を入れたり出したりを繰り返す。

警備員は激昂し、真理亜を突き飛ばした。

「お、お、大人をからかうなよ！！ 撃ち殺してやる。侵入者を排除せよとのあの方の命令もあるからな」

「やれるものならやってみなさいよ。まあ、どうせ無理でしょうど」

警備員は怒りに顔を歪ませ懐から拳銃を取り出すと、それを真理亜に向け発砲。

最新鋭の拳銃より放たれた鋼鉄をも軽々と貫く弾丸が真理亜の胸に風穴を穿つ……、と思われたが弾丸は真理亜の手前数センチで忽然と消え去った。

警備員は突然の出来事に呆然としている。

「な……、何が起きてるんだ？」

「ナイショ。でもって、これはお返し。爆炎！」

真理亜がそう叫ぶと、警備員の数センチ前の空間が爆ぜて、警備員が軽く吹っ飛ぶ。そのまま警備員は気絶してしまった。

「しばらく眠つてなさい。全く、どうにもこつも、全然ダメ。ああ、ダーリン……」

真理亜はその場に横になり、下半身に手をあたがいビクビクと震えてしまつ。端から見たら変態としか思われないだろう。

「ああん、ダーリン……、もつと舐めてえ……」

真理亜は完全に発情して、拓真をやらしい妄想の相手にしていた。そんな中、再び足音が聞こえてくる。

数秒後、さつきの警備員とは違いか細い声が淫乱嬢の名を呼ぶ。

「真理亜、真理亜。藤宮真理亜。私よ。新垣愛子」

しかし、真理亜の耳には彼女の呼び掛けが耳に入つていない。真理亜は讐言のようにダーリンなどと繰り返していく。

「ダーリン、ひい、もつと、もつと奥……くああ……」

「……完全に彼女の世界にのめり込んでいる。しばらく放つておく

そう言つて愛子は何処からか分厚い本を持ち出し、読書を開始する。しかし、隣には嬌声と卑猥な水音を撒き散らす真理亜の存在。当然読書に集中出来るわけが無く……。

「…………」

「ああん、ダーリン、もつと激しくうへー。」

「…………」

「あはああ、そこ、そこがいいの、ダーリン、こつでもここの、いつでもだしていいからあーー。」

「つむるせーー！」

その叫び声は彼女には届く事はない。

彼女は頬を朱色に染め、かなり濃厚な妄想に入り浸っている。  
下着は絶えず滴る真理亜の謎の液体で完全に濡れそぼち、スカートまでびしょびしょになっている。

「イク！ ダメ！ もう我慢出来ない！ ひあっ、ああ、あああああっ！」

真理亜が絶叫する。愛子はたまらないといった様子で耳を塞いでいた。

「やっと終わった。しかし、真理亜に気絶して欲しくない。……、

覚醒の雨

真理亜の上に雨雲が生成される。その雨雲は真理亜に冷ややかな雨を浴びせる。

数秒後、真理亜のぐつたりとした態度が一変、シャキッと立ち上がり、深呼吸をする。

「いめんなさい、愛子、思いつ切り発情してたわね……  
「拓真が行方不明になつてから度々起こる……。それ程、彼との性交は心地良いものなの？」

「ええ！ もちろん！」

真理亜がそう言いかけた時、一人とは違う足音が聞こえてくる。数秒後、二人は警備員十数人と遭遇してしまつ。

「手を上げろ！ お前達は包囲されている！」

「あら、これまた物騒な人達、一人ずつベッドでお相手差し上げますわよ？」

「ふざけたこと言わない。真理亜の悪い癖。無駄な殺生は避けたい、大人しく身を引いて」

愛子の言葉に警備員十数人は激怒、大小様々な声で罵声を浴びせる。

「何を言つか！ 殺されるのは貴様等だぞ！ いいから大人しく手を上げろ！」

「あなた達に私達に触れることすら出来ない」

「ぐうつ……！ 撃て！ 撃てエエエ！」

その声に合わせ、大小様々銃声が響き渡る。

しかし、二人は落ち着き払つて一言一言呟く。

すると二人と弾丸の間に雪を伴つた風が吹き荒れ、弾丸を弾き飛ばした。

「あら、もう終わりかしら？ 情けないわね」

「……雪風壁」

そう愛子が呟くと、先ほどの雪を伴う風が、散り散りに成り行く包围網を囲むように吹き荒れる。

「あの水は……、仕方ない。凍烈風」

愛子は再び呟く。すると、真理亜の近くの酸っぱい匂いを放つ水溜まりが細々とした氷の塊になり、警備員達の様々な部位を殴打する。警備員は次々と倒れ、微かに動くことしかできなくなつてゐる。

「あら、もう終わりかしら？ 情けないわね」

「あなたは何もしない」

「あら、警備員一人を気絶させたわ」

「私の働きには及ばない」

二人がそうやって張り合っている中、隅っこで一人の中学生ひしき少年が怯えていた

「うわわわわ…」

「あら、そこの君、私とベッドで戯すことしない？」

「け、けけっけつ、結構です！」

警備員は真理亜に背を向けて逃げ去った。

「冗談の通じない人」

真理亜がそう呟くと、トランシーバーが音声を受信する。

「「ひから海斗、真理亜、応答せよ、真理亜応答せよ… どうぞ」

「一度言われなくても分かるわよ。で、そつちは何か手掛けかり見つけたの？」

「いや、そつちは何とも言えない状態だ。どうぞ」

「だったら連絡しないでって言つてるでしょ… 拓真がいるわけじゃないんだし！」

真理亜はくだらない報告に声を荒げる。  
どうやら拓真以外に興味がないようだ。

「だが、緊急事態が発生したんだ。どうぞ」

「つまらないことだつたら、本当に壊すわよ… こいつのトランシーバ

一

「人が沢山倒れてる。どうぞ」

真理亜はあからさまにため息を吐いた。  
拓真が見つかった。それだけを期待していたのに、それにかすりす  
らしない雑多な情報だつたからだ。

「興味ないわ」

「え？」

「最後に一つ、言つて良いかしら？」

真理亜はあえて怒りを押し殺した声でトランシーバーに声を送る。  
数秒して、ああ、と返答を聞くと、大きく息を吸う。そして一言、

「ダーリンが見つかつたつて言つ情報以外、いらないのよおおおお  
おー！」

と叫び、トランシーバーを叩きつけた。

流石は大山財閥が最新鋭の科学を集めて作つた代物、なかなか壊れ  
ない。

しかし直後に真理亜の十八番、鎗炎を繰り出した。

科学の粋を集めたトランシーバーも、科学の理を超えた力を受け、  
粉々に吹き飛ぶ。

「ああ、もうー。」いつも駄目、あつちはもつと駄目！ 何処に行  
けば良いのよーー！」

「もつと効率の良い方法は無いの？」  
「効率の良い……、ね……、あつ！」

真理亜の悩み顔が一変。満面の笑みになり、愛子も期待に目を輝か

す。

「やつよ、拓真の居る場所に異空間の扉を開ければいいんじゃないー。」

「そんなことが出来るの?」

「当たり前でしょ、私を誰だと思つてんのよ」

真理亜は愛子の顔が若干笑つたような気がした。

他人が見れば、特に変わつて無いと思われがちだが、これは愛子と長い間付き合つてきた真理亜だからこそ分かるような微妙たる顔の動きを読み取つたのだ。

「好きなのね？ 拓真のこと」

愛子は顔を俯かせる。

「やつぱつ。でも渡さないわよ？ 欲しかつたら力ずくで奪つてみなさい？」

愛子はまつすぐ真理亜を見て「理むと」 と答へる。

「ふふふ、本気みたいね。じゃ、ダーリン呼び出すわよー。呼び出す間は開けとこでね、愛子」

愛子の「了解」の声を聞き、真理亜は満足した様子で扉を潜つていった。

ふと、愛子が周りの様子を伺つ、周りには警備員が囮むように配置されている。

「真理田、拓真を連れて、早く来て」

「子は遠くなる真理田の畠中こそが言つた。

## 第五章 真理亜の潜入（後書き）

俺こと大原拓真は真理亜に連れられて元の世界に戻るのだが、そこで俺が見たものは次々と倒れゆく、一般生徒の姿と両刃の剣を持った教師の姿だつた。

次回、『拓真の帰還』

……と次回予告をつけてみました。

内容とタイトルは変更する可能性があります。  
感想、アドバイスなど是非ともよろしくお願ひします。

## 第六章 拓真の帰還（前書き）

お久しぶりです。R-18規制されないように頑張って書いたら、  
間が開きました。すいません。

今回は拓真が色々な所でハーレムに……大丈夫なのか？

## 第六章 拓真の帰還

はあ、異世界初めての朝……か。

情けねえ……、キスされて気絶して朝を迎えるなんてよ……。

それに、夢オチって訳じやあ……ない。一晩寝たら元の世界に戻つていると思つたのに……それに。

「何なんだよお前ら、下着姿で俺の隣に寝そべりやがつて……」

しかも、みんながみんなエロい下着……、確かにランジHリー？ ベビードールとか言つのもあるよ……。

うう……、健全な男子高校生の田には毒だな。

「うう……、中に出すの？ タップり出して、私を孕ませてよねー。」

香織の夢の中でナーやつてんだよ、俺。

只今の時刻、6時55分。

いつもは稜にぎゅっとされているんだけどな……。稜がないからいつもよじょじょ長く寝ちまつた。

もうそろそろ起きそか。

「うう……、拓真、優しくしてえ……」

うう……、く……。こんなにも無防備な所を見せ付けられて、何かイタズラしないと勿体ないぞつて内なる煩惱が言つてゐる……。

「……テメエ、寝ている所を襲つたらどうなるか分かつてんだうつなあ？ テメエの頭のお花畠を満開にしてやるからな……ムーサ！」

ダメだ！ そんな事したら絶対に嫌われる！ 傷蔑の目を向けられる！

「悩んでこらねばなら実行あるのみやで、拓真……一緒に気持ち良くなうつや」

「おいでえ、私が愛でてあげるからあ

…………、胸だけなら、良いよね？

流石に寝ている人の唇を奪う卑怯なことは出来ないし、下半身に触れるほど淫らな人間じゃない。胸だけ、そう、胸だけ。嫌われるの覚悟だ、女の胸なんかそういうさわれるもんじやない！

「じゃ、じゃあ最初は楓さんから……」

一番年上だし、胸も一番大きいから……。

ベッドの上を音を立てぬきつ滑るように移動し楓さんの近くに座り込む。

「神様、仏様、八百万の神々、そして稜、本当にごめんなさい！  
俺は稜以外の胸を触ります！ んい！」

むにゅうづづづづ。

柔らかい……、稜なんかと比べ物にならないくらいに……。

そう思ったまさにその時、楓さんの頬が赤らみ「んんっ……！」と艶めかしい声をだす。

その瞬間に全身が火に炙られたように熱くなり、下半身が痛み出した。

俺はその事から己の愚かさと卑猥さに恐怖し、初期位置で震え上がっていた。

稜以外の胸を触つただけでこの反応が！？ なんていやうしいんだよ俺！ こんな所香織達に見られたら……、鎮まれこの煩惱！ 愚かな事をしてしまつたぞ、稜以外の胸はもう絶対に

「根性なしやなあ……、どれ、わいの胸を揉んでみい」

突如として紅音の声が聞こえ、後ろに振り向かされた瞬間、無理矢理俺の手を紅音の胸に押し付けられた。

「女の胸ひでな、こひすひて田を描くよひてひね回すんがお互いに  
気持ちいいんやで……せり、わいの顔、赤いやろ？ それはわいが  
拓真を感じてるんや……、せり、自分でこね回してみ？」

—あ、紅音さん！？

紅音は俺の手を動かすのを止める。

本當は今すぐにでも手を離したがつたが、さうき紅音が言つた通り柔らかくて、暖かくて、心地よかつた。

もみもみ……もみもみ……。

「せえや、拓真、気持ちいいやん、うつすねやん、わいはかな  
り気持ちいいで……！」

むにゅむにゅ ..... むにゅむにゅ ..... 。

「あっ、はあ、HHで、最高や、ますます好きになつた！ 抱かせてや！」

えつ、と血の間も無く紅音は押し倒すような形で抱きついた。  
「……なんで？」

「わいはなあ、拓真、お前に一悶懃れしてん、大好きやねん、せや  
からなあ 拓真」

紅音はふざけた様子もなく、真剣な顔をじりじりに向けて、じりじりつ  
た。

「わいと一つにならひや、拓真」

直後、紅音の顔が迫つて来て唇にしつとつとした何かが触れる。恐  
らく唇……。

そう思ったのも束の間、唇の間から舌が翻つて入ってきた。

「んつ……！」

「んふ、ちゅふ……」

なんて濃厚なキスなんだ、意識が飛んでいきそつだ……！

「……ふあ、後は本番だけや、さあ、服を脱ぎ」

瞬間、紅音が消えた……のでは無く壁に叩き付けられた。  
逆方向を見ればそこには怒りに震える香織の姿が……。

「何すんねやー H工霧囲氣やつたらがい！」

「紅音お姉様は黙つてて。拓真、なんで紅音に抱かれているのかな

……？」

「いや、コレにはふかーいワケが」

「皆まで言わなくていいわ、分かつていいから

だつたら問い合わせてくるなよ！」

「あなた、コレがどういうことが分かってるのかしら？ 婚約者が二人いるわけなのよ？」

「誰と誰さ？ 婚約届を出した覚えは無いんだが」

「私と紅音お姉様よ」

「なんで？」

「ふあ、ファーストキスをあんたに捧げたからよ」

「なんだそれ？ キスしただけで婚約成立ってどんだけアブノーマルな婚約よ？」

「あの……、拓真の婚約者に私も追加で」

「同じく。無性にキスしたくなつたんだよな。全く、拓真の寝顔は反則だぜ」

「はあ！？ こ、これで婚約者が四人……、仕方ないわね……。寝ている時に考えついた例の作戦、発動するしかないわね……」

何だよ、例の作戦つて……、香織は深く息を吸い込んで叫んだ。

「これより！ これより大原拓真ハーレム化計画を執行する！」

「で、これが足掛かりか、大原拓真ハーレム化計画の」

「そうよ、女性に対する耐性が一般ピープルと比べても少ないのよね」

「そうそう。だから俺達がともすれば裸になりそうな服装で拓真を囲み、ナマ乳の感触を克服してもらおうじやないかと」

「気分はどうかしら？ さぞかしつらいでしょ」うね

「ムラムラするやろ？ 大丈夫、勃つたら又いてやるさかい」

そんな問題じゃねえよ、と俺は言いたい。

ピンク一色の息が詰まるスイートルームで、バスタオル一枚巻くだけの、いつ弾けて裸になるか分からない格好で、囮まれているだけではなく、胸を押し付けられ、胸板から頬まで舐められ、吸われのとある生徒会の変態主人公が見たら一瞬で狂い殺せるくらいのハーレムの中心に俺はいるんだから、そんな心配よりも俺の精神が死ぬかどうかを心配すべきだと思う。

「なんでこうなんだ？ なんでこうなるんだ？ 俺が何かしたか？」  
「わいらにキスしてもうたからや」

「そう。拓真さん、大山家ではファーストキスの相手がどの様な関係であれ、生涯のパートナーになる訳なのよ」

いや、されたんですけど。無理矢理唇奪われたんだけど！

「男だったら『ゴチャゴチャ言わねえでしつかり女を犯す！ そうだろ？』

「ちげえだろ！」

「なんや甲斐性ないのぉ」

「うるせえ！ 犯罪的な甲斐性なら俺はいらねえ！」

「あら、何度も孕ませたくせこみへ言ひじやない

一同は声のする方へ振り向く。そこには、真理亜がバスタオル一枚巻くだけの姿で扉にもたれ掛かっていた。

「ま、真理亜……？ なんでこりこり……、こりこりはこつもと違つ別世界なはずだが……」

「言つたでしょ？ 私はダーリンのいるところなら何処へでも行けるつて。シャワー気持ちよかつたわよ、香織」

真理亜は香織に見せ付けるように投げキッスをした、恐らく俺に。その瞬間、左から強烈な殺気が猛獸となつて俺を喰らわんと強靭な顎門あきとを開いているような錯覚に陥るのだが、氣のせいだろ？、きっと氣のせい。

「あーれえ？ 拓真君、私達をやる前に真理亜とやつてたんだ？ しかも何度も無く」

「いや、仕方ないだろ、真理亜と出合つたのは香織と出合つ前なんだから」

「そうよ、ダーリンと出合つ前からあなたの負けなのよ！ 香織！」  
「なによなによ！ わざわざから聞いていればダーリンダーリンって、そんなに仲が良いならあつちでにゃんにゃんすれば良いじゃない！」

直後、香織は腕を振るひ。竜の上で感じたのと同じように重力のしがらみから解放され、真理亜の近くで背中から落とされた。

「香織……」

「浮氣者！ サイテー！ あんたなんか何処にでも行けば良いのよ！ バカツー！」

とつづく島もないとはよく言つたものだ。

香織は再び腕を振るい俺と真理亜を吹き飛ばしてしまつた。  
さらに扉まで閉めてしまつたため、完全に打つ手を無くしてしまつた。

「ああ……香織」

「そんなシンシンのことなんかほつといて、私と遊びましょ！」  
「やつこつもんじや なつ、なんて格好なんだよ！ タオルを巻  
き直せ！」

さつきの烈風のせいだらうか、真理亜のタオルが滅茶苦茶になつて、  
太ももや胸の谷間なんかも見え隠れし、なんて言つかもう、裸より  
エロかつた。

「なあにい、私のこの姿を見て欲情してんの？ もうダーリンつた  
ら、見たいなら見たいって言ってくれればいつだつて見せてあげる  
のにい。ほら、ほらあ、ちゃんと皿に焼き付けて？」

真理亜のやつ……、調子に乗つてタオルをひらひらしてきやがつた。  
おかげで見えなかつた所も見えちゃつて……。

「鼻血出でいるわよ？」

見まい見まいとそっぽを向いていたつもりだったがいつの間にか凝  
視していたようだ。情けねえ。

そう思つた、その瞬間だつた。いきなり扉がバン！ と荒々しく開  
かれ、中から幼児を殺せるくらいにどす黒い笑みを浮かべる香織が  
現れた。

「あ、いや、香織、それはだね、香織には持つてないものを真理亜  
は持つているから、ほら、香織には香織の可愛さがあるから  
『立ちなさい』

「だから、ホントはね、なんだかんだ言つて香織の事が一番好きな  
んだよ？ キスした時凄くドキドキしてや、香織こそ運命の人だつ  
て思つたんだよ？ 本当だよ」

「知ってる。あなたの考えているマトは全部お見通し。だから真理亜にエロい目線を投げかけているのも知つてんの。下らない言い訳は要らないから立ちなさい」

最高裁判長、大山香織は被告人大原拓真を婚約条例一条、“婚約者以外の裸を見るべからず”を違反したため死刑判決。

「控訴します！」

「被告人の控訴を棄却します」

死刑宣告。大原拓真を極刑に処す。

んなムチャクチャな！

「歯を食いしばりなさい、少しは痛くなくなるかも知れないわ」

直後、香織は大きく拳を振り上げ振り下ろす。とつとの判断で避けるも、「避けるな！」の叫びと共に無数の空気の刃【エアカッター】。

体に無数の細かな切り傷が出来るが、叫ぶ間もなく香織の渾身の蹴りが鳩尾を捉える。

そのまま吹っ飛ばされて着地する間もなく香織の風魔法で引き寄せられる。

一体何がしたいんだ。

「劣情は抜けたかしら？」

「ああ、しつかりと痛みに上書きされたよコンチクシヨウ」

「あなたが悪いんだからね！」と厳しい言葉を浴びせて真理亜に向き直る香織。

「ところで真理亜、寝静まつた所で襲うあんただからこんな時間に現れるなんておかしいわね。何かあるんでしょ？」

「相変わらず無駄に鋭いわねえ。そりゃ、私の本当の目的はダーリンの搜索。ついでに香織の搜索もね」

「ついでって何よ！」

「だつてえ、ダーリン以外に興味ないもの。ま、あんなに探していなかつたんじや、流石に飽きて来ちゃつたのよね。だから探しものしてるつもりはヤメにして直に会いに行く事にしたのよ」

つかつかと俺に歩み寄り、壁にもたれながらも立つ俺をギュッと抱きしめる。

最初は痛かったが、時が経つにつれ痛みが引き、傷も癒えていた。

「すげえや、真理亜つてなんでもアリなんだな

「愛の力に不可能はないわよ、おーつほつほつほー！ さあダーリン、もっと愛を体で感じ合いましょう！」

「お楽しみの所悪いけど、至急の事なんじやないの？」

「あ、そうだったわね！ ジャあ、早速愛子の元へと戻るわよー！」

あれから、真理亜の空間魔法で、元の世界に戻れたが、状況は最悪のようだ、無表情のはずの愛子が苦虫を噛み潰したような顔をしている。

「遅い、真理亜。翠氷壁すいひょうへきがもう限界に達しそうとしている

愛子が叫びおり、俺達を囲んでいる氷の壁は一面ヒビだらけである。

「愛子、無事だつたか！」

「感動の再会は後、強い衝撃に備えて」

へ？と呆けた声を出すもんだから、香織が即座に叱咤した。

「バカ！！ 前からロケットランチャーが飛んでくるわ！ 伏せて！」

その瞬間、大きな発砲音を聞き、数秒後にはそれよりも大きな爆発音が轟き渡る。

「……くつー」

その衝撃で割れた氷が愛子を傷付けた。俺は立ちはだかる何かに怒りを覚える。

「そんな物騒なもんぶつ放した挙げ句少女に怪我を負わせるたあ、テメエらどんな了見してんだ！」

「侵入者は例外なく殺せとのの方からの『命令だ。』我らはの方の忠実な下部故に彼女らを殺さねばならない」

「そう……かよ、アツタマ来たぞ！ 良心の一欠片もないお前らに生きる価値なしと見做す！ ならばその魂、我が業火にて燃やし尽くさん！ 蜥蜴の尻尾【リザードテイル】！」

眼前に大きな炎球が現れ、瞬間に巨大な炎のレーザーになり、眼前を燃やしいぐす。

「香織！ 一人を連れて空を飛べ！」

「命令しないで！」

そつと香織は一人に飛行のスペルを唱え、上空に飛んだ。

……」それで本氣が出せる。

「つまおおおおおおー。」

蜥蜴の尻尾をゆっくりとだが着実に回していく。そつと回していく内に勢いが付いちやつて……、止まらなくなつた。

「うおああああ！ 誰か止めてくれ！」

「なにやつてんのよ、あのバカ……」

「私に任せて。封水牢！」

小気味良い快音と共に俺の体は一瞬で水に包まれた。つまり、それは息が出来ない事を意味している。

「あが！」<sup>ゲ</sup>……

「拓真！」

「愛子、ダーリンが苦しんでるわよ！」

「ダーリン……、真理亜の呼び方はよく分からぬ。解除」

乾いた爆発音と共に水が弾け飛び、咳き込むと同時に飲み込んでしまった水を吐き出す。

いやあ、死ぬかと思つた。

「拓真、大丈夫？」

「ああ、なんとかな。ありがと香織」

香織は手を差し伸べ、立たせる。

「手荒な事をして申し訳ない。あなたを止めるにまじれしか考え付かなかつた」

「良いんだよ、ありがとな愛子」

俺は愛子の頭を撫でてやる。相変わらずの無表情だが、心中では笑っていることを信じたい。

「それにしてもこの機械は頑丈だなあ、俺の蜥蜴の尻尾を喰らつても壊れないなんて」

「本当……まるで科学の理を超えた力を使つてゐるみたい」

「ねえ、もつと奥に進んでみない? こんな有り得ない機械の謎も分かるかも」

「そうね、なんか悔しいけど番纏の言ひ通りね」

かくして、俺達は謎の機械室を探索する事にした。

約10分後、いきなり開けた所に出る。

精密機械が密集してこるのを見ると、これは司令室か何かか?

「それにしても薄気味悪いわねえホント、今にも何か起こりやうね

「見て。扉がある」

愛子が指を指す先には、光溢れる扉が存在していた。

「登りの階段があるついでに、あれは出口か?」「みたいね。どうに繋がつてゐるのかしら?」

俺達は一步ずつ扉に近く。すると、真理亜が扉の向こうの異変に気づく。

「待つて！ 誰かがこっちに向かってくるわー...」  
「マジかよ！ よし、待ち伏せしよう。扉が開けられた瞬間に一斉放火だ！」

徐々に足音が近くなり、一人の表情が固くなる。  
そして、扉が開かれる。

「今だつ！ 蜥蜴の尻尾【リザード・テイル】！」  
「燃やし尽くせ！ 鎗炎【ソフテル】！」  
「流水葬波【リュウシラボ】！」

扉の向こうの人影は慌てふためき、魔法を唱える。

「う、うわ！ 待て！ 魔破雷壁【マハラコベキ】！」

扉の向こうの人影は地面に手をつける。すると、稻妻が逆り、人影を守る。人影は抗議の声を上げた。

「な、何をするんですか！ 僕を殺す気ですか！」

え？ この声……、どつかで聞いた事がある。

「アナタは……、紛らわしい  
「なんだ、足音の正体はあなたなのか」

二人はとても落胆した声をあげる。  
なにが起きたんだと覗いて見れば、そこには……

「へ？　おお！　一樹じゃねえか！　どうした？」

一樹がいた。一樹はすり落ちたメガネを上げて、とても深刻な顔で肩に掴み掛かる。

「それはこっちのセリフだよ…　どいつも一週間も行方をくらましたのか！」

「はあ？　一週間？　こちとら、一晩寝ただけだぜ？」

「拓真ちゃん！」

そう叫びながら迫つてくるのは坂田桜だった。桜はそのまま抱き付いて来る。

「拓真さん！　私、あなたが誘拐されたかと思いました！　心配で、夜も眠れなかつたんですから！」

嘘……、そこまで深刻な状況に……！？

「わづよーー　お兄ちゃん！　稜、本当に心配したんだからー！」

そつ声を荒げるのは、俺の妹、稜である。

「稜……、ダメじゃないか！　ちゃんと家にいなきやー！　ヘンな人に何かヘンな事されなかつたか？」

「おにいちゃん！　私の心配なんてしなくていいのー…　おにいちゃんにもしもの事があつたら私……」

「稜……、お前……」

「パソコンにシステム……、有り得ない……、なんか引くわ

なんか香織にガツツリと心を抉られた気がするが……、まあ仕方ない事なのだろう。

この歳になつてお互に慕い合い、愛し合つてゐるのは最早……、異常な事なのだから。

「もつたくさん、たくさん泣いたんだから……もう、とにかく唇奪つてやるー！」

そつ言つと、稜は俺に向かつて突進してくる。

「待つて！ キスはもう」「

待つてくれるわけなかつた。稜は両手で顔を挟み込むと、周りに人がいるのに、キスをする。舌も入れてきた。……何故だろう。周りの女達の視線がやけに痛い……。

そうだよな、軽蔑の目を向けるの仕方の無いこと、嫌惡の念を抱くのは仕方の無いこと。ならばその目も念も全て受け入れよう。そう思考が在らぬ方向に一人歩きし、自虐的になる俺だが、現実はその180度違つていた。

「あんたつてば、損な人生してんわね、私という猛烈に魅力的な女子がいるじゃない？ 妹萌えも卒業して、私とその、き、キス……、キスしてあげてもいいわよ！？」

「拓真、妹とキスしたんだから、私達ともキスしても罰は当たらないんじゃない？」

「そうですよ、私達にもティープキスさせてください」「…………、拓真……」

みんながみんな、様々な形でキスをせがんできたのだ。  
愛子まで羨望の目で見てる気が……、あくまで気のせいかも知れな

いが。

「駄目、拓真の唇は稜が独立するから。おにいちゃんは私の物なんだから！」

「きやあああああ！」

稜がそう言つてキスを再開しようとした瞬間、突然の悲鳴に稜はキスするのを止め、代わりに抱きついてきた。

「おにいちゃん……、稜、怖い」

「心配するな、俺が付いてる」

「ちょっとー、そこのブラコンにシスコンー、わっせから兄妹同士いちやいちやチュツチュと本当に苛つくて、わっせと離れなさい！」

「まあまあ、落ち着いて。それより、さつきの悲鳴は運動場から聞こえましたね、もしかしたら謎の生徒仮死状態事件の真相が分かるかも知れません」

「だな、さあ立った。悲鳴が聞こえた運動場へ行くぜー！」

俺は謎の仮死状態事件が気になつて、運動場に走り出そうとしたが、しかし一樹に止められた。

「ダメだよ！ 君が行つたつて仮死状態になるだけだよ！ 君はここで待機していくください！」

「なんだ、そう言つことか」

「そう言つことかって……、拓真君！ 僕はあなたのことを思つて言つているのです！ 僕はここ最近の仮死状態事件で多くの友達が生死の狭間をさまよつている状態なんだ！ 君まで仮死状態になつたら僕はどうすれば……」

「大丈夫だ、俺はもう普通の平凡男子高校生じやない、火の魔法使い、大原拓真だ」

一樹の前で炎の球を作つてみせる。

その瞬間、一樹の懇願の声が感嘆の声に変わった。

「すごい……こんな炎、見たこと無い。少しの混じり氣のない純粋な炎は」

「俺にはコレがある。だから負けない。仮死状態になる前に消し炭にしてやるよ!」

「ぐわあ！ 何だこれ、力が抜けていく……」

チャラい感じの男がまた一人倒れた。

「……、懲罰完了。次、桐原壮介、頭髪が染められている。校則違反だ」

そういうて、謎の男は両刃の剣を振りかざす。すると、校則違反をした男子生徒、桐原壮介は急に倒れ、ぴくりとも動かなくなる。

「あいつが原因か」

「叩きのめしちゃいましょうよ」

「賛成。これ以上の被害が出る前に片付ける」

「よし、行くよ ここまでです！ 大人しくしてください！」

俺達は運動場横の小高い木の影から躍り出る。両手剣を持つ男は氣だるそうにこちらを向く。

「また校則違反者か、だが、この人数じゃ『神の裁き』じゃ捌ききれない」

「降参しなさい！　あなたじゃ私達に勝てません！」  
「仕方ない、面倒だが、一人ずつ叩き潰そう」

両手剣を持つ謎の男は剣を構える。  
俺達も次々と戦闘準備に入る。

「来るぜ！　気を引き締めろ！」  
「行くよ、エクスカリバー！」

現実世界の現実離れした戦いの火蓋が切られた。

## 第六章 拓真の帰還（後書き）

次回は遂に第一部の物語が佳境を迎える……と思います。お楽しみ。

## 第七章 現実世界の秘密通路（前書き）

バトルシーン多め（当社比1・5倍）でお送りする第七章－第一部  
もつに佳境へ……？

## 第七章 現実世界の秘密通路

「行くぞ！」

先手を取ったのはエクスカリバーとか言う大剣を持った男子生徒だった。男子生徒は一樹の懐へ一気に潜り込み、俺の目からしてまあ早い一閃を放つ。

一樹はその一閃を首に当たるか当たらないかという所で躱し、続く連閃も紙一重といつぶつと躱していく。

「どうした？ 避けてばかりではこの戦いには勝てないぞ」

「そうだね、ならこれはどうだ！」

一樹は懐から金属製の短い棒を取り出して一言呪文らしき言葉を呴いたかと思えば、短い棒がたちまち90cmくらいの日本刀になり、それを一樹が真横に振り抜けば巨大な大剣で受け止めた男子生徒は大きく吹き飛び近くの校舎の壁に激突する。

よく見れば彼の握っている大剣にヒビが入っている。

……一樹の日本刀に一体どんな秘密があるってんだ。

「この日本刀はね、玉鋼30%にチタニウムが55%、それにタンゲステン15%を練り合わせた特別製さ。もの凄く重いけど、これを受け止めきれる人は、いないんだと思つよ」

「一樹、このクソ」

「召雷！」

一樹の右手から稻妻が迸り、巨大な剣を携えた男子生徒の足元を穿つ。

男子生徒は一步後退り、額に脂汗が浮かんでいるのが遠目から見えて分かる。

「今のは警告です。降伏してみんなの仮死状態を解きなさい」

男子生徒は高らかに笑い、巨大な大剣を真上に掲げて不敵に笑う。  
何がおかしいんだ、アイツ。ワケ分かんねえよ

「そんな事は知らないな。全てはあの方の命令だ、あの方がやれと言ふからやるんだよ」

「そうですか、あなたが何をしようとも僕たちには関係ないですが、  
僕たちの行く手を阻むというならしばらく眠つて貰います！」轟（じゅう）

雷召（らいしゅう）！」

「眠るのはお前だ！ 出力最大の裁きを受けよ！」

無数の稻妻が降りしきる中、男子生徒は無骨な大剣を一樹に向けて振り下ろし、何だか物々しいオーラが一樹を包み込む。

「あれは……なるほど、仕組みが分かつた。呪封冰（じゅふうひょう）」

愛子が一言一言呴いた瞬間、男子生徒の持つ大剣の鍔が凍り付き一樹を纏う物々しいオーラが消え、無数の稻妻の一つが男子生徒に当たつてそのまま男子生徒はパタリと前のめりに倒れる。

「ふう、真剣を携えた人と戦うのは骨が折れるんだね

「俺には随分と余裕そうに見えるけどな」

「まさか！ 剣が体の近くを薙ぐ度に心臓がバクバク鳴つてましたよ！ 余裕なんて全然ありませんでしたから！」

あはははは、と一同は揃つて笑い出す。俺はふと浮かび上がった疑問をみんなにぶつけみて。

「なあ、さつきのヤツ、風紀委員がどうだのこりだのつて言つてたけどさ、他の風紀委員もみんなあんなおつかない剣を携えているのか？」

「風紀委員のほぼ全てがエクスカリバー=レプリカを持つている」

「そもそも、この学校に風紀委員会なんて存在しなかつたんだね」

「ね」

まあ、あつちでチョメチョメこっちでチョメチョメ、運動場で子作りが当たり前な学校に風紀なんて無縁の存在だわな。

「さあ、理解も深まつただし、あつちでチョメチョメしましょ？」

「へ、うん……っん！？」

振り向いた瞬間に唇を奪われ、顔を真理亜の大きな胸に押し付けられて完全に抵抗力を無くした俺の手を引いて近くの公衆トイレへと連れて行こうとする。

その瞬間に見えない何かが色々な所に、主に首へと絡みつき後ろへと引き寄せられる。

その先には香織がいた。

あともう少しで真理亜とキモチイイ」と出来たのに……じゃなくて、節操の危機から救つてくれてありがとう……かな？

「誰が真理亜とこちんこちんするのを許可したの？」

「ぐ、ぐびー」

「誰が真理亜の胸、触ることを許可したのー？」

「じ、じぬう……」

「誰が！ 真理亜とー、キキ、キスする事を！ 許したのー！」

「お、おーい、拓真君が死んじゃうだー！」

一樹のその一言で見えない何か 恐らく空氣の繩を解き、「ふん！」  
とそつぽを向いた。

この高飛車傲慢束縛不良女め～！

……なんて思うもんじやねえな。空氣の鞭がしなって俺の体を痛め  
つけるよ……、とほほ。

「あ、やつ言えば拓真さん。海斗さんから伝言があるんですけど……」

「イテー、ジウセ、ゴホッ、ゴホッ……、決闘しろー、だろ？ イ  
テー！ 士に遅れとでも言つといってくれよ、イテー、めんどくさいテ  
ー！」

「……相変わらず海斗さんに手厳しいですね。でも、違うんですよ。  
海斗さんは拓真さんに会えたら地下広場調整通路に来てくれ、って  
言つてましたよ！」

さかきばらかこと  
**榎原海斗。**普段の彼は俺と目が合つ度に決闘、決闘とつるさい人間  
だが、今回は珍しく違つようだな。

「で、地下広場調整通路つてのはどこにあるんだ？」

「あ、はい、こっちです。付いてきて下さいね」

見る者全ての心を癒す満面の笑みを見せ、手を取り地下広場調整通  
路つて所へと向かう桜。

俺は桜が手を引くままについて行く事にした。

「何なんだ、その無数の傷とメチャクチャになつた服は！ ほん  
とうに無様だな、拓真！」

「焼き死くられる前に本題に入った方が良いと思つけどなあ」「やれるもんならやってみるよ、お前が放つライターのようない弱

な炎なんかで俺の神木には焦げ痕一つ付かないだろ？がな！」

「アホか、俺の炎は地獄の劫火だし！　お前のヘンテコリンな木クズなんか一瞬で消し炭だね！」

「二人ともやめてください！」

その桜の声と共に両手パンチが同時に俺と海斗の頬にヒットし、軽く吹っ飛び辺りが笑いに包まれる。

コレが俺と海斗が遭遇したとき、必ず起くるサイクルである。もう三年は繰り返しているが、意外とまだ飽きられてない。

「海斗君、怪しい所を見つけたって聞いたけど、一体どこなんですか？」

「まあ、見つけたと言つかは思い出したと言つた方が正しいか。これはネズ二ーランドが丸々入る程の面積を持つ地下広場を円滑に稼動するために調整機器が横一列にズラッと並んでいるのは分かるよな」

「サルでも分かるわ。で、ソコにあるいかにも貯水プールみたいな所が怪しいとでも言つのか？」

「なつ、くあつ！？ 拓真！」

「それこそサルでも分かんだよ、アホ」

自分の考えを先読みされりや、自尊心の塊である海斗じゅ無くとも多少は傷付くだろうな。

海斗はとくに、プールの近くで体操座りしてゐる。良いザマだ。

「でつ、でも、誰も分からなかつた隠し通路の入り口を思い出すなんて、海斗さんはスゴいです！」

「そ、そうか？　俺は凄いか？　俺は凄いのか！？」

はつまつは！ 僕は凄い！ 拓真より凄い！ などとせりあながら立ち上がり、虫酸の走る高笑いが辺り一面を染める。  
……もう無視しよう。

で、貯水プールを泳ぎ切った向こう側。香織の風魔法のおかげで泳いでいる途中で息が続かなくなりお陀仏……なんて心配はなかつた、香織様々だな。そして海斗の予想通り、貯水プールの向こう側にはまた通路が闇に呑まれていた。

「おにいちゃん……、怖いよ」  
「大丈夫よ、いざという時はおにいちゃんが体張つて守ってくれるわ」

そういう事にならないよう願うよ。

「ijiは敵の手中。敵の襲撃が無いとは思えない」  
「ま、そうだよな。気を引き締めてこいつが、みんな！」  
「あ、そうだわ、ダーリン……、ijiだけの話、香織とはじけまでやつたのよ？」  
「なつ！？ んなつ……！」

な、ななな、何てこと聞いてんだよ！ 真理亜のヤツー。

「じゅせ、あのシンシンの事だから処女じゅりか体に触れることが許してないんじやないの？」  
「誰が潔癖症よ！ 体を触られる」とくらべ、何ともないんだもん

！」

「へえ～、じゃあ拓真にこんな風に触れることも、平気よね」

忍者顔負けの忍び足で香織に氣付かれる事無く後ろに回る真理亜。そのまま抱き付かれ、真理亜の魔手から逃れまいとする香織だったが、すぐさま首筋を舐められてそれも失敗に終わる。何せ真理亜は性感帯といつ性感帯を知り尽くしているからなあ、「真理亜の毒牙に掛かった者はえもいわれぬ快樂に絡め捕られ精を捧げる」という逸話が存在し、『現代に蘇った夢魔』なんて呼ばれたりするしな、それに俺も何度か真理亜に襲われて……。やべ、思い出しただけで体が反応しちまってる。

いや、田の前に広がる真理亜と香織のいぢやいぢやを田の辺たりにしたら興奮するのは男なら仕方ないことか……。

「あ、んん、ひやっ！？ やめ、止めてよ！ 真理亜！」

「あれえ？ 香織ちゃん、お顔が真っ赤よ？ ダーリンにこうこう風に触られる事考えて興奮してるのね？ やらしい娘」

「かつ、か、か、か、考えてない！ あ、あんな奴隸にこう、こんな風にベタベタ触られたって、な、なつ、な、何も感じないもん！」

「へえ～、アナタって不感症なんだ？ 違うわよねえ？ だつて今こんなに真っ赤にしてるじやない！ 大丈夫よ、今アナタを感じてるその性への焦燥、私がその扉を開いてあげるから」

「ふ、ふつ、ふ、不潔！」

性器に手を伸ばす真理亜を疾風の一撃【ウイングブレイク】で吹き飛ばし、泣きながら俺に駆け寄り抱き付く香織。

……お、俺もお尻とか触った方が良いのかな？

「うう……、拓真」

とつ、とつあえずお尻に軽くタッチ。

香織はんっ、と甘い声を出してギュッと抱き付く腕に力を込める。反応は良好と“思い込んだ”俺は調子に乗ってスカートの中から両手を使ってがつしりタッチ、さらに包み込むように揉みしだく。手のひらに広がる甘美な感触に包まれて、やつたな、と誇らしげな顔で香織を見れば

「奴隸如きがどじ触つていいのよ」

双眸に憤怒の光を湛えた香織の顔がそこにはあった。つまりアレだ、さつきの反応は拒絶反応だった、ってわけなんだな。

つまり俺、絶体絶命！？

「あ、いや、その……、どうにか香織を元気付けようと奮闘し

言い切る間もなく、香織の的確で鋭いボディーブローが鳩尾に炸裂、当然俺は崩れ落ちて悶え転げる。

怒るほどに動きに動きの的確さや鋭さや力強さが上がるのが彼女、香織なのだ。

「ふん、奴隸如きがエッチなことするなんて百年早いのよ百年。あーあ、久し振りに疲れ果てちゃったわ、あそこで休憩を取りましょ

「そんな事したら敵からの奇襲も」

「休憩、休憩、きゅーケーい……キャツ！？」

それは香織が座るのにちょうど良せそうな段差に腰掛けた瞬間に起きた出来事だつた。

小さな悲鳴と共に飛び上がり、怯えた表情で自分の下着を見る。瞬間、香織の顔が青ざめ小刻みに震え出す。

香織が自らの下着を確認するためにスカートを捲り上げた際に見て

しまつたのだが、妙に下着が水氣を帯びてゐるような気がするのだ。

「なにこれ、ねちよねちよしてへばりついて、とつても気持ち悪い！」

「あら、濡れちゃつたの？ ソロには直接触れてないのに、やつぱりいやらしい娘よね」

「くううううう… 拓真！ 下着を貸しなさい！」

「貸せるかっ！」

「三人とも！ 風紀委員に気付かれましたよ… 既に包囲されてます！」

「包囲網をかいくぐつて奥に逃げるぞ…」

生意氣にも海斗がそつと言えば、一樹達も各自戦闘準備を始め。でも相手は生身の人間、俺はどうすれば……。さつきもああは言つたが本当は熱風で軽い火傷を負わして吹き飛ばしあだけなのに……。

「なにボサッとしてんのよ！ 殺されるだけよ！」

「分かつてる！ でも相手は生身の人間なんだぞ！ 例え帶剣していたとしても…」

「今は目の前の事に集中しろ！ 拓真！ 殺すのがイヤなら殺されよう気に絶せろ！」

「あの方の」命令により、死んで貰うぞ！ 大山香織イ！」

剣を持つた風紀委員の一人が香織曰掛けて突つ込む。

よほど予想外の攻撃だったのか香織の詠唱が全然間に合わない！

「ままじゃ香織が……！」

「クツソオオオオオ！」

俺は手の平から炎球を繰り出して向かってくる男にブチ当てる。男はすぐさま炎上して持たれていた大剣は香織の足元に転がり落ちる。

残つたのは、エクスカリバ＝レプリカと焼けた男の残骸……。

「あ、アリガトウ、拓真……」

「うつ……く、はあ……！　はあつ……！」

「拓真……？　どうしたの？」

人を殺したんだ、アイツ等と同じに、そう。あの孤児院を襲つたアイツ等と同じレベルになつたんだ……ついに。

これだけはなりたくなかったんだ、でもなつてしまつた。友達を、思い人を助けるためとは言え、殺したのは事実、逃れようのない……事実。

「ウアアアアアアアアアア！」

「落ち着きなさい！　拓真！　あなたの思うことは分かるわ！　でも今は……」

「殺した……、人を……、俺が……！　嫌だ、いやだ、イヤだ！　止める、やめる、ヤメロ！　はあ、はあ、はあ、はあ、はあつ……！」

鮮明に広がるあの時の惨状。

悪夢とも地獄絵図とも思える衝動と欲望が渦巻く孤児院何も出来ずにただ震える自分がいた。兄を守りきれなかつた自分がいた。額を傷つけられた自分がいた。

胸が、心が痛い、とても苦しい……。

その内に視界が真黒に染め上げられ、襲い来る虚脱感に包まれてこれ以上あつても意味のない意識を投げ出した。

男は皆殺しにしろ！ 上玉の女は犯してトレーラーにブチ込め  
！ ブスは殺しても構わん！

なんだその目は、大切なお友達が犯されて悔しいか？ 殺され  
て恨めしいか？ 力無き人間がそんな目をするな！ 腹立たしい！  
死ね！

なんだ、驚かせやがって死にそこないが、お前は頭からノゴギ  
リでガリガリとじっくりいたぶつてから殺してやる！

「そんな事、絶対にさせない！」

「死ぬんじゃないわよ、拓真。私よりも先に死ぬのだけは絶対に許  
さないからね」

次に目覚めた時、香織の顔が視界を埋め尽くし、口内では蠢く感触、  
体全体がぽかぽかと暖かい。

これだけで香織に抱き付かれてキスされてることが分かる。が、香  
織の性格上それはあり得ないだろう。

俺が何かすれば怒声、殴打、魔法の三連殺。

抱き締めて甘々キッスなんて到底するはずがない。

「…………！？ 起きたのね、拓真。…………やつと会ったのね

「…………何が？」

「なッ！？ 何だつて良いでしょ！」

「痴話喧嘩は後。『痴話喧嘩じゃない！』…………今はとりあえずこ

「を離れなければ。拓真、動ける？」

「ああ、もう心配いらない。心配かけちまつたな」

俺はゆっくりと腰を上げて辺りを見回す。

ふと気付くのは周りの風紀委員が一人たりとも見当たらないことだ。  
少量なら血痕は確認出来るが……。

「アイツ等なら何とか撤退させたわ。かなり深い傷も何度か受けた  
けど、ちょうどそこに回復魔法のエキスパートがいたから、なんと  
かなつたわ」

「稜のことでーす！」

「や、そつか、よくやつたな稜。偉いぞ」

俺は稜の頭をグシグシと愛情を込めて撫でてやる。稜は堪らないと  
言つた様子で抱きついてきた。

稜の胸は真理亜には劣るが意外と大きい。

齡12歳にして、バストが78cmあるとは……、これ以上の成長  
は望めないな。

「まだまだ成長するよー。おにいちゃんが愛を込めてみもみして  
くればね！」

「あ、ああ……。とにかく！ 先を急ぐぞ！ 追っ手に追いつかれ  
る前にな！」

……とは言つても、進むべき方向が分からなければ話にならない。  
とりあえず「愛子」にどっちに行けばいいか聞いて、指差した方向へと  
ずんずん進む。

そうして進んでいく内に俺や香織達は大きな広間みたいな所に出た。  
白いコンクリートの質素な壁が闇に呑まれる程に天井が高く、丸く  
配置された篝火の間隔が広いことから面積もかなり広いことがわか

る。

「よつこじや、現実と空想の境目へ。歓迎しよつ、空想の業を使う現実の住人よ」

そこには異様な雰囲気を放つ一人の初老の人間がいた。

俺はその老人が放つ異様な雰囲気に気圧され、思わず劫火の銳剣【ブレイズブレイド】を装備してしまう。

「これほどまでに一人の人間を『怖い』と思った事があつただろうか？ これほど怖いと思ったのは孤児院以来のことだ。いや、これは孤児院と同じ恐怖？ まさか、コイツがあの時兄さんを殺したヤツだと言うのか？」

あり得ない。アレほどのことをしてのけて懲役五年以下なんてそんな甘ったれな事、絶対にあり得ない。無罪放免なんて以ての外だ。なのに、なんで？ なんでコイツからあの時と全く同じ恐怖を感じてしまうんだ？

「だれだ……、テメエは！」

「私か、私はただのしがない教頭先生だよ、ふははははは！」

そう言って自称教頭先生は空に向かつて不可解な笑い声をあげる。今回は、なかなかに手こずりそうだな。

俺は、そつと心の中でそう思い、一本目の炎の剣を作り出して構える。

「おや、次期校長先生に刃向かうのかね？ なんと愚かしい。格の違いを見せつけてあげよつ。エクスカリバー！」

アーサー王物語に登場した架空の剣の名前を叫んでどうすんだよ、頭イカれてんじゃねえの？ 確かにそう思った。が、次の瞬間に俺

は自らの田を疑う事となる。

コンクリートの床を突き破るよつに両手剣のしつかり突き刺さつた岩が現れ、その両手剣の柄を掴んだかと思えば、男はそれをスルリと抜き取つてしまつたのだ。

真黒に染められた剣はどこからか放たれる光で鈍く輝き、見ているとまるで絶望を圧し固められたモノを直視してゐるよつな感覚に陥つてしまつ。

「怖いか？ この剣が」

「はっ！ 別に怖かねえよ！ そんな剣、溶かして屑鉄にしてやるよ！」

「ほお、その虚勢がいつまで続くか、試してやひつ」

男の周りに闇が纏わりつく。

絶望の具現とも呼べるその闇を見ると、やつぱり原始的な恐怖が呼び起こされ、『逃げたい』という気持ちがどうしようもなく湧き上がつてしまつ。

でも立ち向かわなければ何か大切なモノを失つてしまつ気がするんだ。

だから、どんなに無謀でも立ち向かわなければならないんだ！

「みんな、準備は出来てる？ 立ち向かう準備は」

「ええ、エクスカリバーだかなんだか知らないけど、あんなにムカつくヤツには私の風の刃をお見舞いしてやるわよ！」

「みんなの怪我は私が治してあげるからね、おにいちゃん」

真理亞達も各々自らが得意とする武器を装備し、戦闘準備を整える。

そして、俺は男に向かつて突進する。

例えどんなに無謀でも、勝利を呼び寄せる聖剣を相手にする事

になつても。  
この先を知るために障害となつるものなら、全て等しく壊すまで  
だ！

## 第七章 現実世界の秘密通路（後書き）

結局、エッチなシーンが入りました。俺つて……

慰めの感想、お待ちしています。

## 第八章 漆黒の扉（前書き）

かなり長らくお待たせしました、そして、かなり長らく文章が続きます。

（当社比約2倍）

遂に第一部はラストスパートをかけます！

遂に一連の騒ぎの黒幕と対峙する拓真。果たして、拓真の運命は？

そして、香織はどういうに拓真を弄ぶのか！？

## 第八章 漆黒の扉

「だあああああ！」

俺はまず、自称教頭に向かつて一振りの剣を同時に振り下ろす。かなりの衝撃があるこの攻撃を自称教頭は顔色一つ変えずに受け止め、さらには片手で軽く横に振るうことでいつも簡単に俺を吹き飛ばして見せたのだ。

人間離れした怪力しやがつてこの野郎が！

「ぐあっ……っと、一人じゃ無理があるか」

「援護する。拓真は再び突撃して」

「私も援護するわよ、ダーリン！」

「よし……、行くぞ！ 一人とも！」

今度は変則的に蛇行しながら自称教頭に突っ込む。

真理亜と愛子は自称教頭に強力な魔術を浴びせるために精神を統一している。

それに対してもう一度、何をするでもなくただただニヤニヤ笑っていたのだ。

ムカつく上にキモい野郎だぜ、全く！

「これに乗つて下さい、拓真さん！ がんじょうだい 岩昇台ー！」

直後、自称教頭の前五メートルの床が盛り上がる。

俺がそれに飛び乗れば、盛り上がったコンクリートは少し沈んだ後に重力が過度に掛かるほどのスピードで急上昇した。

こんなもんが急に止まつたら、俺はどうなると思う？

答えは単純にして明快、派手にぶつ飛び込んだ。

しかし、意外と計算高い桜はただ俺を吹き飛ばした訳じやないつて事は分かってる。

頭上から急襲するのにちょうど良い場所をピンポイントで落ちるようちやんと計算してぶつ飛ばしたのだ。

：後で前からせがんでいたほつぺにチューでもしてやろう。ああ見えて桜は2人つきになると凄く積極的になるんだ、ハグとか頬擦りとか。

うん、すごい甘えんばさんなんだよね。

「今です、拓真さん！ 飛びつきりの一撃をぶつけて下さい。」

「ハサウエイ、おまえがおもてなしをうながすには、もう少し年齢がある方がいいだろ？」

桜の助力、無駄にはしない！ 二対の火炎迸る剣同士をぶつけ合わせて大剣を形成し、自称教頭に向かつて振り下ろす。

これで決まりだ！自称教頭！

「仲間、良いですねえ。仲間同士協力し合つて強力な力を生み出せ

自称教頭の一喝と共にエクスカリバーを床に突き刺す。

瞬間、おぞましい不可視のオーラが火と氷の帯を消し飛ばし、炎の大剣を跡形もなく粉々にした。

その衝撃で俺は大きく吹き飛ばされて香織の前まで吹き飛び地面に叩き付けられて、甚大なダメージを受ける。

「こつまでも慣れ合っていふようでは私には敵わない！」

「そんな……、三方向から攻撃しても通じないなんて！」

「どうなに堅い守りでもどいかに穴はあるはずです！」  
陣襲雷一

一樹の一言により自称教頭の足元にかなり複雑で言葉に表せない魔法陣が現れてそれが一際強く輝く。

次の瞬間には黄色の円柱が自称教頭を包み込んで爆ぜた。

「やりましたか！？」

「ハハハハ……、蚊にでも刺されたか？」

「ビクともしてねえな、じゃあ俺に任せろ！」

若草縛  
じやくそうばく

海斗の掌から蔓が伸び、自称教頭の全身に絡み付く、そのせいか剣を振ることとは疎か歩くことすらままならない。

「くそ、こんな蔓草の一本や二本……！」

「今だ！ 拓真！ 今や自称教頭はツタの中だ！ 僕が言いたいこと、分からぬわけ無いよなあ！？」

「サルでも分かるわ！ アホ！ 蜥蜴の尻尾【リザードテイル】！」

海斗は絡み付く蔓を燃やす事で、自称教頭を火の中に閉ざそうとうと考えらしい。俺もその手に乗ったが、良く考えれば、こんなことしたら確實に死ぬんじゃ……？

いや、一樹の陣召雷を受けて平気で立っていたんだ、例え火達磨になつても『良い火加減だ』つてけろりと不気味に笑つて見せるんだろうな。うざつたい。

そう考へていても蜥蜴の尻尾はツタにぶち当たり点火させ激しく燃えさかる。

「ああ、フィニッシュショよ、渦風の牢獄【ショトロムプリズン】！」

風の牢獄を作り出すであろうその魔法は、轟々と燃え上がるだけの炎を球状に形作り、質を上げたのだ。

さすが香織といったところか。

「当然よ、だつて私は大山財閥の跡取り娘！」

「関係ないだろ、さすがに」

「ふはははは、全く、さすがは大山財閥の跡取り娘、といったところか！」

燃え盛るドーム状の炎から声が聞こえたと思いきや、突如黒い小さな球体が香織を貫かんと猛スピードで襲い掛かる。

……ダメだ、弾き返すには反応が遅すぎた！ やむを得ず、俺は黒い球体を体で受け止め、香織を守った。

「なかなか素晴らしいチームプレイだつたよ、しかし、他人を頼つているようでは私には勝てない。守るものがあるが故に生まれる隙が私には無いからな。私は孤独だからね」

「があつ、ぐう……、はあ、はは、孤独気取つてんなよ！」

痛みが和らぐや否や、すぐさま飛び起き剣を再び一本作り出して自称教頭に突つ込む。

今度は教頭も真っ黒なレーザーで排除しにかかるが今の俺には止まつていてるよう見える。

俺はそれらを軽くかわして自称教頭に斬りかかる。

「孤独を感じたからって強くなつた氣でいるのか！？ 何でも一人で出来るからっていい気になつてているのか！？ ふざけんな！」

上段で一本の剣を受け止めてガラ空きの脇腹を思いつ切り蹴り飛ばし、よろける自称教頭の懐に潜り込んで右斜め下から斬り飛ばす！

「守るものがあるが故に生まれる隙？ 守るものがあるが故に生まる強さを知らねえくせに知つたようなこと抜かすなよ！」

自称教頭は近くの貯水ポイントに落ちて水飛沫を上げる。

「それに、悪いけど俺の方がお前の何十倍も孤独だぜ。父親も母親も兄さんも、奪われちまつた俺の方がな」

「やつたね！ おにいちゃん！」

満面の笑みを迸らせて駆け寄つて来る稜。

……さあ早く俺の近くに来てパイタツチさせておくれ、その大きなおっぱいをゆっくり揉ませておくれ。

ああ、顔を真っ赤にしてキスをせがむ稜の姿が目に浮かぶぜ……。

……なんてけしからん事を考えていたら、いきなり自称教頭が俺と稜の間を割るように現れたと思えばもやもやとした闇で出来た腕を背中から一本、生やしたのだ。

「そう、なら妹も奪われてみるか」

「ふざけんな！ 稜に何かしてみろ！ 絶対に殺してやるからなー！」

「死ねえ！」

「キヤアアアアア！」

稜の悲鳴が室内に響き渡る。

俺は両脚に力を込めて二人の間に駆け込む、割り込んだ時には自称教頭が闇で出来た爪を振り下ろし、俺の背中を抉っていた。

「がはあつ……、クツソオオオオオ！」

俺は残つてゐる力を振り絞り自称教頭に一閃、見事にヒットし大きく吹き飛ぶ。

ザマア……、そう呟く頃には体を支える力を全て無くし、どうと崩れ落ちる。

そんな俺を心配してかみんなが俺の近くに駆け寄る。  
そんなに近づいたら、俺の血で体も衣服も汚れちまつぞ……。

「拓真ああああっ！」

「気を確かに持つんだ！ 拓真君！」

「タダじや済まさねえぞ！ 化け物が！」

「おにいちゃん！！」

「ハハハハハ！ 妹を庇つて自ら傷を負いにきたか！」

くそ、力が……、指先一つ動かない。俺は死ぬのか……？  
でも……、稜のために死ねるなら、俺は……。

「バカな事言わないで！ 私はおにいちゃんといっしょで初めて幸  
せなの！ おにいちゃんが私より先に死んじゃうなんて許さないか  
らっ！」

「お願い、拓真さん！ 死んじゃ嫌です！」

「もう遅い！ この傷では絶対に助からんわ！」

「ダーリンを傷付けた事、後悔させてあげるわ」

「案じなくとも良い、貴様等もすぐにこの男の所へと行くんだから  
なあ！」

「そんなに孤独を愛すなら、あなたに永久の孤独をあげるから」

「許さない、おにいちゃんを傷付けたあなたを許さないんだからあ  
つー！」

薄れゆく意識の中、稜の絶叫が脳内で木霊する。次の瞬間には視界  
が真っ白に染まった。

もし俺が気絶していたなら視界は白ではなく黒に染まるはず。

そこまで思考が及んだその時、不意に唇が柔らかいモノに包まれる。  
口内に無味無臭の明らかに食物ではない何かが流れ込み、何故か背  
中の傷が痛まなくなるのだ。

魔法的な何か何だらう、じゃなきやこんな短時間で傷が癒えるはずない。

その影響か徐々にだが視力を取り戻し、目の前にある脣を覆つている何かの輪郭が露わとなる、その輪郭の主が……、

「良かった……、おにいちゃん、無事みたいだね」

稜だった。視力を完全に取り戻した時の顔の近さと脣の感触からキスされてたんだと考えがつく。

他のヤツらにもこいつやってキスしてたとしたら、ちょっと妬しちゃうな……。

俺はムスッとした表情のまま立ち上がり、ありがとうと無遠想に礼を言ひ。

「もー、おにいちゃんにだけ、特別に考えた癒しの光【ヒーリングライト】口移しをしてあげたのに、その態度は何なのよー。もう、癒しの光口移ししてあげないぞ！」

「あ、いやいや、ゴメン、とっても嬉しいよ……、でも、していいのは俺だけだからな」

「もう、おにいちゃんつたら……、最初からそのつもりだよ、おにいちゃん以外の人とキスなんて考えられないし、こんなことをにいちゃんにしかできないし」

ちゅう、といふ音と共に俺の体は歓喜に震え上がる。

……やっぱり敏感な首筋に吸い付かれるとどうしてもこいつなるよな。その最中、今まで包み込んでいた光が徐々に収束していく周りに香織達の姿を、後方には自称教頭が凄い形相で睨み付けている。

いや……、あれはまさに悪魔！？ 頭に禍々しい角を生やして黒眼の中心は赤い光を放ち、所々裂けた衣服から覗く皮膚も緑色に変色している。何故だ……？

「ぐ、ぐおお……、が、暴れるな、体を借りねば存在できぬ靈体の分際でエエエ！」

「お、おい、なんだか分からぬが今がチャンスみたいだぞ！ 全精力を以て駆逐だ！ 駆逐！」

なぜだか分からぬが、自称教頭は呻き苦しんでいた。今がチャンスなのは間違いない！ 僕は蜥蜴の尻尾【リザードテイル】を放つべく両手をかめ めはの要領で後ろに引いて呪文を唱える。香織達も各自が最も得意とする魔法の呪文を唱える。

「古より伝わりし炎の蜥蜴よ、今こそ我に全てを燃やし尽くす尻尾を『』えよ。蜥蜴の尻尾【リザードテイル！】

両手がこれ以上無いつてほど熱くなる。見れば両手にバレー・ボール程の大きさになっていた。

俺は両手を突き出しその中で暴れる真紅の炎を解き放つ。放たれた炎は自称教頭に着弾した瞬間に爆発し吹き飛ばす。次の瞬間には香織達も次々自称教頭に向けて魔法を繰り出し、次々と命中させていく。

炎が舞い氷の楔が身を穿ち、土の槍が地中から襲えば金屬がその身を縛り、細かな木片は激しき風に乗つて深く突き刺さる。最後に香織が無数の細かな空気の刃を放つて自称教頭は断末魔を上げて仰向けに倒れる。

「やつたか！？」

「あれほど魔法を浴びたのよ、死んでなければ人外としか考えられないわ」

「はは、がはははは、は……、見事だ」

「野郎、まだ息してやがる！」

「違う、彼の体から黒い粒子が出ている。彼はもはや闇そのもの」愛子の言ひおり、自称教頭の至る所から黒い粒子が流れ出している。

「ははは……、まさか悪魔の力を取り込んだ私が、死にかけるとはな」

「悪魔の力？ どういう事だ！」

「知りたければこの扉を開くがいい。その先に答えがあるだろ？」

孤児院襲撃の理由もな

「孤児院襲撃……だと？」

「どういうことだ！ 僕がそう叫ぶ頃には自称教頭は高らかに笑い黒い粒子と化していた。

「チクショウ！ 待ちやがれ！ 孤児院襲撃は仕組まれていたことなかよ！ 答える！」

「落ち着いて、彼の気配はもう無い」

「落ち着いてられつかよ！ 僕はあの事件で一度全てを失った！

大切な人を！ 兄ちゃんを奪われたんだ！ もしあの事件が仕組まれていたことなら、俺はその首謀者を殺さねえと気が済まねえ！」

「あんたの気持ちは分かったわ、でも——」

「分かる訳ねえだろ！ 全部無くした人の気持ちを、全部有り余っている人間なんかに！」

ペチン！ 乾いた音が大きな部屋に響き渡る。  
香織が俺の頬を叩いたのだ。

「何……すんだよ」

「ええ、正直あんたの気持ちなんてこれっぽっちも分からぬわよ。

でも、ここで喚いたつてなにも変わらなこじやない！」

香織は叱つづける、その顔には涙。一体彼女は何を思い泣いているのだろう。

「失ったものは確かに取り戻せない！ でも作り直すことはできるわ！ あんたに兄はいなくても、妹や真理亜たちとか、お姉様たちがいるし、何より私がいるじゃない！」

「香織……」

「そうそう、失ったものは大きいけど、それ以上に大きな思い出を作つたら、少しさは寂しさは紛れるんじゃないかしら」

「過去ばかり見ても何も進歩しない。大事なのはその過去を自らの糧とし今に未来に活かすこと」

「だから、今を邪魔する教頭先生をばばーんとやつつけちゃいましょう！」

「真理亜……、愛子……、桜……」

「全く、しみつたれな拓真を見るとなんか調子狂うんだよなあ、普段が普段なだけに」

「んだとお……！？」

「まあまあ、拓真さんの言いたいことは分かりますが、今回は香織ちゃんの言い分が正しい。とりあえず彼の言つていた扉を探し出してみませんか？」

「一樹……、そうだな。一樹の言つとおりだな。よし、じゃあちやつちやと扉を探し出して、ちやつちやと自称教頭を片付けるぞ！」

「おおー！ 互いを鼓舞するよつと雄叫びを上げる一同。

そりやあ憤慨は完全には消えちゃいない。でも香織の言つとおり、今ここで喚いたつてなに一つ変わらない。

だから俺は直接自称教頭の所へ殴り込んで、一発殴り飛ばしてやるんだ！」

「それでこそ、ダーリンよー！」

「むぐつ……！？ ちよつ、真理亜ー。」

真理亜の大きな胸が襲い来る。羨ましいなんて思うなよ、コイツは俺以外の男を快樂を得るための道具としか考えてないから。俺でさえいついかなる時、場合でも襲える恋人としか捉えられてないんだから。

……十分？ おめでたいな。毎晩襲われてみる、俺じゃなくともウソザリするべ。

「ダーリンつてば素敵すぎつ！ 食べちゃいたい！」

「今はマズいだろ！ ギヤラリーがいる！」

「そうよー！ 扇探して教頭ぶつ飛ばすつて奮起したのに、ダメにする気ー？」

「いーじやない。」ご褒美つてことで全身リップだけだから

「それがいけないのよー！」

「い……イクぅ……」

真理亜のお一きくてやーらかいお胸が僕のお顔にぴったりくっついて酸素を供給するための穴とこつ穴を埋め尽くして、結果スゴく苦しいんだけど。息できないんだけど。

「イキそこの？ ダーリン？」

「ええ、早く離してあげないと天に召されるわよ」

そこで事の重大さを知った真理亜は慌てて頭を押さえつけていた腕を離し、撓わに実った罪深き果実から漸く解放されたのだ。あと少しで幸せな死に方をするといふだつたぜ。

「……拓真」

「ん？ どうした、なにか言いたげだな、愛子」「扉、見つけた」

例の「ことく要点だけを話し、ある特定の座標を指差す愛子。その座標上には、扉というには余りにデカすぎる、例え巨人社みたいな巨大な人間が実際してたとしても普通に通れるような巨大な漆黒の扉が存在した。

「これは探すも何もないですね、この大きさじゃ」

「全くだ、こんな巨大な扉誰が使うんだ？」

教会とか中世西洋の建物なんかに意味もなくバカでかい扉がよく使われるだろうが。  
まあ、海斗はバカだから分からぬだろうな。

「拓真。なんなんだ、その明らかに見下している目は」

「別にい、海斗は所詮井の中の蛙なんだなあって」

「この形状にさつきの発言、あれがどこかに繋がる扉だとしたら、開かない訳ないわよね？ その三バカトリオ！ あの扉、開いてみなさい」

三バカトリオって……、俺が入つていらない事を祈るが……。

「名指ししないと分からぬの！？ 使いづらいわねえ！ 拓真！」

「一樹！ 海斗！ あんた達の事よ！ 分かつたら貴婦人達のためせつせと氣張りなさい、男でしょう！？」

「拓真と一纏めにするな！」

「だってバカ犬、バカオタク、姉妹バカじやない。バカが三人揃つて三バカトリオと呼ばれても仕方ないじやない？」

こんなにもバカを連呼する女は十五年生きてきて初めて見たぞ。

しかし、やつぱり入つていたか……。それに自分たちの事を気品の一欠片も持つてないくせに貴婦人つて言つてやがるよ。

せめて優雅な立ち振る舞いの一つか二つ、見せてから物を言えって  
んだ。

そんな心の声を聞いてか、香織は俺に空気の塊をぶつけてきた。そんな香織の顔を覗き見れば、どす黒い笑みを浮かべてこちらを睨み付けている。

俺はこれまで二三の言ふことを考へたまゝ、はやく屋の前へと立つ。

「拓真君、準備は出来ましたか？」

もぢてんた  
一樹

「御前」の御前は、天皇の御前を意味する。天皇の御前には、御内侍、御内親王、御内親王の御内侍等が在り、御内侍は御内親王の御内侍を指す。

俺達二人は同時に扉へと手を掛ける。

だが、そんなのに構つてゐる暇はない！ 扇を力いっぱい押し、扇の開放を図る。

でも男三人でも力不足のようだ。ピケともしない。

おしゃれ真!自分だけ楽をしないと手を抜いてんたア!正直

「それは」つちのセリフだ！ 筋肉無しのもやしがッ！」

新編大藏經 卷之二

時間が数分に渡り続く。

香織も呆れて「使えない三バカトリオだわ」と呴いた、まさにその

時扉がズズッと軽く動き、四メートル超の巨大な扉が独りでに、なんと独りでに動き出したのだ。

……大事な事なので一度言いました。

「……俺は音がしてから少しも触れてないぞ」

「僕も。何でこんなことが起きたのでしょうか？」

「そういう仕様なんじゃないの？ とにかく行くぞ！」

「気を付けてダーリン、空間魔法を自在に操れる私だから分かるんだけど、この先はさつきまでダーリンがいた世界なのに、さつきとは様子が変よ」

「……姉様達が危ない！ 急ぐわよ！ 桜、愛子、真理亜、三バカトリオ！」

「だから拓真と一緒に纏めるな！」

焦りを隠せないと言つた様子で香織は駆け出し、俺達も香織の後についていく。

この時の俺達はまだ知る由もなかつた。この世界と魔法の世界の二つの世界を巻き込む大きな出来事が起ころうとしているなんているなんて。

## 第八章 漆黒の扉（後書き）

どうでしたでしょうか？

今回はエッヂとシリアルス4・6を意識したつもりですが……いまいちエッヂが多くなる傾向にあるみたい……  
目指せ、シリアルス50%！

## 第九章 惨劇の魔法世界（前書き）

お久しぶりです！ シリアスで、長い文を書いていたら、こんなに間が開いてしまいました。

それに加え、『ゼロの使い魔』とか『HEROES』を見てましたから……

やつぱりルイズは最高だ……

じゃなくて、いつか『ゼロの使い魔』みたいなエッチと『HEROES』みたいなシリーズの両立が出来たらなあつて思つて、日々頑張っています！

遂に、校長室を発見した拓真は、扉を切り裂き、教頭先生の元へと向かう。その時、拓真は衝撃的な過去を知らされて！？

もちろん、香織も負けていない！ 首輪を使って犬扱いしたり、おまけにキスをせがんだり！？

拓真は二重の意味でどうなつてしまふのか？

## 第九章 惨劇の魔法世界

「しつかし、どじまで続くのか、この暗闇は……」

ここまで歩いて約30分、どじまで続くのか、はつきり言つて、少し疲れだぞ……

「あら、元気ないようね。私が元気が出る」と、してあげようかしら?」

「なツ! 節操を持ちなさい! 」 じいじは黒幕の手の中かもしれないと、拓真の心が叫ぶ。

「あら、あなたは欲しくないの? 拓真のか・ら・だ」

香織は顔を赤くして、顔を背けた。

「つうつ……そう言わると、弱いわね……」

「でしよう? だつたら行動あるのみよ! ちょっとど辺りも真つ暗だから、何をしても、私とあなたと拓真しか分からぬわよ」 そんな淫乱娘に腹が立つた俺は、殴りかかるのは情けないという考えから、大きな胸を揉みしだくことにした。

俺にとつては、二人に対する罰ゲームみたいなものだが、二人はこれで興奮してると勘違いしてしまった。

「ほら、拓真も興奮して、おっぱいもみもみしてくれてるわよ! 今を逃すと一生できないわよ!」

「そ、そうよね。今しかないわよね。拓真もエッチしてくれるのは、真つ暗な今しかないわよね」

すぐさま俺は誤解を解こうとするも、抗議の声を出す唇は真理亜の唇によつて塞がれる。

「いいから、黙つて私達のおもちゃになればいいねよ」

「ぬああ! 離せ! おい、ふざけるなよ? じいじは愚かなる教頭先生の手中だと言うのかわからないのか!」

「問答無用!」

「知つた事ではないわ! ただ私は獸なの! 快楽を貪る獸!」

それが夜の私、闇の中の私！」

いや、昼夜問わずお前は獸な氣がするがなあ……

それは所謂氣のせいでやがて死んでしまつた。

「じゃあ、両者の真理性はどんな真理性だよ?」

真理亜は可愛らしげに首を傾げ、「んー、気品溢れる淑女?」と答えた。

『ありえない！』

この場にいる全ての友人達が口を揃えて返した。

「そんなことより、見ろー。出口が見えるぞー。」一樹の言ひとねり、前方に光るやうだ。さうして、少しずつ進んでいく。

「前方は光がさしてきただけが、妙に赤い気が……」「あらかじめ、武器は装備しておけ」

「おらがじめ 武器に装備しておに」  
毎斗が物のど、みんな武器を装備した。さすが

海斗が言うと、みんな武器を装備した。さすがは元帥の息子、戦闘の時はリーダーシップを發揮してくれる。しかし、かなり臆病なので前衛ではまったく役に立たない司令塔みたいな人間だ。

「つるわー！ 戰闘狂よりかは数段ましだ！」

「誰が戦闘狂だ！ 焼き尽くすぞ！」

「アーティスト」

止めなさい。こんな所でいがみ合つても仕方ないわ。第一、無駄

香織は一際厳しい剣幕でこちらを睨み付けている。

「拓真、いっちに来なさい。これは主である、私からの命令よ。」

「へいへい」俺は渋々と命令に応じた。……はあ。一体、何されん

だろ。と沈んでいると、ガシヤンと首元で金属音が鳴り響いた

「んんっ！？」  
何だこれは！？  
…………じやなくて、何でしうつ

# かご主人様?」

「チェーン・オブ・ザ・ウインド。風属性専用マジックアイテム、

『風の首輪』より

「く、首輪ア！？」あの犬がつけるアレか！？」

香織は悪ひれた風もなく笑う。

ノルマニヤノトシ

「ぞっけんな！　俺は犬なんかじゃねえ！」

「あら、犬じゃない。オスにはケンカをふつかけ、メスには尻尾振つて、種をまく。これ全部、犬の本能じゃない！」

「俺がいつ種なんかまいたよ？」

「しつかりましたじゃない？　真理亞に。精根尽き果てるまで」

「まいてねえ！」

「ふーん、へえ、そーう」

「何だよ……そのあからさまに信用してないその田は」

「だって、世界一誘惑が上手な真理亞と世界一誘惑に弱い拓真なのが？　もう、拓真は誘惑されて『困ったなあ、もうやっちまおつりか？』的なノリでやつちまつたんだろ？』

「ヤつちまつてねえよ…　そもそも何だよ…　『ヤつちまつ』つて！」

「おーい、そろそろ本当に出る、本当に戦闘準備しどけよ…」

「あいよ

俺は再び、獄炎の小刀【インフェルノ・ナイフ】を装備し、首輪の中に入れる。

「な、何するつもりか分からぬけど、破壊するのは諦めなさい、この鎖はかの有名な『オリハルコン』を使われてるみたいだから」

「破壊？　何をお子ちゃんなどと言つてんだ？　灼き斬るんだよ。『灼熱の一閃』」

小刀に纏わり付く炎が、一際強く輝き、首輪に纏わりついでバラバラになる。香織は完全に色を失ってしまう。

「うううう、嘘ツ！　ありえないわ！」

「オリハルコンもマグマには負けるみたいだな。さ、いよいよ教頭先生のお出ましだ、氣イ引き締めるよ…」

「分かってるわよ！　もう、この戦いが終わつたらたっぷりとお仕置きしてやるんだからね！」

そんな中、稜が敏感に異変を感じ取った。

「ん？　あれ？　なんか焦げ臭いよ？　お兄ちゃん

「稜も感じるか？人々の悲鳴、怒号、恐怖が」

「うん。やつぱり何か変だと思った。……怖い、怖いよお兄ちゃん」

「心配するな。俺が守る」

「ここまで話して、とんでもない殺氣と嫉妬が混ざり合った、グサリと心臓に突き刺さってしまうんじゃないかと思わせるような鋭い視線を感じたが、「気のせい、きっと気のせい」と自分に言い聞かせて、いや、全然気のせいじゃないけど、無視して、魔法の世界へ足を踏み入れた。

後々、これが災いとなつて、再三と追いかけ回され、散々と痛みつけられたのは、また別の話だ。

そして、俺達は再び魔法の世界に足を踏み入れる。恐らく、ここは学校の近く、そこそこ高い山の山頂付近の公園なのだろう。そこで見たものは……

「地獄絵図」

「ひどい……誰がこんな事……ひどすぎますー！」

市街地が火の海となつていた。地獄でいう『灼熱地獄』だろう。

「わ、私のお姉様達が！　まだ屋敷の中かもしれないわー！」

「よし、急げー！」

しかし、愛子は手をかざし、行く手を遮る。

「困まれた。待ち伏せ」

辺りを見回すと、ゴブリンとか、ドワーフなどの下位悪魔がわんさか集まつていた。前のよつな化け猫……なわけないか。奥の手を使つてみますか。

「仕方ない、アレを使おう。かなり魔力使つけど」

「何！　アレって！」

「いいから、黙つて見てな！　烈火の流星【シュー・ティングスター・ブレイズ】！」

突如として現れた、流星群が次々と下位悪魔に当たり、消滅してい

く。ただ、この魔法は消費が激しすぎて発動したら、しばらくは寝返りをうつこともままならないくらいに疲れ果てるのだ。

「ゼエ……ハア、やつた……やつたぞ……クツ！」

そのまま、足腰に力が入らなくなり、前のめりに倒れる。

「え、嘘！ 拓真！ しつかりしなさいよ！」

香織の声が聞こえる……やべ、再起不能だ。くそ、こんな所で……そんな中、俺の唇に何か暖かく柔らかい物が触れた。……何故か動けるようになる。あんなに疲れてたのに……

「だだだだ、大丈夫？」「香織……さつきの柔らかくて、暖かい感覚は……唇？」

「そそそそ、そうよ。魔力回復には、女の子の唇が一番なの。他に緑色のポーションとかあるけど、苦すぎて私には飲めないわ。だから、女の子の唇を奪うの。別に、ガールズラブとかレスピアンとか小百合属性つてわけじゃなくて、魔力回復なの。分かった？」

「お、おひ。にしても三回目だな」

「何が？」

「キスしたのが」

瞬間、真っ赤になつた香織に押し倒され、気が済むまで唇を奪われた。

「富本流剣技、居合い一ノ型『断絶』！」

灼熱の冠を鞘に差したまま、抜いた衝撃を利用し、対象を下から真っ二つにする、基本中の基本の技。だから威力は低めだが、俺が使うと大山家の豪邸の前にそびえ立つ鋼鉄の巨大な門を粉碎するほど威力を有するのだ。

それに加え、香織とのキス。あれが俺に絶大な力を与えてくれたみたいで、今ならドラゴンも瞬殺出来るんじゃないかって思えてくる。

「おおい、紅音ー！ 詩音ー！ 楓さーん！」

俺が彼女達の名前を呼ぶと、突然、目の前にワープしてきた。

「あら、お久しぶりですね。香織に拓真さん」

「ああん？ 香織に拓真じゃねえか？ どうした？ 遭難者を探すような呼び方しゃがつて……俺らはこここの住人だから、迷わないんだよ」

「もお、なんや？ 人様がせっかく気持ちよく寝とるゆーんに？」

腹立つわあ！」

あ、あれ？ 紅音の口調がとてもなくへンだ。関西弁になつている。前に会った時はルー 柴みたいな喋り方だつたのに……

「あの、一つ質問、いいですか？」

「なんや、いってみい？」

「あなたは、前に日本語の間にgo I am orousとかnameとか言つてませんでしたか？」

「それは、あんたとアタイが初対面だからや。初対面の人にはいきなり関西弁つてーのは失礼や思うてな……」

「だから、ルー 島みたいな喋り方を？」

「せやな。大体あつとるけど……」

「もう！ 拓真も紅音お姉様も雑談に興じている暇はないでしょう！」 一刻も早くここを離れなきや！」「せやな！ 拓真、この

の続きは混乱が終わつたら、じっくり話したるからな

俺達は大山家の豪邸を後にし、最寄りの高台に登りつめた。俺達がそこから豪邸を見た瞬間、そこに巨大な隕石が落ちてきて、大山家の豪邸を跡形も無く吹き飛ばした。

「あつ！ 私達の家がつ！」

「んなアホな！ ありえへんて！」

「おいおい、住むとこ無くなつちまつたぞ！ どうすんだよ！」

「まあ、ドンマイ！ 復興までは家を使ってくれて構わないからさ

……」「ホンマか！ おおきに、ホンマ助かるわあ！」いや、紅音が関西弁を使うのは意外だつたが、あの挑発的な態度も完全に消え

ている。

「ああ、あれは芝居やで。じや、興奮したやろ？」  
いやあ、女とこいつのは本物に芝居が上手くて怖いもんだよ、まったく。

次に向かったのは、大山第一魔法学校。もし俺が普通の人間だったら、今頃向こうの世界で、五時間田の授業を受けているだろ。確かに歴史だつけな……と物思いにふけていると後ろの方で轟音が響き渡つた。今のはあの大山家豪邸を吹き飛ばした隕石なのだろう。

「おい！　さっきの高台も吹き飛ばしたぞ！　あのオッサン！」「だが、こいつが奴の居城なら、ここに隕石は降つて来ないだろ。安心して捜索すればいい

「じゃ、じゃあ、もしこいつが教頭先生のいるところじゃなかつたら、どうなるんですか？」

『・・・・・』

みんな黙つちまつたよ……。

「ねえ、ダーリン。私と最後のエッチ、しようよ」

お前は一生黙つてろよ！

「じゃあ、とりあえず校長室へ行こいつか？」

「なんぞ？」

「そこしか見当つかねえからに決まっているだろーがッ！」

「でも、敵が……」

愛子の言つとおり、いつの間にか、ガーゴイルを中心とした、魔物軍団が俺達の周りを囲んでいた。

「お兄ちゃん、私……怖い……」

稜は驚く程に怯えていた。確かに怖い。だが負けるわけにはいかない。俺は稜の背中を優しくさすってやつた。稜の体の震えは收まり、表情が綻ぶ

「教頭先生は我々が到達する前に魔力を使い果たさせてしまおう、

とこう魂胆なのでしょう。しかしそうはこきませんよ

一樹は土間に向かって雷を放つ。土間を守っていた魔物は全て消え去った。

「行つてください。」ヒは任せて先へ。これであなた達が本来使う魔力の2分の1位は節約でしょう！」

「でも！　一樹だけじゃ、みすみす死にに行くようなもんだ！」

その時、木で作られた巨大なハンマーが近くのガーネイルを襲う！

「誰が一樹だけだつて言つた？　俺も行く！」

「海斗……お前、やれるのか？」

海斗は不敵に笑つた。

「当たり前だ。どこまで侮辱すれば気が済むのか、生還したら全力で土下座しろよ？」

俺も不敵に笑う。

「ああ、土下座ならこいつでもしてやる！　だから、絶対に死ぬなよ！」

「おう、貴様の悔しそうな顔を見るのが楽しみだぜ」

「僕たちも必ず追いつきます！　だから早く！　土間のバリケードが張られる前に！」

「お、おう……絶対に死ぬなよ！」

土間には早くも魔物が集結し始めている。俺はその魔物を全て切り刻み、活路を切り開く。

「こっちだ！　早くしろ！」

俺と女達は校舎の中へと消えていった。

俺達が完全に消え去るのを見て、不意に一樹は呟いた。

「海斗君。君の勇気は賞賛に値し、中世の~~アーロン~~パでは、普通に爵位を貰えるくらいの働きをしてくれたと思つ。これは特攻で、足止めに過ぎないし、こんな魔物達を殲滅しきれるかも分からぬ。それでもやつてくれるかい？」海斗君

「愚問だな。友の危機に駆けつけるのが真の友といつものだらう。

散る時は一緒だ。一樹」

「あれ？ 生きて帰つて、拓真に下座させてやるんじやなかつたのかな？」

「ああ、そうだとも。仮にだよ。ありえないがな。さて、あちらもそろそろ痺れを切らす頃だらう。この続きは生きて帰つて、拓真に下座させた後にしようぜ！」

「だな、攻雷九ノ式、『豪雷ノ双拳』」

「攻木九ノ式、『神木ノ巨槌』！」

「きやつ！」

突然の地響きに田を丸くして驚く女達。まあ俺も多少はびっくりしたが……

「お兄ちゃん、さつきのつて……」

「ああ、あいつらだ。あいつらが頑張つてくれているんだ。俺らも頑張らないとな！」

「ええ！ 当然ですわ！」

「一樹さんと海斗さんが頑張つているんです！ 私達も頑張らなければ！」

「この世界が教頭先生に滅ぼされてしまします！」

その時、愛子が何か呟いた。

「敵影、接近。12時の方角。」

愛子の言つとおり、正面に衛兵が接近してきた。「何者だ！」

すかさず、接近し、居合い抜きからの峰打ちで衛兵を氣絶させた。

「凄いやん！ やるやないかい！ なあ？」

詩音

「いや、まだまだだね。俺なら一瞬で殺せるぜ？」

殺せるって……これまた物騒な……

「甘い、甘い！ 勝負はいつも死ぬか生きるか！ 弱肉強食の

この世界、そんな甘ちよろい考え方じゃ、すぐにお陀仏だぜ……」

そこまで言われるんだ……氣絶させただけで……

「まあ、これが詩音ちゃんだから仕方ないですよ」

「おい！　楓！　俺をちゃんと付けで呼ぶなって何回言えばわかるんだ！　気持ち悪い！　俺はチャラチャラした女じやねえ！」

！

「でも、香織ちゃんと遊んだ時の、あの乱れっぷり、最高でしたよ？」

「グギイ！　るせえ！　つるせえ！」

そういう詩音の口には涙が黙っていた。

「殺すからな、テメエら絶対に皆殺しにしてやるからな！」

それからしばらくな、雑談を交えながら、衛兵を次々に気絶させたり、懲殺したり、色氣で乗り切ったり（俺も色氣で何度も気絶しそうになつたが）と、搜索はスムーズに進んでいた。遂に校長室へとたどり着いた。

「魔力消費してる人はいますかあ？」

桜を除いた全員が手をあげた。みんな、ちやちな魔法から壮大な魔法まで様々な魔法を放っているためだ。桜はと言えば……逃げていた。

「一列に並んでください。キスしますから」

いきなり何言い出すんだ、お前は。もじもじしてゐるし。

「本当は拓真さんとだけで大人の時間を過ごしたかったんですが、せっかくだから、女の子ともラブラブしてあげようかなあ、なんて」

「……本当はそんなこと言われるとこっちから願い下げって言つてやるんだけどね……今はあなたの唇が必要だから、何も言わないわ」

「じゃ、拓真さん、キスしましょー！」

遂に香織がキレだした。

「ふざけないで！　もつ我慢の限界だわ！」

「……キス、しませんよ？」

その一言だけで香織の反抗は終了する。……いやあ、本当に短い反

抗だった。

「何か言った！」

「いや、何でもないですよ」

「ああ、もう！ 勝手にしなさい！」

「じゃ、拓真さん、私がやせしー、ゆっくり、じゅくり、がつつい、キスしますからね」

そういうた途端、俺は桜に押し倒される。

「え？ ええっ！」

「ついでに体も奪つてあげますから」

「……おーい、みんな、大丈夫？」

「あんたみたいに激しく体を貪られたわけじゃないからね」

「ゼH……ハア……なんで俺だけこんな目に」

「女の子をメロメロにするフェロモンがあなたにはあるのよ」

真理亜が蠱惑的な微笑を浮かべながら、近づいてくる。近づいてきて、抱きついてきた。

「チューしていい？」

「お願ひします」

「ふざけるな」

香織は疾風の棍棒【ウイング・クラフ】でしたたかに殴りかかる。

「なにすんだ！」

「真理亜はダメ。絶対にダメ。個人的に気に入らない」

香織、それを人々はエゴつて言つんだよ。

「うつさい！ そんなにシメられたいのー！」

「うわっ、目がマジだ。

「すみませんでした。あなた様の主張が聞きたいのであります」

「つまり！ 真理亜とキスするくらいなら、わ、わ……私とキ……スをしなさい……って意味よ……分かった？」

「つて言わてもなあ……もうされんんだけど、キス。

「うぬああああつ！ 真理亞！」

香織は激怒した。『うぬああああつー』って言つくらいだから相当腹が立つていたらしい。

「ああ！　もう！　元々の目的を忘れたか！」教頭先生の殲

「… 何故」んな所で油を売っているんだ

四

「自分の性欲が歯止めを失つたから?」

「じゃかあしい！」とにかく行くぞ！ああ行くぞ！」

俺は獄炎の双剣【インフルノ・ツインブレード】を装備し、クロスして構える。

「阿波の火祭」

「アホ、四〇八年のアホだ！」

剣を振り下ろし、扉をぶち破る。その奥には、自称『しがない教頭

## 先生の姿が見えた

一週が二週だね。待せぐたひれたよ」

の様だ」

君

！何故その名を！」

忘れる所がないし、なにか殺し掛けた奴の名を

血塗られた壁、首から上がない子供の死体、

血塗られた壁、首から一かたない二体の死体、辱められた街は憎殺された若い女性の死体、そして無惨にも切り裂かれた、俺の兄さん！

「アーティストとしての才能を発揮するためには、常に新しい視点や表現手法を追求する必要があります。」

ねえのか！」

「私は金がある、廻るぜ。」  
「うそだ。」

「……………最低なヤローだぜ」「み消しただけのこと！」

俺の周りにスペルを唱えたわけでもなく、炎が迸る。……ファンタジーでよく使われる、魔力の具現化だ。かなり興奮すると発生するらしいが、知つたことか。今、考えていること、それは……

「兄さんの仇、修道院のみんなの仇、この額の傷のお礼だアアアアツ！」

次の瞬間、俺は額をさらけだす。そこには10cmくらいはありそ  
うな大きな古傷だった。

「この時をずっと待つていた！ テメエに復讐する時を！ 修道院  
のみんなの仇を討つ時を！」

「ふん、非力な貴様に何が出来る、兄一人満足に守れない、貴様が  
ア！」

「今の俺は昔とは違う。俺は力を手に入れた。あの時の過ちは繰り  
返さない！」

「ふはははは！ 強がりを言つていられるのは、今の内だぞ！  
小僧！」

俺は装備していた双剣を標的に向けて構える。標的も同じで、エク  
スカリバーと呼ばれる両手剣をこちらに向けて構えている。  
魔法学校、否、魔法世界全体の生死をかけた戦いが、今、始まろう  
としているのだ。

## 第九章 惨劇の魔法世界（後書き）

どうだったでしょうか？

『ゼロの使い魔』みたいなエッセイと『HEROES』みたいなシリアルスの両立は出来ていたでしょうか？

感想、お待ちしています。

尚、来ないだらうけど、一応言つておきますが、『タバサのほうが萌える』だと、『アンリエッタのほうがいい』とかそういうのは無視しますね。

## 第十章 決着の校長室（前書き）

今回は第一部の最後と言つことで、表現の限界に挑戦してみました。見る人が見れば、18禁だと思う人がいると思います、でも、まあ、他の作品でも似たようなのがあるから、ギリギリ15禁だと思います。苦手な人はご注意下さい。

## 第十章 決着の校長室

「うあああああああつ！」

俺は駆け出した。冷静なんてどこかへ吹っ飛んでいた。

「拓真！ 落ち着いて！ それこそ奴の思う壺よ！」

そんなこと、知ったことか。今は奴を叩き斬る！

それしか頭にない俺は教頭の頭めがけて右手に装備した『焰魔』を振り切る。が、手応えが全くない。

「ははは！ どこを見ているのだね！ 怒りに任せて剣を振つてもこの私には当たらないぞ！」

「黙れエエエエッ！」

教頭に向かつて絶空波を放つも、教頭には当たらず、教頭は真後ろに移動する。そこに剣を振るつても、教頭は闇に同化し、からかうかのようにかわし続けている。

「クソオ！ 変われ！」

その言葉と共に左手を軽く振るつ。左手に持つていた『緋炎』の刃が鍔の部分から折れ、次の瞬間、鍔が撃鉄、引き金と言つた拳銃の部品になり、切つ先に穴が開き、銃口になる。左手に持つていた『緋炎』は十秒もしない内に真紅色をしたリボルバーになつた。

「実は、18禁改造工アガンで、ヤンキー約百名を殺した事があつてね、その頃から大山財閥の権力が働いたか、ニュースにはならなかつたが、みんな眉間に寸分違わずヒットしてね。みんな即死だつたよ。何が言いたいか？ つまり、テメエの眉間から心臓まで寸分違わず蜂の巣にしてやるつて事だよ！」

俺はダブルアクション式のリボルバーを構え、放つ。

「ふん、そんなちやちな兵器が通じるはず……」

その時、教頭の頬に血が伝う。

「血が出ているぜ？」

教頭は唸り声を上げ、こちらに向かつて突進してくる。俺も駆け出

す。そして、相打ち。俺の頬に血が伝つ。教頭は黒い塊と化して、いつの間にか俺の横に立つていて。

「何！ どういう事だ！」

“闇黒の球体【ダーク・ボール】”

瞬間、横からの衝撃に大きく吹き飛び、壁に激突する。

「ガハアッ！」

香織が緊迫した表情で駆け寄つてくる。

「拓真！ そんな！」

香織が怒りに顔を歪め、風を纏わせる。

「テメエエエエエツ！」香織は教頭の後ろに瞬間移動し、纏わせた風を解放し、教頭を吹き飛ばした。

かに見えたが、闇と同化して、いつの間にか香織の後ろに存在していた。

「香織！ 危ない！」

ドヤ顔していた香織の表情が一瞬で青ざめる。その胸に教頭の右腕が貫いていた。

「嘘……でしょ……？」教頭は乱暴に右腕を引き抜く。香織は糸が切れたマリオネットのように倒れ込んだ。

「香織いいいい！」

「三ある目的の一、大山香織の抹殺を達成した。残るは一つ。大原兄妹の抹殺だ！」

即座に稜の前に立ち塞がる

「こいつだけは、稜だけは絶対に守る！」

「何度も言わせるな。兄も守れないお前に何が出来る。邪魔だ」  
教頭は右手で埃でも払うかの動作をした。それだけですぐ横にある壁に激突してしまう。

「グアアッ！」

「言つただろう？　『お前は無力だ』と、彼女を守れなかつた事を悔やみながら、死ぬがいい！」

教頭は左手で首を絞める動作をした。氣道が締まり、息ができなくなる。

『止めてええ！』

女達が叫ぶ、しかし、その声は次の瞬間、断末魔に変わる。

『エクスカリバー！』

教頭が叫ぶと右手に両手剣が現れ、それを片手で軽々と振るい、七人の女達を一瞬で真つ二つにする。

……まずい、このままじゃ死ぬぞ……。

意識が薄れ、窒息死してしまう、と思った時、一筋の光が教頭の左腕を吹き飛ばし、俺は呼吸を取り戻す。

「お兄ちゃん！」

激しく咳き込む最中、俺は落とした二つの剣を拾い、構える。

「すまない、心配させたな。だが、次は

だが、稜は首を横に振り、頬にキスをする。

「いいよ、十分頑張ったよ、一人で抱え込まなくていいんだよ。拓真は休んでて、私達に任せていて」

稜の目の色が青色に変わり、稜がいつも纏っている、のほほんとした雰囲気が嘘のように消えてしまい、代わりに今にも殺されてしまいそうな雰囲気を纏わせている。

「いいんだよ」

言下、稜の姿が消えた。……と思わせるようなスピードで教頭の目の前まで接近していた。

「我が聖なる光よ、全てを切り裂く剣となりて、我が敵を討て！」

聖光の銳剣【ホーリー・ブレイド】！ ウオオオオ！

雄叫びと共に、拳を斜めに振り上げる。普段なら、教頭の体が闇に同化して、どこかに移動してしまはずだが、同化せずに血が吹き出した。見れば、稜の手には光で作られた剣が持たれているではないか。

「伝説の『光』属性が、厄介な奴を敵に回したものだ」

稜は血で衣服が汚れるのも構わずに、ひたすら斬り続ける。斬つて斬つて斬りまくる。その内に、教頭は立つていられなくなり、倒れてしまふ。

だが、稜は攻撃を止めようとしない。むしろ、倒れてから一層、攻撃が激しくなつているような……

「私はどうなつてもいいの……でも、お兄ちゃんが傷つくのは許さない！」

『お兄ちゃんに謝つて！』と繰り返し言いながら、どこからか持ってきたサバイバルナイフで教頭の体をメッタ刺しにしている。

「お、おい！ 止めろ！ もう死んでいるだろう！」

俺は稜を揺さぶつたり、羽交い締めにしたりしてみる。稜はまるで長い夢から覚めたかのようなリアクションを取り、よつやく攻撃の手を止めた。

「終わったよ。お兄ちゃん！」

「あ、おひ……」「

ま、まさか稜にこんな一面があつたなんて……

「うひ？ お兄ちゃん、びひしたの？」

「いや、なんでもないですよ」

……『うひ』って言ひくりいだから隠しておきたかったことだったんだらうな、相当に。

「お兄ちゃん。このこと、バラしたりしたら……あのひとみたいになるからね？」

稜はそう言いながら教頭を指差した。内臓やらそういうのがぐつちやぐちやになつていて。

……どんな風に転んでもあんな感じに殺されたくはないな。

「了解。とにかく、稜……」

「なあに？ お兄ちゃん」

稜は俺に向かって、純粋無垢で弾けるような笑顔、稜曰わく『お兄ちゃんをメロメロにする』『二〇二〇スマイル』を放つて来た。

……なぜだろ？俺はメロメロどころかムラムラするぞ？ぐ、苦しい……落ち着け拓真、落ち着くんだ。これは反社会的行為であつて、してはいけないこと、ヘンタイの考へることだ。そうだ！これは煩惱なんだ！だから追い払わなければならぬ。煩惱退散！ 煩惱たいさ～ん！

「……私の体が欲しいのね」

「ふえっ！？」

稜の表情が赤みを帯びていく、もじもじもし始めた！ 原爆並みの威力を有する仕草だ。

「だつて、お兄ちゃん、稜のおっぱいばかり見てたんだよ？ 考えられることは3つ」

「だああっ！ そんなわけ……無いじゃないか、妹に欲情するなど禁忌の中の禁忌、そんなことしたら、兄妹の関係じゃ無くなつてしまふ

「いいじやん！ お兄ちゃん！ 稜は兄妹の関係もそうだけど、大人の関係つてやつになりたいんだよ！」

くそ、氣道を絞められてる訳じやないのに、息が出来ない。苦しい。まさか稜の口からそんな言葉ができるとは……

「お兄ちゃん、稜のおっぱい、もみもみして何考へているの？」

え？ そんなはずない、と目線を上げていくと……

「ああ、ダメだこりや。お兄ちゃん、エッチしてあげるから、おっぱいもみもみ、止めてくれる？」

両手で包み込むように揉みまくつていた。

「あ、あれえ？ わかしいな、こんなことするわけないのに、しかも、離せない。つまり、取り憑かれた！？」

「それは災難ね、お兄ちゃん、私もムラムラしてきちゃつたた、助けて！ 僕、本当にビリにかなりそうだ！」

「フハハハハ！ 滑稽、滑稽。笑わせてくれる」

声のした方へ振り向くと、エル オス第一形態みたいな翼を生やし、悪魔としか思えない姿をした、『教頭先生第一形態』が不気味な嘲笑をうかべていた。

「驚いただろ？『真・教頭先生セカンドインパクト』だ！名前ダサッ！ ネーミングセンスゼロだ！ 僕でももう少しマシな名前を付けるぞ！」

「ああ、驚いたよ。テメエのネーミングセンスにな」

「うん、ダサイ。それにさ、お兄ちゃん。いつまでもみもみしてんの？」そんなこと言われても、体を乗っ取られているんだ。しかも俺の体を利用して、あんなことから、こんなことまで稜にやろうとしている。「呪われてるんだよお……助けてくれよ……」

「そうだね。悪霊はお祓いしなきやね」

そう言うと稜は大きく深呼吸をし、決心したように口を開じる。「何をしている、そつちが来ないなら、これからいかせてもらひぞ！ 悪魔の稻妻【デビルズ・サンダー】！」

紫色の雷が教頭第一形態の手から放たれる。火炎の壁【ファイア・ウォール】で防御しようと呪われている最中、どうにか構えたが、稜が手を出すなど言わんばかりの勢いで構えたため、自肅することにしよう。しかし、何を出そうとしているんだ？

「聖なる光よ、我に守る力を与え、我と守りし者を守りたまえ。光の聖域【ホーリー・サンクチュアリ】」

稜がスペルを唱えると、真っ白な壁が現れ、瞬く間に俺と稜を囲む。

「な、何これ？ 白い空間が広がっているけど……」

「うん、光の聖域、ホーリー・サンクチュアリだよ。ほら、呪いも解けた」

「おお、ほんとだ。もみもみが止まっている。

「はあ、一時はどつなることかと思つたよ」

自由を取り戻した手で額に浮かんだ冷や汗拭う。いやあ、今ほど自由を感じた時はない。

「でもさ、お兄ちゃん。実はやりたかったんじゃないの？」

そう言いながら、稜はにやにや笑っている。その動作一つでドキッとする俺だが、さすがにそこまでは思わないぞ？

「いやつ、そんなやらしいことは……ねえ？」

「まあいいや、お兄ちゃん、キスしよー！」

完全なる不意打ち。一発KO。俺は完全に沈黙してしまう。その沈黙をイエスと受け取ったのか、ゆっくりと目をつむり、唇を近付ける。……あれ、このシチュエーションはどこかでみたことがあるような気が……と考えていると、俺の唇に稜の唇が触れる。その瞬間、香織や真理亜のキスでは感じる事がなかつた、雷が落ちたような感覚に襲われる。少し抗う素振りを見せると、両手で顔を挟み込み、動けなくして、じっくりと唇を貪るのだ。少し貪つては“好き”と囁き、抗う気力を奪い、ゆっくりと、だが確実に、俺の心を奪つていく。

ある程度時間が経つと、突然に稜が光の粒子になり、俺の体内に侵入してきた。

「うわっ！ 稜！？ これはどういうことだ！」

一瞬の間が開き、俺の頭に稜の声が直接響いて来た。

“スピリット・リンク、魂の繋がり、私達がお互いを心から愛し合える存在になつたとき私達は本当の意味で一つになれるの。ああ、お兄ちゃんと一心同体。なんて素晴らしいことなの！”

「う、うん、でさあ、この状態になると、何ができるようになるの？」

目には見えないが、稜は得意げに説明した。

“ズバリ！ お互のステータスを足した能力値をお兄ちゃんが使えるようになるのです！”

「なるほど、運動能力、知能、さらには魔法まで、俺と稜の物が使えるようになるわけか」

“さつすがお兄ちゃん！ 大正解！ 『褒美としてラブラブあげるっ！ あ、補足説明しておくとお兄ちゃん、私の姿が見えなくとも、抱きついたり、チューしたり、ペロペロしたりすることがで

きるんだよ。ほら、このとおり”

稜に抱きつかれ、チューされ、舐め回された。ような感触がした。

“それと、お兄ちゃんが受けた感覚なんかも稜に伝わつたり、逆に稜が感じたこともしつかり伝わるんだよ”

稜がそう言つと、何だろ、得も言われぬ感覚に襲われる。

「な、なにやつてんのかな？　なんかすごいゾクゾクするんですが」

“うにい……今、自分のえつちいところを指でいじくつてるとこり……はあん、やつぱり、お兄ちゃんとあんなことしていふところを想像するだけで、私は、ああん！　私はっ！”

「しつかりしろ！　稜！　今はそんなことしてるとこりじやないんだぞ！」

“そ、そりよね、私がしつかりしないと、お兄ちゃんが全力を出せないからね。よおし、じゃあ、いくよ！　解除【ディスペル】”

稜が叫ぶ。少し間を開け、光の聖域が弾け飛ぶ。弾け飛んで最初に見たのは、怒りに顔を歪ませた教頭第一形態の姿だった。

「待ちわびたぞ！　貴様等、どれだけ待たせたと思っておるんだ！」

「待たせたんじゃない」“余命を延ばしてあげたんだよ”

「貴様等ア！　私を完全に怒らせたなア！」

教頭が激怒しても、動じなくなるとは……やはり凄いな、スピリット・リンク

“うん、稜とお兄ちゃん。最強のコンビだよー”“光の翼【ホーリー・ウイング】！”

背中に魔法で作られた翼が生える。

「驚くのはまだ早い！　“斬鉄剣！”

光で作られた日本刀が正面に現れる。それを手にとり鞘を抜くと、目映いばかりの閃光が迸る。

「そつちが西洋の剣なら！」

「調子に乗りよって！　すぐに後悔させてくれようぞ！　エクス

カリバー！」

二対の戦士は同時に空を駆け出す。金属音を鳴り響かせ、鎧を削る。

「富本流剣技、一ノ型『閃光斬』！」

俺は剣を目には見えない速さで振りまくる。俺の剣は火花を散らし、次第に光を放つようになる。教頭第一形態の顔にも、苦悶の表情が浮かんでくる。

「クソ……よもや」これまでの力を持つていたとは思わなかつたぞ、どうにか形成を逆転せねば……」

「戦闘中に考え方か、余裕あるなあ」

“でも、これはどうかな？ わが輝く光よ、空を駆け、敵を討て！”

輝光の飛刃【シャイン・エッジ】！

突然、刀の切つ先が光り輝く。

「どうすればいいんだ！？」

“そのまま、振つてみて。面白いことが起こるから”

稜の言う通り、俺は剣を振つてみた。そしたら、面白いことに、切つ先からソニックブームみたいなのが現れ、教頭第一形態の片翼をあつさりと切り落としてしまう。

……嘘だろ、あんな丈夫そうな翼がいとも簡単に切り落としてしまう、否、あれは翼の付け根が光の粒子になつたと言つた方がふさわしいだろ？

「おのれ！ おのれおのれエエエツ！」

“今度は、溜めてから放つて見て、すごいことが起こるから”

俺は斬鉄剣を真上に掲げた。すると、空気中の光が刀に集まり、周りが少し暗くなる。逆に斬鉄剣は今まで以上に光を放つている。

「“いけええええツ！”

「調子に乗るな！ 暗黒の衝撃【ダークネス・インパクト】オオオオ！」

二つの技は同時に放たれ、俺達と教頭第一形態の中間点で激しくぶつかる。その後、輝光の飛刃は暗黒の衝撃を打ち消し、教頭第一形態を真つ一つにした。

「ああ！ 校長になる計画が！」

「テメエに校長先生、いや、社会人になる資格なんて最初からねえんだよ、殺人鬼」

“ ばいばーい ”

教頭先生第一形態は雄叫びに似た、断末魔を上げ、大爆発。教頭先生は跡形もなくなってしまった。

「兄さん、仇はとりました。安心して、眠つてください」

俺はそう呟くと、地面に降り立ち、斬鉄剣を鞘に収める。

“ お兄ちゃん、あそこになにか刺さつてるよ？ ”

稜が指さした……と思う所を実際に見てみると、なんか神々しいオーラを纏つた両手剣が威圧感を放ちながら、刺さつていた。

「本當だ。なんか神々しい物が刺さつてるね」

“ あれが愛子さんの言つてた、『本物のエクスカリバー』じゃない？”

「そうだね。でも刺さつてるね。抜けるかな？」

“ 抜けるよ！ だつてお兄ちゃんだよ！ 不可能なんてないんだよ！”

「じゃあ、抜いてみるか」

恐る恐る、エクスカリバーに近づき、柄の部分を握つてみる。……何も変化はないようだ。次に柄の部分を上に引っ張つてみる。すると、電撃が走り、俺達に多大なダメージを与える。

「があああああつ！」

“ いやああああつ！ ” だが、負けるわけにはいかない。この剣には魔力が込められている。他の悪人に利用される前に、引っこ抜かねばならぬんだ！

「こんのおおおお！ 抜けやがれえええ！」

突然、剣が軽くなり、スルッと抜けてしまう。

おお、抜けた！ と思ったのも束の間、刺さつていた所から、いきなり閃光が漏れだし、視界を奪つた。

「うわっ！」

“う、うう……きやあ！”

稜が後ろに吹つ飛んだと同時に閃光は消え、視界が戻る。その時に見たのは、鞘に収まつた、エクスカリバーだつた。

「すげえ、いつの間に……」

腰に下げるにはちょっと長い為、背中に背負ひ。と、同時に稜が後ろから抱きついてきた。

「おに～～ちゃん！ 稜ちゃんにい～～っぽいチューして～！…すぐさま振り向ぐ。その時、二つの異変に気づいた。

一つ目、稜の表情と様子。顔が完全に緩んでる。それに、すごく危ない感じになつてゐる。

まるで、媚薬でも飲まされたようだ。

二つ目、俺の体。なんかすごいゾクゾクする。これこそ、媚薬でも飲んだのか、つて感じだ。実際飲んでないけど。

「お兄ちゃんもゾクゾクしちゃうでしょ？ スピリット・リンクの副作用、一つになつた二人は惚れ薬と媚薬を一緒に飲んだかのように、お互の体を激しく求めてしまうの…！ ああ！ 今、稜の下着はびしょびしょ、お兄ちゃんの体はムラムラ！ もう、アレしかない！」

「アレ？」

「ひとつになるの！ 心も体も！ ついでに、私達の子供も作れるよ！」

「おい、まさか、マズいって！ 反社会的

「そんなの関係ない！ ああん！ もう我慢できない！ いただ

きます！」

「ちよつ！ おい！ やめつ、うわあああああ！」

俺達を産んでくれたお母さん、「めんなさい。兄妹で交わることになつてしまいそうです。いや、そんなことはあつてはならない。反社会的行為だからな！」

「火炎の

「解除【ディスペル】」右手に生み出した炎はあつと/or間に鎮火

される。くそ、やっぱ駄目か。

「眠りを誘う雲【スリープ・クラウド】

稜の口から霧状のねばつとした何かが噴出される。それが雲だと気が付く頃には、強烈な眠気に襲われる。

「な、なんだこれ、めちゃくちゃ眠くなる。何を……した?」

「うふふ、お兄ちゃんは今から眠ります、痛みも感じないくらいに。その間、私は事を進めておきますね。」

「待て……りよ……う、やめ……」

その後、三日三晩も眠り続けた……らしい。

## 第十章 決着の校長室（後書き）

どうだったでしょうか。

この作品を読んで卒倒した人がいないことを願っています。  
感想、お待ちしています。

【お詫び】完全に18禁ワードがあつたことをこの場でお詫びします。その他にも、完全に18禁ワードがあつたならば、ご連絡下さい。すいませんでした

## Hピローグ 一時の平和（前書き）

Hピローグです！ 次回から愉快な学園編になります。（全五話）  
その前にキャラクター紹介が入るかも。

## Hペローグ 一時の平和

……まあ、たくま……

「拓真！ コラ！ サツサと起きるー！」

頭に激痛が走る。Mじゃない俺は無論、反撃に出る。

「誰だ！ 烈火の竜巻【ブレイズトルネード】」

炎を纏つた右手を横に振る。途端に炎の竜巻が現れ、周りを包んでいく、と思われたが、一陣の風によって消え去る。

「バカね、あんたの魔力はあたしより、か・な・り弱いの！ 分かつたら無駄な抵抗を止め、サツサと起きるー！」

また蹴られた。今度は鳩尾に当たったぞ、起き上がるうつとしても、起きあがれないんだけど！ と思つていたら、頭をぐりぐり踏みにじってきた。

「ほりほり、こうこうのが好きなんでしょう？ 気持ち良いんでしょ？ もっと痛めつけてあげますよ？ 好きなだけ味わいなさいよ！」

ここは大山家の豪邸、時刻は朝。俺と香織の主従生活が今日もまた、始まるうとしている。

しかし、香織は胸を貫かれたはずでは？

「あんな危険な場所、行くわけないでしょ？ あんたら兄妹以外、みんな分身よ！ 分身！」

## ハルクー　一時の平和（後書き）

と書いた上で第一部が終わりました。感想、お待ちしています。

## プロローグ 紅音の発明（前書き）

いよいよ、学園編が始まります。学園といえば、着替えシーン、水泳（夏限定）、生徒会室のハーレム！ まだまだ挙げきれないが、これら全てが不幸にも拓真に襲いかかる。（予定）

頑張れ！ 拓真！

## プロローグ 紅音の発明

「も、もう良いでしょう？」「犬は喋らないって、何度言えば分かるのかな？　まだ調教が必要ね」

時は少し進み、大山家豪邸。

俺は今、香織の魔法で強制的に四つん這いの状態だ。でもって、香織は風の鞭で叩きまくるといった、俗に言つて“SMプレイ”って言うのを、香織によつて無理矢理体験中。

「ほら、『キャイーン』つて言いなさいよ！　野良犬！　無様ね、つて笑つてあげるから」

おまけに、“バタフライマスク”なるものをつけて、完全にSM女王様気取りだ……マジでムカつくぜ。燃やし尽くしてやる。

「……我と契約せし、炎の魔神よ　」

「はあ？　なんて言つてんのかしら？」

「　汝の炎を持つて、我が仇敵を討ち滅ぼせ！　現せ！　その姿！　イフリート！」

俺が叫ぶと目の前の地面に魔法陣が浮かび上がり、そこから炎の魔神、イフリートが現れる。

「な、犬の分際で召喚魔法！？」

香織が動搖したためか、俺を強制的四つん這いにしてた、空氣の縄

【エア・ロープ】が解け、自由を取り戻す。肩つったかと思つた……。それはそうとして。立ち上がるごと、イフリートの為の攻撃呪文を唱える。

「灼熱地獄の主、迸る灼炎、死の息吹に似て、仇敵を瞬く間に葬り去る」

イフリートの口から炎が迸り、香織を包む。が、香織は真っ黒焦げにならず、バタフライマスクだけが消し炭になる。

「あ、あれ？ 私、いつの間にここへ？」

「とほけるなよ？ お前が鞭でメチャクチャにひっぱたきまくって、

挙げ句の果てには『跪け！ 犬！』だよ？」

俺は一句『』とに指を差し、今の苛立ちを一生懸命にアピールする。その度に、香織は慌てふためき、「あわ！」とか「ふわあ」と声を漏らす。

「私はそんなキャラじゃないわよ！ 私はその…………つん…………つん……」

「ツンデレ」

「そう… 多分それよ！ 認めないけど」

「でも、どうして『ツンデレ香織ちゃん』が（バキッ！）『SM女王香織様』（ベキッ！）になつたのか、よく分からないよな」

「…………知らないわよ」

拗ねるな。お前のもう一人のお前に失礼だ。

「つるさーーー！」

「おー、素敵なSMライフを過ごーっとゆかいな

『紅音…』

あれは…………やつきのバタフライマスク？

「へへへ、どうした？ わいの新発明『SMマスク』は？」

『お前（紅音）の仕業か…！』

だが紅音に反省の色は見えない。むしろ、アブナイ笑みを浮かべている。

「ほな、次な。名付けて、『性転換光線銃』レズつ娘の香織ちゃんが喜ぶ、拓真を女の子にしてまつ光線銃だ。受けてみ、拓真…」

紅音は懐から、外国製アニメによく出そうな光線銃を取り出し、構える。

香織の田の色が、徐々に変わっていく。

「そうよ、拓真！ 主からの業務命令よー！」

ふざけるな！ 業務命令で女の子にされてたまるか！ つてもう撃ってるし！ う、うわあああああっ！

眩い光に包まれ、煙幕に囲まれて、自分の姿が一瞬、溶けて消えた感覚がした。煙幕が晴れると、そこには……。

「成功したわ！ 完全に女の子よ…… かわいい！」

女の子の体になつた自分がいた。胸が苦しくなり、重くなる。よく見ると、いや、チラッと見ただけで胸が膨らんでいることが分かる。

「わああ…… 服があっぱいではちきれそうになつて……。紅音！」

スツ「くおいしそうー…… 食べていー？」

「どうぞ、召し上がり

ねえ、食べるつて、グロテスクな意味？ それとも、エッチな意味？

「エッチな意味に決まつとるやろ」

じゅるり……、と涎を飲む音、鼻孔、眼孔、その他諸々と、色々な所が開いてる。その姿だけで俺（今は私か……）の心を原始的な恐怖が襲う。そして、恐れていたことが現実になる。

「いっただきまーす！」

ただ、叫ぶしかなかつた。

「いやあああああああつー！」

その後、香織は衣服を剥ぎ取り、胸を揉みしだいたりして、着せ替え人形にした挙げ句、気絶するまで弄ばれた。

はあ……。これからずっとこんな事が続くのかな……？

## プロローグ 紅音の発明（後書き）

どうでしたでしょうか。

あーあ、なんでこうなるんだろ。次回はもう少しシリアルズになる、予定。

## 第一章 伝説の刀剣（前書き）

退魔師見習い様から、感想が届きました。ありがとうございます。  
本当に、地の文には、気を付けたいと思います。

今回は、エッチよりも、シリアルの方が多いはず。形式も『ハルヒ  
形式』に（わかつてくれるかな？）したつもり（ただし、試験的）  
です。

感想、お願いしますね。

## 第一章 伝説の刀剣

時はさらに進み、ここは学校の校舎内、たつた今地獄のよつにつまらない数学が終わつた頃だ。

内容？ 覚えてない。何せ、嫌いなことや恥ずかしいこと、自分に都合が悪い出来事は一秒で忘れられる、ビーでもいい特技を持つるからな。

なのに、今日のご主人様、大山香織の下着の色が頭から離れない。純白のブラと純白のレース付きパンツ。この二つが頭の上をぐるぐる回っている。ワザと見せてた気がするが、早く消さねえと、『ご主人様の下着を見たドヘンタイ』として処理されてしまう。それはそうとして。

「思つたんだが、ここはどうじつの世界なんだ？」

「どつちつて？」

「決まつてつだらう！ 僕達が元いた世界か、魔法がひしめく世界か」

全く、一から十まで教えないと答へられないのか、俺のご主人様は。「そうね、剣を見てもビビらないから、魔法の世界なんじゃない？」  
「『なんじゃない？』ってぶつきりっぽうな……。何が起きたんだよ？」

「『何が起きたんだよ？』じゃないわよ！ あんた、私の本体が校長室に入つて、最初に目にしたの、何か知ってる？」

「血まみれになつたお前？」

「ちがう！ あんたと稜が汚らわしく繋がつていた場面よー！ あんた、あんなことされて、無抵抗なんて！ あんたお得意の、蜥蜴の尻尾【リザード・テイル】でもぶち込めば良かつたのに、あんたは何もしなかつた！」

妹にそんなことするか？ 普通、やらないよな。

「怖いこと言うなよ、俺は稜をこれ以上傷つけないって決めてんの。したがつて、稜に魔法は放ちません」

「システムコンー？」

「どつかの変態と一緒にするな。俺は女に手を出さないだけで、稜だけ攻撃しない訳じやないんだよ」

「フェミニースト！ ヘンタイ！」

いかん、落ち着け、今、香織を攻撃したら全校生徒を敵に回す事になる。落ち着くんだ。俺。

「ふざけるな！」

それ、普通にエッチしてくださいって言いつてる

ようなもんじやん

「じゃあ、エツチしてください」

「言ひ方変えたらしてくれると思つたの！？」

断固拒否するから

な？」「

「あんたの心はどう思つているかしら？ 私と交わりたいって言つてる気がするわ」

ヤバい、そのままじや、犯される。打開策を練らねば……。

「ということだから、覚悟してね？ あんたの心と体、奪い取られてあげるから」

「ふざけるな！ 烈火の拳【ブレイズ・ファイスト】！」

俺は炎を纏つた拳で、香織を攻撃する。が、案の定、吹き飛ばされる。

「やはり、魔法じや香織の方が上か。じゃあ、新兵器、エクスカリバーだ！」

俺は鞘からエクスカリバーを抜き放つ。すると、俺でも香織でもない声が聞こえてくる。

「よお！ お前が95番田の主かい、俺を抜けたつてことは、あ

のバカ王子くらいにすげえ奴なんだよな？」

俺はその声に驚き、腰を抜かす。

「け……、剣が喋つたああああ！」

その後、剣の話を聞くに、あのアーサー王の剣だつたらしく、その後、色んな姿や形になり、色々な主と出会い、仕えてきたが、皆共通して不幸な最期を遂げていつたと言つことだつた。

俺も思ったことだがこいつは百年以上使われた物に憑く、“付喪神”みたいな存在で、喋つた所を見られるのは、アーサー王を除いて、何故か俺だけらしい。

「実はバカ王子とも喋つたんだが、そのことは歴史の闇に呑まれたみたいだな。いやあ、お前さんの魔力がバカ王子と同じでさあ、バカ王子が現世に蘇つたかと思つたぜ。」

つまり、アーサー王も魔法使いだというのか？　しかも、火属性。いやいや、良く考えてみ？　どうして魔法が使えるようになったかさえ分からず、思いつきで魔法を唱えていた俺が、どうして、アーサー王と同じ魔力を持つているんだろうか？

それに、『アーサー王物語』を読破したことがあるが、アーサー王が魔法を使った所など、書かれていなかつたぞ？  
と、考えていると、不意に、エクスカリバーが、

「俺様の名前はエクスカリバー」

と、いきなりの自己紹介をする。まあ、いずれにしても、自己紹介せねばならないとは思つたがな。俺は「大原拓真」と自己紹介を済まし、ついでに番纏でも紹介してやるつとした時、エクスカリバーはこう言つた。

「おつと、主以外の名前は紹介しなくていいぞ、10秒で忘れるから

……

記憶力が乏しすぎないか？　俺より深刻だぞ。

「何せ、興味ないのや、関係ないのはどう頑張つても、覚えられな

「いんだよ、脳みそあるわけじゃねーもん」

あつそ、じゃあいいか。すぐに忘れるものと、開き直る。だが、香織は許さなかつた。香織は「奴隸の事は覚えられるのに、どうして主であるこの私が覚えられないのよ！」と怒り狂つた。このままいくと、学校を破壊してしまいそうな勢いだ。いつそのこと破壊して欲しいと思つたんだが、勉強好きな生徒に恨まれかねないので、仕方なしに覚えさせようとすると。

「いいか、エクスカリバー。あいつは、お前の主の主、大山香織だ。

胸だけが妙にデカい、独裁者気取りの、ドS娘だ」

「了解だぜ。『独裁者気取りの『デカチチババア』』ね

「ちがう、覚えるべきは

「オイ、デカチチ」

あちゃー、やつちまつた。今すぐ捨てたいぞ、この剣。

「だれが『デカチチ』ですって？」

「お前さん以外にいねえよ。『デカチチババア』

香織のツンツンオーラが殺気に変わつた瞬間である。

「覚悟してね？　その剣ごと切り裂いてあげるから

あの空氣……マジだ。

「相棒、俺を構えな、ある程度の魔法は吸収してやる」

いつの間にか、対等の関係に。つてそんなこと考へてる暇ないか。

「旋風の鋭刃【サイクロン・エッジ】！」

香織の手から竜巻らしき風の塊が襲つて来る。

俺は動じずに風の塊を斬る。瞬間、風の塊はそよ風に変わり、頬を撫でる。

……伝説の使い魔が持つインテリジョンスソードと機能が一致し過ぎて、なんだか怖い。これがエクスカリバーの能力なのか？

「違うね。俺が状況に応じて、様々な機能を持つ。さつきのは、お前の記憶の、『ゼロの使い魔』とか言う作品の『平賀才人』とかい

う奴が持つてゐる、『デルフリンガー』とかいう刀剣の機能をパクらせてもらつた。口調もな

それ、説明したから！　ああ、伏せて説明しようと言ひ俺のポリシーが……。ま、いいや。

「実に心地良い風だ。こんな風は何年ぶりだろつか」

と、言つてみる。香織は顔を赤らめる。その赤らみが怒りから来るものなのか、それとも、羞恥なのか。俺には分かりかねる。こういう時ほどテレパシーが使えたなら、と思う。

「もう、いい！　知らない！　拓真なんかもう知らない！」

「あっ、おい、待て！　はあ……、行つちました。」

『とりつく島もない』と云ひのほ、まさにこの事か……。

「なあ、エクスカリバー。俺はどうすれば良いと思つ？　やつぱり追うしかないんだよな」

「そうだな。じゃ、とつとつ追いついて、いちやいちやしてやれへこんだ時には屋上へ行く。と相場は決まつてゐる。俺は屋上へ向かつて駆け出した。

香織が襲われているということを知らずに。

## 第一章 伝説の刀剣（後書き）

予告、次回は焰野様とクロスオーバーの予定。

焰野様には、失礼の無いようにしなければ。

## 第一章 交わる世界の侵入者（前書き）

クロスオーバー第一弾！

焰野様の氷原健吾君と共演させて頂きました。  
これを機に、焰野様の作品も読んでもらえたら、嬉しいです。

「でも、これは本編だな？」

ええ、この理由は次回くらーじに詳しく述べますよ。お楽しみ。

## 第一章 交わる世界の侵入者

「あ、俺何か言つたかな？　いや、だつて『實に心地よい風だ』って言つただけだぜ？　何であそこまで言われなきゃいけないかね？」  
「本当、女つてわかんね。」

いや、そもそも他人の考へてることすらひくに分からぬ、推測の範疇を超えないんだけどね。でも、それでも分かる奴はいる。テレパシー使いだ。たまにテレパシーで人の思考を支配したり、悪夢や幻影を見せたり出来る奴もいるが……。

そんな戯言は捨てといて。

「なあ、エクスカリバー、何で俺は魔法を使えるようになつたかね？」

「その昔、アーサー王は女好きでな、女を見る度ナンパして、子供を孕ませていたんだよ」

「つまり、何が言いたい？」

「お前はアーサー王の血を引いてる。デカチチも、お前の妹も、お前の親友もだ」

なるほど、しかし、アーサー王は火属性なのでは？

「いんや、何でも使えた。魔導師マーリンに魔術の全てを教わったんだが、歴史の闇に消えちまつたみたいだな。ガリア征服の時はバンバン使ってすぐ魔力を使い果たしたからな。それからだよ。俺がアーサーのことをバカ王子つて呼ぶようになったのは

そなんだ……。そりゃあ、アーサー王がバカ王子つて呼ばれるわけだ。

その時だった、

「キヤアアアアア！」

香織の悲鳴が聞こえたのは、

「香織！」

俺は夢中で駆け出した。一秒でも早く、一瞬でも早く屋上へ出なければ。香織が危ない！

そして、屋上の扉にたどり着き、ぶち破った。

「香織！ 無事か！」

「早く助けなさいよ！ 変な化け物が、執拗に迫つて来るのよ！ 気持ち悪い！」

そこには、力エルみたいな真っ黒な化け物が、舌で香織を喰らおうとしていた。香織は必死で避けている。その足元は、舌の粘着力が強いのか、はたまた、舌の先に強烈な酸があるのか分かりかねたが、とにかくめぐれていた。

「早くッ！ 出来るだけ早くッ！ きやつ！」

力エル型化け物の口から爆竹みたいな物が放たれる。爆竹みたいな物は香織の足元で弾けて、文字通り、爆音を撒き散らす。香織は泣きそうな顔になりながら、慌てふためき、奇妙なステップを刻んでいる。爆笑必至である。

「何、楽観視してんのよ！ いっちは生き抜くのに命懸けてんの

！ 奴隸のくせに、生意氣よおおおつ…

そんな事を叫んでいる間にも、カエル型化け物は、香織に向かつて狙いを定めている。

「させるかよオ！ 業火【フレイム】！」

前方に向かつて火炎放射。命中するが、手応えがないし、反応もない。どういう事だ？ まさか……影？

「さやあああつ！」

香織にカエル型化け物の舌が迫る！ すかさず聖光の矢【ホーリー・アロー】で舌を貫く。舌は狙いを外し、香織の足元に着弾。ジユワツと音と共に床が溶け、ぐちよぐちよになる。香織は声にならない悲鳴を上げる。

そりや、そりだな、強烈な酸が自分に当たつたとしたら……、考えたくもないな。エクスカリバーを抜き放ち、スペルを唱える。

「我が輝く光よ、空を駆け、敵を討て！ 輝光の飛刃【シャイン・エッジ】！」

エクスカリバーの切つ先に光が宿る。それを勢い良く振ると、光の刃がカーライが使うマーケードのソードビームみたく飛んでいく。カエル型化け物は断末魔も上げることなく消え去る。

「でも、やっぱり、稜がいたほうが威力高いよな……」

「まあ、お兄ちゃんの光魔法はお兄ちゃんの特殊能力、技術複写【スキルコピ】にすぎないからね。」

いつの間にか、稜が真後ろから抱きついてきた。

「 ？ 特殊能力？ どういう事だ？」

「うーん、まあ簡単に言つちやうと、魔法以外の普通じゃあり得ないことかな？」

説明する側が疑問符使うなよ……。つまりあれが、『禁書目録』から幻想殺し【イマジンブレイカー】を例に挙げて、それを完璧ではないが使用する事が出来るのか。

「だいたい、そんな感じね。私の場合、解析【アナライズ】と言う特殊能力があつて、心を読む事ができて便利だなあ、とか思つたけど、最近になつてこれが読心術の為に使うんじやなくて、物とか人を調べる為にあることが分かったのよ」

「そうそう。私の能力は増強能力【スーパーイヤージャー】、私が触れると能力が強化されます」

稜、胸を張つて自慢げなところ悪いけども、それ、とある外国ドラマの丸パクリだからな？

まあ、俺もスキルなら何でも丸パクリ出来るから、人のこと言えな  
いか。

「それだけじゃ無いわ。あんた、ダブルスキルなのよ！ これだけ珍しいのに、スキルもこれまた珍しい、幻想召喚【イメージサモン】よ！」

「な、なにそれ？ すごいの？」

「すごいんですよ！ 自分の想像を現実に、そして、ちゃんと使えるすごい特殊能力 」

轟音。そして重圧感。ちょうど、玉と融合した藍 惣右介に睨ま

れた感じだと思つてくれて構わない。

「何！　何なの！　何がどうなつてんのよ……！」

「わ、分からん、ただ、ただならぬ重圧感というか威圧感がす”い  
こ」

瞬間、空間が歪む。そこから、さつきのカエル型化け物の比にもな  
らないくらいに気持ち悪い化け物が次々と現れる。  
……本当に吐き気がしてきた。吐いていいかな？　胃の中に残っ  
ているもの、全部吐いてもいいかな？

「何をふざけた事言つてんの！　本気でぶつとばすわよ……」

「それよりも、早く魂の繋がり【スピリット・リンク】を…三人  
で！」　「無茶よ…　お兄ちゃん、副作用覚えてる？」

「承知の上だ！」

「そこまでの覚悟があるなら、やつてやるわ。で、どうやってやん  
の？」　「ひたすらキスをします」

「き、きききき、キス！？」　そつ、そんな事しなくても、スピリ

ット・リンクくらい、楽勝よ！」

「へえ、だつたらやつてみてくださいよ、キス無しで、出来たら誓  
めてあげます」

……一人とも、胸を張り合つのは俺の中ではくれないか？

「分かつたわよ」

「うん…　いくよお兄ちゃん！」

『魂の繋がり【スピリット・リンク】…』

俺を含む三人を眩い光が包む。次第に光は広がり、バラバラだつた  
三つの光は今や一本の光の柱になつている。その柱もいつしか消え、

俺だけが残され、二人の姿は無い。

化け物達は女達が逃げたのかと思い込み、無様に笑い転げる。だが實際は違う。

### ‘疾風の一撃【ウインド・ブレイク】’

一陣の風が吹き荒び、下級の化け物を消し飛ばす。

残された化け物達に動搖が走るのが分かる。さすがは解析【スキヤン】。奴らの思惑やら何やらが丸見えだぜ。

‘残りの敵はどうすんの？’

“片つ端からやつつけるしかないよ、お兄ちゃん”

‘だな。’ “融合魔法 三色の銳剣【ヨニゾンレイド、トリニティ・ブレイド】” ’

俺は左手を前に突き出す。すると、火、風、光の魔法陣が現れ、融合していく。全ての魔法陣が合わさると眩い光が迸り、一振りの片手剣が具現化する。

それをしつかり掴むと、エクスカリバーを片手で抜き放ち、エクスカリバーに「片手剣になれ」と呟く。すると、エクスカリバーの柄と刀身が同時に縮み、片手剣になる。

‘いくよ。稜、香織！’

‘分かつてるわよ！’

“了解！”

俺は獣のような雄叫びを上げ、近くに鎮座する、中級悪魔（つて呼

ぶ事にする）を一太刀で切り捨てる。

‘あと六！ 気イ抜くな！」

続いて、空に向かつて、エクスカリバーを掲げる。

### 「太陽の光【ソーラー・レイ】」

天から無数の光線が降り注ぎ、標的を光の中に葬り去る、稜の最強攻撃魔法。瞬く間に上位悪魔もろとも葬り去った。

だが、歪みは次々と現れ、遂には人型の悪魔まで生み出した。

いや、あれは人間。そんな、どうやってあんな歪みを！？

破型 式式 苦寂

その人間は一瞬で傍らの上位悪魔に近づき、三撃で終わらせる。

「俺も負けてらんねえな、宮本流剣技、秘式壱ノ型『一刀両断』！」

俺は空高く飛び上がり、近くの上位悪魔を真つ二つにする。

「お前、『ブラッティローズ』じゃ見ない顔だな、名乗れ  
「人に名前を聞くときは、まず自分から、名乗るもの……、だろ  
つ！ 秘式参ノ型『灼熱地獄』！」

近づいて来る上位悪魔を火だるまにして消滅させる。くそ、埒が開かねえ。

「それよりも俺は、ぞろぞろ沸いてきやがる上位悪魔を一気に殲滅する方法を教えて欲しいね。普通に魔法をぶつ放しても当たらねえし。影だから、光魔法は通じるんだけどな」

「上位悪魔？」 “墮ち神”だ

“墮ち神”ね、じゃ、その“墮ち神”って奴をどちらが多く殺せ

るか、競争と行こうじゃないか。氷原健悟君

「 ！ 何で俺の名を」

「俺の特殊能力、解析【スキヤン】だよ、何でも知ることがつ、できる！」

袈裟切りで一体倒す。4／12体を倒した。その内の三体が俺。健悟君はまだ、一体。

「すごいな。 あんな短時間で二体殺つたぞ」

その声は健悟君のものではなかった。

「へえ、健悟君も意志のある剣を持つてんだ。エクスカリバー！」

「何だ、俺つちに何か用か。」

「いや、喋らせただけだ。悪いな」

「なあに、良いってことよ」

終型 初式 怨炎

健悟君の剣 蒼百合が黒炎を纏い、墮ち神を二体、炎の中に葬り去る。

「やるなあ。でも、まだまだ俺達の方が凄い！ 我が輝く光よ、空を駆け、敵を討て！ 輝光の飛刃【シャイン・エッジ】！」

スペルを唱え、エクスカリバーを真上に掲げる。光が宿り、エクスカリバーが細かく振動する。

そのまま横に振り抜くと、光の筋ができて次第に広がっていき、ついには四体を光の粒子にする。

“ いち、にー、さん……、うわあ！ 何体倒したか分からなくなつ

たよ！」

「7体よ。それくらい数え切りなさいよ！  
「まあまあ、つてありや何だ！」

突然、一際巨大な歪みが現れ、ラオ ヤンロンが具現化したかのような、ラオ ヤンロンに似た、否、そのものが歪みを通して現れる。……今頃、ラオ ヤンロンのいた世界では、ハンターが『ラオ ヤンロン』が消えた！』つて喚いてんだろうな。

「きりが無い。で、このバカでかい墮ち神は何だ？」

「知らん、知るか、知らないですよ。力 コンにでも聞いてくださいよ」

「そうか。俺はあいつを殺る、お前は雑魚を片付けておけ  
「嫌だね、討伐して天鱗をゲットするんだもんね」

俺は駆け出した。健悟君も同時に駆け出す。

### 幻想召喚《蒼穹双刃》

#### 技術模写《抜刀術》

モン ンにはモン ンで倒してやるぜ。

いつの間にか現れた二つの青い二つの剣をしつかりと握りしめ、邪魔する墮ち神とやらをぶつた斬り、ラオ ヤンロンの喉元に右手の刀剣を抜き様に切り裂く。

抜刀術の効果は、抜き様の攻撃、その威力をあげるモン ンのスキル。

もつとも、その攻撃で喉元を断ち切れるかと言つと、『否』だが。

終型 式式 黒雨

突如、健吾君の剣から、無数の剣撃が宙を駆け、四方八方から斬り

つける。たまらず、ラオ ヤンロンが悲鳴、うらしきものを出す。

健吾君はいつの間にか、浮いてるラオ ヤンロンの弱点である腹下に潜り込み、突き上げた。

無論、血は出る。その返り血で衣服が汚れるのも構わずに、更に突き上げる。ラオ ヤンロンの口から、血が吹き出す。

「エクスカリバー、弓矢モード。用意」

「あいよ。相棒、お安い、ご用だ！」

“何するつもりなの？”

「背中から心臓を狙う！ 今、一番シンクロ率を上げないと、最悪、心臓に当たらず、健吾君にグサリ、だ」

「シンクロ率？ 何それ？」

「ようは、心を寸分違わず、一つにすんの」

「なるほど、分かったわ」

“でも、その後の副作用が大変な事に……”

“怖い事言わないで”

「そうだぞ、稜、頼むからシンクロ率を下げるようなことを言わな

いでくれ。キスしてやるから」「私には無いの？」

「いっぱいキスしてやる。頑張ってくれたら、いっぱいキスしてや

るから、頑張ってくれよな」

“拓真のキス、絶対に貰ってやるうううつー、”

辰星 水羅億傷 魔

ん？ いつの間にか、健悟君はラオ ヤンロンの横に立つて、  
…、魔法？ みたいな放つている。水色の炎みたいな物をぶ  
つけまくつて、ラオ ヤンロンに多大なダメージを与えていく。  
…、こちらに流れ弾が飛んでくる？ …、無差別攻撃か！ 左  
手の剣で受け止める。しかし、その炎は爆発し、俺達は大きく吹つ

飛ぶ。

「ぬつ！　ぐううつ！」　いやあああつ！　何で？　自分が受けたわけじや無いのに、こんなに痛いの？」

“それは、スピリット・リンクの最大の特徴、感覚の共有だわ”  
「相棒、準備完了だ。いつでもいけるぜ」

「よし、いくぞ、‘‘穿て、心の臓まで！’’，‘

シンク口率を最大限まで高め、矢を放つ。腹に健吾君は居ないため貫通しても、被害は出ない。ラオ ヤンロンの背中に突き刺さり、貫いていく。

遂には、心臓に達し、ラオ ヤンロンは活動を完全に停止する。

「ふう、討伐完了。凄いクエストだつたぜ」

クエスト名称 異次元の歪みから湧き出るモンスター！

報酬金 0 z

契約金 0 z

制限時間 無制限

指定地 学校の屋上、及びその上空

主なモンスター 境ち神 ラオ ヤンロン

備考 クエストクリア

「改めて自己紹介。大原拓真です。中に大山香織、大原稜、で、この剣が伝説の名刀、エクスカリバーだ」

時は少し流れ、学校の屋上。ようやく戦闘が終わり、とりあえず自己紹介をしている。

「氷原健悟だ。で、中とは？」

「話すと長くなるが、簡単に言つと、俺の頭ん中に一人がいるんだよ。と自己紹介も終わつた事で、勝者からの命令、君の世界について、教える」「俺の世界？　どうしてう事だ？　」こが俺の世界じゃないみたいに言い方だな」

「ああ、そうだ。こには君が来るような世界じゃない。墮ち神なんてこの世界じゃ現れない」「だが、現にさつき現れた」

「それは」「

すると、エクスカリバーが横槍を入れる。

「“異次元の歪み”だな。お前さんも墮ち神とやらを追つてる最中に、紫色の割れ目ん中に入つたらう？」

「ああ。俺はその時、ある依頼を受けていた。だが、いきなり地面が裂けて、俺はその裂け目に吸い込まれてしまった」「だろ？　お前さんが裂け目に吸い込まれたよ」「墮ち神とやらも吸い込まれたんだよ、多分」「戻らねえと」

さつきの“依頼”で思い出したらしい。健悟君はかなり深刻そうな顔をしてくる。

「……無理だよ。異世界に行く手段なんてないんだし、手段があるならとつぶくに元の世界に戻つてるつての」

「お前らもこの世界の住人じゃ無いのか？」

「そうだよ、俺らも元は超常現象が何もない世界に住む、真人間だったんだよ。でどんな奴だった？　あんなに出たんだ、依頼された墮ち神もいるかもしけん」

「……。カエル型の墮ち神という情報が」「

「じゃあ、葬つた」

「チツ、俺の獲物を横取りしやがって……。俺と戦え」「いいよ」

“いいの！？”

‘無茶よ、コイツヤバすぎる！’

‘何だよ、二人とも臆病風に吹かれたか？」

‘誰と話しているんだ’

‘冗談じゃない！ やつてやるわよ！’

‘お兄ちゃんがついているもん！」

‘よし、いくぜ、まずはこいつと戦つて貰うぜ。我と契約せし炎の魔神よ、汝の炎を持つて我が仇敵を討ち滅ぼせ。出よ！ イフリート！」

言つが早いが、魔法陣が現れ、次いでイフリートが召喚される。が、出ると同時に剣が胸に突き刺さる。

「は？」

瞬間、健吾君の姿が消える。と言つのは間違いで、実際は一瞬でイフリートに接近していたのだ。

### 絶ノ双爪 封臨

直後、両手の剣で切り上げる。ああ、イフリートが無残な姿に……。

「修復【リペア】、灼熱地獄の主、劫火の拳、魑魅魍魎の炎を纏し、その拳に打ち碎けぬ物など皆無！」

切り裂かれた肩が治り、戸惑う健悟君を灼熱の炎を纏つた拳が強かに打ちつける。

「チツ！ クソが！」

健吾君はとつさに剣を突き立て、勢いを殺そつとするも、殺し切れずにフェンスに背中を強打する。すかさず、追い討ちを掛ける。

「灼熱地獄の主、迸る劫火、死の息吹に似て、仇敵を瞬く間に葬り去る！」

イフリートが炎を吹き出す。フェンスが解け落ちる。そこには健吾君の姿が見えない。

終型 壱百式 狂桜

彼は空中にいた。健吾君は空中から、頭、首、心臓を田に見えぬ速さで突く。イフリートは消滅してしまう。

「次は、お前だ！」

「うわっ！ 突進してくんな！ こいつは武器持つてねえんだぞ！ ええい！」

「エクスカリバー！ 日本刀モード！ 大至急！」

「あいよ、完成だ」

エクスカリバーを恐るべき速さで日本刀になつた。ご丁寧に鞘までついて……。手間かけさせんな！

そうやつて、悶々としている間にも健吾君は迫つてきている。健吾君の初撃を抜き様の剣で受け止める。だが、もう一つの剣が襲い掛かる。

「エクスカリバー！ 鞘を日本刀に！」

「あいよ」

金属音、どうやら間に合つたみたいだ。

「ちつ、これなら」

「宮本流剣技、攻式七ノ型『風林火山』」

右の刃が動きかけた健吾君の剣を打ち落とす。次いで、左の刃が健吾君の急所を狙う。

この技は、相手の次の攻撃を潰し、更に急所を斬る、攻防一体の技。しかし、健吾君も一流の剣士、こんな攻撃はいとも簡単にかわされ、距離を取られる。

辰星　八岐大蛇　斬

「負けるか！　宮本流剣技、攻式三ノ型『空穴来風』！」

二つの技は正面からぶつかり合い、衝撃波を撒き散らしながら消滅していく。

完全に消滅した後、二人は駆け出す。

辰星　激龍雷怒　滅

「宮本流剣技、副式ハノ型『迅速果敢』」

目に見えない速さでの剣劇が繰り広げられる。

ガギン、ガギンと金属音が鳴り響く。端から見れば、火花しか分からぬいだろう。

「クソが、叩つ斬つてやる」

「はっ！ そろそろ終いにしそうだぜ。」

剣劇は激しさを増していく。つばぜり合にが繰り返され、技を出し合い、少しずつ傷つき始める。

そして、遂に決着の時が来る。

絶ノ双爪 阿修羅

「富本流剣技、攻式ハノ型』一覇百戒』」

断続的に続く金属音、少し懷に潜れば、すぐに斬りつけられる。しかし、誰だって一瞬の隙はある、技術模写ガントールグほら、そこががら空きだ！

「富本流剣技、攻式四ノ型』三日坊主』」

健悟君の鳩尾に柄をめり込ませる。健悟君の動きが一瞬だけ、止まる。

その一瞬を俺は見逃さなかつた。すかさず首筋に峰打ちを喰らわす。

健悟君は、苦痛に顔を歪ませ、悶絶する。

「ふう、お疲れ、と言いたいとこだか、まだやることが残つているぜ、健悟君を元いた世界へ帰すんだ」

「でも、どうやって？ 他の世界に行く手段なんてないんでしょ？」

「いいや、一つだけある。真理亜の空間魔法【ディメンジョン・マジック】だ。真理亜は俺達が元いた世界からワープしてきたんだろ？」

「だったら、健悟君も送り返せるかも知れない！」

“ おお！ ぐつどあいであ”

‘ でも、彼の世界には、墮ち神つてのがいっぱいいるんでしょ？

危険だわ

「怖いのなら無理についてこななくてもいいよ？」

「べ、別に怖いわけじゃないわよ。ただ、あんたが向こうの世界で

浮気しないか、心配なだけよ」

「そう、じゃあ、行くぜ。異次元の扉よ、その戒めを解き、我を導け！」

俺はエクスカリバーを緑衣の剣士が神殿で、伝説の剣を台座に收める時が如く地面に突き刺す。健悟君の前に淡く光る扉が現れる。俺は健悟君を肩に担ぎ上げ、扉をぐぐる。そこは夜霧漂う、港町だった。

「おーい、健悟…」

「おい、健悟君」

「ん、ああ……」

「連れの方が、お待ちのようだ」

「そうだな」

健悟君は軽やかに飛び上がり、軽やかに着地する。

「拓真、お前に言つておくが、まだ負けた訳じゃない、次に会ったときはお前の首を落とす」

「勘弁してくれ、男なら」いわざよぐ、負けを認め、恋人の胸に埋まつてよしよししされとけ」

「……」

俺はそれだけ言つと、剣撃が飛ぶ前にさつきの扉を潜り、魔法の世界へと逃げ帰つていつた。「じゃあ、スピリット・リンクを解除するよ」

生睡を飲み込む音。当たり前か、三人同時つてのも、シンクロ率最大つてのも初めてだからな。解除した時の副作用がかなりヤバい事になるのは当たり前なことで、覚悟を決めたつもりでいたが、いざ、解除となると、やはり原始的な恐怖が心臓を掴んで離さない。

「ねえ、副作用って何なのさ。」ここまで一度も話題になつてないんだけど、どうしてさ？」

「その内容が、あまりにも過激で、破廉恥で、下劣極まりないからだよ」

「ふん、そんのにビクビクしてんの？　あんたらしくない。あんただつたら、多少のリスクくらい、平氣でぶつ飛ばすでしょ？」

「……そうだな、そうだよな、そうでなくちゃいけないよな！　よし、覚悟決めた！　いくぞ、スピリット・リンク、解除！」

と、叫んだ瞬間、光の柱が俺を包む。数秒経つた後、稜と香織が具現化する。が、様子がおかしい。顔が真っ赤だ。……俺、何かやつたかな？

「違うの！　これは、これは……。何かすごいムラムラしてきて……。いやつ！　ダメ！　冷静に思考出来ない！　何がどうなつているの！」

「すごいです……。これがシンクロ率100%の力。体がどんどん熱くなっています。服を着ているだけで、ダメ！　もう我慢出来ない！　稜、服を脱ぐ！」

稜がすごい勢いで服を脱いでいく。豊満なバストがお天道様にさらけ出される。

少し間を開けて、香織も風の力を使って脱いだ、というより、ビリに引き裂いた。俺の衣服と共に。

「て、テメエらアアア！」

「わ、私の裸を……、見て……」

「おに～～～ちや～～ん！」

「く、くるな、来るなアアア！　業火の竜巻【フレイム・トルネード】！　業火の防壁【フレイム・バリア】！　業火の牢獄【フレイム・プリズン】！」

淫乱娘共に汚されてたまるか。俺は竜巻、防壁、牢獄の三重防御を試みるが、稜の解除【ディスペル】で全て鎮火される。

「うふふふ　　しっかりと搾り取つてあげるわ」

「おに～～～ちや～～ん！　　だいだいだあいすき～！」

「や、やめてエエエッ！」

その後、香織と稜は官能小説並みに淫ら狂い、俺は気力を全部持つてかれ、なされるがままになっていた。

俺の人生の90%はハーレムなのだろうか？

俺はそう思いながら、ペチャペチャと言づ音と共に気絶した。

## 第一章 交わる世界の侵入者（後書き）

どうでしたでしょうか、畠野様、すいません、やつぱりあの漢字は出ませんでした。変わりに“怒”を使いました、本当にすいません。

クロスオーバーと言うのは、面白いけど、その分難しいんですね。

よし、クロスオーバー、自分も募集します。

使いたいと言う人も、出したいと思う人も、感想や、メッセージで連絡をお願いします。できる限り、いい感じに仕上げてみせます。よろしくお願いします。

## 第三章 異世界に通じる扉（前書き）

大変長らくお待ちいたしました。

外伝にしては、あまりにも物語が動きすぎるので、本編にしました。  
ですが、海に行つたのは変わりません。

今回は残酷なまでに性的虐待を受けます。

海だもの、少しぐらいはつちゃけたつていいじゃない。

## 第二章 異世界に通じる扉

あの戦闘三昧の日から、あつと言ひ間に2ヶ月が、授業と言ひ合の  
性的虐待をたっぷりと味わった俺は、精神的に強くなつただろうか  
？ そんなことより、

「はあ、来るんじゃなかつた」

せつかくのサマーバケーションに海の家、なのにテンションだだ下  
がりなのは、理由がある。

「アハツ、止めなさいよ~」

「そつちからしてきたくせに、何言つてんのよ~」

「そんな解きやすい水着を着て来るから悪いのよ~」

今のお分かりになつただろうか。

そう、恥を知らぬ女達は水着の脱がし合いをしているのだ。

あいつら絶対に俺の事をそこらへんの犬っころとしか見てねえよ…。

「おい、あんたらの辞書に『恥』と言ひ字はあるか？」

『無い!』

即答……。しかも何気にハーモニー奏でてるし。

「全く、シークレットビーチだからって、コッソリ後から付いてきて盗撮している奴がないとは限らないんだぞ。ほら、そこに俺が茂みを指差すと、音を立てて中肉中背で眼鏡を掛けた、明らかにオタクな中年男が、カメラを持つて「なぜバレたんだ」と心の中で呟いている。おそらく、不可視【ステルス】でも使っていたんだろう。

俺は技術複写【スキルコピー】で、とあるドラマの能力の一つ、時空間制御【クロノキネシス】をコピーし、時間を止め、カメラを奪い取る。すぐさま画像をチェックするが、見るに耐えないものばかり

りで、三枚も見ないうちに、叩き付けた。

「ごめんなさい！ もう一度としませんから！ 金なら払う。

命だけは、命だけはどうかご勘弁を！」

何かの拍子でクロノキネシスが解けてしまったが、まあいいや。俺は今、完全に怒っている。いまにもはちきれそうだ。

「このカメラ、意外と頑丈だなあ、返して欲しいか？」

盗撮男はものすごい勢いで頷いている。爆笑物だ。

「じゃあ、かけっこで勝つたら、返してやる」

そう言い残すと盗撮男は全速力で走って行つた。

「さてと、どうやって絶望させてやろうかな。メモリー・オールデリート？ それとも……」

悩みに悩んだ結果、『メモリー・カードを抜いて、原型を留めないくらいいにブツ壊す』ことにした。

「火炎の球【ファイア・ボール】、業火の球【フレイム・ボール】、烈火の剛球【ブレイズ・ボール】、獄炎の剛球【インフェルノ・ボール】

次々と炎の球を作り出し、上に投げる。炎の球は融合を繰り返し、全て投げ終えた頃には、拳ほどしかなかつた炎の球は小さな太陽くらいに膨れ上がつていた。

「フュージョン・レイド 合成魔法、紅炎の爆弾【プロミネンス・ボム】！」

直後、小さな太陽はカメラに向かつて全速力で突進する。男がようやく異変に気づき、後ろを振り返れば、炎の巨大な塊が力メラをブツ壊している様がよく分かるだろう

「…………！」

そして、着弾。叫び声は轟音にかき消され、男の姿は巨大な炎柱で見ることが出来ない。

「後で上映会だな。男の前で」

「えらくエグいことすんなあ、拓真」

声のする方へ振り向くと、視界が真っ黒に塗り潰される。

「何するんだ！」

「なんや、つれないのう、わいの事嫌いか？」

返ってきたのは関西弁、つまり紅音である。

「別に、そんな」と言つてるわけじゃ無い

「あ、ええ。せつがくの娘さ、おねがいします」

「ええ。取つあえず、水着を着てくれば一か?」

紅音もまた、淫乱娘の魔の手にかかつっていた。

「着たで、ほんでな拓真、さつきのは何やつたの？」 盗撮男がなんとかつて

「ああ、たかに脱がし合には止めないで言つたんだかなあ」「さつきの轟音は拓真が作り出したのね。あんな凄そうな魔法、どうやつたら唱えられるのさ」

「怒りだよ、怒り。ファンタ

お庭の手の竹林に重慶の手の口唇

うございわね、奴隸がそんな」と語りて良いと思って

「はい、奴隸。自分の都合が悪くなるとすぐに奴隸、奴隸、奴隸！」

「うぬれーー。うぬれーー。うぬれあああいーー。わた

しは何も聞いてなあああい！」はあ、大原拓真の夜明けはまだ遠い  
な。  
。

「よーし、ジーチバレー やる!」

「唐突だな、どうしたんだよ、桜

「いや、だって、いつでも言わなきゃ、私、すぐに忘れられるから

「分かった。やるやく。そして、いめん。もう忘れない」

その後、ビーチバレー セットを俺の幻想召喚【イメージサモン】で生み出したのだが、チーム編成で既に負けていた。

まず、香織のチームだが、香織、真理亜、紅音、詩音、楓といった、平均身長が高いチーム編成になっている。

一方、俺のチームは、俺、稜、愛子、桜、人数合わせのため、一樹をテレビポートで呼び寄せたが、俺以外に誰一人として、一番背の低い香織を超える身長を持つ人はいなかった。

そして、俺と一樹にとつて最大で最凶の脅威、みんなFカップ越えの巨乳だったことだ。

ジャンプした際に発生する“乳揺れ”で俺や一樹を悩殺し、使えなくして、大量得点を狙うつもりなんだろう。

そして、試合開始、ビーチバレー 対決は実に悲惨なものになった。香織チームのジャンプサーブが色んな意味で凄まじいし、万一受けきつても、桜が俺に向かつて殺意あるアタックをして来て、せっかくのチャンスをすべて棒に振ったために、全五セット中、一度も得点出来ずにしてストレート負け。

罰ゲームは桜に与えるべきなのだが、香織曰く、

『部下のミスはリーダーのミス。従つて、あんたが全部受けるのよ』らしいので、結局、罰ゲームは俺が受けることになった。笑顔で殺されかけたんだぞ？

「さてと、どうやって犯そうか？」

「ははは、それ方面オンリーですか？」

「水着で罰ゲームって言つたら、これ方面しかないじゃないの！」

ああ、香織が興奮してきたよ。また汚されるのか、嫌だよ、授業と言つ名の性的虐待受けたばつかだよ？

「いや、もつとあるじやん、尻文字とか、砂埋めビキニとか」

「男の尻文字とか、見てるこっちが罰ゲームじゃねえか、キャハハハハハ！ それよりかは拓真の体を貪つてみたいね」ダメだ。人の話聞く気ゼロだ。

「罰ゲームが決まりました！ なんと、『拓真さんの唇を奪いまく

つて、拓真さんの体を食べちゃおう』です！

「はあ、もういいです。好きにしてください、もう、抵抗する気力が失せました」

「じゃあ、お言葉に甘えて……、ウキヤホーイ！」

「あーっ！ ずるいです、私も食べます！」

と、桜と稜も加わり、結局ただの大ハーレムになつた。

「助けてくれ、一樹」

俺は一樹に助けを求めた。一樹は「仕方ないですね」と呟き、稻妻の機関銃を装備する。

発砲する直前、鋭い竜巻が吹き荒れて、稻妻の機関銃を切り裂き、一樹を吹き飛ばす。

「助けを求めている人を見るとさ、すりぐいジメたくなるのよね」香織の魔の手が迫る。俺は無意識の内に叫んでいた。

「拓真、落ち込むなよ、いつものことだらう~」「ああ、でも、今回のは酷かった。もう海に行きたくない。トラウマだ。水着すら見たくない、裸体なんて……」

「まあまあ、拓真。君はよく頑張ったよ」

「時に、君はこんなにスタイルのいい女の子達に囲まれ、どう思つ？」

聞き覚えの無い声に、一同は一斉に振り向く。

男は全員がこちらに注目したのを見ると、前髪をかきあげ、薔薇の造花を口にくわえる。その一つ一つの動作に吐き氣を覚える。

「あんた、何者だ」

「人のな」

「不審者に名乗る名前などない」

すると不審者は激昂したのか、全身を真っ赤にして、

「こんなに美女を侍らしておいてその態度はなんだね、貴族の基本も分かつて無いじゃないか！ そうか、貴様は成金か、ゲルマニ

アに行つて、金の力で貴族になつた野蛮人か！」とマシンガンのように言葉を吐き出した。そのためか、手が不審者にメタルクロールを喰らわせていた。

「ぶ、無礼だぞ！　成金風情が、このグラモン家に手出しして

」

「異世界の扉よ、その戒めを解き、我を導け」

俺の正面に扉が現れる。「おい、じらー、待て、待つてくれ！」

「さようなら、異世界の住人よ」

扉が開かれると、身体強化を技術複<sup>写</sup>でコピーし、異世界の住人を放り投げた。

「うわあああああ！」

扉が閉じられ、光の粒子と化していく。

「何だつたのかしら？　拓真！　教えなさい！」

「ヤマグチノボル著、『ゼロの使い魔』のキャラクターの一人、『ギーシュ・ド・グラモン』だね。何かの拍子に具現化したんだろう？」

「あんたに聞いてないわよ、バカ兄貴！」

「やつと兄貴と呼んでくれたね、次はおにいさまだ！」

「誰が呼ぶか！　あんたは一生涯、バカ兄貴だ！」

「まあまあ、香織も一樹も俺の話を……聞けええええええ！」

俺が叫ぶと二人は口論と言つか、兄妹喧嘩と言つか、とにかく、言い合いを止めた。

こいつらを鎮めるには、大声で怒鳴らなければならないのか……。これ、終いにや喉枯らすぞ。

と思つた時、二人からの攻撃を受ける。

「マクロスか、イイねえ、特に」

「あんたもオタクだつたの。『ルイズ』って言つた時点で、『なんか臭い』と思つたけど、まさか、本当にそうだつたとは……。アンタ、本当にバカア？」

『あんたもオタクだつたのか』って言つ割には、テメエもエ アのセリフパクつてんじやねえか！

「つるさい。ア カのじいが悪いのよ？ 可愛いじゃない。キン  
グ・オブ・ザ・シンデレ、ぐぎゅ以外で唯一 可愛いなつて思つた女  
キャラなのよ」

「そりだよな、その性格のルーツだもんな！ でも、もう少し文  
乃つぽくなつても良いと思うがな！」

「“迷い猫”の？ なつてるわよ。わたしのシンデレは、バージ  
ヨン一六・八よ？ 最新のシンデレ、それらをイイとこドリップ  
しているんだから」

イイヒコドリップした結果、“芹沢文乃”は完全に消え去つたらし  
い。

「それにはルイズも入つているのか？」

「もちろん、今のメインだもの。でも、最近のルイズは才人にツン  
ツンしなくなつたと思うわ。キュルケが才人争奪戦に参入すれば、  
もつと面白くなると思うんだけどね」

判定、黒。釘宮理恵さんをくぎゅと呼んだし、ゼ 使の今後について語り出した。誰がどう見ても、オタクと思うだろ？。いや、女だから腐女子か。

「お兄ちゃん、あの人達は一体なにを言つてゐの？ 稜、よく分  
からない」

「分からなくていいんだよ、稜」

「ちなみに、稜は完全に妹属性だ！」

「いもうとぞくせいってなあに？ お兄ちゃん」

「ムダな知識だ。トリビアだ。いや、トリビアはためになるから違うか」

「羨ましいな拓真。自分もお兄ちゃんと呼ばれたいね。なあ？」

香織

「つるさい！ バカ兄貴！ 一生涯バカ兄貴だよー！」

「『おにいさま、キス……、したくなつちゃつた……』ってだ」

「誰が言つか！ バカ兄貴！」

しばらくオタクな話が続いた。真理亜、愛子、大山姉妹は、終始蚊

帳の外だつた。

「本題に戻りますけど！　さつきのキャラクター具現化は何だつたんだろうか？」

突然の質問に、この場に存在している全員が沈黙する。

しばしの沈黙、口火を切ったのは、エクスカリバーだつた。

「ありや、『異次元の歪み』を通ってきたにちづえねえな」

「異次元の歪み？　あの化け物達がたくさん出てきて、氷原健悟君が出てきたトンネルみたいなアレ？」

エクスカリバーは鍔を力タカタ鳴らして答える。某ラノベのインテリジェンスソードみたいだ。

「大正解だ、デカチチ」

直後、何故か俺を殴つた。後々、理由を聞くと『剣を叩くのはバカバカしいから』である。死ねばいいのに。

「つまり、あれはフィクションじやなくて、実際に現存しているつてわけかよ！」

「それも正解だ、相棒」

「つまり、近い未来にルイズちゃんと出会えると！」

「おいおい、興奮し過ぎだ、一樹。有り得ない事はないが、確率かなり低いんじゃねえのかよ、世界は狭くなつたとは言われるが、所詮はコミニケーション。旅行しようつたつて五、六時間は確実に掛かる。世界は俺たちの手に余るくらいに広いんだよ」

「そだな。確かにルイズとやらも異次元の歪みを通じてこの世界に来ることもあるだろ！」

「この世界に？　やつぱり世界は一つだけじゃないのか」  
エクスカリバーの聲音が変わる。ここからは今まで以上に真剣な話が始まるのか。

「そう。パラレルワールドって知ってるか？　平行世界と書いて  
パラレルワールドだ」

「えーっと、この世界と別にある、私達が元居た世界。一つの世界が同時に進行している、ってところかしら」

「大当たりだ、楓の姉貴、そう、パラレルワールドは一つだけじゃない。パラレルワールドは“もしも”、“*if*”の数だけ存在する。ドラ もんの映画にもあつたろ？ “もしもボックス”って、あれでパラレルワールドを召喚つて訳だ」

「つまり、どうゆうこと？」

「つまり、無限通りある“もしも”の世界から俺達の世界へ異次元の歪みを通じていろんなものが流れてくれるって感じだろ？」

「そうだ、詩音の姉貴」

「で、俺達は何をすればいいんだ？」 エクスカリバー

「簡単に言えば、色んな世界に行つて、色んな所に現れる、異次元の歪みを閉ざす。それだけ」

「そうか、海斗がいつから居たかは置いといて、どうやって色んな世界に行くんだ？」

「そりや、あそこにあるような、『異世界に通じる扉』、通称D.Oorsを潜るんだよ。記憶したか？」

「どこにあるのよ！ その扉は！ どこにも見えないわよ！」

「……あそこ」

愛子が指差した場所に、扉が現れる。それは入学式の日に、俺をこの世界、魔法の世界へ誘つた、淡い光に包まれた扉、そのものだった。

「マジか、マジなのか。今度はどこに飛ばされるんだ」 エクスカリバーは凄く他人ごとのように、

「知らん」

とだけ答えた。

「でも、あの扉がどこに通じていようとも、俺達はあの扉を潜り、そこにある異次元の歪みを閉じなければいけないんだろう？ エクスカリバー」

「そうだ。坊主、話が早くて助かる」

「やうかい。じゃ、行くか」

しかし、香織はやり残した事があると、抗議を上げる。

……霧囲気ぶち壊しやがつて。

「まずは元いた世界に戻つて、私達の無事を伝えるべきよー。」「それもそうよね……。パートナーと無断で旅行に行つてましたつて言つのが一番ね」

「よし、拓真、異世界の扉よろしく」

「いいけどよ、俺は真理亜と違つて、場所の指定は出来ないんだ。南極に飛んでも勘弁してくれよ?」

なにせ、「ゴローしても“不完全”だからな。ゴローデやれる」とは制限されんだよな……。

「じゃあ、真理亜よろしく」

「嫌よ。なんか屈辱的な言い回しだから」

「拓真!　どこでもいいから元いた世界に送りなさい!」

いやいや、もう少し頼むことをしようよ……。

「俺からも頼む、真理亜。どうしても真理亜の扉が必要なんだ。何でもするから」

すると、真理亜の口の色が変わつていき、舌なめずりをする。

「……今、真理亜はやらしいことを考えたわ」

「そんなことはないわ。それよりも拓真、本当に何でもしてくれるのよね?」

「一言はないよ」

真理亜の舌なめずりが薄氣味悪い笑い声に変わり、なんだか酸っぱい匂いが漂い始める。……恐いよ、真理亜、いかにも喰われそつて感じが特に……。

「うふふ、くふふ、ぐふふ、ぐへへへへ

「ねえ、いつの間にか真理亜ちゃんの足元に水溜まりが出来てるけど、魔法の前触れだつたりするのかな?」

「ああ多分そうだろう。って真理亜?　真理亜、真理亜ー?」

俺は真理亜に軽めのチョップを喰らわせる。

真理亜は長い夢から覚めたかのようなリアクションをとつ、我に返る。

「あ、ああ、異世界の扉よ、その戒めを解き、我を導け！」

真理亜の詠唱がもう一つの扉を生み出す。それは、Doorsとは違つて、小さくて、丸くて、不思議な紋章が描かれてて、要するに、魔法陣だった。

「一応、確認しておくけど、ちゃんと私達の部屋に繋がつているんでしょーね？」

「お、おいおい、扉を作らせておいて、それは無いだろ？　なあ？……、前見たときと、形が違うのですが……」

「うふふ、これが本式よ？　さあ、行つてらっしゃいな」

真理亜は蠱惑的な笑みを浮かべる。それに惹きつけられたか、どうにも体が動かない、じつ、蛇に睨まれた蛙みたいな感じ。

そんな俺をコシンと小突き、

「ほら拓真、何真理亜に鼻の下伸ばしてんのー。わつわと来るー」と叱咤し、魔法陣の中へ消えて行つた。

「さてと、俺も行くわ」

と真理亜達に伝え、踵を返し、魔法陣に向かつて歩き出した途端、「ちよつと待つて

真理亜が手を掴んで、

「伝えたい事があるの」  
真剣な表情で話しかけてきた。

## 第三章 異世界に通じる扉（後書き）

次回は恋の茨が拓真に巻き付く予定、あくまでも、予定。自分の気分次第でキャラクター紹介になるかも。

## 第四章 動き出す恋の歯車（前書き）

破廉恥な事しか出来ない訳じゃなによー。

と書つことで、恋愛小説風味、特に理由は無いです。  
あるいは、動きが欲しかった。それだけです。

## 第四章 動き出す恋の歯車

「あなたに伝えたい事があるの」

真理亜の表情がいつもと違う。なにやら真剣な話をするみたいだ。

「キュルケみたいな色ボケキャラかと思っていたが……」

「眞面目に聞いて！　私は真剣なの！　本気で聞いて！」

半泣き状態の真理亜。こればかりはいけないと見て、本気で土下座した。

「すまん、この通りだ」

真理亜は俺に「立つて」と言い、それでも土下座する俺を水魔法で立ち上がらせた。

「本題に入ります」

「クリ、生睡を飲む。俺は徹底的に犯されるのか？

『今からダーリンに媚薬や催淫薬を沢山飲ませ、絶頂直前まで興奮させて、私の胸の中でたくさんいってもらいます』

うん、あり得る。真理亜ならやりかねない。

「確かに、私の本能はそうしろと叫んでいるけど、今のところは理性が歯止めを掛けているから……、いつまで続くか分からないけど俺は安息の溜め息をつき、尻餅をついた。

「り、了解……。続けて？」

「ええ、そうさせて頂くわ」

俺はもうそろそろ真剣になつた方がいいと考え、立ち上がり、真剣な眼差しで真理亜を見る。

そうすると、真理亜は日に見えて赤くなり、言葉を詰まらす。

……意外と初心だったりするのか？

「え、緊張して、何を話すべきか分からなくなつたわ、心を落ち着

かせるから、もうちょっと待っててね？」

……緊張は人を変えると言つが、本当だつたんだな。

「落ち着いたわ、日頃の行いのせいから……、いくわよ

ゴクリ、俺は一際大きな塊となつた生睡を必死になつて呑み込む。

「あなたのことが好き、いや、愛してる。心の底から、愛してる…」

真理亜の顔が迫つてくる、互いの顔に鼻息が当たるほどにだ。

ここまで至つて普通、いや、結構好きだな。こうやうの。でも、

ここまでは至つて恐怖に変わる。

「私はね、欲しがりなの、特に愛する人については、誰よりも知つていて、持つていなきゃ、私は耐えられないの」

真理亜は相も変わらず、顔を真つ赤にしている。目もぎゅっと瞑つ

ていて、とても可愛げがあるのだが、肝心のセリフがなんか危ない。

「ダーリンが欲しい！ 誰よりも欲しい！ 心も、体も！ 全部欲しいの！ 私にとって、あなたが全てなの！」

このセリフは、もちろん嬉しい。

でもそれはセリフだけ取れば話で、さつきから出でている、その奥からの殺氣。及び、真理亜から発せられる筆舌に忍くし難い、オーラみたいな、真理亜みたいな人がここまで真面目になると、凄く、近寄りがたい雰囲気が漂つてしまつて……、とにかく、それらさえなければ、俺は嬉しすぎて、思わず飛びついで押し倒し、真理亜の最大の魅力である巨大で豊満な胸を、揉みながら埋まり、あんなことやこんなことも……、俺つてやつは、なんてことを……。

「でも、今のダーリンは香織の物、香織にぞつこんだから、私がちよつと色気を振りまいても、ちつとも見てくれないかも知れない」

急に声音が変わつた。自分を責めても何も出ないぞ。

確かに高飛車で高慢ちきな香織のことが実は好きだ、そればかりか、彼女以外、好きになれそうにない。

いや、友達とか、そういうのは別だ。そういう意味でなら、真理亜のことは大好きだ。

でも、香織には悪いけど、それは暫定で、まだ答えを出しかねているから、今後の行動次第では真理亜のことを好きになつたり、逆に俺が香織やその他の皆さんにあんなことやこんなことをして、俺の物にしてしまつていい場合もある……。

いや違う、何てことを考えてたんだ！ やっぱり香織一筋だ。今決めた、神の名の元に誓つた。大原拓真は大山香織だけを愛し続けることを！

「だから、私は全身全霊を賭けて、ダーリンを虜にしてみせる！

今まで以上に過激で、大胆にダーリンを惑わして、私の物にしてみせるわ！」

言下、真理亜は俺の手と頭をしつかり掴み、自分の胸に押し付けた！

真理亜は一方の手で俺の頭を巨大で豊満な胸につづめさせて、もう一方の手で俺の手を自身の胸に押し付け、弄ぶ。その際、真理亜はくねくねと動き、さりげなく“えっちいところ”をこすりつけ、粘っこい、艶やかな声と息を浴びせかける。

男にとっては、願つたり叶つたりのシチュエーションだが、俺にとっては地獄、お色気地獄だ。それに、数分前に誓つた、香織との誓約が……。

「いけないわね、歯止めが利かなくなっちゃつたわ」

実際に楽観的な真理亜、何か奥の手でも持つているのだろうか？ 持つてないにせよ、香織に見つかる前に止めさせないと……、殺される。

「だあれに殺されるんですつて？」

「げつ……、この声は……。

香織が戻ってきた。かつて無い、巨大な殺氣が容赦なく襲っている。誰か助けてくれ。

だが、念じただけで物事が良い方向に進むほど、人生は甘くはなかつた。

むしろ、最悪の展開が訪れた。

「あら、香織じやない。ふふふ、私、決めたわ！　　香織にダーリンは過ぎた代物、ダーリンは私が愛してあげる！」

それは、火にガソリンを注いでいるようなものだ。

香織は案の定激昂し、竜巻【トルネード】を繰り出すが、真理亜も負けじとそれを上回る威力で槍焰【そうえん】を繰り出し、竜巻を打ち消す。

……ん？　炎？　確かに真理亜は水属性だったはずじゃ……？

「ふふふ、私、実は火属性だつたりするの。さあ、私の胸の中で眠りなさい」

真理亜はさらに力を入れ、俺の顔に巨大で甘美な、禁断の果実を押し付けてくる。燃え盛る炎に、ガソリンを呆れるくらいにぶちまけているようなもんだけな……。

「え～る～ま～り～あ～！！」

香織の近くにつむじ風が次々と出来る。香織はマジギレ寸前のようにだ。

しかし、真理亜も挑発することを止めない。

「褒め言葉として受け取つておいてあげるわ」

その一言が香織を派手に事故つた車の最期が如く爆発させるつてことを真理亜は知らないのかな……。

「にぎやあああああっ！！」

真理亜に対する香織の怒りが、奇声を上げて大爆発。辺りに竜巻が発生し、辺りの土地を容赦なく荒らし、この辺りの水を全部ひっくり返してしまう。

「もう、スマートじや無いわね」

「つるさい！　人の奴隸に手を出すな！」

「だ、だからつて竜巻を飛ばしてくんない！」

蛇行しながら、近づいてくる巨大な竜巻。あんなの、俺の炎でも呆

氣なく消し止められてしまう！

「ど、どどど、どーすんだよ真理亜！ 助けて、まだ死にたくない！」 まだやり残した事が！

「そうよね。まだ私との『テート』が終わってないものね」「テート？」

「そうよ、あなたが何でもしてくれるって言つたんじゃない？」「ああ、そういうことか、納得。

「納得すんなああ！」

目の前の竜巻が更に勢いを増す。少し気を抜いただけで高度二千メートルまでとばされそうだ。

「大丈夫、私を信じて、少しの間だけでいいから、私に心を委ねて欲しいの」

「委ねるつたつて、どうすりやいいんだよ？」

「うふふ、こうするのよ」

そつ言つて、真理亜は俺の顔を両手で優しく包み込み、蠱惑的な微笑を浮かべる。

そして、真理亜は香織にむけて言い放った。

「香織！ 女の子は可愛さが一番よね！ でも可愛さだけじゃダメなのよ！ 女は、時に妖しく、時に大胆に、時に纖細に、男を求めるものなのよ！ そしてね、今から拓真にこんなことして誘惑してあげるんだから！」

真理亜は再び俺に聖母マリアのような微笑みを見せ、捕食されたかと錯覚するほどの激しくて大胆なキスをした。

「んっ、んぐっ！？」

舌が凄い入ってきて、唾液を思いつ切り吸われる。何故か興奮する俺は変態なのか？

「んっ、んんっ……」

俺はバレないように真理亜の顔を覗き見る。がすぐに口をとじた。反則だ、真理亜のキス顔可愛すぎる……。ちゅっ、ぶちゅっ、ぶちゅううううう、という効果音さえなければ、もっと可愛いんだろう

な。

だが、竜巻を止めなければならないのだが……。  
仕方ない、ダメもとでやってみるか！ 烈火の飛刃【ブレイズ・エッジ】！

撃ち出すために、手を竜巻に向ける。意識を集中、手が熱くなり、手を突き出すと炎がでる！ はずなのに、意識を集中しても、手が熱くならない。突き出してみても、ジュウと音を出しただけで消えていく。

「ああ、ダーリンのマナは情熱的な愛を育んでいる最中に、ほとんど貢ったわ。あ、マナって言つのはダーリンが知つてゐる言葉で、MPと叫うのかしら？」

え、MPドレイン……。アスピルとも呼ばれるそれは、RPGの呪文の中で喰らうとかなり厄介な呪文だ。

MPを取られすぎた俺の分身が、魔法も口クに使えず、威力が弱すぎて意味のない直接攻撃ばかり繰り出し、ブラッドーゴンになぶり殺され続け、本体」とソフトを破壊したのを、今でも覚えている。「なんて事を……」

すっかりと意氣消沈する俺を真理亜は優しく抱きしめる。その顔を覗き見ると慈愛に満ちた微笑みを浮かべていた。この顔を見て、夜間は真理亜にこつそり従う事に決めた俺。良心？ 教頭もとい、ケダモノに兄を殺された時から捨てている。

「気を落とさないで、竜巻から、ダーリンを守つてあげるから」そう言うと真理亜は、再び唇を奪つた。だが、前と違つて優しく、興奮よりは安心の方が強い。

ひとしきり唇を重ねると、急に唇を離し、何か呟いた。

「純愛【ピュア・ラブ】」

何かの魔法？ と頭を傾げてみると、閃光が炸裂し、荒れ狂う竜巻を何事も無かつたかのように、消し去つてしまつ。

「ドキドキするでしょ？」

「へ？」

「私の能力はね、キスした人を興奮状態にして、冷静な判断を失わせるの。そしてもう一つ、キスした人のマナを奪い、特殊な魔法を使うワインディーネ特有のスキル。さつきのがそうよ」

「ワインディーネ？ 水の精霊？ 何故特有のスキルを使えるんだ？」 実はワインディーネだったとか？

「血を引いてるのよ、ワインディーネの血を」

……神話はテタラメじやなかつたんだな。

「好きよ、ダーリン」

その言葉と同時にとてつもない殺氣を感じた。

「そうか、そんなにエロいのが好きか、そうよね、あんたは盛りのついたバカ犬だもんね。仕方ないもんね。あんた達なんか、遙か上空でいちゃいちゃと交尾でもしていなさいよ！」

怒りで真空の刃や竜巻が乱れ飛ぶ！ 船がヤシの木が、果てには

岩山が木つ端微塵になる！

俺は香織に追われる形で元いた世界に戻つていった。

## 第四章 動き出す恋の歯車（後編）

どうだったでしょ？

次回は雑魚キャラ地獄で暴れまくる予定です。

後一話でやっと異世界へ。

## 第五章 元いた世界の心無き者（前書き）

久々の更新です。凄くヤバくなつて、ボツになつたり、苦労と努力を水の泡にされたりと泣きたくなりましたが、なんとか書き上げました。

今回はヤバいです。マジでヤバいです。かなりえつちいです。苦手な人は戻ることをお勧めします。……マジで！

## 第五章 元いた世界の心無き者

「私の前で大人の階段を昇った大原拓真を正式に婚約者として、我が家にむかえよう。この婚約は決して違えられる事はなく、二十歳になつたら何がどうなるうと香織と結婚させるんで、ヨロシクう！」

「何が『ヨロシクう！』だよ！　凄い傍若無人な結婚ですね！？」  
「褒め言葉として受け取つておひづ」

……はあ、「レも運命か。

「せつ、あなたは私と結ばれるして結ばれた、運命共同体なのよ！  
それに、拓真は私に種をまいた。まいておいて責任放棄なんてさせないんだからね！！」

「そうだよな、例えコイツの事が嫌いだったとしても、男として最低限の責任は取らないとな。  
そう、あんなことをしたばかりに

### 回想シーン

「生きてるってなんて素晴らしいんだろ！」

風魔法をむやみやたらと撃ちまくる香織から逃げるよう元いた世界に来た俺は完全に逃げ切つたと思い、息を絶え絶え、束の間の喜びを噛み締めていた。

「私から逃げ切れると思った？　バカな男よねえ」

だが、そんな喜びをあつさりぶち壊し、逃げ切つたかと思つた俺を捕食するかのように後ろからしなだれかかる香織。

「ううあつ！ なにこれ、また女になつてる…」

いつの間にか女の姿にされた俺の胸を、いつの間にか付けていたブラジャーの下からがしがしともみしだかれ、いつの間にか付けていたパンティーの上から、『アレ』をなぞられる。

「私はね、拓真の次に女の子が好きなのよね。カッコ良い拓真もいいけどや、可愛い拓真は凄く萌えるんだよね… さあ、私を喜ばせなさい、萌えさせなさい！ 淫らに舞い踊るのよ！ 拓真！ いや、春菜！」

淫らに喘ぐ声、それが俺の声だなんて、未だに信じられない。

「はあはあ……、はううっ！ なんで、こんなことを？ これが、自分の声なの……。はんっ！ 激しく……かふあ…」

香織はさらに激しく胸を揉みしだく。世界が一瞬暗転し、真っ暗闇が広がる空間で、遂に覚醒するもう一人の人格、春菜。

『春菜は拓真で、拓真は春菜。私を傷付ける事はあなたを傷付ける事なのよ』

春菜は意味深長な言葉を残し、俺を“意識の牢獄”に閉じ込め、体をコントロールし始めた。

「おねえさま……私とキスを」

「ええ、もちろん。でもただキスするだけじゃつまらないわ。胸を揉み合いながら、キスしましょ」

激しくキスして、激しく揉み合い、互いに色々な所に触れた。

そして、禁断の花園へもよゆーで踏み込んでいた、香織と春菜だつた。

(つまり、レズって二人仲良く果てた)

意識を取り戻して、初めに見たのは、威厳ある校長室と、香織の胸を後ろからもみしだく変態だつた。

「はあはあ……、ああ、ああっ、ああん！　いやっ！　やめっ、やめて！　た……、拓真もぼけっと見てないで、助けなさいよっ…」

香織は凄まじい嬌声を上げ、恥部からは透明な液体が流れ出していく、色んな意味で見てられなかつた。

すかさず、香織の上位風魔法、暴風の金鎧【ストーム・ハンマー】

を繰り出し、香織もろとも変態を吹き飛ばす。

香織は窓ガラスの横の壁にぶつかり、落ちずに助かつたが……。

「お、あいおい、何やつてんだよー?..」

時既に遅し。香織は完全に発情し、目を虚ろにして、一歩前に近寄つて来る。

自分の恥部を自分でいじくり回して、嬌声を上げている。そして、艶やかな声で誘惑してきた。

「はあはあはあ、ううつーーはああ……拓真、私だけの拓真！　私の“初めて”受け取つて欲しいの……。拓真が初めてじゃないとヤダ……」

瞬間、俺の中の“何か”が吹っ飛んで

今に至る。

ほら、セレーナまだ残つてゐ、血と汗と酸っぱい匂いを出す何かの痕跡が……、今思い出しただけでも……、ザボンヤーーー。

「なかなかやるじゃない、凄く気持ちよかつたわよ」

「ひっせえ、まあこんなことにならなくとも、いつかは真剣に考え無けりやならねえと思つたがな……、結婚について」

「ばつ、ばかつ、何言つてんのよつ、結婚は形だけで、扱いは私直属の奴隸として、一生こも使つてやるんだからね！」

そつ言つてますが香織ちゃん、お顔が真つ赤だよ？ そんな香織に愛おしさを感じ、わゅうう……ひとそれはもつひとつもわかつへく抱き締めた。

「 つて、何抱きつこいのよつ！ いたたつ、離しなさいよ

つ！ ねえ、離してよ、恥ずかしこじやない……！」

「好き、好きだよ香織、とても愛おしい。凄く好き、本当に好き、心の底から惚れてる」

「嘘じやないでしょうね？」

「 わかりと、心の底から愛してゐ」

俺は証明の為に、わらこそつづり抱き締める。が、さつすぐたのどう、肩を叩き、ギブアップを示している、プロレスじやあないんだから……、と思しながら離してやつた。

「いたた……。分かつた、あなたの愛は凄く感じられた、でもさ、あれは無いわ。痛い。凶器か。……、でもね、凄く嬉しかったから。……また……やつてね？」

「……、分かつた」

「でつ、でも、エツチなことしたら、吹き飛ばすからね！ ホントのホントに、吹き飛ばすんだからね！」

「……分かつてますよ」

そんな甘いムードをぶち壊す、愚者が一人……。

「さあ、一人の気持ちが高まつた所で拓真。香織と誓いのセッ

「つおあつ！」

「あやあああつ！」

甘いムードを完全にぶち壊す、激しい揺れと突然の轟音。何かが爆発したみたいだ。

「あんたが爆発させたんじゃないの！」

「何もしてないよ……つか、いつの間にかツインテレ香織ちゃんに戻つたんだな」

「う、うるさいわね、現場に急ぐわよー」

渡り廊下

「…………、な、なにこ……あの歪みは」

「異次元の歪みなんだろうけど、何よアレ……。黒い塊を吐き出しつづけているわ……、気持ち悪い……」

……確かに見ていて気持ちの良いものじゃないな。

「拓真、激しい戦いが待つてはいるかもしないわ、死なないで」「俺のセリフだ、絶対に死ぬな、ダメだと思つたら逃げても良い、だから絶対に死ぬな」

そんなシリアスな雰囲気さえぶち壊す、とんでもない愚者が一人…。

「おいおい、二人共、誓いのセ

『エロオヤジは黙つてろ!』

香織と俺はその言葉と同時に魔法を放つていた。

二つの違う魔法は、混ざり合い、融合魔法、獄炎旋風【ストーム・インフェルノ】になり、香織の父、確か大吾朗だっけ？ を遙か彼方の上空へと吹き飛ばした。

「……、切り替えよう、香織。とにかく生徒に危害が加わる前に、素早く殲滅させなければ……」

「そ、そうね。拓真。……それにしてもエクスカリバー、あの歪みはどうやって閉じるのかしら？」

「前はかなり小さな歪みだから出てきた奴を全滅させれば塞がつたんだが、今回のような普通クラスはある程度出てきた奴をぶつ飛ばし、俺が光り輝いたら歪みに向けて俺を掲げる。そうすれば歪みは消えて増える事もなくなる。あとは残った奴らをぶつ飛ばすだけだ」

俺と香織は同時に息を呑んだ。

そして、これまた同時に、俺は「キンダムハーツみたいだな！？」

と、香織は「あれで普通クラス！？」と驚きを隠せぬ声で叫んだ。その後、「ツツ」む所が違うと言われてボコスカ殴られたのは、

言つまでもない。

## 運動場

マジかよ……。と眩いてしまつ程に、多大といつゝ言葉すら殺してしまつその量は、いつか見た『ハート ス千体狩り』のイベントみたいにうじゅうじゅしていく、吐き気がしてきた。

「キン ダムハーツ恐るべし、実際に起りると吐き気がしてきた、なあ香織、お前もそう思わないか?」

返事がない、ただのしかばねのようだ。

「誰がしかばねよ! 死んでないわよ! 考え事をしていただけよ! ねえ! 拓真! 聞いてるの! ..... “返事がない、ただのへんたいのようだ”」

「誰がへんたいだ! 変態でも返事くらいはするわ! 考え事をしてただけだ!」  
そんなふうにいちゃつこいでいる最中、一体の黒く小さい悪魔が襲つてきた。

「ちえつ、もう来たか、気の早い奴」  
「でも、私達の濃厚な愛の前には無力同然なのよ!」  
「へ?」

言下、香織に突然唇を奪われ、同時に襲つてきた黒く小さい悪魔は消滅する。

それを合図に次々と襲つて来るが、それらも儘く消え去つてしまつ。

これは『ラヴ・インパクト』なる魔法の一種で、特殊魔法のカテゴリーに入るらしい。

そもそも魔法には、攻撃魔法、防御魔法、補助魔法、特殊魔法と四つのカテゴリーがあるのだが、それを説明するのはまた別の機会にしてくれ。

香織曰わく、二人の魂の波長がピッタリ重なることにより爆発的なオーラが発生し、辺り一面を吹き飛ばすらしい。

……、意識せずに使えるのは、それ程までに深い関係になつていてからなのか？

（でも、受け身は嫌いだ。もっと強引に大胆に攻めるのが、香織の力であり、俺の生き様だ）

（生き様つて……まあ、その方が拓真らしいわね）

そう心の中で会話を交わした後、俺は静かに唇を離す。唾液が俺と香織を結ぶ、透明な橋を築き上げる。その光景にキュンとなつて、再び唇を奪う。今度は俺が口の中を舌で搔き回す。

香織は悩ましげな顔でキスに応じ、艶やかな声と衝撃波を辺りに撒き散らしている。衝撃波に關しては、さつきより大きい……。シンク口率とかそういうのも関係して来るんだな……。

俺は香織をここまで求めたことがあつただろうか？ 一人の息が荒くなり、体は火照っている。

我慢出来なくなつた俺は香織のTシャツをたくしあげようと、右手を裾に置くが、香織の手がそれを許さない。香織はそつと唇を離し、何人をも虜にする笑顔でこう言った。

「白昼堂々と私を求めてくれるのはもちろん嬉しいわ。でも、今は戦闘中よ？ 今は戦闘に集中して。戦闘が終わつたら、真つ先に押し倒してあげちゃうんだからね」

俺はコクリと頷き、エクスカリバーを抜き放つ。そして、横薙ぎに多くの心無き悪魔を切り裂いて、悪魔の群れに突進していく。

香織も何故か強化された竜巻【トルネード】で次々と悪魔を吹き飛ばす。後々、香織に聞いてみたが、『愛の力』らしい。……。

「エクスカリバー、他の武器に変化できるか?」

「なあに言つてんだ相棒、弓になつたじゃねーか」

「よし、なら“マシーンブラスター”にチエンジだ

エクスカリバーは「あいよ」とだけ言い、淡く光つた後に少し大きめの近未来的な銃の形に変化した。

「形は完璧だな。あとはトリガーを引いて小さな光の弾が出たら最高!」

そして、トリガーを引く。次いで、『ドドドド……』といつた発砲音と共に小さな光の弾が連発され、心無き悪魔を黒い粒子にしていく。

「最高! 忠実に再現されてやがる! チェンジ、ランチャーノ・8!」

淡く光り、銃口が九つある重火器に変化する。

一度トリガーを引けば、一度に九発の誘導式ミサイルが発射される、とある銀河の最強武器。とてもなく重いのは、身体強化でカバーだ。

「ひひひひひあー 吹つ飛べ!」

四十セット全てを一気に撃ちまくる。

ミサイル一つ一つが違う標的を狙い、着弾し、爆発する。それはもう、大音量だった。

「今まで大体、十分の三くらいは吹き飛んだだらう。じゃ、一一天流、富本武蔵の凄さを見せてやろうかな……つと」

「ん？ 相棒のよく使っていた富本流とはどうちがうんだ？」

いきなり喋るなよ……。まだ慣れてないんだから……。

「富本流は武蔵の弟子が新たに開いた、分家の一つみたいなもの。対する一一天一流は武蔵が作った宗家みたいなもんだ。つてことでエクスカリバー、右手に大太刀、左手に小太刀を装備だ」

エクスカリバーは「こりやまた細かい注文だこと」とぼやきながらも、注文通りに、右手に大太刀左手に小太刀を装備させる。

「一一天一流地の巻“突貫”」

瞬間、俺の姿は数十メートル前に移動し、その軌道半径五メートル内にいた悪魔はぶつ飛び、黒い粒子に変わっていく。

「ヒュー、やるねえ」

「キングダム一ツのアクセルかつての。でも、まだまだこれからよ、一一天一流風の巻、“怒涛”」

その姿は、まさに疾風怒涛、俺は一瞬の間に悪魔の群をほとんど薙払い、エクスカリバーも凄い光を発している。

「今だ！ 相棒！ 僕を歪みに向かって掲げろ！」

「つたく、アクセルかデルフリングガー、どっちかしてくれよ、絡みづらい」

そう言いながら、右手のエクスカリバーを歪みに向かって掲げる。

光が切つ先に集まり、次いで一筋の光線になつて歪みに放たれる。歪みはでかい塊を吐き出したのを最後に、一瞬で閉じてしまった。

「さあて、残り物の掃除といこうかね！」

「おうよ！ 相棒！」

「私を忘れてもらつちや、困るわ」

ちょうど、でかい塊は小さい悪魔を全部喰らつちまつたからな、心置きなく100%で戦える。

卑怯だ？ 化け物相手に卑怯もクソもあるか！

ギィヤアアアアアアツ！……！

化け物が吠え、こちらに向かつて突進して来る。四足歩行のドラゴンみたいな容姿だが、何かが違う。あれだ、闇だ。実態のない闇の集合体だ。だから、普通の攻撃魔法じゃ効くはずない。

香織の目を見る。ちゃんと分かつてゐるな、よし！

『<sup>ヨニゾンレイド</sup>融合魔法、聖なる風【ホーリーウィンド】！』

光の鱗粉が風に運ばれ、闇のドラゴンを包み込む。

この魔法は、対象が人間、獣人みたいな生物だと無害どころか、体力が回復される、回復魔法になるが、もしモンスターや悪魔などの魔族だったらものすごいダメージを与える攻撃魔法になる、光／風属性の特殊魔法だ。

だが、ああいうドラゴンがそんな簡単にやられるはずも無く……。ゴオオオガアアアアアアアア……と咆哮し、怒らせてしまい、尻尾振り攻撃でかなり手痛いダメージを受けたあげく、校舎の一つが全壊して瓦礫が振つてくる。

「いやあああつ！」

まざいな……。瓦礫をどう防ぐか、やはり光の聖域【ホーリーサンクチュアリ】が一番か！

すかさず、スペルを唱え、ホーリーサンクチュアリを発動させる。瓦礫と聖域がぶつかる度に凄い音を発する。

「ねえ、大丈夫なの？」の口pee。凄い音がするわ

「心配ない。信じろ、絶対に大丈夫だ。」

しばらくして、断続的に続いていた轟音が收まり、俺と香織は一安心と一息ついた。

「ふう、なんとかなったわね」

だが、安心など戦闘中にあるはずは無く、すぐに轟音、しかもさつきより大きい轟音が聖域内に響き渡る。

「まざいわ、聖域にひびが入つて！ 何か解決策は無いの！？」

「魂の架け橋【スピリットリンク】しかないだらつ」

“繋がり”が“架け橋”になつてゐるが、名前を変えただけで、特に変化は無い。

「誰に言つてるの？ とは敢えて聞かないわ……。それにしても、ま、また、キスするのよね？ 私、またさつきみたいに口の中を搔き回されたら、今度こそ……」

「今度こそ？」

「えへっと、そのへ、うへん、あひゅ……。えいー！」

香織は意を決したか、思い切り唇を俺のそれに押し付ける。あの時の感覚がフラッシュバックし、もう一度口の中をかき回したくなれる。

上唇と下唇を割って入るよつて舌を動かす。香織は驚愕の声を上げるが、直ぐに身を委ねる気になつたみたいだ、とろんとした目になつている。

いつもみんなからドンカン、ドンカンと言われる俺ですら分かる。凄く求めていたんだ。

そんな目で見つめられたら、何もしないわけにはいかない、俺は舌で思い切り口の中を搔き回した。

くちゅくちゅ、と音が鳴る度にいやらしい声が聞こえて来る。

早く！ 私、もうダメになる！

ん？ 今香織の悲痛な叫びが聞こえたような？

「んっ！ んんっ！ んんんんん！」

凄い断末魔としか言いようのない叫びと共に、香織の体から力が抜け、辺りに酸っぱい匂いが漂つ。

「……まさか、ね……」

俺は下をゆづくつと見た。案の定、下着から液体が漏れ出し、香織の足下に水溜まりを作っている。

「キスだけでこんな事になるのか？」

そんなわけなかつた。

左手が妙に濡れている。

匂いを嗅いでみると……、クラクラした。女のフロモンの集合体だこれ。

さらじに、右手は下着の下からしっかりと胸を揉みしだいていたのか、服装に乱れがあり、その乱れの中で右手が思いつきり胸を鷲掴みにしている。

ドラゴンが眼前に迫っているのに、凄いピンク展開の予感。

「たくま、わたしのじきゅうがたくまをまつてるの、はやくいて、おくまでいれて、いっぱいにして、ぜんぶとして、おねがいたくま�」

……。戦闘中にすいません、ピンク入りま～す。時よ止まれ、タ～イムストップ。

数十分後

「満足したか？ 正気を取り戻せたか？ 戰えるよな？」

「ええ、もう、完璧よ。瞬殺出来るくらいにね。あんたも本氣出せばこいつを倒すくらい、赤子の腕を捻るくらいのもんでしょう？」

「ああ、時を動かすぞ、戦闘準備しとけ」

時よ動き出せ、タ～イムスタート。

轟音と共に、ドラゴンが眼前を通り過ぎる。ドラゴンの横に移動したのだ。

「気持ちよかつたわよ、たくま」

「つっせえ、その呼び方で呼ぶな！ 恥ずかしい！ 蜥蜴の牙【リザードファング】」

凄い勢いで燃え盛る、小型ミサイル型の炎が闇のドラゴンに向かって放たれる。普通なら、すり抜けて、変な場所に着弾するが……。

ギィアアアアオオオオ！

ドラゴンに当たり、爆発。左足が吹き飛び、黒い粒子と化した。

「光の鱗粉の効果ね、物理的な攻撃が効かない闇の集合体をじがらくの間だけ、実体化させるのよ」

「じゃあ、斬撃も効くんだな？」

「もちろん」

「じゃあいぐぜ、エクスカリバー、右手に大太刀左手に小太刀を装備！」

エクスカリバーが淡く光り、右手に長い青竜刀が、左手にそれより少し短い日本刀が持たれていた。

「見てな香織、これが宮本武蔵の本当の剣術だ！　二天一流空の巻、  
“絶空”」

瞬間、目にも留まぬ速さで駆け、闇のドラゴンを真つ一いつにする。

ギヤアアアア……！　と断末魔みたいな雄叫びを上げ、幾多の黒い粒子となり、鍵みたいな形になった後、俺の右手に収まった。

「黒光りする鍵だな、どこの鍵だと思つ？　香織」

香織が答えようとしたところに、エクスカリバーが、

「あの扉の鍵だ」

と答えたために、香織は答える代わりに軽く俺を殴った。  
ひでぶつ！？ と言うのも忘れない。

「んじゅ、歪みも閉じた事だし、一樹ん所に帰るか  
「……ふん」

拗ねやがって、面倒だな……、置いていくか。  
「来ないんなら置いていくぞ」  
「ちょっと、待つてよー。置いていくなんてひどいじゃないー。こ  
ら、待てー！」

香織の声をバックに、一人考え方をしていた。

……あんなに大勢で襲つて来たのに、あんなに巨大な怪物が校舎を  
一つ破壊したのに、目撃者、負傷者共にゼロ。それは何故なのか？

ああ、そうか、夏休みだったんだ。

簡単過ぎる謎の答えに落胆しながら、俺と香織は一樹達が待つ魔法  
の世界に戻つて行つた。

## ヒューローク 新たな世界の黒い鍵（前書き）

歯止めが利かなくなってきたこの最近。

今回もガチでヤバい！

遂には殺される…

## Hペローゲ 新たな世界の黒い鍵

「戻つたぜ、一樹」

残つた力を振り絞り、今出来る最大の笑顔を親友達に見せる。

「遅かつたじゃない、ダーリン、待ちくたびれちゃつたじゃない！」

媚びを売るような声と共に、駆け寄つてくる真理亜。

「待て、待ってくれ真理亜。抱きつくなは」

「もうまたなーいつ！」

直後、真理亜による渾身の一撃で一、二メートル吹き飛び、倒される。

当然のようにのしかかっている真理亜は顔に頬擦りをし、胸がきつかつたからなのかボタンを外してさらけ出された胸を大胆に押し付けた。

当然、俺は息が出来なくなり、周りの女達は息を呑む。  
マジで窒息しそうになつた時、俺は生存本能を呼び覚まし、無理矢理胸を遠ざけた。

「なあ、頼むから激しいことは後にしないか？ 満身創痍の状態から、なんとか回復【リカバリー】で癒やしたのはいいんだが、魔力使い果たして精根尽き果て」

「じゃあ、抗う気力はゼロってことね？」

真理亜が急にニヤケだした。凄く怖い、マジで怖い。なんだか一方

的にやられそうな予感……。

すると、真理亜は突然鼻で体中をまさぐつてきた。  
真理亜はひとしきりまさぐると、ものすゞぐべーヤケながら、吐息がかかるくらいに顔を近づけた。

注意深く鼻息を聞くと、ほんの少し鼻息が荒い。ほんの少しだが興奮しているんだ。

「ダーリンから、一人の汗と香織の蜜、それからダーリンの真っ白な愛とほんの少し、初エッチの血の匂いがするわ。ダーリン、香織の処女を奪っちゃったのね……」

俺はとても恥ずかしくなり、顔を背け、少し頬を染めながら答えた。

「恥ずかしながら……」

「そうよ！ これで真理亜に一つ勝つたわ！」

勝ち誇った顔をする香織。だが、真理亜も負けず劣らず、勝ち誇った顔をしている。いや、真理亜の方がドヤ顔に近い気が……。

「へえ、おめでとう。晴れて大人の仲間入りね。でも、私は五年前にダーリンの童貞を奪い、理性という理性を隅々まで喰らい尽くして、私を何度も何度も陵辱させた挙げ句、私とダーリンの子供を五年の間に三人も身籠もらせ、みんな母子共々無事に出産させたのよ？ あなたよりも、一回りも三回りも凄くてよ？」

女達の顔がひきつる。有り得ない……。と真理亜以外の全員が思っている。

「ねえ、ダーリン、さつきので力を全部使い果たしたんじゃない？」「ああ、そうだよ。頼むから窒息死だけは止めてくれよな、胸に押

し潰されて窒素死なんて、洒落にもならねえ

「世界中の健全な男の子はみんなそういう風に死にたいと思うものなんだけどねえ……」

ははは、そう思わない俺は健全じやないってか、悪かつたな、まだ死にたくねえんだ。ま、胸に押し潰されて窒素死も悪くは無い……か？

「分かつてゐる、死んだら」

真理亜はためりうじとなくジーンズに手を突っ込み、直に“アレ”を握り締める。

数秒後、頭が真っ白になり、またさらに数秒後、下半身が痺れるような感覚に襲われる。

「こんな気持ち良い」とが出来なくなるわよね

真理亜はゆつくりとジーンズから自分の手を抜き、自分の手に付いた何かを艶やかに舐めとる。

その笑みはどこか蠱惑的でなまめかしく、今この場面を現すには、妖艶の一文字が最もふさわしい……。

……じこまでエロチックなんだ真理亜。一樹も、いつの間にかいた海斗も、釘付けになつていてる。俺もなんか脈拍数みたいなのが急激に上がつて、体中が熱い。体中でマグマが煮えたぎつているみたいだ……。

「愛する人の精液は蜜の味ね、ここまでおいしい“食料”は食べたことないわ。もつと食べさせて頂戴な……」

真理亜は再び蠱惑的な笑みを浮かべ、四つん這いに覆い被さった後、激しいキスをで口内を貪り始めた。

ひとしきり貪った後、真理亜は唇を離す。二人の間に透明な糸が引き、脆くも切れる。それだけで体はヒートアップしてしまう。そして、真理亜は獸みたいな笑みを浮かべながらこいつ言った。

「ねえ、処女のお味はどうだった？　おいしかったでしょう？　でもね、私のような熟練者も良い味出すのよ？　うふふ、一人とも完全に発情している今、香織の“初めて”より気持ちいいことが出来るわ……ほら、私の中の狼がお腹を空かせて待ってるの。今にも暴れ出しそうだから、早く行つて私の中の狼を、まんぞくさせて頂戴な。あの時のよう」……

その一言で、俺の中の何かが目を覚まし

1時間が過ぎた

「真理亜、あんたの中の獣は気が済んだわけ？」  
「ええ……、こんなに沢山……愛をもら……つて、狼はとても……まん……ぞ……く、して……る」  
「そりや良かつた。じゃ、そろそろ扉の鍵を開けるぜ」  
「拓真、あんたはいっぱい搾られたはずなのに、なんで立てるのよ？」  
「？」

「さあ、何でだろ？」

香織の質問をあつたりとかわし、扉の前に立つ。扉はまだ淡い光を発していない。おそらくまだ繋がっていないんだろう。  
「相棒、あの時手に入れた黒い鍵を見てみな」

エクスカリバーに言われた通り、あの時の鍵を見てみると、鍵が黒

い光を放っていた。

「さあ相棒、格好良くD.O.O.R.Sの鍵を開けな

「格好良くつて……はあ

「おーい！ 相棒が格好良く鍵を開けるんだよー。」

「お、おい、バカつ！」

チクシヨウ、みんながぞろぞろと集まって來たじゃないか！ 後に  
引けなくなつちまつたじやねえか！

「じやじや、わくわく

「おこにいちゃんが格好良くな

「ま、まあ、じつしてもつて言つなら見てあげなくもないわよ

「……………楽しみ

「ダーリンが格好良く鍵を開けるんだもの、きっと凄いことになる  
んだわー！」

上から、桜、稜、香織、愛子、真理亜である。  
みんなマジで期待してる……。

つてか真理亜が復活している。すっかり果ててしまつたはずなのに。

「ああもうー 格好良くやつりますよー。」

『キヤー——ツ！』

黄色い声援、つてやつか……。ジャーブジヤあるまいし……。

「開け！ 異世界に繋ぐ、魔法の扉！」

漆黒に輝く鍵を扉に思いつきり投げつけた。鍵はまっすぐ鍵穴に吸い込まれ、ガチャリと音を立て、消えていった。

「あ、開いた……のか？」

直後、眩い光が扉を包み込み、この場にいる全ての人が目を覆つ。

「なつ！ 眩しい！」

「あやあつ！ 何なのよ一体！」

『きやあああー。』

「何も見えない！」

「……？」

「何だあれは！？ 黒い翼が四つ生えてるだ？」

愛子と海斗が扉の異変に気付く。それと同時に眩い光は消え、誰もが異変を見取る事が出来た。

「何だ？ 扉から翼が……」

そこで俺が見たのは、絶望の具現と言つても変わらないくらいに真っ黒な翼だった。

「不気味な翼、……拓真、本当にに行くの？」

「扉が現れるつて事はそこに異次元の歪みがあるんだろ？ 行くしかねえだろ」

「うう……。分かってるわよ！ 言つてみただけよー！」

辺りを見回し、大きく頷く。取つ手に手をかけ、思い切つて開ける。

「……行くぜ」

俺は一步、また一步と奥へ進んでいく。香織達も後を追つて次々と入っていく。

「真っ白な部屋……」

確かに……。ん？ これ、最初に扉をくぐり抜けた時と……気のせいか？

そう考えている間に、一樹が敏感に何かを感じたらしい。真剣そうな顔をして、唸つている。

「うーん……」

「どうした、一樹？ そんな真剣そうな顔をして……」

「なーんか嫌な予感……」

一樹がそう言つた瞬間、部屋中が一際輝き、光が消えると、それまで部屋だった所が大空に変わっていた。

「まさか、ね……。」

そのままかだった。次の瞬間、重力が戻り、凄い勢いで落ちていった。

「またかあああつ！」

高度2000メートルからのフリーフォール、  
今度は、助かるかどうか分からぬ。  
再び。

## キャラクター紹介その1

### 『第一回キャラクター紹介』

今回は、主人公大原拓真とその妹大原稜、メインヒロインの大山香織です。それでは早速スタート。

大原拓真 男 15歳

身長 168cm

誕生日 6月6日

火の魔法を得意とする異世界を旅することになってしまった不幸な本作の主人公。

元は普通のどこにでもいるような男子高校生だった。

が、突然、超高位魔法の蜥蜴の尻尾【リザードテイル】を放ち更に高位魔法、獄炎の剣【インフェルノソード】を続けて繰り出し、何らかの経緯で魔法が使えるようになってしまった。

魔力、精神力には長けているが、まだまだ実力は未知数。得意技は眼前に存在するもの全てを炎に包む、蜥蜴の尻尾【リザードテイル】。

喋る聖剣エクスカリバーを携え、今日も異世界を旅する。

香織などにキスされると簡単に気絶したり、真理亜の誘惑に度々負けるなど、少々女に弱い所がある。

大山香織 女 15歳

身長 163cm

誕生日 7月19日

スリーサイズ

B／75 W／55 H／70

風の魔法を操る、とある高飛車貴族より胸が小さい残念な本作のメインヒロイン。

拓真に思いを寄せる。自分の感情に素直になろうとするが、プライドやら何やらが邪魔して失敗に終わる、いわゆるツンデレキャラだが、三女紅音曰わく、ラノベの読み過ぎで真似し出したら定着してしまったらしい。

また、本来はとてもえっちいらしく、女の子をこのんで襲う、いわゆる百合属性だつたらしい。

拓真と出会つてからは、寝静まるのを待つて、襲おうとしているとか。

得意技は激しく吹き荒れる風で敵を吹き飛ばす疾風の一撃【ウインドブレイク】。とある寡黙少女の技をパクつたらしいが、香織は容疑を否認している。

風で薙刀を作り出し、近接戦闘もこなす。

大原 稜 女 12歳

身長 155cm

誕生日 5月20日

スリーサイズ

B / 78 W / 65 H 75

光の魔法を駆使する、ないすばでえな拓真の義妹。

おにいちゃん（拓真）が本当に大好きでいつもそばにいる。人目を気にせずキスすることも。

中学生とは思えないプロポーションは、おにいちゃんを喜ばせたいという信念と努力の賜物。

おにいちゃんを喜ばせるためなら手段を選ばない。

香織には昼夜構わず自然に甘えられて羨ましいと思われている。

得意技は鋭い光で敵を両断する、輝光の飛刃【シャインエッジ】。

という訳で、キャラクター紹介、第一回、拓真、香織、稜編を終了します。

次回は、拓真の親友特集です。

## キャラクター紹介その2

『キャラクター紹介その2』

さあ、お次は拓真の個性豊か過ぎる親友達です。

大山一樹 男 15歳

身長 155cm

誕生日 5月2日

五行ノ術式の内、金の術式を極めた、拓真の中學以来の親友。  
大山香織の父親、大吾朗の血を分けた子供。つまりは香織の義兄。  
しかし、不倫相手との子供なので大吾朗は快く思っていない。  
実はかなりオタクらしい。

香織からはおにいちゃんなどとは呼んでもらえず、良くてバカ兄貴、  
最悪の場合クサレオタクと呼ばれ、兄とは思えない仕打ちを受ける。  
得意技は稻妻を呼び起こして敵を貫く、召雷。

藤富真理亜 女 15歳

身長 175cm

誕生日 11月20日

スリーサイズ

B / 95 W / 75 H / 85

五行ノ術式、火ノ術式を極めた、大山四天王と呼ばれる大山財閥最大の傘下その一。

拓真とは中学以来の友達。

拓真をあの手この手で誘惑し、何度も何度も襲せた過去を持つ。今でも、あの手この手で、時に描写出来ないくらいに乱暴な色氣で拓真を誘惑する。

香織とは、拓真を取り合つライバル的存在。

その影で拓真を誘惑し、耐えきれなくなつた所で大胆に喰らつているのは、まだ誰にも知られていない……。

得意技は真っ直ぐに伸びる炎で敵を貫く、鎗炎。

榎原海斗 男 15歳

身長 170cm

誕生日 2月3日

五行ノ術式、木ノ術式を極め、拓真のライバルと思い込んでいる、大山四天王と呼ばれる大山財閥最大の傘下その一。

上に四人、下に二人の姉妹を持っている。

特に、姉からの仕打ちは海斗も恐怖している。

それが原因でドMに。

自分がシスコンだということを、必死で隠している。

因みに、姉妹からはカイ、と呼ばれているらしい。

得意技は巨大な木の塊を生み出し、敵にぶつける、木塊。

新垣愛子 女 15歳

身長 145cm

誕生日 3月3日

### スリーサイズ

B / 65 W / 45 H / 55

五行ノ術式、水ノ術式を極めた、拓真の勉強友達で大山四天王と呼ばれる大山財閥最大の傘下その二。

かなりの無口。過去に何度か強姦事件に巻き込まれるが、未だ解決されてない

それが原因か、男が嫌い。  
だが、拓真は例外。

むしろ信頼しきっている

ごく稀に、感情や人知れず我慢していた思いが爆発することがある。

得意技は鋭く研ぎすまされた氷の槍で敵を串刺しにする、氷槍。

坂田 桜 女 15歳

身長 165cm

誕生日 5月6日

### スリーサイズ

B / 58 W / 51 H 65

五行ノ術式、土ノ術式を極めた、拓真の小学校以来の幼なじみとも言える存在であり、大山四天王と呼ばれる大山財閥最大の傘下その

四。

香織達は拓真争奪戦に一切関係無いと思っているが、実際はとても大胆で、一人きりになると想い切り甘えてきたり、場合によつてはキスもしている。

得意技は何も無い地面から鋭い槍のような物を突き出す、地突針。

これでキャラクター紹介その2を終わります、次回は香織のお姉さん達です。

## キャラクター紹介その3

『キャラクター紹介三回目』

最後に大山香織の姉達を紹介します。

大山 紅音 女 17歳

身長 170cm

誕生日 8月10日

スリーサイズ

B / 85 W / 65 H / 78

水の魔法を使役する、とあるゴム人間並みに陽気な大山四姉妹の三女。と、言つても元々はとある孤児院に暮らしていた血縁関係に無い子供である。

関西弁で喋る、四姉妹のムードメーカー。

拓真に裸体を見せるのを恥ずかしいと思わず、バスタオルを巻いただけの霰もない姿を見せたり、拓真のベッドに裸で忍び込む事もある。

また、記憶を消すことが出来て、拓真の記憶が抜けているのはだいたい紅音のせい。

得意技は、空気中の水分を極限まで集めて圧縮し敵にぶつけてその水圧で粉々にする、激流の大砲【トレントキャノン】  
水を伸縮自在の鞭にして戦う事もある。

大山 詩音 女 19歳

身長 173cm

誕生日 6月20日

スリーサイズ

B / 70 W / 59 H / 63

土属性の魔法をちょこっと使える、とある人造人間並みに戦闘狂な大山四姉妹の次女。

彼女も紅音と同じように血縁関係に無い子供。

血の氣が多く、イラついては拓真をイジメたりボッコボコにしたりする。過去に暴力団を五つ、団員千人相当を棍棒一つで無傷でまとめて潰した武勇伝を持つ。

得意技は標的に当たると弾ける岩の爆弾を投げつける、岩石の爆弾

【ロツクボム】

魔法を使うよりも岩石で棍棒を作り出し、叩きのめす方が強い。

大山 楓 女 22歳

身長 180cm

スリーサイズ

B / 95 W / 72 H / 83

闇の魔法を扱う、大山四姉妹の長女。彼女だけは父親、大悟郎の血を引いている。母親を物心付く前に亡くし、母の顔を知らない。そのためか、とてもなくお節介焼きで、母親のように細かく言つ

てくる。

その所為か、楓の胸に飛び込めば母性愛に包まれて安らぎを得ると  
言われている。

拓真に関しては人一倍お節介焼きで、拓真が落ち込んでいると性的  
交渉を持ち掛ける事も。

得意技は触れた標的を一時的に幻覚を見せ混乱させる悪夢の息吹【  
ナイトメアブレス】

闇魔法で二丁拳銃を作り出して戦う。

これで現時点で全てのキャラ紹介が終わりました。

次回はいよいよ死神の世界編、同時に三作品同時クロス。  
凄まじくえっちくなることが予想される……。

## 序章 死神と拓真とピシク

「うわあああああ！ またかあああつ！」

魔法の世界に続く扉を潜った時もそうだったつけな……。

「香織！ 一樹達を頼む！」

あの時は香織が風魔法で助けてくれたが、その香織も今は空にいる。間違い無く死ぬ。

「分かったわ！ ……死なないで」

雲を抜け、城が見えてきた。うん、間違いなくここは別世界だ。  
……ははは、ここまでひどいと、ビリしてか笑いがこみ上げてくる。  
ビリもおかしくないのにね。  
さらに落ち、ひとつのお家が正面に見えるようになる。ビリや、ここに落ちるみたいだ。  
木造だけどかなり頑丈そうな家だ。木造ならば下手に炎を使えない、  
か……。なら！

「真空の剣【ニアーブレイド】！」

左手に真空の剣を生み出し、右手でエクスカリバーを抜き放つ。そのエクスカリバーにも、真空の刃を纏わせる。

「富本流剣技、攻式一ノ型『疾風怒涛』！」

屋根を塵さえ残らず切り刻み、軽やかに着地する……はずだったが、

切り刻んだ時にバランスを崩して、背中から派手に転んだ。

……ステルス発動しておいて良かった。

いやあ、本当に広いなこの部屋、寝室？ 寝室だよな？ まあいいや、とにかく広いな、ホテルみたいだ。

中三の修学旅行で泊まったディーニー ホテルより広い……気がする。そう思った時、甘ったるい断末魔が耳を貫いた。

「…………まさか、ね…………」

そのままかだつた。二人の男女が裸で抱き合っている。俺は運悪くラブホテルに墜落してしまったのか？

……いや、その割には扇情的な物が少なすぎる。

ん？ 何故知ってるか？

後々話す、真理亜とのデートで分かるはずだ。決してピンク予告ではない……と思うよ。

さてと、特徴は女がネコミミ？ をつけている。尻尾はない。人のハーフなのか、満月の夜に凶暴化するから切られたのか、俺には分からぬ。

男は……、あれ？ どつかで見たことがあるぞ？ 確か……いつの間にか積まれていったアダルトビデオ（失礼だ）の如月優太か？

「誰だ！」

あー、いかん。ステルス解けた。ここは潔く召乗るか。

「知らぬなら言つて聞かせましょ、俺は異世界を扉のままに旅する

「危ない！ たく

「

「

ちゅうじーん！ 香織と並んでの爆発が落ちこむって、俺は甚大なダメージを受けた。

しかも、マウントポジションみたいに着地したために、身動きが取れない。

さらに、香織は運悪くスカートを穿いていたため、下着が丸見え……。

「何？ 何かおかしい所もある？」

悟られてはならない。なるべく冷静を装わなければならぬ。  
悟られたら、命は……ない。

「い、いや。それよりも香織、一樹達を任せたと言ったはずだが？  
「ちゃんと安全な所に飛ばしたわよ！」でも、それで精神力を使い  
果たして私だけ真っ逆さまよー。」

「そうかよ」

見まい見まいと踏ん張つてきたが、こんなシチュエーションはそう  
そう無い。

ならば思い切り満喫してやるうと、俺は目線だけを下に向けた。  
……なるほど。見れば見るほどに水色のしましまだ。

それに、何でだろう、下着の一部分が濡れてしまっている。

「早く下りやがれ、このバカチン！」

十分に満喫した俺は、いつに放つが、香織はただ一ヤーヤするばかり。

……JRの上無い恐怖だ。

「とりあえずひ、償つて貰おつかしら、下着をガン見したこと」

まさか、悟りっていたのか！？ そんなバカな！

「私の解析【アナライズ】をナメてもうたら困るわ。私があんたに乗つかって、あんたが下着を一度でも見たときから、ずーっと分かつてたのよ？ まつたく……、あんたは『主人様まで口に田で見るくらいに盛りのついたバカ犬なのね』

「うつわい、いいからどいてくれよ、さっきから変な液体が流れていて、Tシャツがぐちょぐちょに濡れてんだよ」

「だから償つて貰うのよ、あんたに欲情し過ぎて私の体がどうにかなつたから、いつそのこと快楽を貪つておかしくなつた体を正常に戻そつてハナシ。『毒を以て毒を制す』って言つてしまよ？」

待てよ、つまり、俺……ところの何か？

「気持ち良くなきや、お仕置きだからね？」

香織が凄い笑顔で顔を近付かせてきた。

「もしかして、怒ってる？」

「ううん、拓真がどんな手段で食べててくれるか楽しみなだけよ

はあ、如月優太くーん、隣のベッド貸してー

しづらへお待ちください

「で、しばらぐじを拠点にしたいと？」

「こ」は如月優太君の家、一階のリビング。大まかな自己紹介を終え、事情を説明した後に、しばらくの間だけ「こ」を生活の拠点としていきたい、と交渉しているところだ。

「俺は優太君を知っている。優太君も俺を知っている。そうだろ？」

「あ、ああ。一応はな」

「家事は手伝うし、子育ても微力ながら手伝う。頼む！」「この世界のために！」

俺がそう言つと、優太は手を突きだし、顔を歪めながら傾げる。

「待て、待つてくれ。この世界のため？ 拓真達が他の世界の人だとということは分かつてたが、一体どういう事だ？」

「それはだな」「

エクスカリバーが喋ると、この場にいる如月一家全員が「うわっ！」と驚きの声を漏らし、ほとんどが目を丸くした。

「剣が、喋った？」

「凄い！ どこでみつけたの？」

「……不思議な剣」

「魔法に通じてる私でもこの魔法は知らないねえ」「

「何かと使えそうな剣ですか？」

「面白そうな剣だよね」

「少し貸してくれないだろうか？」

「どんな魔法でできているの！？」

『もつとしゃべって～！』

上から、優太君、口口さん、ラルカさん、ジョンシカさん、フロルさん、ミヤさん、ミルさん、リコアさん、子供達。

……捌き切れねえ！ 子供達とか、何かわーわーざわやーざわや騒いでたけど、省略するくらいに多い！

「 話を戻すぞ。今、色んな世界に“異次元の歪み”つつうモンスター無限製造機が現れようとしてる。その異次元の歪みを探し出し、ブチ壊すのがコイツらの使命。」

「パラレルワールドって知つていいだろ？」

「ああ、知つている。俺も元は違う世界にいた。」

「ふえ？ おとうさん、ぱらる、わーるじつてなあに？ ……ふえ

……かんじやったよ！」

突然の五歳児、龍樺の登場に、俺の女性陣は発狂、瞬時にざわつかゆうのハーレム状態になつた。

……端から見るのも辛いな。

「かわゆい！ 拓真も良いけど、この子も良い！ 名前はつ！？」

「ふえええええ！？ 龍樺ですつ、ふえええええ！？」

錯乱する龍樺、さらじぎゅーっとする香織たち。とつあえず、ざわく一つとするのを止めさせる。

「パラレルワールドって言つのはね、仮に優太君と口口さんが出会つて、龍樺君が生まれた世界があるとする。それとは別に、優太君が口口さんと出会わずに、君が生まれなかつた世界もある。それを全部合わせてパラレルワールドって言つんだ」

「うん、分かつた！ ありがとう、おにいちゃん……ふえ……またかんじやつたよう」

……わざとじやねえのか？

そつ考えた時、優太君が、口を開いた。

「はあ、また部屋を増やせなきやな……。いいよ、好きなだけ居候してくれよ」

「ありがとう。こんなことに巻き込んで、本当に済まないと困つていい」

まさにその時だった。何者が壁をぶち破り、侵入してきた。

「ちーっす、拓真の首を取りにきました」

「こんばんは、遊びに来ましたよ」

弓を持つてお辞儀する女はびっくりが、男の姿は……やつ、因縁がありすぎる奴に似ていた、否、そのものだった。

「氷原……健悟……」

## 序章 死神と拓真とペッシュク（後書き）

れども、忙しくなるや。

序・上・中・下・終の五話編成で行きますよー。

みじくお願ひします！ EDEXさん、焰野さん！

徐々にピンクくなるのは、気にしない。  
健悟はキャラが違うので、参加しない。そもそもしたら殺される。

香織「二つのハーレムが交わる時、物語が動き出す」。

拓真「おーおー……」

## 上章 死神と妖刀と冥王（前書き）

EDEXさんへ。

色々とすいません！

特にキャラ壊れていたらすいません！

バトルオンラインにするつもりが……。

なるだけ頑張ったので、読んでみてください。  
次回は頑張ります。

## 上章 死神と妖刀と冥王

「ちわーつす、拓真の首を取りに来ました」  
「氷原……健悟」

突然の襲撃か、まさかそっちから来てくれるとはな、『首を取る』か……。

「上等だ。そのケンカ、受けて立つ。だが、今までの俺と」

煌々と真紅に輝く、獄炎の剣【インフェルノ・ソード】を作り出す。手にしている自分ですら熱いと感じるくらいに燃えている。

「悔らないことだな！」

言下、一足で健悟の元に近付き、剣を弾き飛ばして回し蹴りを繰り出す。

向かいの家の壁に激突、ヒビが入る程の威力に繰り出した自分も驚く。

さらにだめ押しの一手、落ちてくる剣を獄炎の剣で弾き、健悟の顔、そのまま横に突き刺す。

……いやあ、死ぬ気で特訓した甲斐があつたね。街中を走り回り、素振り毎日一万回、ハードな筋トレ毎日五セツトと悔しくて、とにかく死に物狂いだった。

今じや健悟と互角、否、それ以上の力を持っている。  
しかし、快進撃もこれまで、不意に紅からの巨大な火炎弾が高速で迫ってくる。

「健悟はこれ以上傷付けさせない！」

だが所詮は炎、獄炎の剣で両断すれば、吸収され、威力と切れ味が増す。

「あくまでも邪魔するんなら、まずはテメエから叩き斬る！」

踵を返し、紅を両断しようとするが……。

「紅に指一本でも触れたら、殺す」

健悟が間に割つて入り、剣で受け止める。当然と言えば当然か。一度距離を取り、体勢を整える。

「何なんだあいつらは、家の壁を破壊しやがって、しかも拓真は目の色変えて突進するしさ、拓真は何者か知ってるんだよな？」

「ああ、氷原健悟と……（解析【アナライズ】）……赤羽紅、二人共同じメンバーで化け物を滅していくみたいだ、特に健悟は俺につちや、いきなり出てきていきなり斬りかかる超危険人物だよ。……はあ、二人同時はやっぱりキツいか……。済まないが、優太君も闘つてくれないか？ 倒すまではしなくて、ただ戦力を分断してくれればそれでいいから」

「ちつ、面倒だな、まあしようがないか、また家を壊されたらたまらないからな」

よしつ、と言つて一人と対峙する。が、直後に、

「地獄に落としてやる」

と聞こえたのは、氣のせいだろつか？

「俺も不本意ながら、戦闘に参加するわ」

そう言つと、優太君は黒い翼をハ本生やし、何処からか剣を呼び出した。

刃だけで150cmを軽く超えそうな大剣を軽々と持ち上げる優太君。

「悪いけど、手加減出来ないからな」

その割にはかなり冷たい笑みを浮かべている……。  
まさか優太君……、最初から手加減するつもり無いんじゃ……。

「！」

健悟の声、だがその声は建物が崩れる轟音で聞こえず、姿は既に存在しない。代わりに、優太君がすがすがしい顔で、

「赤羽紅は任せる！」

と叫び、邪魔なものを全てぶち壊して健悟の元へと突き進んだ。  
……味方であつて良かつた。

そう思つた時だつた。

「よそ見したら、死ぬよ？」

不意に声を聞き、一瞬遅れて火炎弾が炸裂する。  
いくら火属性に耐性があろうとも、不意打ちでは対応しきれない。  
そのまま大きく吹き飛び、壁に激突する。  
激突した音で子供達が泣き、口口さん達があやしている。  
そんな口口さん達と、戸惑うばかりでちつとも闘つてくれない香織

達を別次元の部屋【アナザーディメンジョン・ルーム】へと転送し、辺りの安全を確保する。

「覚悟はできた？ 死ぬ覚悟は

「生憎、女にやられる程ヤワじやないんでね」

「女と思って見縊ると、あつと言つ間に焼け死ぬよ？」

「上等、炎VS焰、どちらが強いか決めようじやないか！ 狂乱の

炎魔神【バーサークイフリート】！」

拳同士をぶつけ合わせ炎を起こし、起こした炎は瞬時に全身を包み鎧と化す。兜には一本の巻き角が生え、鎧には所々炎が迸る。

「泣いても知らねえからな！」

次の瞬間、視界が一瞬だけ赤く染まり、理性が吹き飛び、『破壊』という本能だけが残る。

「…………！」

紅の数cm横にクレーターが出来る。その衝撃で服は吹き飛び、ズボンは所々ズタズタに引き裂かれる。

「女だろうが子供だろうが、この状態じゃ全て破壊対象だ」

そのまま紅に一撃、紅は大きく吹き飛び、住宅を五軒くらい破壊して止まった。

それと同時に矢が三本、放たれる。が、難なく弾き飛ばす。

「まだまだこれからよー」

紅は飛び上がり、次々と矢を射る。

無数の矢が襲いかかる。

が、一瞬で装備したエクスカリバーの一振りで全てがあさつての方向へ飛んでいく。

「なかなかやるわね、でも、ここからが本番よ！」

紅の姿が消え、無量の矢が囮るように現れる。

「まさか、襲つてきたりしないよね？ キングダムハーツじゃないんだし……」

やはり、襲いかかる。畜生、なんでこう悪い予感は当たつてしまつのか！

次々と襲いかかる矢を弾き返す俺。が、ソラやリクのように延々と弾き返すのは出来ない訳で、徐々に喰らい始めていく。足に、腹に、背中に、腕に、次々と刺さつていく。

しかも矢は突き刺さつた後も燃え盛り、身を焦がす。

「ぐううう……、ぐああ……」

遂には動く事もままならなくなり、次々と矢が深々と突き刺さつていぐ。

「これで、どぎめよ！」

突如として紅が正面に現れ、一本の矢を放つ。

避ける足も弾く腕も使えない俺は何も出来ない動かぬ的以外の何者でもなく、放たれた矢は狙い違わず胸に突き刺さる。

そして、断末魔を上げる間も無く矢が内側から爆ぜ、巨大な炎柱を

作り出し、一階をも吹き飛ばした。

炎柱が消えた頃には炎の矢は消え、血がとめどなく出でている。壁に血がべつとりと生々しくついている。おやりく爆ぜた時に血飛び散つたものだらう。

立つ力を失い、床に倒れ伏せる。血溜まりが更に広がっていく。

「ここの技をまともに受けて、立っていた者はいないわ。私の勝ちね

ちくしょひ……。爆ぜた時に胸が心臓ごとふきとんだか……。

……俺、死ぬのかな……。

“……汝、更なる力を求むか”

頭に声が直接響いてくる。うるさくよつて、どこか心地よい……。

俺は心地よさに身を委ねる形で意識を手放した。

俺が次に目を覚ましたのは黒一色の世界だった。

どこまで歩いても暗黒の世界つてくらいに光一つ無い。

うん。ここは優太君のいる死神の世界でも、俺が元いた日常の世界でもない。

じゃあ、ここは何処だ？と思つた時、その疑問に答えるかのようにな、紫色の炎が足元に灯る。一步、また一步と踏み出す度に炎が灯り、道しるべとなってくれる。

数分後、一際大きな炎が灯り、その前に入れるシルエットが浮かぶ。そのシルエットは徐々に色を取り戻していき、十秒後、完全な人の

色を取り戻した。

「お前は誰だ！」「ここはどこなんだ！」

「私は“冥王”ハーデス。この冥界を統べる者なり」

「あー？　いや、待て待て、冥界いいいい！？」

「さよう、起爆矢によつて胸を抉られ、貴様は死んだ。故に貴様はここにいる」

「よ……読まれた？　今、心を読まれたのか！　まさか、優太がお世話になつていて、『主神』ゼウスじゃないんだし。」

「我ここにあり、故に弟がいるのだ」

「あーはいはい、分かりますよ。ハーデスとゼウスは兄弟なんですよね、それは置いといて、『更なる力』ってなんだ」

ハーデスの顔色が変わる。ここからは眞面目な話になるようだ。

「本題に入る。汝、更なる力を求むか」

「型はいいよ、型は。それよりも、なんでそこまで親身になつて力をくれるんだ？」

「我は貴様が氣に入つた。故に貴様の力となるのだ」

「なるほど、しかし俺は胸を抉られ死んだんじゃねえのかよ？」

「無論、生き返らせてやる。地獄にもゼウスがいる天界にも送つてなるものか」

なるほど、優太君の記憶からあらゆる情報を入手したが、間違つてはいないようだな。

「わい、と……ではじょじょ我の試練を受けて貰う」

試練？ 聞いてないよ！ そんなの！」

「まあ、そう言つたな。儀式みたいなものだ。お、けと痛いがな……始めるぞ」

いや、待て、まだ心の準備が！！

そつ心の中で叫んでいたら、ハーテスはいきなり凄まじく恐ろしい顔をして、

「集え、冥界の炎よ 」

と、呪文を唱え始めた。すると、紫色の炎が俺の周りに、現れ、囲み、身を焦がす。

「ぐつ……ぐああ……熱い、苦しい……！ 何がちょっとだ！」

「まあそつ言わさんな……、彼の者に全てを破壊する冥王の力を、全てを焦土に帰す冥王の炎を」とえ賜え

周りを囲む紫色の炎が俺に纏わりつき、灼けつくような痛みを『える。

熱い、これが獄炎、いつも使う炎。とつもなく熱い。

「耐えよ、耐えきった時、貴様は更なる力を手に入れるだろ」

「んな」と言つたつて……つ！ ぐああああ… ぐうう… ああああ！ 热い……、香織、稜、一樹、みんな……！」

意味もなくみんなを思い浮かべる。そつすれば何とか乗り切れる、そんな気がしたからだ。

あれから何分たつただろうか、炎は段々と弱くなり、それから数分後、完全に鎮火したところで、ハーテスが、

「止めえ！ 良くやつた大原拓真、試練を乗り越えし者よ

と言つた。試練をクリアしたようだ。

「ゼヒ、ハア、やつと、か……」

あまりのダメージに精神が追いつかなくなつたのか、そのまま倒れ伏す。

朦朧とする意識の中、会話が聞こえてくる。

「ペルセポネ～！ ペルセポネはいるか！  
「いるわよー！」

あれ？ ペルセポネは11月から2月の4ヶ月間だけ冥界にいるはずじゃ？

「千年経てば色々と変わるものよ」

また読まれた……。凄いな神つてのは。

「ふふふ、この子が大原拓真でしょう？」

「ああ、我的試練を難なく乗り越えた、私はそいつを気に入つたんだ、丁重にもてなせ。最後に地上へ送ることを忘れるなよ」

ペルセポネはテキトーに返事をし、こちらを覗き込む。かなりの美人に覗き込まれているためか、凄くドキドキしている、香織に覗き込まれているのと同じくらいにドキドキする。

「あら、残念。もう思い人がいるのね。でも、味見くらいなら許されるわよね？」

直後、首筋をペロリと舐めた。背筋に電流が流れ、意識が覚醒する。意識が覚醒して、目を見開き、この時に初めてペルセポネをちゃんと見たのだが……。

「うふふ、この様子じゃ、私、惚れられたみたいね……、私って罪な女、うふふふふ」

スッゴい好みの人だった。

スタイルが良くもなく悪くもなく、ちょうどディイ感じで、顔も整っていて、黒で統一された、胸を開けたドレスが高貴さを漂わせながら、大胆さを醸し出し、これぞまさに大人の魅力っていうような女性だった。

「うふふ、なんて罪な人、私をここまで夢中にするなんて……味見くらいで済むかしら？」

急にペルセポネが笑い出す。真理亜並みに怖い。否、それ以上に怖い。

そんなこと思つていたら、ペルセポネにいきなり首輪に吸い付かれた。

「ひやあっ！？」

女々しい悲鳴に更にキコンときたのか、チヨツ、チヨツと音を立てながらどんどん上へと吸いつく位置を変えていく……。  
首筋から頬へ、上がるにつれて、頭が真っ白になる。

「うふふ、何も考えられないのね……。実は私もなの。いいわ、本能のままに唇も奪つてあげる」

ペルセボネはとろんとした目で俺をしばらぐ見つめ、優しく唇を重ねた。が、優しかったのは重ねた時だけで、その後はめちゃくちゃ激しかつた。

前、香織にしたよつて口の中を搔き回される。

唇が離れた後は俺もペルセボネも呼吸が荒く、顔は紅潮し、目は濁っている。

互いの目線が下半身にのびた、まさにその時、彷徨える魂を捌ききつたハーデスが、声を荒げて叫ぶ。

「ペルセボネ、あの剣は……渡されていないじゃないか！　もてなすのもいいが、ちゃんと渡すものを渡して、早く帰してやうなきゃなあ！」

ペルセボネは悪びれる様子も無く、

「もつと食べたかったなあ……、この子食べ応えあるもの。じゃ、この剣をあげるわ」

と言い、剣を生み出した。柄から切つ先まで真っ黒な剣だ。

「なん……だ？」の、真っ黒な剣は

いかん、まだ頭が真っ白だ。

「魔剣ラグナロク。あなたの背中にかかっている聖剣エクスカリバーと対を成す剣よ」

「さあ、その剣を抜け、闇に掲げよ、すれば、貴様は地上へと戻れるだろ?」「

俺はハーテスの言われたとおりに、ラグナロクを抜き放ち、頭上に掲げる。

すると、闇のトンネルが出来上がる。これが……地上へと続く道……。

「また来てね。今度来たら、交わってあげちゃうから」

「現世と冥界はその魔剣ラグナロクで行き来出来るだろ?、わからんことが出来ればいつでも来るがいいだろ?」

一人の言葉を背に、俺は優太君の世界へと戻つていった。

「早く使いこなせるよ!にならんとなあ、大原拓真」

闇のトンネルを抜け、地上、優太君の家に生き返つて最初に聞いた声は健悟の、

「死ね、拓真」

だった。いきなり酷すぎる。

腹が立つたので、正拳突きで弾き飛ばしてやった。

軽くしたつもりだったが、健悟は城壁まで飛んでいき、前方の建

物が衝撃で五十軒くらい吹き飛び、優太君の家が粉々になつた。

「あ、あれ？ 何この力は？ ハーテスの力？」

うん、これはあれだね、チートってやつだね。

「……！ 僕の家がっ！ それに口口達もいない！ 誰がやつた！…

口口さん達は別次元の部屋に移動させたし、家はさつき俺が衝撃で吹つ飛んだから……。

「ごめん、全部俺だ。今元通りにする」

指をパチンと鳴らす。

さつき吹つ飛んだ健悟も、跡形もなく壊れ果てた優太君の家も、壊滅状態の都市も全てが元通りになつた。

……まさかとは思つたが、魔力もチートになつたみたいだ。

「ほら、口口さん達も」

ポンと二つ音と共に、口口さん達がリビングに集結する。

『おとーさん！ 怖かつたよつー。』

「おーよしよし、みんな無事か」

「もちろん、俺が別次元に非難させたからね」

「ええ、拓真さんの空間魔法で傷つかずにすんだんですよー。それより、ユウタさん、私達……」

口口さん達は優太君の腕を取り、足早に一階へ行つた。優太君はこの後、理性を剥ぎ取られ、あちこちに体液をぶちまけるんだろううな。

「ああ、ちょっとタシマ、優太！」

「何ですかもう…せつかくの日に一時をぶち壊すなんて、空氣読めなさすぎです…」

「黙ってくれないか、口汚い毒舌、それよりも紅さん達はどうしてここに…」

「……えっと、ラファロロさんとゼウスさんが友達で、拓真達が来るついでゼウスさんが言つたみたいで、せつかくなので私達も遊びに行こうってラファロロさんが」

さすがは主神、何でもお見通しつてわけか

「つこでに拓真の首を取ろう」と

『平伏せ』

ドコッ、と音を立て、崩れ落ちる健悟。床が衝撃でへしむ……。  
後で直そう……。

「なあ、コイツらも泊めてやつてくれないか？ 絶対に家具が壊れなこよひにするから」

「出来るのか？ そんなことが」

「出来るから言つてるのさ、頼むよ」

「…………。分かった、本当に頼むよ？」

「ふう、とりあえずは万事解決かな？」

「ねえ、ちょっと拓真」

香織が、顔を赤らめながら話しかけてきた。

「私達を異次元の部屋に非難させてくれたのよね？」

「ああ、そうだよ、それがどうかしたか？」

「いや、あの、そのね、そんな拓真に『ほうびとじて一緒にお風呂入つて、背中を流して上げようかな~、って

その気持ちは嬉しいが、目が激しく泳いでいるんだ？

「あはははは！ やうかしら？ わあー わきに入りなさいな！

私達は後から入るからー わあー！」

俺は香織に不信感を感じながら、浴室へと向かった。

上章 死神と妖刀と冥王（後書き）

次回は遂にアレです！

アレって言つたらアレです！

EDEXさんみたいなアレはかけるかな？

## 中章 死神と妻と浴場（前書き）

激ピント注意！

EDEXさん、優太君のキャラクターが崩れてたら本当にすみません。

視点を変える事に挑戦しました。

焰野さんのキャラクターが未だに掴み切れてない、今日この頃……。

すみません！

## 中章 死神と妻と浴場

「……広いとは優太君の記憶で分かっていたが、まさか、これまでとは思わなかつたな……」

それが、初めて浴室を見たときに、自然と出た言葉だつた。  
この浴室、余裕でチヨメチヨメ出来るスペースあるよな……。  
……彼の狙いなのか？

「ま、驚いたつて何も始まらないよな」

とりあえず、頭洗おう。体は香織達が洗つてくれるらしいからね。  
俺の好きだつたシャンプーとボディソープを想像、具現化して、銭湯みたいな浴室の一角でシャワーを浴びた後、頭を洗い出す。  
シャンプーに含まれる柑橘類の微かな香りが鼻腔をくすぐる。  
銭湯か……。いや、ここは銭湯なんかじゃなく如月家の浴場だが、  
あまりの広さに銭湯と間違えてしまう。

「にしても、香織の豪邸にも、こんなでっかい浴場はあるだろ？  
？ 後で頭の中を覗いてみるか」

特殊能力、解析【アナライズ】これは元々、香織の特殊能力なのだが、いつの間にか使いこなしている。ただ、香織と違つて心の中が読めないだけ。

心の中が読めたらどんなに便利なことか、香織の思惑も簡単に見破れるのに……。

その時、突然戸が開く音が聞こえエクスカリバーを装備した後、烈風が吹き荒び金属音が鳴り響く。

間違いない、健悟だ。戦闘狂かよ、コンチクショウ！

「あんたさあ、時と場所を考えようよ  
「関係ない、俺はお前を殺したいんだよ」

俺は健悟を弾き返して、炎を繰り出す。  
が、健悟はいつの間にか真後ろにいて急所を切り裂さかんとしていた。

だが、呆気なくやられる程、ヤツじやない。エクスカリバーで受け止め、弾き返し、ラグナロクの魔斬弾で健悟を吹き飛ばす。  
一瞬だけ苦痛に顔を歪めるが、すぐに冷酷な顔に戻り、目に見えぬ速さで猛進する。

「突っ込むだけじゃ勝てねえよー！」

迫る影に向かつて剣を振るう。  
手応えを感じる事もなく、鮮血も溢れ出ない。どうこう事かと思つた次の瞬間、後ろに気配を感じ振り向いた直後、背中をバツサリと斬られる。

「な……、いつの間に……」

「死線を切り裂いた。諦めろ、お前の命は既に死んでる」

瞬間、鮮血が飛び散り、真っ二つになる。  
健悟は何事も無かつたかのようにな浴場を後にしてた。

「あ～あ。これから起ころであろうウチなイベントの身代わり君  
が……。ま、これで暫くの間は健悟君襲つて来ないからプラマイゼ  
ロか」

俺は指をパチンと指を鳴らし、幻影を黒い粒子に変える。

風呂場に入った瞬間に幻影を作り出し、ソイツにエッチなイベントを全部受けて貰おうと思つたんだが……。コレ、かなり魔力を食うんだよなあ……

でも、健悟君ですら騙せる幻影を作り出せるなんて、ハデスの力って凄いな。

ガチャリ……。

再び戸が開く音。冥炎の追尾弾【ヘル・ファイアミサイル】を作り、留めておく。敵意を感じたら、ぶつ放す！

「どうしたんだ、拓真？ そんなに怖い顔をして」

「なんだ、優太君だったのか。無駄に神経すり減らしたじゃねえか」

留めていた冥炎の追尾弾を消滅させ、作り笑いを見せる。

「いやあ、健悟君が来たのかなって思つてさ……。それにしても、奥様方はどうするのさ？ まだ行為の途中なんだろう？」

「いや、まだしてないよ。口口が『行為の前には身を清めるものだとカオリちゃんが言つてた』つてや、もう直ぐ口口達も来る」

あんの発情女！ 口口さんに変なこと吹き込みやがつて！ あながち間違つてはないんだろ？ けど。

「すいません、こちらのバカが口口さんに変な事を吹き込んだばかりに……」

「いや、良いんだよ、あはははは……」

一人同時に溜め息をついた時、キャツキヤと女の声が聞こえてきた。

「ヤバい、どうしよう！ 香織達が来た！ これ間違いなく濃厚ハーレムピンクになるって！」

「立ってしまったフラグをへし折ることはできない、諦めよつ

優太君は少しも動じず、落ち着き払っている。

「おいいいい！ 少しは抗おうとは思わないのか」

「思わない。本当に彼女達の事を考えたら、出来ないはずだ」

「はあ、確かにそうだよな、一理ある。俺はアイツらの事が好きだ。だから抗う事を止める、無論、必要最低限の忍耐はするがな」

そう言つと、優太君は苦笑し、

「当たり前だ。俺達は健全な男の子であつて、獸じやない」

と言つた。ま、そつだよな、と思い、戸に向き合つ。

遂に禁断の扉が開かれるのだ、濃厚ハーレムピンクの扉が……。

『たくまあああ！』

俺は精神崩壊を覚悟した。

拓真 side out

優太 side e

『ゆうたあああ』

妻たちの甘える声が、いつか聴いたコーラスを奏でる。あの時は、六人だつたがリュアやHミルが加わって、今や八人になつてゐる……、今更だけど。

「体を清めた方がより感じやすくなるとカオリから聞いた」「だつたらみんなで体を洗い合おうー。」

リュアやHミルも気合い十分だ。近くにあるスポンジを取り、体を洗い始める。  
始める、のだが……。

「よい、しょ……、んっ……」

「ふう、はあ……」

「う……あふ、ふあ……」

「えへへ……あふ……」

デジャヴを感じる……。柔らかいナードが擦る度に当たるのはやつぱりワザとなのか？

「あつ、ふあつ……」

「あ……うう……」

「…………ひあうう……」

「はあ……ひう……」

何だり……、いつも増して過激なのは、香織や拓真がいるからか？

「ねえみんな、私達まだ清められてないよね？」

「それなら、ユウタさんに抱きついて泡まみれになれば、良いと思  
うよ～」

「あ、なるほど、良い考えね」

「うむ、良い考えだな」

「流石ジョシカ、冴えてるう」

「大胆ですねえ、みんな雌豹みたいです」

「…………（口クリ）」

「せーのでギュウツとするんだよ！ セーのっ！」

上からロロ、ジョシカ、ユナ、エミル、ミヤ、フロル、ラル、リュ  
アだ。

そして、リュアがそう言つと皆一斉に抱きついて来る。尋めくよう  
に動くナニかや艶めかしい声が理性崩壊を速まらせる。  
俺はこれでも健全な男の子であつて、このシチュエーションは正直  
辛い。

「ねえ、ゴウタのが凄い事になつてるよー。」

ジョシカが目敏く俺の息子の変化を見取る。  
何しろ限界が近いんだ。

「はあ、こんなのが入つたら私……、早く入れてよぅ……」

ブチッ！

遂に理性が限界を迎える、崩れ落ちた。

優太君が遂に我慢できずにやりだした。

口口ちゃんが喘ぎ、嬌声を上げてる。

「ねえ、優太君もやり始めたんだし、私達もはじめようよ、えっち  
「そうよ、ダーリン、私達、もうイキそうなのよお……」  
「おにいちゃん、私の中に早く入れてえ……」

そして、こちらは首筋を舐められ、唇も奪われ、耳元で淫語のオン  
パレードである。

理性と言ひ名のダムが決壊するのは時間の問題だ。

背中を流した瞬間、稜が抱きつき、次いで香織、真理亜まで抱きつ  
いてきて、軽いハーレム状態だ。

今のところ、桜と愛子は顔を赤らめてこちらをガン見しているだけ  
だが、いつ発情して襲つて来るか分からぬ、愛子なんか下半身を  
いじくつてる。

そういう類は嫌いじゃなかつたのか愛子……。

「うーん、ダーリンはもっと直接的なコトをしないと感じてくれな  
いみたいね」

そんな事考えている間にも真理亜がアレを口に含む。直後、頭が真  
っ白になり下半身に違和感を感じる。  
色々な意味でもうダメだと思った時、

「今ツ！」

一陣の氷粒を纏つた旋風が吹き荒れ、香織達を吹き飛ばす。  
「どうやら助けてくれたみたいだ。

「あ、ありがとう、愛子出来るなら、もう少し早く助けて欲しかつたな」

「ふふふ……、そうね」

……。今、愛子が少しだけ笑顔を見せた……気がする。

「……たまに見せる笑顔は最大の武器と聞いた」

「ふーん、誰から?」

「母親から」

「母親は駆け引きが上手なんだね」

「無口なだけ。でも」

愛子は無表情で跨り、これまた無表情で、

「とても大胆だった」

と言い、更に

「母は言つた、女は罵を張り、男は罵に掛かり弄ばれる。あなたも  
その内の一人」

と言い、背、といつかお尻を向ける。

「母はいつも言つた、ON/OFFの切り替えが出来ない女は失敗  
すると」

「つまり、今のあなたは狩獵モードONって訳ですか?」

愛子は返事の代わりにアレを口に含む。

さつきから晴れてきた意識が再び白く濁り、何か得体の知れないモノがこみ上げてくる。

「あい、こ……今すぐ止める、このままじゃ、何かまずい！」

愛子は一いちを一警、口元を釣り上げた後、すぐに続きを始める。

「ちょ……っ！ 待て！ うくああああ！」

抗議をしようとしたが時既に遅し。何かが勢いよく吹き出している。愛子はその何かを喉を鳴らしながら呑み干していく。

「んぐ……んぐ……、ふあ、びつだつた？ 口脣内に出した気持ちは？ 気持ち良かつたでしょ？ 何しろ生殖行動をし終えた後に訪れる快楽は、人間の感じ得る快楽の中で一番気持ち良いとされているから」

濁つた意識の中で、愛子の言葉が頭でこだまする。

「私は過去、父親に犯された。その時から私は男を憎み、呪つた。そして復讐対象として見た。あなたも一樹も海斗も屈辱を与えるつもりだった。しかし、あなた達三人は違つた。その中でもあなたは特別だった。この意味分かる？ 分からないなら、体に教えてあげる」

禁則事項です

愛子が雌豹になつてから、どれだけの時間が経つただろうか。俺の

意識が完全に覚醒したときには、愛子、香織、真理亜と稜、更には桜まで完全に気絶し、彼女達から白い何かが溢れ出ている。その光景で俺は全てを理解し、

「絶望したッ！ 我を失つてまで生殖活動をする愚かな自分に絶望したッ！」

と言つてうずくまつた。

「まあまあ、彼女達が望んだ事だし……、その内慣れるや、まずは体を洗おうか」

「うう、罪を犯した俺を励ましてくれるか、彼女達を犯した俺を励ましてくれるか！」

優太君はマイナスオーラ全開の俺を励ましてくれる。すぐさま膝にしがみつき、涙目で見上げた。我ながらキモいと思った瞬間である。

「俺も最初の頃は自己嫌悪に襲われたさ、恥じる事はない」

その後も励まし合いながら体を洗い、しばらくして就寝した。

翌日、各所に引っ付く香織達を無理矢理引っ剥がしリビングに行くと、仲良く談笑していた口口さん達と赤羽紅がいた。が、内容がぶつ飛んでいた。

「ケンゴ君の事、どう思ってるの？」

「と、友達以上恋人未満ってどこかしら」

声が裏返っている、きっと恋人同士だろう。

健悟が羨ましい、純粋な子が彼女で。じつは昨晩も犯されかけてんだぞ。

「初体験はまだなの？」

「じつ、この年で交わる方がおかしいと思つわ」

純粋で初心。はあ、健悟が妬ましいねえ「コンチクショウ」。

「ちなみに年はいくつなのかな？」

「十六よ」

「タクマさんも十六よ？」

「あの人は呪われているのよ」

呪われているは無いだろ、「うーー更に胸を抉るつもりか！」

「じゃあ私から質問、子供を育てるのは大変？」

紅さんの質問に、口々さんはぶんぶんと首を振り、

『全然！』

と、口を揃えていった。

「むしろ、日々の成長に驚かされ、泣かされるばかりだ」

「うにゅー、子供はいいよー！」

「早くやっちゃん」と良いですー。」

「……誘惑の仕方……知る？」

「え、あ、あうあうあう……」

口々さん達からの連続口撃に紅さんはボンッと爆発し、頭を回して、

顔を真っ赤に染めながら、

「うわああああん！」

と、泣きながら家を飛び出していった。

「あははは……、その話題なら香織達の方が弾むぞ？」

「うわつ！ いつの間にそこにいたですか？」

「ステルス、気配を完全に消す力。俺の場合長時間の使用は出来ません。更に、かなりの達人には意味がありません。あしからず」

「へえ、凄いんだねえ」

話が盛り上がった所で、優太君が一階から下りてきた。子供達も一緒だ。

「おはよ、みんな」

『おはよ、ユウタ！』

0・1秒の誤差さえ無くぴたりと返す妻達。毎日の日課もここまでくると恐ろしいな……。

「おはよ、拓真。昨夜は寝られたかい？」

「全然、ベッドの寝心地云々以前に、女達が襲つて来るから……。そう言う君は？」

「三時間寝れた。おかげでまだ眠い。ふああ……、お互い腰を鍛えた方が良さそうだな」

二人同時に大きなあくびをし、俺は前から行きたかった、『ギルド』と言つものに行くことを提案する。

優太君は清々しい顔で、

「さうだな、俺も子育てや営みに忙しくて最近行つてないからな」と、了承してくれた。

一人は服を着替え、ロロさんお手製の最高に美味しい飯を食つた後にギルドへと向かつた。

大惨事が起ることも知らずに。

## 下章 死神とギルドと呪み 前編（前書き）

やりたい事全部やってみたら、一萬文字を突破しました。  
ので、前後編に分けます。

## 下章 死神とギルドと亞み 前編

「これまた優太君の記憶から抜き取つたものだが、ここはグリア大陸のロームラルカ国という王国らしい。その城下町のある街道にて

「お前、何で生きてるんだ、あの時は確実に死線を切り裂いた筈」「あの時テメエが斬つたのは幻影だよ、もし本物を切り裂いたとしても、俺は冥王ハデスの名の下に力を授けられ、現世に蘇る!」

小さな戦火が起ころうとしていた。

「なら、何度でも切り裂くだけだ」

「ナメるな! 今度はテメエが死ぬ番だ!」

健悟が突進し、俺もエクスカリバーを装備して立ち向かう。互いの剣が首を刎ねようとした、まさにその時、とてつもないプレッシャーが俺と健悟を襲い、二つの剣をピタリと止める。

「おい、ここで騒ぎになつたら……。分かつていいよな?」

優太君の殺氣を含む声、ゆっくりと優太君のいる方向を見れば、なんと四対の黒い翼を生やしているじゃないか!

こんな状態で暴れられでもしたら、あつといつ間に冥界送りだ。健悟は地獄へ直行するんだろうけど。

俺はエクスカリバーを光の粒子にし、健悟の剣を吹つ飛ばしてから許しを請う。

「はい、存じております。健悟共々重々承知でありますれば、もう

「一度と同じ過ちは繰り返さぬ所存。ですからその翼をどうかお納め下され」

「はあ？」

未だに現状が呑み込めないバカに今、何をすべきか小声で言つてやる。

（ほら、お前も地獄へ直行したくなれば、停戦協定を結ぶことだ。お前も分かるだろ？ 刃を交えたお前ならあいつの恐ろしさが）  
（ふざけるな、あの時は後一歩で殺せたんだ、次は殺す）

「……ま、いいや、めんどくさい。ギルドに行くぞ！」

優太君はいがみ合つ俺と健悟を無視して、ギルドへと続く道を進んでいった。

「覚えていろ、いつかお前を殺す！」

「殺してみろ、ハーデスの名の下に現世へと蘇り、必ず復讐するからな！」

その後、なんやかんやピンクな事件も起きながら、なんとかギルドに着くのであった。

「はあ、やつと着いた。エリクサーを創造しなきやな。体力も魔力も精神力も全部奪つていったもん。なあ、真理亜」「ふふふ、『こちそうさま。なかなか斬新だつたわよ？ 真っ白な愛と一緒に貰う魔力は、もう格別だつたわ……。もっと頂戴な」

真理亜は正面に立ち、胸をムニユンと持ち上げ、胸の谷間を強調す

るといつ、よくビキニ着たピチチの姉さんがおねだりする時に使う、悪魔のように艶めかしいセクシーポーズを繰り出してきた。因みに今の服装は、かなり丈が小さなタンクトップ（ブラ付けてない）と下着にしか見えない丈の短すぎるズボン（後に聞いたところ下着だった）、それには申し訳程度にシースルーのヒラヒラ、スカート？…………と肌を隠す気が毛頭にも感じられない服装、と言つたところか。

大概の人は折れてしまうのだが、……俺だつて折れてしまいなかつたんだが、折れてしまつたらエリクサーを創造する気力を奪われてしまつだらうから、離せない目線を無理矢理離しエリクサーを創造して、使用する。

見る見るうちに力が湧き、すっかり生氣を取り戻した俺は優太君に近づき、

「さあ、早く受注しようぜ！」

と急かし、なんとか真理亜の誘惑から逃れた。

……据え膳食わぬは男の恥？ そんなこと知るか。

目に見えて落ち込む真理亜が可哀想に見えてきたので、

「じめん。真理亜。今は少しでも早く戦いたいんだよ、終わつたらなんでもしてあげるから」

と声を掛ける。真理亜は見る見るうちに元気になり、遂にはぐふふふふと笑い出した。

……後にコレが原因で嫌と言つほど体液を搾り取られたのは別の話。

「ギルドは初めてですか？」

「ああ、そうだけど優太君からこここの記憶を抜き取ったから説明は大丈夫だよ。登録用紙に名前を書けばいいんだろ？　こここの字書きなさいけど」

「は、はい……そうですが」

「ほらほら、みんなも来てよ。一人ずつじや時間がかかりすぎるので」

「登録が完了しました。代表として“漆黒の暗殺者”ユウタ・キサラギ様、今回はどのようなクエストを受注されますか？」

「じゃあ、今回は気軽に」

「Sランクを見せてくれない？」

この場にいる優太君以外のみんな、口口さん、ミーノ姉妹、健悟、紅さん、稜、香織、真理亜、愛子、桜が「はあ！？」と言つて呆れた。

「ちょっと……それはいくらなんでもそれは無謀かと」

「そうよ、拓真！　ここは大人しくSランクを受けるべきよ！」

「そうでもないよ？　優太君は本気を出せば、彼を上回る奴は大陸どころか世界中探し回つてもいないよ。ね、優太君。それに、既にSランクなんだから、Sランクなんて楽勝でしょ？」

優太君は目に見えて狼狽えている。

まあ当然か、これを知つてるのは本人と優太君が隊長を勤める突撃部隊の人達だけだからな。

「まあ、驚くな。特殊能力、解読【アナライズ】で優太君の記憶から情報を入手したから。俺は優太君の記憶から、この世界の全てを見る事ができる！　と言つた方が分かりやすいか？」

みんなポカーンとしている。そりや当然か、スケールがデカすぎるもんな。

……と言つても、香織は「それ、元々私の能力でしょ！」と騒いでいたが。

暫しの沈黙、破つたのはミーノ姉妹の姉、フロルである。

「ん、なんだか分からぬけど、凄い能力なんですね」「そゆこと。じゃ、受け付けの人、S級クエストよろしく「はあ……、こちらになります」

「ん！」と音を立て、大きく表紙に「S」と書かれたファイルがカウンターに半分ほつぽりだす感じで置かれた。

俺は早速そのファイルを開き、何があるか確認した。  
何々……。おつ、受注するならこれらの中か？

1・氷狼を百体討伐せよ。  
フェンリル討伐クエスト。

いや、雑魚が何匹集まろうが、雑魚は雑魚だろう。

2・手負いの古代人形を討伐せよ。  
ゴーレム討伐クエスト。

傷を負つた敵など眼中にないわ。

3・大型の半鳥妖女を十五体討伐せよ。  
ハイペイ討伐クエスト。

……っ！ 人間に酷似している！ コイツを斬れと言うのか！ なるべく避けたい所だ。

4・生ける屍を二十体討伐せよ。

ゾンビやらグールなどのアンティックモンスターを討伐するクエスト。  
焼き払えば済む話だろ？

……、あんまり口クなクエスト無いなあ……。  
とつあえず、3を受注することにした。

「よし、ハーピィ討伐のクエストを受注しよう」

「はあ～、わかりました。場所はキルア山、期限は十日間です。まあ、せいぜい頑張ってくださいね。それと、そのクエストなら数日前にトラップマスターどじゅう？ 使い、ハンマー使いと鉤爪使いが受注しましたが、まだ帰還してません」

「晃弥と美由紀か……」

「仁富晃弥に奥島美由紀、か。一樹に海斗も見かけないなと思ったら……、まあいいや。報告を楽しみに待つてなよ。優太君、転移お願い！」

そう言つが早いが、魔法陣が現れ、みんなを取り囮む。その後、気づいたら、山のふもとについていた。

「拓真さん、拓真さん！ この看板に『キルア山登山口』って書いてありますよ！」

桜の言つ通り、森に一ヶ所ポツカリと開いた茂みの前に、

『キルア山登山口』

と書かれてある看板が無造作に置かれていた。

「……やつぱり、登るしかないのか」

「そうみたいだね。ところで口口さん、ミーノ姉妹は王宮騎士隊に入っているみたいだけど、君は騎士隊どこのか、仕事にすら入っていないね。……戦えるのか？」

「失礼な！　てい！」

口口さんが手を突き出すと、氷の飛礫が現れ、狙い違わず看板に当たる。すぐさま看板が凍り付き、パリーンと軽快な音を立てながら砕け散る。

相当強力な氷の飛礫みたいだ。

「どう？　凄いでしょ？」

「おやまあ、こりゃ大層な魔法なことで」

だが、俺の炎にや勝てないがな。

「！」託宣はいい、早く登るぞ」

その健悟の一言により、一同は茂みの中に入つて行つたのだった。

ふう、さすがはハーピィの住まい、と言つたどこのか。  
進めば魔物が現れ、襲つてくる。

その度に、石飛礫や氷の飛礫、空気の塊とか烈火の飛刃、さらに健悟や優太君が剣や鎌で八つ裂きにしていく。

そんな無限ループが三時間も続き、もう山頂が見えてもいいんじやないかと思ははじめた時だ。

「はあ、はあ、流石はS級クエストと言つたどこのか。斬つても斬

つても埒が明かない」「

「おやおや、健悟君ともあれいつ者が直ぐに音を上げるとは、情けないねえ」

「おい、騒ぎを起しそうなよ、いつモンスターが出る」「

「キヤアアアアアー！！！」

女性陣の悲鳴が辺りに轟く。慌てて振り向くが、土煙が舞つばかりだった。

「！」怖かつたです、拓真さん…」

「……今の、間違いなくハーピイ」「

ただ、愛子と桜は無事だった。恐らくハーピイの考えは、胸の無い女は女じゃない、ということなのだろう。

ミーノ姉妹が連れ去れたのは、『萌え』がわかるハーピイが紛れているのだろう。

「お前らだけでも無事で良かった。愛子、桜

「……ええ、あなたこそ」

「でも、香織さんや真理亜さん、稜ちゃんが……」

心配するな、と言ひしと抱きしめる。だが、後ろで憤激する人が二人…。

「絶対に殺す！」

「いつのこと空間」と切り裂く…

一人はかなり禍々しいオーラを放っている……。このままだと本当に殺しかねないため、愛子の技、静寂の水を繰り出した。

見事なまでに怒りが消え去り、話し合ひが出来るような状態にまで回復した。

「わいと、ロロロロヤリーノ姉妹、紅さんと香織達まで連れ去られたが、心配する事はない。なぜなら」

現在、俺達は断崖絶壁を上昇中である。  
まあ、健悟君は翼なんて生えないとひつし、レジーネーションでテキトーに浮かせてやる。

（……心も体も一つになる感覚、【レジーネ】持ち良ことがあるのかしら……？）

（無いです！　えつちとはまた違う快樂です！　凄いです、また一つ官能的な欲望が満たされました！　しあわせ……）

愛子と桜にはこれ以上危険が及ばないよう魂の架け橋【スピリットリンク】で一つになっている訳だが……、一種のエクスタシー状態になつてゐるみたいだ……何か変な気持ち……。

それはそれとして、俺達は終始無言で断崖絶壁を飛び続けた。  
そのうちに長い間続いた断崖絶壁は終わり、そこで俺は

「うう……そんなことしていい訳？」

「直に愚かな男共がくるわ、それまでは少しづつ貴女達の精氣を奪つていくわ」

香織達と唇を重ねたり、抱き合つたり、中には性行為「しき」とをしているハーピィがいた。

「紅ツ！」

「ロロ、ラル、フロル！」

今にも飛び出しそうな二人を裏拳で牽制する。あ、健悟は動けないから意味ないんだった。

「急かさずとも口口さんやミーノ姉妹、紅さんは助け出す。落ち着け」

二人が落ち着いたのを確認し、さつきから発動している不死鳥の翼【フェニックスウイング】を羽ばたかせ、ゆっくりと着地する。それをきっかけに、健悟や優太君が着地する。

「殿方が訪れましたわよ！」

「え！？」

それまで女から精気を少しづつ啜つていたハーピイ達の目が輝き、香織達をパッと離して一瞬で人間に擬態した後、向かって来る。今の今まで精気を啜られていた香織達はパタリと倒れ、息を荒くしている。

ハーピイ達はすぐさま俺や健悟や優太君を囲み、王宮でよく見るお辞儀をし、真ん中のハーピイが前に出て俺の前でくるりと一回転した後、いきなり手を握るもんだから思わず後ずさりしてしまう。情けない。

「ようこそ！　若草の園へ！　私が代表のエリイです、以後お見知り置きを！」

身長はだいたい180cmくらいだろうか？　茶髪で童顔、体つきは華奢、でも胸は大きいハーピイの代表、エリイは目を輝かせる。こちらも紹介しなきゃいけないだろ？

「あ、ああ……俺は拓真、じじじやタクマ・オオハラか。あちらは優太君に健悟君だ」

「はい！ タクマさんにコウタさん、それにケンゴさんですね！」

ハーピィの代表、エリイはそれぞれに笑顔を振り撒き、俺や優太君健悟は知らんが、とにかくドキドキさせた。

「さあ、何なりとお申し付けください！ 私達は大いなる風の使い手、風は自由に姿形を変え、きっと貴方達のご希望に添えられるかと思します！」

「いや、そうじゃないんだ。俺達は」

俺がそう言つた途端、エリイの顔から笑顔が消え、冷酷な笑みを浮かべ、更には擬態も解いて、完全に妖鳥と化した姿になった。

「またですか。何故私たちを付け狙うのか、下賤な人間のする事は分かりませんね」

言下、鋭い光が胸に向かつて輝き、そのまま貫いた。  
無論、こんなことされたら間違いなく死ぬだろ。

しかし、ハデスの試練をクリアし、契約を結んだ俺にとつて胸を貫かれることは蚊が血を吸うのと同義であるため、そのまま引き抜きたちまち貫かれて開いた穴が塞がる。

しかも、エリイの手に付いているはずの鮮血は付いておらず、エリイはただただ言葉を失うばかり。

「冥王の名の下に、俺は不死身となつた。死なないってことは、君達に勝ち田は無いって事だよね。俺だって無駄な殺生はしたくない。そこで提案、木刀同士で一騎打ちをしようじゃないか。どちらかが『参った』と言うまで、もしくは体が動けなくなるかしたら試合終

了。俺が勝てば捕虜の解放及びこの地からの撤退、エリイが勝てば俺達三人を好きに扱う権利が与えられる。君達は男と交わり子孫を増やしたいんだろ？ だったら条件は妥当なはずだぜ？」

しかし、エリイは実に見下した目線で、

「げ、下賤な人間なんかの交渉など、受けたまりますか！」

と言った。めんどくせえ、なんとしても一騎打ちに持ち越さなきや、作戦も何もなくなってしまう！ 俺は背中を向けて帰つていこうとするエリイを挑発して戦闘意欲を高めようと試みた。

「ほお、逃げるのか。確かに俺は普通の人間とは違う、だが人間。お前は下賤な人間君に何もせずに負けるつてことだよな？」

エリイの動きが止まる。数秒後、いきなり振り返り手を突き出す。木刀をよこせ、と言う意味だろう。

俺はその近くに木刀を突き刺し、「GET IT！」と某ゲームの独 竜が如く叫ぶ。

エリイはその木刀を掴み取り、構える。指の間に木刀を挟み込むのはハーピィ独特の構え方だろうか？

「良いぜえ、PARTYの始まりだ！！」

これまた某ゲームの独 竜が如く叫び、突進する。

一瞬でエリイの真後ろに移動、首筋に峰打ちを叩き込もうとした直後、一瞬でエリイが消え去り、峰打ちは空振りに終わつた。辺りを見回しているとき、上から笑い声が聞こえ、見上げて見ると案の定エリイが高飛車な感じに笑つていた。

「オーホツホツホ！ 私は鳥人であるが故に、翼を使いますが、よもや異論はございませんよね？」

「上等。俺も一刀流であるが故に、一本の木刀で戦う。よもや異論はないな？」

そう言つが早いか、一本目の木刀を創造する。

「剣が一本増えたといひでなにも変わりませんわ」

「一刀流ナメてると、痛い目見るぜ！」

エリイは先程のセリフを鼻で笑い、高速回転しながら急降下。地面スレスレで横薙ぎの一太刀を繰り出す。  
それは地面を削る程に強烈で、避けたはずの俺でさえ吹き飛ばされる位に凄まじいものだった。

「！」のままじや落ちるか、仕方ない。不死鳥の翼【フェニックスウイング】…

先程も発動した不死鳥の翼を再び発動。

背中から炎の翼が現れ、急上昇、日輪と重なり翼を広げる。その姿はまさに不死鳥だったと言う。

翼をはためかせ華麗に着地し、一本の木刀を構え直す。

「ふん、下賤な人間の割には随分やりますわね」

「ふん、まだまだこれからだ！」

言下、一瞬でエリイの目の前に近づき、足払い、ミドルキック、回し蹴り、蹴り上げ、踵落としを反撃する間も与えず連続で繰り出し、ファニッシュとして、一度打ち上げてから地面に思い切り叩き付ける、富本流剣技、秘式五ノ型『七花八裂』を繰り出した。峰打

ちで。

それでも少しの間は動けないだろ？と思つていたが、さすがは鳥人、あまり変化はない。膝についた砂を払つた後、

「和解いたしましょ？」

とこつこつ笑つて近づいてきた。

「ハーピィには和解する時、キスをするといつ習慣がありますの、私と甘い口付けを交わせば和解は成立。皆さんと皆さんに関係する人達は返してあげますわ」

「その言葉に偽りは無いだろ？な！？」

「！？ わ、私を疑うのですか？ ひどいです……」

うつ……、エリイが心臓悲しそうな顔をした後、しゃがみ込み泣き出した。いついつ時どいたらいののか？

「おーいもしもー、エリイさん、もしもー！」

俺はそう言いながら徐々にエリイさんに近づく。エリイさんのすぐ近くに行くと、エリイさんが膝にしがみついてきた。人間に擬態して。

「うううう……」

「な、泣かないでくれ、エリイさん、俺が悪かった、俺に何か出来ることは無いか？」

「ならば、口付けを交わして下さい甘くて情熱的なキスを、私にください」

俺は「分かった」と言い、エリイさんを立たせた後ぎゅっと抱きし

め、軽く唇を重ねる、はずだったが、エリイさんは重ねた直後に舌を入れ、更には体重をかけて胸を押し付けてくるなど、色々な所で誘惑した。

遂には誘惑に負け、自分から舌を入れてエリイさんの口内をめちゃくちゃに搔き回したり、胸を揉みしだくなど、色々とえっちなことをし始める。

互いの唇から漏れる、熱い呼吸が顔にかかり、互いの唾液が口内を駆け巡る。

あともう少しで何かが弾け飛ぶ、と思ったその時、急に力が抜ける。結果、エリイさんの胸に顔を埋める形になった。

「オーホッホッホ！ やっぱり男はバカな生き物ですわね！」

言下、俺は粒子となつてエリイさんに取り込まれた。

「拓真！」

「拓真を……返せ！」

「拓真さんを何処にやつたんですか！！」

俺が吸收する際、強制的に魂の架け橋が解除されたのだろう、愛子と桜、それに遠くから優太君が叫んでいる。

「オーホッホッホ！ タクマは取り込んであげたわ！ 少し色氣を振り撒けば男はすぐに食いつき、少し涙を流せばすぐに騙される。全く、これ以上にバカな生き物は存在するのかしら？ でも――」

エリイは突然、顔を赤らめくねくねし始めた。

「でも、ここまで下半身がムズムズして、ドキドキが止まらないの

は句でだらつ……、はあ、ドキドキが……上まらない……。「

エリイはくねくねと動きながら「ああん」とか「はあん」などと嬌声をあげている。

「ハアハア、凄くドキドキする、まるで何かが体を突き破るような……、くわ、うー、あああああっ！」

次の瞬間、エリイの背中から純白で巨大な翼が生え、恍惚とした表情になる。

仲間達のざわめきが起じる最中、エリイはとてもアブナイ笑顔で、「力が漲つてくる……、それに比例するよひにタクマの体が欲しくなっていく……ああ、タクマ！」

と言つてこるので、わざから発動していたステルスを解き、後ろから抱きついて、

「呼んだかい？」

と言つてみる。面白いくらいにピクンとなり、無性にイタズラしたくなつた俺は、うなじに吸い付き、たわわと揺れる胸を揉みしだく。艶やかな声を出し始め、しばらくしない内に崩れ落ちそうになる。俺はそれをなんとか支え、立たせる。

「はあ、はあ、タクマ様あ、私もう準備は万端なんですので、早くしてくくださいよお」

エリイは甘えるようにねだつてくる。しかし、まだ行為をするわけにはいかない。まだ“あの言葉”をエリイの口から聞いてない。

「でもなあ、まだ君ひまつて貰わなきゃいけない言葉があるはずなんだけどなあ？」

エリイのよく育った果実、そのへたにあたる部分をクリクリと摘んでやる。すぐにエリイは、

「参りましたあ！ 私の負けで、いいですから！ 焦らさずに入れてくれださい！」

と負けを認め、さりにねだつてくれる。  
そろそろ、理性なんかも限界……。

後編へ続く

下章 死神とギルドと呪み 後編（前書き）

後になつていいくにつれて、グダクダになつていきます。

もしかしたら、キャラクターが……。

「はあ、はあ……タクマ様のが私の中を、駆け巡っていますわ……」

で、エリイに十分余韻を楽しんでもらった所で、沈黙の水を発動、俺とエリイの欲情やら何やらをリセットし、話し合いを始める。

「さてと、約束通り捕虜の解放とこの地からの撤退、やつて貰おうかな」

「はい！ タクマ様のお願いなら何なりと！」

そう言つた次の瞬間、エリイの後ろに山積みにされた人達が突如として現れた。

「よし、優太君、やつと出番だよ、この人達をギルドの前に転送してくれないかな？」

「ハイハイ、任せてください」

優太君は転送魔法の魔法陣を展開し始めた。

かなりの人数だし、やっぱり時間が掛かるか。

「えーっと、じゃあ健悟は晃弥君達の搜索に当たってくれない？」

「言われなくとも」

その時、一体のハーピィが「それならこいつです」と言い、飛んで行く。それについて行くよつに健悟は生い茂る木々の中に消えていった。

「タクマ様、私、貴方に一生ついて行つて良いですか？」

「え、ああ。でもさ」

“君は”と言いかけた時、エリイは脣に人差し指を押し当てる。黙らせる。つぐづぐドキドキさせるなあ、コンチクショウー。

「私の」とは、エリイちゃんとお呼びくださいまし、タクマ様！」

エリイは満面の笑みを見せる。何も裏のない、純粹な笑顔。あまりの恥ずかしさに顔を赤らめ、背けてしまつ。

「お、おお。エリイちゃんはハーピィの代表じゃ無かつたの？」  
「その点は大丈夫ですわ、マリイちゃんに任せましたから」「マリイちゃん？」

その時、一樹や海斗を足で掻んでいるハーピィがこちらに飛んできた。

「ちいーす！ エリイちゃん、男の子一人連れてきたよーー！」  
「お疲れ様です」

降りてきたのは、身長約190cmで青い髪、エリイとは違い、ナイスバディな女の子だった。

「この子がマリイちゃん？」

「およ？ 私はサリイちゃんですよ？ エリイちゃんの姉貴をやつてます。それにしても、君がエリイちゃんを射止めたタクマ君だね？」

……す、凄く情報が早いなあ、しかも射止めたって……。

そう想つてゐる間にも、ジロジロとサソイが見てくる。

「へえ、さすがは万年処女を堕としただけあって、見ただけでムラムラしてへるよ」

万年処女って……、どんなだけ初心なんだらう。

「それよつもさあ……、キスしていい? あつがとう!」

「ふあ……、私ルールその一、即答出来なければYEUと取るつ。それにしても、タクマ君ムラムラしてゐるね? こんなになつひやつて……そのムラムラに任せてしまつよー!」

「いや、ちゅつと……」「ねえ、じゅ? うん、さうひや」「ねえ、じゅ? うん、さうだね」

またしても有無を測わさず押し倒される。

「ねえ、こんなに求めていいるんだかひつと、心えてあげよう」「あ……うそ、そうだね」

俺は「もう、どうでもなれ!」と咳き、何気に入っていた水色の下着、その妙に膨らんでる所を指で優しく擦つてみる。

「うあん! きたあ!」「さりいは嬌声を上げる。下着の湿り気が水気に変わる。

その嬌声や水氣で理性が何処かへ吹き飛んだ俺は、擦る勢いをさらり激しくしてこぐ。

「あ、あ、す、せきこつ……よ……」

サリイの嬌声が激しくなつていて、微かに残っていた、最後の理性が吹き飛び、そして……。

ちょっと待ってね

はい、またやつてしましました。

「さすがタクマ様、サリイお姉様もマコトちゃんも独り占めするなんで！」

マリイは先代リーダーであり、姉でもあるエリイに報告すると言つ名田で、エリイに別れの挨拶をしに来たのだが、そこで偶然サリイと俺の交尾を田撃しつづけ。『じらつの有様つてわけだ。

「いみんな、マコト。せっかくのリーダーをこんな形で潰しちゃって」

「こ、良いんです。エリイお姉ちゃんもサリイお姉ちゃんも夢中になる人がどんな人か食べてみたくなつて……。メアリーさんに代表をお任せしてまで来たかいがありました」

赤い髪に青い田をしてくる、身長160cmくらいでスレンダーな体つきの眼鏡つ娘、マリイは田に涙を浮かべて答えてくれた。  
……、僥幸する。いつの間にかもらい泣きして、罪悪感にも飲み込まれて……。

「いめんよおおおー、こんなイモムシのためなんかに戻ってきてくれたのに、畠をこなになるまで汚してしまって、いめんよ、生まれたのに、畠をこなになるまで汚してしまって、いめんよ、生ま

れてきて『めんよおおお…』

いつの間にか泣いていた。今なら飛び降り自殺も出来るぐらいにネガティブシンキングな自分をアリイは聖母マリアが如く抱きしめ、ほっぺにチューをした。

「あ、ありがとう、マリイちゃん……」

「拓真！捕虜の転送、完了したぞ！」

「搜索が終わつたぞ」

精神状態も安定し、ちょうど二人の仕事も終わつた事だから……。

「香織、真理亜、稜、桜、愛子…帰るぞ…」「はーい！」

色々な所から香織達が飛び出し、抱きついてきた。エリイ達も負けじと抱きついてくる。

「それにしても、拓真があんなにも技術があるとは思わなかつたなあ」

「止めてくれよ、俺はただペルセポネさんに言われたことを実践してまではさ」

この場にいる、健悟以外の全ての人があくまで丸くし、こぢらを見た。

「いや、冥王の妃つても分からぬよな、きっと……」

健悟以外のこの場にいる人達は深々と頷いた。

取りあえず冥界に行くまでの経緯を紅さんに殴られながら話し、冥王の試練を乗り越え、ハデスというエラい人に認めて貰い、その妻ペルセポネさんに犯されそうになつたこと。

魔剣ラグナロクをハーデスから貰い、冥界と現世を行き来できるようになつたこと。

それと今回、エリィに取り込まれた時、冥界へ行つたこと。

そこでペルセポネさんに完膚なきまでに犯され、その後ペルセポネさんに『同姓が教える、女の子を完膚なきまでにオトすテクニック』なるものを教えて貰つたこと。

そして、魔剣ラグナロクで取り込まれた0・1秒後の現世へと戻つた事を話した。

「へえ、ユウタもタクマ君も神様なんだね」

「そゆこと。優太君はゼウスのお墨付きを貰つて、俺はハーデスに認められた、で、健悟君は大天使ラファエルに魔眼を貰つたと」

「！？ それもなのかな？」「そだよ、まあ本来の能力は技術複写【スキルコピー】と言つて、誰かの能力をコピーしちゃう凄い能力なんだけどね、試しに健悟君のスキル、因果断絶の魔眼をコピーしてあげよう」

目の前に巨石を想像、具現化。

香織達に危険だから離れてと言い、再び集中。

因果断絶の魔眼をコピーし、眼を見開く。

中心部の死線目掛け、エクスカリバーを突き刺す！ 巨石は脆くも崩れ落ち、砂と化して何処かに飛んでいった。

「これが健悟君のスキル、因果断絶の魔眼だよ、と言つても、まだまだ能力はあるみたいだけど、所詮はコピー、オリジナルには劣るから全部は使えないのさ。それにしても、このスキル、凄く目が疲れるよ、よく長時間発動出来るね」

「俺はお前じやないから当たり前だ」

「それもそうだ！」

皆が笑い、誰かと雑談を始める。と言つても、女は女同士、男は男同士で喋つてゐるが……。

女性陣の鼻息が妙に荒いのは氣のせいだろうか？

俺もさつき失つた魔力をエリクサーで補い、雑談に交わろうとした、その時、再び女性陣の悲鳴が轟く。

見れば、黒い檻に捕らわれているではないか。

「一の舞は踏まねえ！」

とつやに無数の烈火の矢【ブレイズアロー】を放つ、しかし壊せたのは香織と真理亜、それとマリイの檻だけだった。

「紅つ！」

健悟君は紅さんの檻に向かつて妖刀を振り下ろすが、一瞬早く檻が瞬間移動し、空振りに終わる。

「クソッ！ 誰だ！ 姿を表せ！」

健悟君がそう叫ぶと、突如として、吐き気を催す程の威圧感に押し潰されそうになる。

「何だ、これは！」

「遂にお出ましか、香織、真理亜、それにマリイちゃん！ アレやるぞ！」

香織と真理亜は頷くも、マリイは首を傾げて、「アレって何ですか」と香織や真理亜に聞いている。

その間にも香織と真理亜にキスをして融合していく。そして……。

「さあ、マリィちゃんの番だよ」

「え、あ、あう、はい！ キ、キスですね、分かりました！ あの、  
その……、優しくしてくださいね？」

マリィはこいつ笑った後、おへつと皿をひむる。 その皿で  
一粒の涙……。

気づけば俺はアリィをキツく抱き締めていた。

「いたい、いたいです、タクマさん」

「あっ、『めん。じゃあ……、するね』

「うん……優しくしてくれた方が嬉しいんだけど、激しくしてくれ  
たら激しく返してあげますから」

そう言つてマリィは皿をつむる。

そして、優しくキスをする。

が、優しかったのは最初だけ、どんどん過激になつてこゝ、最終的  
には舌を舐め合つよくなキスになる。一度唇を離せば、唾液が互  
いを結びつける橋になり、重力に逆らわずに落ちていく。 その夢  
さがどことなくアリィと似ていてドキドキする。

「凄くドキドキします。エリィお姉ちゃんもアリィお姉ちゃんも夢  
中になるわけです。もっと過激なこと、したいです」

「ああ、全でが終わった後な」

そして、再び接吻。やがてマリィは光の粒子となり、すーっと入つ  
ていった。

「さあて、俺は準備完了だ、そつねじだつだ～」

「こつでもこけるぜー！」

「早く出てこー！ 空間」と呂を斬つてやるー！」

健悟の叫びに応じて、吐き気を催す程の威圧感が俺や優太君、健悟君を押し潰さんとする。

「い、これが昨日言つてた異次元の歪みつて奴か……」

「そうだ、万年発情期、しかもかなりバカデカいぜ。相棒もデカチチも見たことない、キング・サイズだ」

「さよう、これらを放置すれば異世界の生物がこの世界の全ての生物を滅ぼし、空は黒い裂け目に飲み込まれ、最終的にはこの世界は消滅する運命にあるのだ」

初耳だよ、世界が消滅するなんて。つか、喋れるんだ……、ラグナロク。

「わが主よ、今はそんなことに現を抜かしている暇などござりんぞ 分かつている。」抜かしてねえよ」と呟き、背中の鞘から一振りの剣を抜き放つ。

次の瞬間、バコッ！ という音を立てて空が真っ黒に染まる。裂け目から、戦艦によく似た円盤がゆっくりと降下していく。

「…………あれはさつきのヤツ！」

黒い牢獄が巨大な円盤の周りを囲むように配置されている。

突如として黒い立方体が目の前に現れ、一瞬だけ光った後に32型のテレビみたいな大きさになり、光を放つ。その光はだんだん映像になり、円盤の上らしき風景と一人の科学者、一体のぐつたりとした裸に近いハーピイが映つている。

(あつ！ あの子はさつき代表を譲ったメアリーさんです！)

「やあ、リア充の皆さん。女の子を取られた気分はどうかな？ 最悪だよねえ？ 僕はモテない人達の代表、ルファ・ワインディーヌ様さ」

ルファ・ワインディーヌと名乗る者は、裸に近いメアリーとか言つハーピイの胸を直に揉みしだき始め、メアリーは悲鳴を上げる。

「イイよねえ、おっぱいって、大きけりや大きい程イイ。君達もう思わないかね？」

これまた突如として、黒い立方体が現れ、程なくしてマイクになつた。

これで意思の疎通がしたいと言つのだろ？、上等だ。

「テメエ！ 稜達はどこだ！」

思い切り怒鳴つてやると、ルファは耳を両手で塞ぎ、裸に近いハーピイを取り落としてしまう。

「いきなり失礼な少年だね、君は。まあいい、君達から奪つてあげた女の子達はここにいるよ」

いきなりアングルが変わり、今度は三人の女の子が映る。それを見て俺達三人は目を丸くする。

なぜなら、そこにいるのは……。

「稜！」

「紅つ！」

「口口！」

それぞれの大切な人達だったからだ。

(私は大切じゃないって言いたいの?)  
(妹も口クに守れん男がどう好きな人を守れと言うんだ。後、地の文にツツ「むな。腹立たしい」)

再びアングルがメアリーとルファに変わる。

「さてと、もう少しでこの女の子を調教し終えるんだ。そしたら、君達から奪つてあげた女の子達も調教してあげよう、完璧な性奴隸として」

「ざけんじやねえええ!!」

怒りに任せ、エクスカリバーを振り下ろす。テレビやマイクを真つ二つにして黒い粒子に変える。そして湧き上がる感情、怒り、ヤツを切り裂かない限り収まる事を知らない怒り。

「絶対に叩つ斬る!! ルファアアアー!!!!」

俺の体から炎が迸り、次第に鎧へと形を変える。

「激昂の冥王【ラージハーデース】」

言下、炎が全身を包み込み、狂乱の炎魔神より強固な鎧が形作られる。

視界が真っ赤に輝き、怒りの感情のみが残つて、無意識の内に雄叫びを上げる。

そして、一瞬で円盤の真上に移動し、

「ぶつた斬れろお!!」

と叫びながら、ルファに向けて剣を振り下ろす。はずだつたが、見えない障壁が邪魔してルファのいる円盤の上に行けない。

「こんなもん張りやがってクソがあ！」

見えない障壁に向かつて、様々な攻撃を繰り出す。エクスカリバー やラグナロクで斬りつけたり、冥炎魔法を繰り出し続けたり……。その程度じゃ破られないことなど分かりきった事なのに、攻撃を止めることができない。

口調も変わるし、つまりはコントロールしきれていない、強大な力にはかなりのリスクが伴つらしい。

「おやおや、無駄な攻撃ご苦労さん。この障壁は世界一固いオリハルコン、それの百倍は固いのだよ。普通の攻撃じゃ傷一つ付けられまい！」

“なら、空間”と切り裂いたらどうなる？

突然の突風。吹き荒れた後、見えない障壁が両断されていることに気付く。健悟君が有する因果断絶の魔眼、その能力の一つが発動したらしい。

これをチャンスと見た俺は、一瞬で円盤の真上に飛び、錐揉み回転しながらルファに近づく。ルファはメアリーを調教し終え、稜達に迫っている。

「い、いやあ、来ないで！ 早く助けて、拓真！」

「ふふふ、何をしたかは分かりませんが、無敗の壁が破られるはずがない、従つて拓真とやらが助けにくる確率はゼロ！ さあ、大人しく

」

「その穢らわしい手で稜に触れるんじゃねえええ！！」

俺は稜の胸に触れそうなルファの腕に向かってエクスカリバーを投げつける。ルファの両腕は稜に触れる前にエクスカリバーが斬り裂き、放物線を描きながら稜達の上を飛んでいく。断面から鮮血が溢れ出る。

「わ、私の腕があ！　何故、何故剣が降つてくるんだ！」

左手に持ったラグナロクでさらに胸あたりを斬りつける。錐揉み回転の遠心力でルファの胸を深々と切り裂き、胸あたりから鮮血が噴水のように噴き出す。

「ルファ……、殺す！」

着地した後、エクスカリバーとラグナロクを融合させ、一振りのかなり長い日本刀にする。

「富本流奥義、森羅万象断空斬！－！」

日本刀を思い切り振り下ろす。

刃から鋭い衝撃波が飛び、円盤ごと切り裂く。ルファは断末魔も上げる間もなく真つ二つになる。

『キヤアアアア！』

女の子達の悲鳴が聞こえ、そこでよじやく正氣を取り戻し、やつと体のコントロールを取り戻す。

「稜！　口口さん！　紅さん！」

俺は、優太君がよくやる転移魔法の魔法陣を展開する。位置を計算、割り出し、実行。見事成功し、優太君達の隣にいることを確認し、稜を抱きしめる。

「怖い思いさせて、ごめんな……」、稜

「ううん、おにいちゃんが助けてくれるって信じてたから、全然怖くなかったよ」

稜はそう言つているが、実際は凄く怖かつたらしく、抱きしめている今でさえ少し震えている。

頭を少し撫でてやると、震えが止まり、顔が綻ぶ。

「もう、怖くないな

「うん！ ありがとうーーおにいちゃん！」

そう言つて、稜は大きな胸と一緒に唇を押し付けて来た。  
瞬間、光の粒子となり、俺の中に入つていった。

「香織、あの黒い牢獄はどうやって破壊できる？」

(そんなの、あんたが探せば良いじゃない)

あれ？ 何でだろ？ 何故か拗ねてる……。 とりあえずもう一押ししてみる。

「それができないから言つているんだ。頼むー、香織、君にしかできないんだー！」

香織はこれまで拗ねてる口調で、

(じゅあ、稜ひやんよつドラマチックなキス、してくれる？)

と、言つた。 思考回路が追いつかず、思わず「は？」と聞き返す。すると、今度は怒つた口調で、

（だーかーら！ 私にも！ ドラマみたいなキスをしてほしいのぉおおー！）

と耳元で怒鳴られた。 おかげでしばらくキーンとしか聞こえそうになさそうだ。 リペアで治したけど。

「分かつた、分かつた。 どんなシチュエーションでも再現してやるから、とにかく今はアナライズよろしく」  
（約束だからね！！ 中心部にエネルギーコアみたいな物があるわ。 それをどうにかできれば ）

「OK！ それだけ分かれば十分、いくぜ！ 烈火の流星群【シュー・ティングスター・ブレイズ】！」

巨大な炎の球を上空に向けて撃ち放つ。 それが上空で炸裂し、無数の小さな炎になつて円盤に降り注ぐ。  
炎の一つ一つが、円盤の上で炸裂し、穿ち、削つていく。  
その内、円盤の中心に橙色の球体が姿を現す。

「あれがエネルギーコアがあ……。 一気にカタを付けるぜ！ エクスカリバー！ ラグナロク！」

「おうよー。」「御意ー！」

かなり長い日本刀を再び一本の両手剣に戻す。 そして、一本の両手剣をクロスさせて構え、

「クロスインパクトオ！」

そのまま振り抜く。

瞬間、エネルギーコアにバッテン印が付き、次いでエネルギーコアが巨大な火柱を起こし、跡形も無く吹き飛ぶ。

そして黒い牢獄が粒子に変わつて、中に捕らわれていた人たちは俺の起こしたつむじ風でゆっくりと落ちていく。

「……、危ないとこりだつた。色んな意味で」

愛子はいつの間にか、真後ろに立つていた。  
いや、今、俺、飛んでいるんだよ？

「空なら飛べる。蒼氷の翼で」

よく見れば、愛子の背中には青い氷で作られた翼があるではないか。  
ただ気づかなかつただけだが。

「それよりも、さつきからなんか寒いな」

「そうなの、これを発動している間は背中から冷気が放たれて周りが寒くなるの……。ねえ、あなたの吐息で、あなたの唇で私を暖めて」

愛子は突然、唇を押し付けて来た。蒼氷の翼が徐々に消えていき、青色の粒子となつて体の中に溶け込んでいった。

「！？ わ、私も一つになりますわ！  
「サリイも一つなりたいんだよ！？」

両頬からのキス。エリイとサリイは一瞬の間も開かず粒子となり

取り込まれていぐ。俺に。

「やつたな！ 拓真！」

優太君は手を振り、一いち方に声をかける。

俺はゆっくりと優太君の近くに着地し、手を振り返す。

「ああ、円盤は吹き飛ばした。だがしかし、男に怯えるようになってしまったハーピィや、微かに残るルファの魔力が引っ掛かる。何はともあれ、ハーピィ達のエピソード記憶から、ルファに強姦されてしまった記憶を消し、体も調教される前に戻す。つまり、『無かつたことにする』んだ。……融合魔法、光の風」

手のひらを突き出せば、光の粒子を纏う風がハーピィ達を包み込む。ハーピィ達は見る見る内に凜とした表情になり、数秒後には、新しいリーダー、マリイを探し始めた。  
さうに数分後、メアリーが一いち方に向かってきた。

「少し聞きたいんだが」

「はい、なんでしょうか」

「今、我々は我らのリーダー、マリイ殿を探しているのだが

「彼女か……、彼女なら君たちを庇つて名誉の戦死を遂げたよ……」

俺がそう言つと、メアリーは頭を抱え崩れ落ちる。

どうやら信じ込んでいるらしい。今、この時、初めて演劇部に入つていて良かったと思つた。  
もう一芝居してみるか。

「彼女は息を引き取る前、俺にこう残した、私が死んでも絶対に泣くな。これからはメアリーが仕切る番だ。ただ東を田舎せ、楽園あればそこを住処にせよ……と」

メアリーは立ち上がり、凛とした顔に戻ると、

「マリイ殿の遺された意思を伝えていただき、誠に感謝する次第！  
我々はこれより東に向け飛び立ち、楽園を目指す！ と、マリイ  
殿に伝えていただきたい」

と言い残し、仲間を連れ東に向け飛び立つにつた。

「良い部下を持つたな、マリイ」

（いえ、全てはタクマさんのおかげです、ありがとうございます！）

さてと、ハーピイ達は無事に飛んでいったことだし。

「出て来いよ、ルファ。テメエの奴隸とやらはみーんな飛んでった  
ぜ？」

「そうだな、円盤も吹き飛んだしな」

言つが早いが、ルファは俺達の目の前に現れる。うなだれているよ  
うだが、目ではかなり怒っている。

「本当に余計なことしゃがつてー リア充共が！」

叫んだ直後、ものすごい殺氣と怒氣を含んだ威圧感が襲い来る。  
しかも、リアルにオーラが見えだしてきたのだ。スーパー サ ヤ  
人みたいなオーラが。

「俺のハーレム生活があああ！ 許さないぞおおおー！」

ルファは有名過すぎるマンガの有名過すぎる構えをする。まさか……。

「かめ め波あああ！」

青いレーザー光線が襲ってくる。が難なくリフレガで弾き返す。ルファは自ら放ったレーザー光線で吹き飛んだ。

「チクショウ！ リア充共、がああ！」

「さつきからリア充、リア充とうるさいぞ、紅をさらつた事もあるしな。とりあえず死ね」

健悟は近づき、そのまま一閃。ルファの背中に大きな切り傷が出来る。

優太君は断末魔を上げることさえ許さず鎌でルファを切り裂き、打ち上げる。

「さあ、トドメをさしてしまえ！」

「あいよー、宮本流剣技秘式五ノ型、『七輪八裂』改訂版」

空間魔法を駆使してルファを地上に落とさないように何度も何度も斬りつける。

トドメは両手の剣を同時に振り下ろして地面に叩きつける。これは変えない。

「今だ！ 有りっ丈の上玉、ぶちかませ！」

二人は領き、優太君は死神の翼を生やして飛び上がり、健悟君は剣を構える。

俺も空中に留まり、巨大といつ葉すら軽く凌駕する予定である炎球を作り始める。

「さて、ラルやフロル、そして口口をさらつた罪……、死して償え

！『死の波動』！

優太君はルファに向けて手をかざす、その瞬間にかなり太い、真っ黒なレー・ザー光線がものすごい勢いでルファに迫る。ルファは虫の息ながら、マジックシールドを張るが、横から健悟の放った鎌鼬らしきものがルファの右腕を吹き飛ばす。そのまま死の波動がルファに降り注ぐ。

「ぐああああああつ！ おのれ、リア充共めがあああああ！」

ルファがそう叫んだ瞬間、俺の最大の火炎魔法が出来上がる。

(どこか遠くへ！ 卷き添え喰らうぞー)

テレパシーで一人に伝える。 優太君は自分と健悟君の足元に転移魔法陣を開き、発動してこの場から離れる。離れたことを確認すると、頭上の巨大という言葉すら軽く凌駕する炎球をもう一回り大きくする。

「よし、今だ！ 獄炎の隕石【メテオインフェルノ】！」

頭上の炎球がかなりのスピードでルファを襲う。

「くそ、リア充共をこてんぱんに泣かせるまで……、俺は」

そして着弾。

ルファの叫び声も虚しく、跡形も残らず燃え尽きた。

「よ……し、ルファの魔力が消え去った、遂にやつたか……。でも、俺の魔力もすっからかんだ……くつ……！」

『あくまでもたぐま』。

「拓真ー！」

「うおわっー？」と叫び奇声を上げながら、ベッドから転げ落ちる。そこで意識が完全に覚醒し、見上げて見れば、そこはあまりにも暗く、すぐ目の前には水色のしましまが……。

「スカートの中に顔突っ込んで、ニヤケないでよー！ ヘンタイ！」

平手打ちを後頭部に受け、思い切り床に顔面を強打する俺。すぐに飛び起き、

「ニヤケてなんかねえよー 第一、俺に謝れよー！」

と講義するが香織は、

「ほおー、あなたの鼻から出でている緋色の液体が何よりの証拠よー！」

とさらりに憤慨して踵落としを繰り出してきたが、鏡花水月でかわす。

「だあー！ 落ち着け！ 質問？！ ここは何処だ！？ 質問？！ どうやつてここに来た！？ 質問？！ 俺は何時間寝てたんだ！？」

？

『それは私たちが教えてあげますよ』

いきなり入り口から三つの影が俺めがけて飛んでくる。 ハリイ、

サリイ、マリイである。

ぐえつと言しながら隣のベッドに押し倒される。軽く数センチは飛んだだろ？。

次いでそれぞの唇が迫つてくる。

「え、う、ちょっと」

エリイの唇が重なる。エリイの唇が離れるとサリイの唇が重なり、サリイの唇が離れればマリイの唇が重なる。その繰り返し。それが小一時間続き、三人の息が荒くなつたある時、エリイ達は誘うように語りかける。

「でさあ、教える前にお願ひがあるんだよねえ……」

「おね……がい？」

「そうです、このギルドに私達三人は苦労しながら連れてきたのですから、聞く義務はありますよね？」

バカめ、これで質問？とは聞いたも同然！

「五時間ぐらいくぐつすりと眠つて、まつし」

「ありがとう、知りたい事は全て知つた。さらばだ、鏡花

鏡花水月を発動しようとした瞬間、エリイは唇を押し付けて鏡花水月の発動を食い止めた。

「この欲情している私が離すと思ったのですか？　甘いですわ、大甘ですよ、おーほつほつほ！　めちゃくちゃに犯しちゃしてあげますので、覚悟なさい？」

言下、ハーピィ三姉妹は俺の体を喰らう始める。

俺は終始なされままだった。

飛びかけた意識を繋ぎ止め、ヒリクサーでいろんなものを回復して、ふと思つた事を、ギルドの受付嬢にぶつけてみる。

「でも、あれが大型の半鳥妖女なのかい？　どう見たって二十歳くらいの身長じゃないか？」

「だから大型なのです。本来、見た目十歳程度なのです。だから元々は“妖女”ではなく“幼女”なんですよね……」

そうだったのか……。

俺はそう呟き、エリイ達を見つめる。

もしエリイ達が“妖女”ではなく“幼女”だとしたら……、凄まじい罪悪感に呑み込まれたのだろう。

「良かつた……、さてと！　じゃあ報酬を頂きましょうかね！」  
「はい、ちょっと待つてくださいね……」

ギルドの受付嬢がカウンターの奥へ消えていく、俺がなんとなく後ろを振り返つてみると、なんか血まみれの惨劇が広がっていた。  
俺は優太君に状況を説明してもらうことにした。

「あの～優太君、これは一体どうなっているのかな？」

「アハハハハ！　それがなあ、この何処の馬か分からねえ奴がよお、口口をナンパしようとしたから、俺がハツ裂きにしてやつたんだよ！　お前も俺と殺るか？」

「遠慮しておくよ

「なーんだつまんねえの」

言うが早いが、大型の鎌が襲い掛かる。

その鎌をラグナロクで難なくかわし、エクスカリバーでうなじに峰打ちを喰らわす。狂気に呑まれた優太君は呆気なく氣絶した。

「隙だらけだ。これならまだ狂気に呑まれていない優太君の方が強い」

一本の刀を鞘に収める。それと同時に、受付嬢がカウンターの奥から戻つてくる。

「はい……、これが今回の報酬……です！」

ドスン！ という音をギルド中に響き渡らせながら、ほとんどじまつぽりだす感じで置かれる。

「はい……、これが報酬の、金貨3000枚です」

さ、3000枚い！？ という声がギルド内に轟き渡る。 そんなに価値がある物なのか？

「はあ……あなた達、国庫を空にするつもりですか？ 3000枚なんて、一人が一生遊んでもお釣りが来るくらいの金額なんですよ？」

そうなのか？ 優太君と言おうとしたが、俺が氣絶させたため、優太君はぴくりとも動かない。

リペアとリカバリーを併用し、血まみれの惨劇と優太君の意識を元通りにする。

「あ、優太君おはよう、金貨3000枚って凄いの？」

「んあ？　いや、俺も金の価値は知らないんだ、まあ凄いって言つんだから凄いんだろう」

「まあ……いいか、凄いものは凄いってことで」

「あの、ギルドカードを下さい。ランクアップしますから」

俺はちょっとした転移魔法で参加者のギルドカードを手のひらに転移させカウンターにさらに転移させる。

受付嬢が奥に消え、暫くすると、優太君みたいに、ううとぐづかく書かれたギルドカード……ん？

「あれ、受付さん、これS S Sつて書かれてますよ？ 確かこのクエストの難易度はSだつたはず」

「ええ、あなたが気絶している間にとばっちりを受けて死んでいた魔物達の剥ぎ取りをしていたらしいんですが、数々のS級モンスターの中に、SS級依頼のゴーレムの破片が多数存在していました、とばっちりとは言え、依頼を達成したのでS Sランクに昇格しました。おめでとうござります、『紅炎の破壊者』タクマ・オオハラさん」

「…………はい？ 今なんと言いました？」

「二つ名ですよ、本当はAランク以上で優秀な成績を残して二つ名が付くんですが、金貨3000枚は異常だろうということなので、このクエストを受注したタクマ・オオハラさんに『紅炎の破壊者』という二つ名を下されるに至ったわけです。」

ちゅ、厨二くせえ……。まあ、事実だから仕方ないか。獄炎の隕石は着弾地点から数キロにわたつて問答無用でクレーターを作るから……。

「あら、良かったわね、これであんたも一役有名人つて訳ね」

あれは……、香織を筆頭にする、万年発情期ネコの階なんだ。

「おー、香織。あの歪みは消えたか？」

「歪みはあんたがバカでかい炎の塊をぶちかました後に起じた噴火で山！」と消えていったわ。でもね、拓真。私達はそういうことが言いたい訳じゃないの、私達はね、あんたのえつち見てて……、む、ムラムラしたのよ」

「……おいおい、勘弁してくれよ！ もう既にエリイ達にほどんどを持ってかれただぞ！？ それに、ここは公共の施設」

「だからこいつんじゃないのよお、ダーリン……」

真理亜がいきなり後ろから抱き付く。

それが起爆剤になり、次々と発情ネコ達は抱き付く、首筋に吸いついたりとえつちなことをやつまへる。

「ちょっ、お前ら……っ止め……お願いだから、やめてっ……」

「あ、拓真さん、凄くいやらしこ声が出てますよ？」

「ホントだね、おにこちゃん。ほひ、みんな押し倒しちゃふーー」

ドスンとこり音を立て、俺は押し倒される。押し倒されるのは本日三度目である。

「ほひ、おにこちゃん、凄いんだよ、わたしたちみんなおにこちゃんのいと食べたがってる。おにこちゃんを食べるためなら何でもするんだよー。」

「もうよ、拓真。周りの人々に私達のせ」

「！」託宣はもうここー！ ひと悶ごくりと喉ごとをくすぐる。なんの抵抗もしないからー。」

発情期の雌ネコ達は、口づけ笑い、「お前葉に甘えて」と美し

いコーラスを響かせ、性的な意味で喰らい始めた。  
性的な意味で喰らい尽くされた後、意識が朦朧とし、暫くしない内  
に意識を失つた。

## 下章 死神とギルドと盃み 後編（後書き）

前後編あわせて二万文字。  
どうだったでしょうか？

EDEXさんのキャラクターは崩れていないか、焰野さんの作品のキャラクターに少しでも近づいているか。

まあ、もっと頑張りねば、文章とか……。

終章 死神と主神ゼウスと神々のお茶会（前書き）

遂に終章！

こんどは天界で……？

## 終章 死神と主神ゼウスと神々のお茶会

次に目覚めると真っ白な空間だった。

本当に何もかもが真っ白で、田を凝らしてよつやくはつきっと物体を認識出来るくらいに真っ白な世界だった。

「あれ、俺は確か香織達にギルドで犯され氣を失ったはずだよな？」

香織達の事だ、俺が氣を失ったとしても構わずに性的行為をし続けるのだわ！」

「まあ、この点はラッキーだな。香織達に体を貪られずに済んだし」

“いや、下界の時間は止めてあるが、お前の体は貪られていくぞ”

「誰だッ！」

突如として聞こえた声に警戒態勢として、エクスカリバーとラグナロクを瞬時に装備する。

「氣を付けな、相棒。凄まじい氣を感じるぜ」

「主よ、我が刃も主を軽く凌駕する氣を感じております。お気を付けなされ」

ラグナロクがそう言つた途端、田の前の空間が歪む。

「そこだッ！」

ガギンと金属音が鳴り響き、火花が散る。

エクスカリバーの能力、複写で魔を打ち払う力をコピー、エクスカリバーが触れている部分から歪んでいた空間が元通りになつていき、次第に鎌を持つた人の形を取り戻す。

「あ、あんたは……、優太君じゃないか！」

「そういうお前は拓真じゃないか！　いきなり歪んだ空間が襲い掛かるから何かと思ったが……」

“ ようこそ、天界へ ”

先ほどの男の声が、また頭に響き渡る。次いで目を刺すような閃光が頭上に発生、したかと思えばすぐに消え、目の前に鬚を生やした白い布を纏う男が存在していた。

「ようこそ天界へ、私がオリュンポス十二神、主神のゼウスだ」

「知ってるよ、今日はいつにも増して登場が派手だな。……でなんだ、今日は」

「君があのバカ兄貴に認められた大原拓真だな？」

「どこから仕入れた？　その情報は、神は下界（＝人間界）をいつも見ているとは聞いたが……。ハデスに認められたのは冥界での出来事。まさか、バカ兄貴といつくらいだから交信はしないだろうが……。」

「君もいつもやっているじゃないか」

「……解析【アナライズ】か。それよりも、さつきの言葉、一体ど

「うじうことだ？」

「それはな、これを見れば分かる」

ゼウスは手を横にかざす。鏡みたいな物が現れ、そこには下界の様子が映し出されているのだ。そこには……。

「今すぐに閉じてください、今すぐに！」

俺なんかが説明しちゃいけない、淫らな大人の世界が広がっていた。

「今、君は精神だけの状態だ。まあ、すぐな

轟音と称すべき爆発音が響き渡る。火炎弾によるものだ。それもかなり巨大な。

神とは言え不意打ちでかなり巨大な火炎弾をぶつけられたら一溜まりもないだろう。だがゼウスは身じろぎもせず、

「話を聞いていいからといって逆上してあんなの放つて貰っちゃ困る。神だって痛いんだからな！」

とあれほど魔法を喰らつたはずなのに、痛いだけで済むとは……。  
さすがは神か。

「そうだ、私が神だ。ところで拓真といったかな、バカ兄貴は元気か？」

「まあ、気になるなら、自分の目で確かめればいいじゃないか。  
開け、冥界への扉！」

左手に装備したラグナロクを真上に掲げる。

少し間が空き、俺の後ろの空間が歪んで黒いトンネルを形成する。

闇の回廊みたいな感じのやつ。最初に来たのはペルセポネだった。

「うーん、天界に来るのはいつぶりかしら。あ！ 拓真あ！ 後で互いに体を通じて分かり合いましょうね」

ペルセポネはいきなり後ろから抱き付き、真理亜並みに大きい胸を押し付け頬を舐める。あとなんか凄いこと言つてるよ…………、とりあえず笑つておこう。

そして、冥王ハデスが天界に闇の回廊みたいなやつを通つて現れた。あれ？ そういうえば名前は確か

「陰陽を紡ぐ空間だ。それにしても久しいのあ、我が弟よ。前に会つた時の方が遙しく見えるのは氣のせいであろうか？」

「ああ、久しぶりだなバカ兄貴」

ハデスはバカ兄貴という言葉に過剰反応した。  
簡単に言えば、キレたのだ。

「バカ兄貴、か。やはり父クロノスの教育は貴様に対し甘過ぎたのだ。私はここまで厳格に育てられたといふのに、貴様だけはクロノスに甘やかされ、さらには主神の地位も欲しいがままにした！だから貴様は女に溺れる！ だから貴様は妻を怒らせ激情せりのだ！」

いや、そこはバカ兄貴と関係なくね？

「黙れ！ ゼウスもろとも貴様も我が剣の鋒となりたいかア！」

「もう、騒がしいなあ……。おちおち寝れやしないじゃないの……」

突如として金髪、ツインテールの幼女が現れた。

解析【アナライズ】…………、この幼女がゼウスの姉であり妻であるヘラだというのか？

「失礼ね！ これでも結婚の神なのよ！？ 私がちょっといじくれば、あなたを一生結ばれない悲しい人生にする事だってできるからね？」

「失礼いたしました。結婚の神、ヘーラー様」

俺はヘラの前で跪く。香織達と結婚出来ないのは香織達に申し訳ないし、何よりも自分が嫌だ。

「真面目ね。どう転んだってそんな事しないから気にしないで、でも浮気はしないでね、香織達はきっと悲しむから」

「当然の事を言わぬでくれ。香織達の涙は見たくないんでね」

「おお、我ながらとつてもクサいセリフ。だがそれが本心だから仕方ない。」

「香織達が羨ましいなあ、どこかの誰かさんとは違つて律儀だからねえ～」

「お前の事だよ！」と言わんばかりにゼウスを睨み付ける。ゼウスはその場にうずくまり、ガタガタと震え始める。

「コレが神……、と俺が思うと同時にゼウスの目が輝く。ヘラはそれを見逃さなかつた。

「ねえ、変態色欲万年発情浮氣ペド野郎、今ペルセポネを変な目でみたよね？」

「見てません、本当です、姉貴」

「ありえない。“うわ、胸でつけえ、きやつほつ”みたいな目で見

てたでしょう！　いいわ、女の恐ろしさをたつぱりとその体に刻み込んであげるから」

そう言つたヘラは、ゼウスに対してもウントポジションを取り、次々とパンチを繰り出してゼウスを圧倒した。

剣の鎧としてやるうなどと抜かしていたハデスは蚊帳の外だった。

「まあ良いわ、興が醒めた。ゼウスを斬り裂くのは次に会つた時にしてやるう」「ううう

「まあまあ、ハデスさんも落ち着いてよ、せつかくの再会だからさ、お茶でもどう？」

ゼウスをしつけ終えたヘラの一言で、なかつたはずの場所にティーセットが現れ、甘い香りが漂う。ペルセポネは「是非！」と言ひ、すぐさま一番近くの席に着く。

ハデスははあ、と溜め息をつくが、程なくして席に着いた。どうしたものかと優太君に言葉を一、三投げかける。

その内に、ゼウスを無理矢理座らせているヘラに「座つて」と促されたため、とりあえず座つて待つてみる。

程なくして、この場にいる全員が座り終え、（ゼウスも氣絶状態から回復した）それでも一つ空席があるため不自然に思つた俺は、その空席について訊いてみる。

「ああ、そこには大天使ラファエロさんが来る予定なんだけど……あ、来た来た」

ヘラがそう言つと、突如として頭上に神々しい光纏い、翼を生やした白髪の幼女がゆっくりと下りてくる。

「はあ、何ですか……？　私も暇じゃないんですよ？」

「まあ、そう言わないで。暇あげるから」

「まあ、それなら良いですけど。早くしてくださいね」

ヘラの言葉に、ラファエロといつ幼女天使は泣々納得し、頬を膨らませ、ふてくされる。

これが健悟君に邪眼を受けた大天使ラファエロなのか？

「独断と偏見で人を見たら、痛い目を見るからね」

直後、俺の額の前で拳を握る。

「何これ、デコピン？」

「うん、デコピン」

言下、幼女なりに怖い顔になり、デコピンと思えないデコピンを繰り出した。

横に十回転、後ろ向きに二十回転して巨大で白い柱にぶつかる。その際柱はビビは入らなかつたみたいだ。

……、流石は天界か……。めちゃくちゃ痛いのは変わらないけど。

「私を怒らせると怖いんだから」

「く……そ、炸裂する豪火【バーンフレイム】！」

左手をラファエロに向ける、次いで火種がいくつも現れ、ラファエロに襲いかかる。着弾した瞬間、とてつもない炎が中から飛び出るよう爆発し、ラファエロを包み込む。が、

「か弱い女の子に手を出すなんて最低の行為だよ？ そういうのを幼女虐待といってね、ヘンタイのする行為なのよ？」

と、あまりにもふざけた態度で笑っている。衣服にすり傷一つなく、だ。

俺はえもいわれぬ恐怖に心を掴まれ、思わず右手で白旗を創造し、頭上で狂ったように振る。あんな化け物に勝てる奴がいたら『元気呼んで』、神として崇めてやるから。

「もう終わりかあ、つまんないなあ

「ふふ、両者共に満足したようですが、さあ、始めましょうか、愉快なお茶会を」

俺や優太君、神達は茶菓子を食べながら喋り続ける。そして、あつと/or/間に時間が過ぎた。

「よし、今日はお前ら帰つて良いぞ

「結局、何のために呼んだんだよ……」

「暇だったから

「……、『死の波動』

ルファを窮地に陥れた真っ黒なレーザーがゼウスを包み込む。

「じゃ、SEE YOU AGAIN」

ルファを絶命寸前まで追い詰めた死の波動をものともせず、俺と優太君の意識を飛ばした。

（1ヶ月を過ぎたある日）

「ふあああ、変わらぬ朝、変わらぬ腰痛、そして」

「ふあああ、変わらぬ淫らな女共。と言いかけた時、バタンヒドアが開け放たれる。

おそらく口口さんが食事の準備ができたのかと思つたが、予想は呆氣なく裏切られる。

「ここが寝室だときいたのだが」

「クソブタの小屋はここか？」

一樹と海斗を担いだ二人組の女性が扉の向こうにいた。よく考えてみれば早すぎるか。

一樹を担いでいるのは長身で緑色の長髪に深紅の目、アマゾネスを彷彿とさせる締まつた筋肉……程ではないが、そこそこ締まつていて、さらに推定Gカップの大きな胸をぶら下げている。

……、イツミテモアンバランスダナ。

一方、海斗を担いでいるのは小柄で桃色のショートヘア、目はアマゾネス女と一緒に深紅、体型はスレンダーな方だ。

それと、目が凄くつり上がっている。

……、ヤツパリコイツ、ドウダナ。

「やうですよ、メアリーさんごジユディさん」

そうなのだ、彼女らは遙か東方に飛び去つていったハーピィなのだ。二人ともリーダーを辞退し、群れから抜け出したのだ。

ちなみに、彼女らはそれぞれ一樹、海斗を好きになり、一度交尾した後、一樹は一は完膚無きまでに喰らい尽くされ、海斗は完膚無きまでに蔑まれた。（海斗は人知れずMだったため、逆に喜んだ）

「なら、このベッドに乗せておこう」

「…………、すみません、」要望にお応え出来なくて

「いいんだよカズキ、君はよく応えてくれた、私は満足したんだ。  
愛してる、カズキ」

メアリーは頬を染めながらベッドの上にいる一樹に濃厚なキスをした。微笑ましいこと極まりない。まあ、メアリーが唇を離した瞬間 気絶したが。

「ケツ、こんなブタをベッドに乗せる価値なんてねえよ、床に這いつくばつてろ」

「うう、もつと……」

「うひさい、死ね」

ジユディは床に投げ捨てた海斗の鳩尾を思い切り踏みつけ、踏み躡る。 海斗は断末魔を上げて気絶した。

「相変わらず、二人とも過激ですね」

「一樹を心から愛しているからな」

「いえ、彼きての希望ですから……」

そうなのだ、ジユディは海斗が気絶すると穏やかな性格になる、二重人格なのだ。

「まあ、いいや、先にリビングへ行つていってくれ、俺は俺でしなきゃいけないことがあるし」

「分かった、香織にもその旨、伝えておいで」

そう言って、メアリー、ジユディは寝室から退室していく。 バタンとドアが閉まる。

「さて……と、エクスカリバー」

言下、腕を正面に突き出す。

一瞬間に空き、俺の右手に光が収束して剣の形になり、実体化した後、光が收まり、金色の柄に半透明な黄色の宝玉といった、アーサー王物語でお馴染みのデザインの両手剣が完成する。

「よつ、相棒、お呼びのようだな、とりあえず床に突き刺してくれ、腕が疲れるだろ?」

お言葉に甘えて邪魔な海斗をサイコキネシスで一樹が寝ている隣のベッドへ飛ばし、エクスカリバーを突き刺す。

本当なら前にかけた俺の魔法で弾き返されるはずだが、エクスカリバーの元々の能力、『魔力の無力化』でそこだけ俺の魔法が効力を失い、突き刺さるってワケだ。

何? 人の家を壊すな?

そりや直すよ、そりや直すけどさ……。

「誰に向かって喋っているんだ? 相棒」

「やかまし。それにしても、その性格は定着してしまったのか、エ

クスカリバー」

「へへ、元々の性格が近かつたからな」

「あの某有名ライトノベルの主人公が持つていてるあの刀剣に?」

「俺あ回りくどい表現は嫌いだ。お前さんの記憶の中にある

「大丈夫、分かったから。俺がしたいのはそんな話じゃない、香織のシークレットビー<sup>チ</sup>に現れたあの扉がでているかつてことだから

エクスカリバーは急に黙り込む。おそらくは考え中なのだろう。

「見つかった。この部屋の隣りの開かずの扉だ」

「おいおい、そんなこと、なんで分かんだよ」

「俺あそゆうを探知できるステキスキルがあつてね」

「ふうん、で、鍵は？」

「

宝玉のところを押してみな、とエクスカリバー。言われるがまま押してみると、押していない手のひらが光り輝き、その手の中に透明な鍵が持たれていた。

「へへっ、どうよ？ 僕っちのステキスキルその一、異空間の道具箱よ！ 大小は問わないが、三十個までな」

「スッゲエよ！ エクスカリバー！ 何か分からねえけどスゲエ！」

あ、ちなみに収納はお前さんの空間魔法を使いなよ、とエクスカリバー。

どこに繋がるか分からぬ透明な鍵を空間魔法で異空間の道具箱に転送、エクスカリバーもまた、白い粒子に戻し、再びドアノブに手をかける。

「さあてど、みんなに朝のあいさつでもしようかね！」

扉を開け放ち、リビングに向かう。

楽しい団らんの日々もこれで終わりか。なら、悔いのないよう過ごしていかないとね……。

一樹と海斗に向けて愛子の魔法、『覚醒の雨』を発動、程なくして二人は目覚め、リビングへと向かう。

俺も扉を開け放ち、最高の笑顔で朝の挨拶をする。

「おはようー！ みんな！ 今日はみんなに重大な発表がある、次の

扉が見つかった！ この扉な。質問はいらないぞお、俺もわからな  
いから。で、今日がお別れの日なので、記念撮影をやろうと思つ。  
異論反論全て無視するからな、特に健悟。よし、じゃあみんな外に  
出てくれ！」

ぞろぞろと外に出る皆さん、全員が出切つたところ俺も出る。

「数十分後」

「よーし、みんな定位位置に着いたな？ じゃあいぐゞ、クロスオーバー記念撮影！」

カシャリ……ツー……。

「上出来だ、これを2つ複製して……と。さあ、香織、赤音、詩音、  
楓、真理亜、愛子、桜、エリイ、サリイ、マリイ、メアリーさん、  
ジュディさん、そして、一樹に海斗。出発の時だ！」

再び中に入り、問題の開かずの扉に立つ。

そして、エクスカリバーを呼び寄せ、真ん中の宝玉をポチッと押し、  
透明な鍵を呼び寄せる。

「じゃあ、解錠するぞ」

透明な鍵を差し込みくるりと回す。

扉の隙間から淡い光が漏れ出し、みるみる内に扉が開いていく。

「またな、優太君。1ヶ月間本当に楽しかった。お互い、腰痛には  
気を付けよつな」

「ははは、そうだな。またな、拓真」

「香織さん、私が教えた男の子を完全にオトすテクニック、使って  
みてくださいね！」

「ええ分かったわ、それじゃ、またね口口ちゃん」

などと、それぞれ思い思いの別れの挨拶を交わし、10分後、漸く全員が扉をくぐりぬけていった。あ、ちなみに健悟達はその後、ラファエロさんが元の世界へ送つていったそうだ。

死神の世界 本編 終了

## 終章 死神と主神ゼウスと神々のお茶会（後書き）

はい、死神の世界編の本編が終りました！

これからは死神の世界を舞台に一、二番外編の予定です！

番外編 朝 拓真とサリィと純白の翼（前書き）

はい、約1ヶ月振りの更新です。

いやあ、予想以上にGOD EATER BURSTの武器やら何やらが豊富なもんだから、ついついやり込んであつとこいつ間に1ヶ月経っちゃつて……、小説が疎かに……。

今日は拓真とサリィの交尾とうぎゅうがメインです。ほとんどキスしてるだけ

後編も出来次第更新します、お楽しみに。

## 番外編 朝 拓真とサリイと純白の翼

ルファの襲来、あれから一週間が経った。

一週間が経つ中で、文化祭らしきイベントがあつたらしいが、あえて詮索はしないでおこう。

エリイ、サリイ、マリイのハーピィ三姉妹もよつやく生活に慣れてきたようで、人前でも平氣で抱き付くようになつた。

……香織がハーピィ三姉妹に変な事を吹き込んだな。きっと。

何はどうあれ、今日も平和な1日だ。

「ちよつ、口口！ いきなり抱きつくな！」

『ふにゃふにゃあ～』

「ちよつと待てみんな！ お願ひだから待て！ い、椅子が……た、倒れるっ！」

いやあ……、今日も平和な1日だよ、全く……。

次々と抱きついてくる女の子達の衝撃に耐えきれず椅子が大破。

みんなが怪我しないように椅子だった木片を粒子に変えるが、無論優太君は口口さん達に押し潰されるようになるため、打撲が絶えないとか。

その後は流れとして、口口さん達は自分の体重で自分の果実を押し付けて、さらに優太君の体のいろいろな所に唇をあてがい吸い上げられ、あつという間に気絶する。こんな事が日常茶飯事になつているのだ。

「うひつせよ」

早くも健悟は朝ご飯をほとんど平らげて出かける準備をした。

「どうしてんだ、健悟」

「お前には関係ないから」

優太君の質問に無愛想な感じに答えると、優太君の家を出て行つた。  
後々、心を読んでみたが、剣の素振りをしていたようだ。

練習熱心で宜しいこと

健悟君の僅かながら歿した。食はどうぞ。  
紅かむしやむしや食べていた。

……血分のを食へてゐる時。ニセモノには見えてるには僕のせいが多  
うか?

「おおひ、石真」

「香織が、おはよう」

俺達の寝室から、香織が寝ぼけまなこを擦りながら

「お、おい！ ななな、何だよその、はつ、裸同然の服はつ！」

ブランジャーもパンティーも着けずにスケスケのカーテンをそのまま巻きつけたような服装でリビングに現れた。

「ベジーダールって言つのみ。口口ちゃんから譲つて貰つたわ、コウタでやしたからタクマくんでも”つて。凄いでしょ?」

香織は胸をいつかの真理亞みたいに持ち上げ、強調する。

それだけで頭が真っ白になり、何でもやつていいような気分になるが、太ももをつねり上げてそんな気分を振り払う。最初からやつてしまふと後々辛いからな。

「は、早く着替えてー」い！ 朝っぱらから、い、いかがわしいも

の見せるな！」

「つれないわね……、まあいいわ、夜を楽しみにしてなさい」

そう言つて香織は再び寝室のドアノブに手をかけ、寝室へと消えて行つた。

あ、思い出した。優太君の子供達はこの時間、異空間の部屋で遊んでいる。

いくらリア充二代目と呼ばれる龍樺でも、まだ俺達や優太君達がイヤイチャしている所は見られたくないからね。

「おっはよ～！ たつぐーん！」

香織の次に起きてきたのは昨日のクエストで親しくなつたハーピィ三姉妹の長女、サリイである。

「親しくなつたって、よそよそしいなあ、あたし達は既に、こ・い・び・と、でしょ？ まさか、あんなことしてさあ、まだ赤の他人だと言つつもりなのかい？ ん？」

「いや、その、……すみません」

なんかやるせない気持ちになり、顔を逸らす。

サリイの目がキラリと輝いたと思つたら、いきなり頬に唇をあてがい、思いつ切り吸い上げたのだ。

頬を吸い上げられているのに、全身がむず痒くなり、ふるふると震え出す。

それからおおざつぱに数えて十秒後、サリイは唇を離し、俺の顔を

凄くキラキラした目で見てくる、俺の顔に何かついているのか？

「やうだよー！ たっくんのほっぺにあたしのキスマークがついているんだよー なんか興奮しちゃってさあ、もつとキスしていいよ？」

ちょっと待てと左手でサリィにアイアンクローラーを繰り出し、右手で手鏡を創造してさつき吸いつかれた左頬を確かめる。

……うん、サリィのキスマークがついているね。しかもはつきりと。俺はすっかり脱力し、両腕をだらんとする。

「ふはあ！ し、死ぬかと思ったあ！ 息が出来なかつたんだからな！ お詫びとしていっぱいキスさせるのは礼儀つてやつだよね！」

？

サリィが凄く凶悪な笑みを見せる。齧されているんだなあ、俺。

「……好きしてくれ、今の俺にや抵抗する気力はねえよ」「じゃあ、いっぱいするからな、もし止めてって言つても止めないからな！」

サリィははつきりと膝に跨り、はつきりと笑う。

……正直かなりドキッとした。いや、香織とのファーストキスよりかはマジだよ？あの時は心臓飛び出たかと思つたもの。そしてサリィはゆっくりと唇を突き出す。

柔らかそうで形のいい唇はゆっくりと近づき、俺の唇と重なる。その際、サリィは舌を入れ、とてもないテクニックで俺の何か、……何かはつきりとわからんが、何か大切なものを奪われているような気がする。

そんな風に思つていいと、いきなり唇を離し、ニタアと笑う。

……怖い。原始的な恐怖が心を掴む。

「やうでしょ！ やう思つひやうでしょ！？ 何故なら私は理性を奪つてゐるからね！」

理性？ そんなの意図的に奪える物なのか？

「じゃあさ、あたしもつと凄いキス知つてるんだけどさ、あたしとしてみない？」

心の中の自分に問いかけてみる。

.....。

「じゃあ……、少しだけ……」

「ほり、やうぱり！ いつものたづくんならきつぱじに断つてたよー！  
まあ、それが本心だからねえ？」

再び凶悪な笑みを見せる。これ以上俺に何を望むのか。

「よくぞ聞いてくれました、あたしさぎゅーっと抱きしめて欲しいの、あのキスは感情の高ぶりに任せて思いつ切りぶちゅちゅちゅちゅうつってやつちやうつだから

それが凄いキスの内容なのね、果たしてそれは本当に凄いキスなんか？ と疑問が生じたが、そんな小さな疑問はサリイを抱き締めたいという衝動に上書きされ、次の瞬間がぱつと抱き締める。

「ふあああああああつーーー、あ、キタアアアツー！ 今、この瞬間、

たっくんに思いつ切り抱き締められているうつうつ！　あ、ああ、

嗚呼！！　あたしの中に、愛が！　たっくんの愛が満ち溢れていく  
う！　好きつ！　嗚呼、好きよ！　大好きつ！！　」の感情の高ぶ

りが、留まることをしらなによおお！…

「俺もだつ！　サリイの愛情がひしひしと感じじるつ！　好きだつ！　

サリイ！

感情の高ぶりが頂点に達したのか、サリイの唇に自分のそれを押し付ける。

サリイも始めは動搖したが、だんだん感情が高揚し、ついにはサリイも舌を入れる。

二つの舌が淫猥な水の一重奏を奏で、それがただただ聞こえて來るのだ。

聞こえて來るつてのは、優太君の妻達、その大半のメンバーがロームラル力城に出掛け、紅さんはサリイが頬に吸い付いた時から気絶。優太君はたまたま休みだつたミーノ姉妹に連れてかれて自室で襲わ  
れている模様、その息子達は異次元の部屋で遊んでいる。

口口さんはクスクスと聞こえてこない程度に笑いながら、洗い物を終えて觀察し、香織達は未だに起きてこない、と音源に成りうるものが無いからだ。

……くちゅ、ちゅむ

まずい、これ以上キスを続けると……つ！　おかしくなる！　でも

……ずちゅつ、れろれろ

どうこうワケだがやめられない！

そつ思つた瞬間、何かがブチリと音を立てて切れ、次いでサリイの大福を彷彿とさせる柔らかな胸を驚掴みにし、ガシガシと揉みしだく。

サリイは吐息に嬌声を交じらせ、なんとか口を吸っていたが、だんだんと耐えられなくなり、遂には唇を離し、嬌声を上げて悶え狂う。

「お乳を揉むのは反則だよー!! たっくんにお乳が当たつだけでドキッとするのにー! もみもみされたらもう悶えるしかないよおーー!!」

「……?? まあいいや、それよりもさつき、俺の中で何かが弾け飛んだんだ。つまり、俺は俺じゃなくなってるから、そこんとこ、ヨロシクッ!!」

言下、サリイ達の一張羅である緑色のワンピース、そのバスト部分を腰のところまでずり下ろし、次いで俺の指がサリイの巨乳の先にあるピンクの部分をつまんでいた。

つまんなどんじゃない、つまんでいたんだ。

俺の中にあるもう一人の拓真が暴走を始め、体を乗つ取りサリイの乳首をつまんだのだ。

……責任丸投げしてもいいよね?

「あひあうー やこはつまんじゃダメえ！ そんなことされたら、あたし、ダメになっちゃう

サリイの悲痛な叫びにいたずらしたくなつて、サリイの大きなお乳に顔を近づけて、そのままチロチロと舐め回したり吸い付いたりする。サリイはますます悶え、遂には叫び出す。

「ひやああああー もつだめ、あたし、いつちゅうからあああー、

「つ叫んだ後、サリィは『やつになり、背中から純白の翼が生えた。

「へへ、たっくんでいつたら翼が生えてきたやつた、あの時は生えなかつたのに」

「えつと……、今のサリィちゃんはハーピイ？ それとも天使？」

「わかんない。でもたっくんが好きなら関係ないよ、あとわつきはよくもイかせてくれたね？」

そう言つと、サリィは背中の翼で俺を包み込む。

体の一部ではない、俺の全身をすっぽり包み込んだのだ、腕ほどもないその翼でだ。

「ああ、何故？ つて顔をしてるね？ でも残念、あたしもわからないんだ。まあ、でもこうなったからには覚悟しなさい？ 何度も、何度もたっくんが果てるまであたしの中でたっぷりとイかせてやるから」

言ふと、サリィは思い切り抱き付いて

じぱらむ待ちださー

「覚醒の雨」

ぼやけた意識でそのような声を聞いた気がする。次の瞬間、上から大量の熱湯が降り注ぎ

「つあつちやちやあひあああー」

俺の意識は完全に覚醒した。

「なにすんだよ！　俺なんか悪い事したか！？」

回答は魔法だつた。香織の魔法、突風の槍【プラスチスピア】が顔面に直撃、幸い顔面に風穴は穿たれなかつたが、他の誰かだつたら確実に穴が開いて即死だつただろう。

さうに香織は一言、

「一回死ねつ……」

……お前が三回死ねよ。

そう思つた直後だつた。ガスガスガスッと後方に轟音、見れば後ろに巨大な穴が無数に開いていた。相当立腹のようだ、香織の奴は。……つてか、さつきの熱湯は一体何なんだ？

「言つてやんなさい、愛子」

「…………覚醒の雨…………情事に溺れた人の為のお仕置きバージョン…………」

香織が指示し、愛子が頬を朱に染めながら説明する……、どうやら熱湯の魔法は愛子の魔法らしい。

「その言葉から察するに、俺はサリイにメチャクチャにされていたんだろうな。で、そのサリイはどうなつた？」

「もちろん、私が厳重なお仕置きを下したわ。あそこまでメチャクチャにされると私の立場が無いからね」

うんうん、とひとりでに頷く香織、相当犯されていたんだな、俺。

「あ、私達今から買い出しに出掛けるけど、拓真も行く？」

「何を買うんだ？俺は行かねえけど」

「服を買うわ。エリイちゃん達のね。あの子達、若草色のワンピースしか持っていないじゃない？」

確かに、一週間ずっとあのワンピースだつたつ……。

「だから、みんなの服を買うと同時にエリイちゃん達の服を買つてあげようって話になつたの」

「ふーん、そう、よく分かつた、分かつたんだけど、ドアの影に隠れている人は何？」

俺が扉に向かつて指を差すと影に隠れている人の一人がビクッとなり、その後続々と女の子が扉の影から現れる。

「お前ら……、何がしたいの？」

『行つてきますのキス』

なんとも素晴らしいコーラスだ、が、内容は最悪だ。

「良いじゃない、ダーリン、キスくらい」

「やつぱり、しなきゃダメ？」  
『もううん』

はあ、とため息を吐きみんなに“行つてらっしゃいのキス”をしてやる。まあ、偶然最後だった桜はガマンできずに襲つたけど。そのせいで桜は再起不能になつたが。

でもつて再起不能になつた桜を寝室で寝かそうとするが……、

「やーつー！ 見ないでえええーー！」

サリイが首輪で壁に釘付けにされ、全裸でM字開脚している場面に出くわした。

「ふええん……、あたしもうお嫁にいけないよ……」

「……いや、俺がもらうことによりはないが」

サリイはその言葉を聞いたとたん、すぐに泣き止み顔をきらめかせて問いかける。

「……本当に？」

「もちろん」

サリイは涙を浮かばせながら、「大好きー！」と叫び、純白の翼を広げた。

それと同時に桜が復活し、ぴょこんと立ち上がる。次いで桜は今のこの状況に驚いた。

「うわ！ 真っ白な闇です！ 何も見えません！」

その声を聞いてサリイは桜の存在に気づき、

「へえ、さくちんも一緒かあ……じゃあ、一緒にヤラうつよ

と、桜に対して言った。

桜はそれを聞いて急に服を脱ぎ始めた。

「桜！？ なつ、何服を脱いでいるんだ！？」

「いえ、ここは脱がない方がおかしいんです。早く脱がないと私が

脱がせますよ？」

テンパつてゐ俺に対し、恐ろしそうに落ち着き拵つてゐる桜。しかも桜は今、とんでもないことをさらりと口にしたからなー!? とりあえず急いで服を脱ぎ捨て、すっかりと全裸になつた。

「うんうん……じゃ、次はここきて交わって」

いきなり交わつてと言われてもなあ……、とりあえず近づき、深呼吸をする。

「……早く、ヤツてよお」

「私も忘れちゃダメです！」

「はいはい、わかりました。やればいいんだろう? やれば

こうして、香織達がお買い物に行つてゐる間、俺と桜とサリィとでたくさん交わりました。

「た……、ただいま」

「お疲れ、どうだつた?」

「腰がイタイ、の一言に切れるよ、せつちゅ?」

「俺もだ。いや、俺は年中痛いな」

俺と優太君は同時にため息をつく。

「女の子は傷付けちゃダメって言われても、一人同時はマズいな」「いや、俺は毎日八人同時にやつてるから。さつきだつて口口口とう

ルとフロルとで三人だ

想像してみよう、相手はハーピィ三姉妹。

.....。

「エリイ達に一方的に犯されるね。うん、間違いなく  
「ははは、そうか、まあエリイ達だもんな！」

ははははは、と笑う俺と優太君。

その時、扉が開き健悟が帰ってきた。

「今戻った

「おかれり健悟、お前はどうだった？」

「.....まあ、ぼちぼち

健悟はそそくせと立ち去ろうとするが、優太君が呼び止める。

「まあ、話でもしないか？　どうせ暇なんだし」

「それもそうだな」

健悟はテキトーに近くの椅子に座り、女の子達が帰つてくるまでの会話を交わる。

.....が、あまり会話が弾まず、あまりにも気まずい雰囲気が香織達が帰つてくるまで続いた。

番外編 朝 拓真とサリイと純白の翼（後書き）

いかがでしょうか。

次回は焰野さんリクエストのお買い物、EDEXさんリクエストの口り百合を組み込んでお送りします、お楽しみに。

番外編 曙 死神の妻とお買い物と亜人との交戦（前書き）

えーっと、戦闘描写を入れてみたところ、また分けることになりました。

……とにかく計画通りにならない自分の人生。

## 番外編 曙 死神の妻とお買い物と世人との交戦

拓真達が気まずい雰囲気で香織達の帰宅を待っている頃、その香織達はとある街道のとある店で服を買っていた。

「あの……、どうでしょつか？ 似合っていますでしょうか？」

「うん！ 面く似合つてこるわー マリイ！」

マリイと呼ばれる少女、否、ハーペルはドレス姿ではにかんでいた。

「さすがは口口ちゃんのチヨイスね、凄くカワイイ服ばかりで且  
移りしちゃうわ」

「でしょ？ やらしく、ここには魔法薬も売つててさ、暗示薬、睡り  
薬、惚れ薬などよりどりみどりなのー あと、……ちょっと耳貸し  
てね……、『じこじょ』『じょ』

口口は香織になにか囁き始めた。

恐らくは何かアブナイ話なんだろう。

「ええ！ 退化薬！？」

「しつ！ 声が大きい！ 通称が“ロリツ娘薬”って言つんけど、  
ここ最近、禁制の品になつてゐる。ここで売られてることを知られ  
たらこの店が潰れちゃうから、大きな声で言つちゃダメ。分かつた  
？」

「う、うん。分かつたわ」

「そんなことより、次は私の番よ、わあ、この私の可憐な姿に刮目  
しなさい！」

しゃつ、と顔を立て試着室から姿を現したのは、チャイナドレスを

身に纏つたハーピィ、エリイであった。

エリイは「どうだ、お前等の美貌も私の前では色あせるのよ」と言わんがばかりに思いつきり胸を張る。

すると香織が近づき、チャイナドレスの切り込みから覗く生足を頬擦りし始める。

「凄いわ、凄すぎるわエリイ、あなたのチャイナドレスの切れ込みから覗く、その生足がとてもおいしそう」

香織はエリイの足を舐め上げ、恍惚とした表情になる。そのエリイは背筋が凍り付き、顔が真っ青になり、後退りをしようとすると、香織がそれを許さない。

「なんで逃げるの？ もしかして、私のこと嫌い？」  
「いや、そういうわけじゃ」

エリイがそういった瞬間、香織はエリイを押し倒し、服を脱がし始める。

「ちよっと、香織さん、これは売り物」

「いいのよ、紅さん。お金ならいくらでもあるから。わあエリイちゃん、私が本物の女子にしてあげるから」

その直後、香織はエリイの脣に自分のそれを押し付け、口内、舌先、その他諸々を舐め始める。

その様子を見てしまった紅は顔を真っ青にして震えていた。

女の子同士で破廉恥な事をし合つとどこかで聞いたが、まさか実在していたとは！

紅は一、三歩後退り、尻餅をついた。  
それくらい衝撃的だつたのだ。

「ひあつ、やつ！ ちよつと！ そんなとこり舐めないでくれますかつ！？ 私が、私じゃなくなるわつ！！」

「あなたも私を散々舐めまわして私をおかしくさせたじやない。今度は私が舐めまわしてエリイちゃんをおかしくしてあげるから」

直後、香織は自らの衣類を脱ぎ捨て、エリイに覆い被さる。試着室は店の端っこに設置されているため、端から見ればエリイの足がバタバタ暴れているのが見られるだけなのだ。

「好きよ、エリイ。とつても愛おしい、私が残さず食べてあげる」「力オリ様に食べて頂けるなら私……、ひあつ！ くつ、くあつ、ん、んんっ……、ダメ！ やつ、あつ、あん！ イヤつ！ ひやつ！ あ、あつ、はん！ なんかくつ！ うつ、やつ！ やああああ！」

「あ！」

さつきまでバタバタ暴れていたエリイの足が、嘘みたいに動かなくなつた。

この状況を知る紅以外のメンバーはいつしかつたのね……、と溜め息をついた。

一方、紅はまわりのメンバーと一緒に溜め息をついたため、ますますわけが分からなくなり、涙も流している。

「一体、エリイさんの身に何があつたの？ なんでエリイさんは動かなくなつたの？」

「純潔な紅ちゃんには……まだ早いよ……、それより、紅さんは買う服決めたの？」

「はい、私はこの服を買おうと思こます。……ビーフドショウつか」

紅が取り出したのはピンク色のリボンが随所に施されたドレス、と愛子以外は全員笑つてしまふほどノーマルだった。

「ふつ、あはははは！ 紅さん、あなたはオシャレといつたらドレスしかないんですか？」

「いやつ、でも」

「皆まで言わなくて良いわ、眞のオトナファッショソを知らない紅さんを私達がオトナっぽくコーディネートしてあげるから」別にファッショソに疎いわけじや、という紅を強引に香織のいる試着室の隣りの試着室に押し込め、稜が採寸（バスト、ウエスト、ヒップに直接触る、セクハラ以外の何物でもないやり方）をし、紅に合うサイズの多種多様な服を試着室に無理矢理押し込め、一着一着脱がせ（自分で脱ぎます、と囁ひ紅の抗議を全て無視）、着せかえていく。

そして、試着室のカーテンが开かれて、愛子やマリイ、口口は言葉を失う。

「！」「これは何？ これがオトナ？」

「オトナかどうか知らないけど、赤ずきんちゃんの服です。うん、実に清楚。清楚な女の子はオトナになつてもモテるよ」

赤ずきんちゃん。自分が童話のコスプレをしてることが恥ずかしく思つ紅、そんな紅に真理亜は追い打ちをかける。

「ダメよ、男の子は乙女の素肌が好きなの、だからそんな素肌が1mmも出ていない」「一ディネートは誰一人興奮しません。むしろブーイングの嵐ね、私ならこうするけどね」

真理亜は再び試着室のカーテンを閉める。

その三分後、試着室のカーテンが开かれ、これまた言葉を失う。

「！」「こんな露出度の高い服、恥ずかしくて着れません！」

「それがいいんぢやない、慣れればみんな自分に注目してるので優越感に浸れるわよ？ それに、その格好でアピールしてみなさいよ。ベッドにお持ち帰り、そして淫猥な……」

「健悟はそんな軽い人ぢやない！」

「ビスチェはダメです！ 過激すぎて田に毒です！ 私に任せて下さい！」

このループが三回繰り返され、着せかえ人形と化した紅は遂に氣絶してしまつ。

「あ～あ、氣絶しちやつた。まあいいや。それにしても真理亜さんは買う服、決めたんですか？」

「ええ、私はこれでダーリンを誘惑するわ」

真理亜は既に精算を終えていた様子で、胸に大きなスリットを施され、背中は大胆なまでに露出しているスパンコールのドレスを身に纏っていた。

「見えそうで見えないのが世の殿様方を欲情させるの、この服で街を歩いたら大概の殿様方は振り向くわ」

「その殿様方があまりいないのがこの国なんだよね」

口口のその言葉に真理亜は異常なまでに反応し、色々とリアクションを取るが最終的には大きな溜め息をついた。

「はあ、行く人来る人女の子ばかりだつた理由が分かつたわ……、やっぱり殿様方はいなかつたのね。はあ、ダーリンはこの服装を見てどう思うかしら？」

「とっても大胆な服だと思います」

その声を聞き、真理亜を含む買い物メンバーは一斉に声がする方へと振り向く。その影は

（拓真 side）

一方、あまりの気まずさに耐えかね、香織や口々さんもいないことだし、龍樺達を呼び戻すか、って話になり、呼び戻した。そのお陰で気まずくは無くなつた、が、逆に少しやかましくなつた。

「ねえねえ、けん！」  
「ん、どうした？ 何か俺に用か？」  
「受け答えが少し刺々しいよ、健悟。で、何かな？ ……未亜ちゃんに、……夏那ちゃん」  
『赤ちゃんがどうやってできるの？』

言葉を失う健悟と俺。

そりやそうだ。あのアダルトな単語の数々をどう表現すればいいか分からぬものね。

「なんで俺にそんなことを聞く？」  
「だつてお父さんに聞いたら『大人になれば分かる』ってあいまいなこと言つて『まかすから……』」  
「そうか、拓真、俺の代わりに答えてやれ」  
「ええ！？ ヤダよめんどくさい、……いよいよ、やつてやるよ。どうせ純潔な健悟くんには自重音が入るような事は言えやしないものね。……………」といつわけだから、チョリーな健悟君の代わりに俺が答えてやるよ。いいな、心して聞けよ、一度しか言わないからな

固唾を飲み込む未亜ちゃんと夏那ちゃん。

自分達の知りたかった事柄について知ることができるので期待の眼差しで見られている気もする。

ハツキリイツテ、カナリメンドクセニア。

「いいな、赤ちゃんはな、キスし続ければいつかはできるんだ。ざつと十年くらいはするよ!」「

『うん! 分かった! でもどんなキス?』

これを言葉にすることは難しい。

実演することにした俺は桜を手招きし、呼び寄せた。

「はい、どうしましたか? 拓真さん」

「ああ、ちょっとね……、じゃあ一人共、今から俺が桜お姉さんにキスをします、これはほんの一例なので、どうキスするかは任せます。……じゃ、いくよ桜」

「はい」と桜、思い切り深呼吸をし、桜の唇に自分のそれを押し当てる。

桜は最初ビクツとなつたが、最初だけで次の瞬間からは身を預け、舌まで入れてきた。

フレンチキスで終わらせるはずだつた俺は逆にビックリし離れようかと思ったが、気分が高揚して来て、『もっと濃厚なキスがしたい』って衝動に駆られた俺は、桜を抱き締める力を強め、桜よりもっと深く舌を入れて桜の口内、主に舌を執拗に舐めまわした。

三分後、ようやく満足した、俺と桜は唇を離し、荒い息の中で説明を再開する。

「はあ、はあ、これが、キスの……、ほんの一例……です」

「うん! 分かった!」

言下、未亜ちゃんと夏那ちゃんは龍樺に向かって突進し、同時に抱きついて同時に両頬にキスをした。

龍樺は完全に同様し、「ふえええ！？」と叫声を上げる。

それが起爆剤になつたのか、みんな一斉に抱きつきキスをする。

「……いいのか？ あれで」

「いいんだよ、道を違わなければ」

「あれは当分続きそうだな、微笑ましい光景ではあるけど」

「それよりも、拓真さん、私、ムラムラとしてきちゃつたみたい、昔はみんなから清楚って言われていたのに、今じゃ拓真さんにすぐ欲情しちゃう、拓真さんって麻薬みたい、のめり込んだら戻れなくなるし、人格形成も変えてしま」

「分かった、分かったから、相手してやるよ。転移【テレポート】

健悟と優太君は龍樺君が女の子達にいっぱいキスされる様子を遠巻きに見つめていくことにした。

俺は不運にも欲情してしまった桜の相手をするために、寝室で桜の相手をしてやつた。

……お陰で腰が痛い。

拓真 side out

「大胆な服だと思います」

場所は戻り、再びとある街道のある店にて、真理亜の背後から何者かの声が聞こえた。

その声の主は

『拓真！？』

そう、拓真であった。

拓真は少しほにかみながら、

「いや、服が欲しくなつたからね」

と真理亜達に聞こえるように呟いた。

稜は目をキラキラと輝かし、「おにいちゃん！」と駆け出しが、真理亜が制止をせる。見れば真理亜は不審そう顔をひそめているではないか。

真理亜は囁くよつ稜に言い聞かせる。

「待つて、拓真の様子がおかしいわ。目の奥にやらしい炎が見えるわ。普通の拓真なら純粹で真っ直ぐな氣高い炎が見えるはずよ、どんなに欲情していてもね」

「真理亜さんつて目の奥の炎で人が分かるんですね、つてか目の奥の炎が見えるんですね。私には何も見えないんだけど」

「私は火の使い手よ？ 当然じゃない、今から拓真が本物かどうか確かめるから」

「どうやってですか？」

「ひやつてよ。『鎗炎』！」

直後、真理亜は拓真に向かつて腕を突き出し、鋭い炎を拓真に浴びせる。稜は悲鳴を上げて、「おにいちゃんに何するの！」と叫ぶが、再び真理亜は制止する。

「やつぱり、この拓真は偽物よ」

「どうしてそんなことが分かるんですか！」

「もし、拓真が本物なら、瞬時に烈火の障壁【ブレイズシールド】を張つて私の炎を吸収したはずよ。正体を現しなさい、そして私の気が変わらない内に視界から去るのよ」

さつきから炎に包まれている拓真、否、拓真の紛い物は、表面の擬態用の皮膚が燃え尽き、見るも冷酷そうな青い皮膚に変わる。

「うわっ、擬態用の魔法服がつ！　ええい仕方ない！　力づくでもヤつちまえ！」

さらに数人、青い皮膚の亜人が現れ、一斉に襲い掛かる。

「物分かりの悪い子は嫌いだわ、獄炎傀儡！」

突如、地面が揺れ動き、亜人の動きが止まる。  
そして、先程拓真に擬態した亜人が断末魔を上げながら炎に包まれ、呼び寄せた亜人に襲い掛かる。

「覚悟してね？　この魔術と敵対して生き残った者はいないから」

言下、炎に包まれた亜人が爆発し、その亜人は木つ端微塵に吹き飛ぶ。

「この魔術は一つの生命を触媒として発動する禁忌魔術、アナタ達には過ぎた魔術だわ、でもね　」

真理亜は一度言葉を止め、深呼吸をする。次いで、真理亜が今までに誰一人として見せた事ない程の怒りの表情を見せる。

「最も愛する人で欺こうとした怒りが下賤なアナタ達にこの魔術を使わせたの」

真理亜が言葉を続いている間に巨大化していき、ついには5Mを越える巨体になつた炎の傀儡子は雄叫びに似た咆哮を放つ。

青い皮膚の亜人はそれだけで臆病風に吹かれたみたく後退りをして逃走を試みるが、真理亜はそれを許さなかつた。

「誰一人として逃がさない、拓真の姿を真似た怒りをぶつけまるまで、死なせない！」

炎の傀儡子が拳を振るう。亜人の一人が拳に呑み込まれ、一瞬で燃え尽き跡形も無くなる。

それを見てもう一人の亜人は胸にぶら下げていた笛を思い切り吹く。次いで真理亜の傀儡子が放つた炎球で爆発と共に蹴散らされた。

「真理亜さん！ 落ち着いて下さい！ 敵は全滅しました！ 魔術を解除して下さい！」

「分かつてゐる、分かつてゐるけど、……制御出来ないので！」

言下、真理亜の傀儡子が遙か遠方の山脈目掛けて『ガイアフォース』みたいな巨大な炎球を投げつけ、炸裂し、山脈が消える。

「お願いよ、稜。あなたの解除【ディスペル】でこの魔術を解いて！ この城下町に被害が出る前に！」

既に真理亜の傀儡子は山脈を消し飛ばす程の炎球を頭上にチャージし終えている。

稜はすぐさま呪文を詠唱し、解除【ディスペル】を発動、炎球諸共

傀儡子は消え去り、真理亜も緊張の糸が切れたのかその場にへたり込む。

「危なかつたですね、真理亜さん、街に被害が出たら、危うく牢屋行きでしたよ」

「そ、そうね……」

二人が安堵の一息を吐いたのも束の間、今度は青色の皮膚を持つ亜人が無数に現れる。

「わっ！ わわっ！ たくさん出てきた！ 真理亜さん！ セツキの魔法をもう一度お願ひします！」

「無理だわ、あの魔術は無双の強さを誇るけど、そのリスクとして、丸一日魔術が使えなくなるの」

真理亜がそう言っている間にも、青色の皮膚を持つ亜人はジリジリと近づいてくる。そして、先頭の亜人が飛びかかる！  
もうダメだと稜が諦めた、まさにその時、横から圧縮された水のレーザーが亜人を貫き、屍となつて稜と真理亜の眼前にじさりと落ちる。

何事かと水のレーザーが飛んできた方向を見やれば

「なんや、愛する義妹がピンチに晒されると思えば、これほどまでにひどいとは……、手貸すで」

紅音を初めとする、香織の姉達が皆それぞれ艶やかな姿で立つていた。

「あら？ 香織の姿が見えないわね」

「あ、香織さんならわざからHoriyaさんと試着室でへんなりしゃつてます」

「分かったわ、ありがとうね紅ちゃん」

楓はいつの間にか意識を取り戻した紅に礼を述べた後、嬌声の聞こえる試着室の前で足を止め、カーテンを開け放つ。

「香織！ いつまでレズつてこらつもつなの？」

楓の一言により、香織は正気を取り戻し、ピシッと立ち上がる。

「は、はいっ！ 楓さん！」

「今、表で何が起こつているか、分かっているかしら？」

「わかりません……」

「でしきうね、こんな閑ざされた所で女同士のシックスナインなんかやつてるあなたには、わからないでしきうね」

「すいません……」

うなだれる香織、楓はこれ以上の追及をせず、香織の頭をぽんぽんと軽く叩き、にっこりと笑って見せる。

「うん！ 反省してるなら良し！ わあ、これから愛すべき義妹である稜ちゃんを救つてあげなさい！」

「はいっ！ 香織お姉様！」

香織はしわくぢやになつた、ピンク色したいつものTシャツと黒いフリルのスカートを自分の風魔法で乾かし、表に出る。「加勢するわ！」

「おう、香織が、流石に俺一人じゃ何ともならないと思つていたんだ、よつとー 十四獣の足跡【ベビモススタンプ】ー」

詩音は先程転ばせた亜人目掛けて棍棒を振り落とす。亜人はバラバラに吹き飛ぶ。しかしながらその余力で街道がひび割れ、地割れなんかが起きて（と、言つても後々拓真が全部直したが）亜人に動搖が走る。

「影の鉤爪【シャドークロ-】」

「激流の巨砲【トーレントキャノン】！ 嘘らいや！」

「これでも喰らえ！」

「てえええい！」

「……滅びの雨」

「輝光の飛刃【シャインエッジ】！」

詩音以外のメンバーも張り切つているらしい、影の爪で攻撃したり、激しい水流をぶつけたり、炎の矢を放つたり、稻妻を落としたり、酸性雨を降らせたり、光の刃を放つたり……。

香織もある魔法を発動させるため、ルーンを詠唱する。

「出でよ、すべてを凍てつかせる氷の巨龍よ、その力を以て全てを凍てつかせ！！ 氷結の飛龍【コールドドラゴン】！」

直後、香織の眼前に魔法陣が表れ、密度の高い氷で作られた龍が現れる。香織は更に詠唱を続ける。

「我が氷の龍よ、我と己に仇なす者に永遠の孤独を与えよ、絶零の息吹【フリーズブレス】！」

香織の召喚した氷の龍が咆哮する。

亜人は竦み上がり、逃げ出そうとする者も出るが、その前に氷の龍はブレスを放ったため、全ての亜人は逃げ出す前に氷の中へと閉ざ

される。

「止めよ。突風の矢雨【ブلاストレインアロー】」

香織は真上に手を掲げる。香織の上の空気が揺らぐ。先刻拓真に放った突風の鎧【ブلاストラーンス】を一回り小さくした物が次々と降り注ぎ、氷に閉ざされた亜人を穴だらけにする。

「爆ぜろ【バースト】！」

言下、氷塊が粉々に砕け、亜人は跡形も無くなってしまった。

「終わりよ、さあ、拓真達の所へ帰りましょ」

「そうだね、例のアレも買つたし……、夜が楽しみ

「例のアレって何なの？」

『純粹な紅ちゃんにはまだ早いわよ』

その後会計を済まし、一樹や海斗、ジュディやメアリーと合流して拓真達の待つ優太宅へと歩みを進める。

因みに、青色の皮膚を持つ亜人は、小さな異次元の歪みから出てきたモンスターの一種らしい。

その歪みはどうに消滅しているが。

何はともあれ、一樹達が先に玄関へと入り行く。

その中、香織と口口はアイコンタクトを取り、凄くニヤケる。

これから繰り広げられる淫乱な宴を妄想し、薄ら笑いが止まらないのだろう。

香織や口口には極上の喜びの、拓真や優太にはこれ以上ない苦しみの夜が幕を開ける。

## 番外編 曙 死神の妻とお買い物と亜人ととの交戦（後書き）

次回こそは、本当に、口リツ娘の、百合シーン入ります。  
どうぞお楽しみ。

包み隠さず表現すべきか、オブラートに包んで表現すべきか……  
なるべく早く更新しますね。

以下、次回予告。

オッス、オラ拓真。悟空じゃないぞ、拓真だ。  
家で優太君の子供と戯れていた俺は、香織や口口さんの帰宅を知る。  
にやにや笑う香織と口口さん、一体何が目的なんだ？  
うわっ！ 香織よりも背が低くなってる！ しかも大事なアレが無い  
い！

次回、番外編 夜 幼女とレズの危険な化学反応！  
く、来るなあつ！ 香織！

## 番外編 夜 ロリヒ娘の危険な化学反応（前書き）

死神の世界編、遂に最終回！ 最後はやつぱり、ピンクです！

これでもうつべらいで濃縮100%、超濃厚なピンク、80%〇バ  
ーです！

進むにつれてグッダグダになつていくのは目を瞑つてネ……。

拓真「もうこれって富士見ファンタジアの猫娘とかヤングマガジン  
の淫乱姉妹を大きく上回つたんじゃねえか？ もはや殆ど十八禁…  
…」

だが後悔はしていない。

拓真「しろよ！ あー、今回は今まで以上に露骨で、ガールズラブ  
要素満載です！ キャラ崩壊も否めない為、上記三つで一つでも嫌  
だなあと思う方は、戻るキーを押して下さい… ショック死します  
！」

焰野さんすみません、今回、健悟登場しない上に最後の最後に紅と  
美由紀が出るだけの見事にチョイ役です。

EDEXさんにもすみません、色々とキャラ崩壊してしまったか  
もしれません。

## 番外編 夜 ロリとレズの危険な化学反応

『ただいまー!』

香織や口々さん達が帰ってきた。龍樺君も愛する母親が帰ってきたためか、さつきから頬や脣、更には胸板まで吸い続いている愛美から逃げ出すためなのか定かでは無いが、上半身裸で所々にキスマーケが付いている状態で口々さんを出迎えた。

「おかえりなさいー！　おかあさん！」

「ただいま龍樺、……あれ？　私がいない間に何があったのかな？」

龍樺

「あう……、さあついに夏那ちゃんと、未亜ちゃんが、ちゅつてしまひ、そのあとに、みんながちゅつてしまひ……」

そう説明している間にも、愛美を筆頭とする優太君の娘達が近づいてくる。

そして、龍樺君は抵抗すら出来ずに捕獲されてしまひ。

「つかまえたー！　たあおにこちゃん、いじくつしましょー！」

「ダメー！　りゅうかはわたしと一緒にじくつするのー！」

「あの、その……わたしどうたら、たのしこよ……」

「…………（ギコッ）」

「りゅうかはわたしのものです、いじくつはわたしのきょかをどるです」

「りゅーちゃん、いつぱこちゅーしていじくつもみつけられぬ」

「りゅうか、わたしどちゅーをするんだ」

「ふにゅー。りゅー、ほっぺたがいい？　それともおへりー？」

などと、口々に舌葉を並べながら唇や頬、更には胸板まで吸い付く。

「どうしたの？ みんな？」

『たくまおにじさんかじゅうねんくら』、わすしつづければ子供がつくれるつていつたの』

口口はじばりく睡然とするが、すぐに夜ご飯の支度を始めた。

「一樹から聞いたぞ、襲われたんだってな」

「ええ、まあ私が全部片付けたんだけどね」

どうだ、すごいだろう。あんたとは違う次元に私はいるのよ、と言わんばかりに胸を張る香織。なんとなくイタズラしたくなり、ふにつとついてみる。

案の定、顔を赤らめ胸を押さえ、「バカ！ デスケベ！ ヘンタイ犬！」などと罵声を浴びせる香織。

「『めんじめん、触つて欲しいかと思つたよ』

ちゅうひんの時、

「みんな～！ 『飯が出来たわよ～』

と、口口セラ。今日はやけに出来るのが早いな……。

まあ、腹が減つてたから別にいいんだけどね。

俺は「待つてました！」と言いながら席に着き、並べられるのを待つた。

「はいはい、随分とお腹が減ったのね、拓真さんは」

「ええ、子供達とハチャメチャに遊んでいましたから

「嬉しい、そういえば拓真も将来的には子供を作るでしょ？ 作る」としたら何人？」

「そうだな……、子供は欲しいよな、子供は愛の結晶だとか言つしね」

「そうだね、私たちも優太と肌を何度も重ねて、生まれきた愛の結晶だもの、龍樺や愛美達を見ていると、その子に対する愛だけじゃなくて、優太に対する愛も滲み出でてくるものよ、で、どうするの？」

「一人ずつは欲しいかな」

「お盛んなこと」

「やかまし。人の事言えんのかよ」

「愛があるからいいの。と言うわけで今日はちょっとしたフルコースディナーを作つてみました、召し上がり」

なんとも美味しそうなフルコースが次々と並べられる。

なんか知らないちょっと苦い野菜のサラダ、パンが浮いたコーンスープ、柔らかく煮込んであるラム肉、甘い匂いを漂わすプリン、そして

「なんで優太君のと俺のだけ紫色してるの？」

香織や口口さんが白ワインなのに赤くお世話になつてゐるからそのお礼白とも取れない不思議な紫色っぽいワイン。

「いやあ、優太と拓真さんには凄くお世話になつてゐるからそのお礼としてちよつと奮発してみました……なんて」

ははは、といかにも怪しい笑顔を見せる口口さん、腑に落ちないため、香織に聞かれるのを覚悟でテレパシーを使う。

(優太君、聞こえるか？ 賴むが、先にそのワインっぽい何かを飲

んでみてくれないか？）

（ああ、でも何で？）

（ちょっとね、悪い予感がするんだ。いかにも怪しい薬！　つて感じじ）

（気のせいじゃないのか？　拓真らしくない、どうした？）

（いや、ただの思い過ごしか？　スマン、忘れてくれ）

優太君、不審そうに眉を潜めるも、すぐ口へらへらと笑い出し、ワインっぽい何かを飲み干す。その瞬間に異変が起きた、机に突つ伏したのだ。

優太君はゆっくりとこちらを向きながら、途切れ途切れの心の声で訴える。

（た……くま、お前の予感は……ただし……かつたな……）

（優太君！？　どうしたんだ！？　優太君！？）

そう呼びかけている間にも、優太君は白眼を剥いて氣絶した。

「ぎやあああ！　優太君が！　逃げるぞ、ああ、逃げるぞ！　何されるか分かったもんじゃ」

「空氣の繩～操り人形～【エアロープ　マリオネット】」

席を立ち上がるうとした瞬間、力が抜けて動けなくなる。力を入れようとしても入らず、どこも動かない。まるで自分の体のコントロール権を奪われたかのように。

「そうよ、拓真。あなたの体をコントロール権は私が剥奪したわ！」

「これで名実共に私の物ね」

「残念だつたな、俺に精神操作は効かない、今にお前を殴……れない！？」

香織は古風な貴族がしそうな高笑いを上げながら言つ。

「あ～れ～？　自由になつてないじゃない？　まあ当然よね、あんたは精神操作じゃなくて神経操作されてるもの、その気になれば私のアソコを子猫ちゃんのようにチロチロ舐めさせる事も出来るのよ？」

と。

自分自身ですら氣づかなかつた盲点を突いて来やがる。つーか発想がアブナイ……。

そう考へている間にも、グラスを唇にあてがつ。

そして、グラスの中に注がれているワインっぽい薬草を飲み干す。

ゴクリ……。

その瞬間、ハーデスの試練と比べたら生ぬるいが、それでも常人なら軽く気絶させられる程の焼け付くような痛みが全身を駆け巡る。その痛みから、後ろに倒れ、後ろ向きに半回転して静止する。

「うぐっ……ッ、何を飲ませた……ッ！」

香織の魔法が解け、自由な顔をゆっくりと上げながら言つ。

「退化薬、通称口リツ娘薬よ、直に睡魔が訪れるわ、その眠りから覚めた時……、あはははは！」

不気味に笑う香織。それに連動して、女性陣は次々と多種多様な高笑いを上げる。

その時、空けられたピンク色の小瓶を見つけてしまった晃弥さん。

そのまま健悟君や紅ちゃんや美由紀ちゃんを引ひきつて、「俺たち午後の鍛錬があるから」

などとありがちな理由を並べ、すっかり真っ暗な夜に慌てて家を出た。逃げ出しやがったんだ、きっと。

「逃げ出したくなるわね、これからこの家は禁断の花園と化すもの」

なんだよ、禁断の花園って、と言つたつもりだが返答が無い、おそらく声が出でていないのでどう。それでも思考が回った時、ちょうど睡魔が襲ってきた。

俺は女達の高笑いをバックに意識を手放した。

おひる起きておひるおひるおひる

「起きるー 拓真！」

その声で飛び起きたらしい、俺は優太君の顔に思いつきり顔をぶつける。厳密には、唇と唇が触れ合つたのだが、あえてそういうことにしよう。

じやなきや心が保たない

「……………、『メンー』

と思ったが、ショックが相当大きかつたようだ、謝つてしまつ。この言動がさつきのハプニングキスをより鮮明に形作る。

つてか、なんでだろう？ 声のトーンが上がつてゐる、眠る直前まで

正常なのに……。

「なあ、なんか言つてくれよ、ゆ、う……た？」

俺は心底驚いた、優太君だと思つて話しかけたその人は優太君ではなく、一人の幼女なのだ。

「優太君、だよな？」

「ああ……、そうだ」

優太君の額に手をかざし、アナライズと呟く。  
うん、確かに名前は如月優に変わつていて、詳細説明として『如月  
優太が幼文化した姿』とある。

「そりゃ……、やつぱり退化薬の作用か」

「退化薬？」

「口りつ娘薬の正式名称らしい、全くこの世界の魔法はなんでもありだな」

はあ、と溜め息を吐き出しながら下を見る。

薄々気づいていたが、服を着ていない。眠つているときに剥ぎ取られたようだ。

そして俺の体には、あつてはならない小さな双丘と、なくてはならない息子がない。

「なあ、優太君」

「なんだ？」

「女の子同士のキスつて、えげつないな」

「なんで？」

「一瞬とはいえ、優太君を引き倒して、舌を入れ、優太君の口内を

俺の唾液でぐちゃぐちゃにしたくなつた

「……止めてくれ、本氣で寒気がしてきた」

「……ゴメン、優太君、もう、歯止めが効かないみたいなんだ」

完全に欲情しきつた俺は、始めに唾液で自分の人差し指を濡らし、優太君の胸に小さなハートマークを描く。

その後、無理やり優太君の口に人差し指を入れて、人差し指を優太君の唾液まみれにする。

それをうつとりとした目で見つめ、美味しいものを味わつて吸い尽くすようにちゅうちゅう吸い上げる。

この時点では優太君は背筋を凍らせていたんだろう、指を離して、「これで間接キス……（はあと）」と呟いた瞬間、優太君は脱兎の如く逃げていこうとした。が、あえなく俺に捕獲される。

そして、優太君を振り向かせた後、「ハアハア、優ちゃん、ハアハア、柔らかい唇と、美味しい唾液。全部食べてあげる～！（はあと）」と呟き濃厚なキスをしながら押し倒し、薄い胸をまさぐる。数分後、戸が開く音がして香織を筆頭とする欲情ガールズの面々が現れる。

「WOW!! なんて情熱的なキスなの!? ねえねえ！ les bian kiss した気分はどう!？」

「……ぶちゅう……、んぐ、んぐ、ふあ……。もう、最高！ 優ちゃんの舌が求めるように絡まつてきて、それをぶちゅう、って吸い上げたら……、じゃねえ！ 今すぐあんたに球をブチ当てなきゃ気がすまねえ！ 火炎球【ファイアボール】！」

二つの苛立ちを手の平に込め、香織に向かつて突き出す。

赤い火の球が香織に向かつて勢い良く飛んでいく！ しかし、香織はそれを素手で弾いた。

「何これ？ 新種のカイロかしら？」

「舐めやがつて……ツ！ 弾ける豪火【バーンフレイム】！」

今度は、まあまあ大きな炎球を繰り出す。あれが着弾すれば、凄まじく爆発する火種が飛び散る！

……はずだった。

「……抵抗するのね。少しお仕置きが必要」

水が渦巻く音、愛子が何らかの水魔法を発動しているみたいだ。本気じや無いのは分かる、しかし何故だろうか生存本能が身を引けと言っている。まるで自分じやかなわないと言つているようだ。

「ふざけるな、ハデスの力を持つてしても勝てないのか！？」

「……その愛くるしい体を食すため……、行け！」

言下、巨大な水流が一気に襲いかかる。まずい、水は相性が悪すぎる。

「くっ……、蜥蜴の尻尾【リザードテイル】」

俺と愛子は同時に魔法を放つ。

炎と水がぶつかり合い、蒸発。その繰り返し。

「幼児退行していても、冥王の力は厄介」

「ははは、まだ……だ……ツ！」

突如、頭に激痛が走り、蜥蜴の尻尾が途切れる。それは蜥蜴の尻尾を放つてから大まかに数えて10秒後の出来事だった。

「なつ……！？」

「チヨックメイト」

直後、巨大な水のハンマーが体を奥の壁へ強かに打ちつける。壁に打ちつけられた背中はもぢりん、蜥蜴の尻尾を使いすぎたせい……、

「うぐう、頭が割れるようにイタイ……！」

「それは、少ない精神力で、強大な魔法を使つから」

愛子は一、三度深呼吸をすると近づき、軽く唇が触れるようなキスをする。

頭痛が收まり、そこで初めて目を開ける。

「……、拓真」

その頬は少し紅くなつてた……、気がした。

「あなたは男、今は……、女

「何が……、言いたいんだ？」

残念なことに、さつきのキスで機能するよになつたのは目だけのようだ。体はうんともすんとも言つてくれない。だから、愛子の言動ひとつひとつに恐怖せねばならないのだ。

ほら、恐怖で涙が一粒、頬を伝つた。

「恐れることはない。あなたには少し気持ち良くなつてもらつだけ、あなたの女体を淫らに開花させるの」

言下、左右の小振りな果実、それに付いてるピンク色の出っ張りを

口に含み、吸つたり舐めたりし始めた。

「ひあっ！ やめ、やめて！ そんなに吸わないで！ 舐めないでえ！」

いつの間にか叫んでいた。あたかもそれが当たり前のようにな。えもいわれぬ喜び、快感が脳髄を直撃してゆさゆさと色々なものを揺さぶる。

愛子はニタアと唇を緩ませ、右手で右側の出口張りを摘むように刺激する。

更に、愛子は二回に一度、思いっきり吸い付くよくなつたために凄い快楽が体を駆け巡る。

「ひああああっ！ やめて、やめてください！ わた、わたわた、私が私じゃなくなるっ！」

これも思わず口からこぼれ出した言葉で、最早自分が自分じゃなくなつてあるんじゃないかと思つ。一人称が『私』だし。

そんな心を読んでか、愛子は唇を離し、またニタアと笑つて足首を掴む。

んでもつて、左右に広げる。ちょうど『エロテロリスト』と自称する人が良くやるアレっぽくなつた。恥ずかしくない訳がないこの格好に、もちろん、俺は声を張り上げ、抵抗する。

「やつ、やめてよー！ 愛子！ 本当にダメ！ とても恥ずかしいー。」

「ふふふ、その恥ずかしさが開花の糧となる。痛くない。私が目覚めさせてあげる。女の一面を！」

その抵抗も無意味に終わり、ビンからかぴかぴか、ぴぴゅうと淫ら

な水の音が聞こえてくる。

それと同時に、突き抜けるような快楽が脳髄を揺さぶる。

それに……、俺の体が俺の管理下から離れたみたいだ。

俺の意志に関係無く、言葉が漏れ出し、体が動くのだ。

「ふふ、淫らに開花した、拓真の体。私の仕事はここまで、最後に私がどびきりのキスをしてあげる」

そこまで言つと、瞼を閉じ、唇を近付ける。俺もまた、愛子の唇欲しさに顔を近付ける。

やがて、一つの唇は重なり、どちらからともなく舌を入れ、口内を搔き回し始めた。

「ん……、ひゅる、んふ……」

「ん、んふつ……れうつ、くちゅ……」

そりやあもう、愛子のティープキスは情熱的だつた。

人は見かけによらないどこかで聞いたが、愛子に関しては本当にそうだ。

まさか、冷静沈着で色恋沙汰に興味が無いってか嫌いな愛子がここまで情熱的になるなんて……、思いもしなかつた。

「……ちゅつ、ちゅむ……、んう……くちゅつ……」

「……ん、ちゅ……、ふむ……、ふあ……」

唇が離される、後に透明な糸が引き、2人の息を更に荒くさせる。

「……、拓真あ……好きい……」

愛子は「」まで甘ったれた声が出せるのかと思いつらこの声を出しつ

再び唇を近付ける。

そこでようやく体が動けるようになり、両肩を押されて立たせる。身長差も力の差もさほど無い為、楽に立たせることができた。でも、愛子はすぐ不機嫌な顔をして、「嫌なの?」と言つ。俺は無言で首を横に振り、ただただ抱き締める。愛子も満足したのか、「拓真あ……好き……」と甘えるような声で連呼し、ひと抱き締める。

「……あ、そうだ」

愛子が最初にキスをしたときにふと浮かんだ疑問をぶつけてみる。

「いつか愛子は男は嫌いって言つたよな?」

「ええ、今でも変わらないわ」

「じゃあ逆に女はどうなんだ?」

「好きよ、特にあなたのようなとても可愛らしい幼女には、すれ違うだけで下着がぐぢゃぐぢゃ濡れる……、恥ずかしいわね」

ははは、マジですか、レズですか、でもうてロリコンですか。

「拓真あ……、苦しそひー！」

愛子、突然俺を引き倒し、胸を顔に押し付ける。本音を言えば、小さい胸に押し付けられてもムラムラしないしむしろイタイだけだが、何故だらつ、目の前にある突起物を吸つたり、舐め回したり、こねくり回したりしたい衝動に駆られる。その衝動を悟ったのか、愛子は顔を真っ赤にしながらかなり欲情した声で、

「拓真あ！ もう我慢出来ない！ 胸を弄くり回して私をイかせて！」

と叫んだ。

愛子が一番上口く見えた瞬間であった。それで理性を捨てた俺は愛子の小さい胸を舐め上げる。

愛子は「ひつ、ああああー」と嬌声を上げながら、自分の胸に俺の顔を更に押し付ける。

が、愛子は元々非力なため、どうかの姉弟みたいに苦しげはない。だから、俺は舐め続けた。

女性が上半身で一番えっちい声を出す（と黙つ）、ピンと立つてこするピンクの出っ張りをあえて避けて舐めてみると、

すると、愛子はたまらずこやらしい声でねだるのだ。

「いやあああつ、じらさないで、拓真、もっと直接的な快楽を、私はちゅうだいっ！」

その時の愛子は涎をたらし、恍惚とした表情の痴女丸出し、いや、レズ丸出しだった。

そんな愛子の痴態にかなり興奮したのか、

「なんてえっちい声なんだ、愛子……。分かった、聞かせてくれ、愛子のむつとえっちい声をたくさん聞かせてくれ……ッ！」

思つてもいなに言葉を口にし、愛子の要望どつり、俺は出っ張りを思い切り吸い上げたり、口の中で転がしたりしてみる。その度に愛子の口から艶めかしい声がこぼれる。それは俺の欲情を加速させる。その内に愛子が、

「も、もつだめ、たくまつ！ 好きいいいー あはああああつ！」

と断末魔みたいな嬌声を上げ、『わざつになる。』愛子は満足げな顔をしながら気絶していった。

「はあ、はあ、イッちゃった？……みたいだね」

そう恥ずかしげに愛子の顔を覗き見る。

可愛らしく寝顔だな。

そう思いつつ、愛子の頬をふにふにしてみる。

ふにふに、ふにふに。

うん柔らかいね、赤ずやんを彷彿とさせるへりこむ。  
そんな赤ちゃんほっぺに軽めのチューをして、頬擦りをする。だつてめひやくひや可愛いんだもん。

「キス……する?」

そうやって頬擦りをしていると、愛子が意識を取り戻し、質問を投げかけている。

「……、元々気絶していない。ただ気持ち良すぎてしまふ餘韻に浸っていたかつただけ。それより、するの?しないの?」「もちろん、させてくださいー。」

言下、愛子の唇に押し付けるように自分の唇を重ねる。  
愛子は少しひくつしたが、幸せそうに舌を廻り、舌を入れて、絡ませる。

俺も愛子に負けないくらいに舌を舐めまわす。  
こういったことが愛子が一度目の絶頂を迎えるまで続いた。

優太 side

ありがと。

これは今、拓真と愛子に投げ掛けたい言葉だ。

想像して欲しい。二人の幼女が仲睦まじくキスをしている場面を。さつきの龍樺みたいに幼い男女がキスをするのはなかなかどうして微笑ましいところがある。

しかし、今の拓真は幼いおんにやのこで、愛子も当然おんにやのこ。おんにやのこ同士のキスは見ていて何かそぞるものがある、と俺は思つたですよ！

……話が在らぬ方向へと思いつ切りズレたな。話を戻そう。

拓真が愛子に覆い被さって、愛子の唇を思いつ切り吸い上げている最中、俺達はようやく体を清め終え、いよいよ行為に移るといったところだ。

「その前に、私と……キス……して欲しいな」

ミヤが顔を赤らめながら近付いてきた。

「もちろん、来て下さい」

あの時と一緒にだ。まだ結婚していない時と。

俺はミヤの頭を軽く撫でて、キスをする。ただ、今回は……。

「んふ……ん、れろつ……」

舌を入れてきて、かなり濃厚なキスになった。

「んん！　ん、ふう、くちゅ……」

「ふむ、ちゅ……、れろつ、ちゅ……。ふあ……。ゆうたあ……」

ミヤ、しなだれかかるように抱きつくもんだから、大きな果実が派手に潰れる。

理性が軽く吹っ飛びそうになるが太ももを振り上げ、なんとか耐える。

だが、そんなギリギリの状態で、追い討ちを掛ける存在が一つ。

「ミヤばっかりズルいわよ。…………私にも構つてよね。」

「私にも構つてよ！　優太！」

後ろから、口口とコナが抱きついてきた。  
おかげで前から後ろから大きな果実が……。

ムニコムニコ……

「はあん……あ、ふう……」

ムニコムニコ……

「ん……、ふあ……はあ……」

艶めかしい声……、色々とデジャヴを感じる……。

しかし、六つのデカメロンが直接潰れるこの状況……。もつそろそろ理性とか限界……。唯一救いなのは、俺が女だという事か……。

「ん？ 何だらか、この水、とても温かくて……とてもムクムクする匂いがします」

「本当ね、欲情を搔き立てる、媚薬のよつなこの香り……、何かしら？」

「優太、ううん、優のに決まっているでしょー！ ふあ……良い匂い……。私達が抱き付くだけでこんなになるなんて……、Hツチになつたね、優。ほらここも……」

そう言つた後、口口はクリクリと転がすよつて蓄を摘み出す。自分の意思と関係無く、艶めかしい声が漏れ出でします。

「あ、やつ、止めて！ 口口ー、い、ひや、ひやん！」

「優、そんなに感じてちや、これからやるお遊びの一ツも出来ないわよ、私がきつちつじごこてあげるから、感謝しなさいよね」

直後、ユナがアソコを弄りだしたんだら、下半身に甘美な刺激が立て続けに起つて、全身へと広がつていぐ。

「はううー、ユナ、それダメ！ おかしくなるー！」

「きやつー、優から漏れ出す水がいきなり熱くなつた。どうして？」「もつそろそろイキそうだからよ。まあ、トドメを刺してあげる。ミヤも口を吸つてあげなさい」

ミヤは弾けんばかりの笑顔で「はー！」と答え、ゆっくりと田を暝り、唇を押し付けようとするが、「はー、止めー」とこう口口によつて止められ、引き離される。

ユナも同様に「私がイかせるんだよ？」と言ひながら引っ剥がす。

「二人とも、暴走したい気持ちは分からぬ訳じゃないけど、今は我慢して。後でいっぴやらせるから」

二人は快く承諾し、また体を清め始めた。

……つてか、この口りつ娘レズの後にまだ何かやるのか？ 悪い気はしないが。

「二人になつたね、優」

「ああ、そうだな」

「私ね前から優とやりたかつた事があつてね、『眞合わせ』つて知つてる？」

口々、ここに来て満面の笑みを見せる。

それを見た瞬間、暖まるはずの心が何故か凍り付き、思わず身震いしてしまつ。

まさか、これが先程の悪寒の原因じゃなかろうか？

「知らないです」

「じゃあいいや、今からやつてあげるから」

再びにつこうと笑つて、大きく一歩下がる。

どうした？ と声を掛ける間もなく、口々が「うにゅーーー！」と叫ぶ。すると、俺の体がふわりと宙に浮き、90度後ろへと倒れるようになつかの力が働く。抗おうとしても抗えない。一体何が起きているんだ！？

「『やつはつはつはつはーー！ 最近力オリに教えてもらつた、エアマットの魔法だよー！』これでもう優は動けない！」

確かに、寝返りを打つとしても、何かに力を全部削ぎ落とされ、寝返りを打つことが出来ない。手も地面に着くことなく、魔力も幼文化した時から全然湧いてこない。

だから魔法も放てない。一体どうすれば？

「何も出来ないよ、ただ私に食べられるだけ」

直後、口口が跨り唇を奪う。その際、舌を入れることは変わらないのだが、このキスはいつもより長く、いつもよりねっとりしていた……、気がする。

「…………ふ…………、とってもかわいいよ優、そして、これが『貝合わせ』だよ」

その後も口口は手を休めず、立て続けに責め立てる。次に口口はアソコ回りが擦り合いつゝて座り直し、ゆっくりと腰を動かし始める。

最初は何も感じなかつたのだが、徐々に徐々に気持ちよくなり、何時しか手で直接弄られるくらいに気持ち良くなつた。

「うひやあ！ くっ…………、何これ、口口、とても気持ちいい……こんな感じたことがない！」

「でしょ……、だって……これは女の子回りじゃなきゃ…………感じられないんだもん……うくひやあ！」

口口が悲鳴に似た嬌声をあげる。もう限界が近いんだろう。

「優だつて近いよ、お汁が熱を帯びて来てる。さつさ中斷をせりやつたけど、今度は止めない、必ずイかせるからー。」

腰を振る速度を速める口口。にちゅつ、ぴちゅつと卑猥な水の音が大きくなり、息を荒くさせ、艶めかしい声が次々と漏れ出す。遂には口口がぐつたりと俺の肩に顔を乗せる、のだが、腰は止まらない。

……じうなつてみると、執念を感じるな。

そう思つてゐる間にも、快楽は蓄積されていく。

そして……。

「う……ふう、はあ……、優ちゃん、先にイッてるね……っ！　い、ひあああああ！」

絶頂に叫び、腹部に液体が飛び散り、びちょつと粘性の液体が床に落ちる。

口口はそのままぐつたりと体を全部預け、動かなくなる。

その息は荒く、涎も垂らしつぱなし。

そんな口口を見て、人知れず堪えていた感情の高ぶりが一気に爆発、結果として自分もいくことに……。

「あはああ！　……、ゴメン、ユナ、ミヤ、もうイク……いひつ、あはあああああ！」

俺もまた絶頂に叫び、体中の力が一気に抜け、意識を手離す。

その後、俺は男に戻り、コナやミヤにてつてつづけられた事をこの時の俺は知らない。

「お休み、愛子」

ふう、と溜め息を一つ吐いて立ち上がる。

つい先ほど、愛子がイつたのだ。

……キスだけでイクとは思わなかつたなあ……。

「だあありいいん！」

声がしたその瞬間、誰かが後ろから凄まじい勢いで抱きついてきた。イケない果実が派手に潰れ、息がつまりそうになる。この大きさは真理亜だな。さっきのダーリン発言もこれで結びつく。

とつさに蜥蜴の尻尾【リザードテイル】を床に向けて放つたが、体格差やら勢いなんかがあつて、甲斐なく額を床に強打した。次いで真理亜は俺が仰向けるよう横に転がす。

その時、すらりと伸びた肢体や薄い胸、あどけなさを残す幼顔、さらには何一つ生えてない、綺麗に整えているアレが見えて胸が高鳴つたのか真理亜の目が輝き出し、ペロリと舌なめずりをした後、まるで理性を失つた俺みたいに覆い被さる。

その時、偶然にも俺のアレと真理亜のアレが擦れ合い、互いの脳髄に快楽を植え付けて互いの口から嬌声が漏れる。

「ダーリン！ どうだつた？ 愛子とのlesbian sexは

「……英語っぽくしたらごまかせると思つたかよ、ああ、悔しいけど……、死ぬほど気持ち良かつたね」

「でしょ！？ ただ差したり抜いたりするだけとは違う快楽があなたを襲つたはずよ？ 愛子があなたのワレメを舐め回したり、乳首を吸い上げたり。それから生まれる快楽は、全部男の子じゃ分から

ない悦びよ？ そしてこれも、……はあん！ アソ「回十を擦り合わせることも女の子回十じやなきや味わえないわ！」

真理亜、なんか知らないけど腰を振り出した。

それと同時に覆い被さった時と同じ快楽が脳髄を揺さぶりまくる。ヘタすりや気絶するぞ、これ。

「ああん、まるで体が溶け合うようなとても心地良い気持ち、流石は口口ちゃんがやつてた事だわ！ ダーリンと一つになつていいくような快感……なんて素晴らしいのかしら！ もう2人でイッちゃおう、当初の計画ではみんなでイクつて予定だったけど、もうそんなのどうでもいい！ 私、もう我慢出来ないのよー。」

真理亜、さりに腰を激しく振る。その顔は、まさに性欲に支配された者の顔と言えよう。

そして、自分も……。

「つやあ！ 真理亜つ、ダメつ！ ナーかくる……つ！ い、ひああああつー！」

あまりの快楽に何かがブチリと切れて、いろんな感情がなだれ込んで知らぬ間に叫んでいた。

体の力が全部抜けて、頭がぼーっとする。

気付けば、俺は意識を手放した後だった。

『拓真！ どうして先にイッちゃうのー。』

『真理亜さんも、どうして私達が体を洗い終わるまで待てなかつた

の…』

『……見て、拓真が男に戻つてる』

『あら、何時の間にか復活しているのね、愛子。つてか本当に戻つてこるわね、どうしてかしり』

『そんなことはどうでもいいの！ 今はおにいちゃんの私達に対する種まきについて考えるべきよ…』

『なら、これを使う』

『ナニコレ？（一人の声）』

『拓真の頭の中にある情報を元にして作った。この中にとっても強力な媚薬を調合したから、拓真は一定時間疲れることなく種を蒔き続ける。さつき口口さん達に実験をかねて渡した。効果は実証済み』

『凄い！ どうしてそんなことが出来るの！？』

『液体に関する物なら何でも作れる、それに私の能力はサイコメトリー、拓真の記憶を抜き取ることなど簡単』

『なるほど、そつと決まれば……』

『いつただきます……』。

「うわああああっ…」

『ああああ！ なんつー夢だ！ あのまま行けば、間違いなく陵辱ルート突入じゃねえか！

『でも事実、拓真は精根尽き果てるまで種を蒔き続けた』

そんな心の聲を聞いてか、愛子がいきなり耳元で囁いた。もちろん、俺は驚いて飛び退こうとしたが、しつかり跨られて動けない。

『なにそれ、夢オチじゃないので？ 雰囲気からして』

「？？？」

「ごめん、意味が分からないね、悪かった。とりあえずリビングに行きたいんで退いてくれないかな？」

さつきも言ったとおり、今、俺の上には愛子が跨っているのだ。端から見れば、可愛らしいなあとか思つだらうけどね、当人は凄くシリージのよ、理性とか、理性とか、理性とか。

「嫌。私に接吻してくれるなら退いてあげる」

「そうですか、そう来ますか！」

はああああ、と息を吐きながら頭をかきむしる。そして半ば強引に愛子の唇に自分のそれを重ねた。

愛子も普段の無表情が一気にぼぐれて女の顔になつたようだ。その証拠に愛子が自分から舌を入れて来た。

「ん……くちゅ……じゅる……ふあ……、拓真……、あなたってか  
つえせんみたい」

「いや、例えが分かりづらいんだけど？」

「つまり、あなたと交わると、止められ無くなつていつまでも続いていくし、止まらなくなつてどんどんエスカレートしていく。まさにそんな存在なの、それに……これも」

言下、愛子の下で存在を物語るアレを握り締める。瞬間、心臓が止まりそうな心地よさに包まれる。

つーか下ネタかよー、だんだん恐ろしくなつてないか、愛子のヤツはー、さつきのキスもAVに出てきそうなキスだつたし！

そう思つていたら、愛子は顔をいきなり近づけ、一言、衝撃的なことを呟く。

「「ひんなに勃たせて、いやらしこ人」

……と。まさに意表を突いた一言と詰めよひ。  
つてか、軽くSめいてないか！？ セツキの一言… 何かさつきか  
ら愛子、冷酷な笑みを浮かべているんだけど…?  
愛子はさらに言葉を続けていく。

「何でこんな事になつたの？ 私とキスしたから？ 私の胸が当た  
つているから？ それとも、私が騎つているから？」

言い切つた後、アレを撫でながら誘つよつた愛子の冷たい目線が自  
分の拳動不審な自分の目線と重なる。  
ドキリと心臓が跳ね上がり、凍りつく。  
猛禽族の目と詰つんだらうか、なんかいつもより鋭く突き刺さるよ  
うな眼光。

こんなにまで愛子を恐れたことはあつただらうか？ いや、ない。  
こんなの初めてだ。

……つーか、さつきから愛子、マシンガンのように言葉を放つてゐる、  
本来の性格つて、冷静沈着、本当に寡黙な性格だよな？

「余計な事考えない。それにしても、あなたのモノは本当に私を突  
き刺したいつて、私に語りかけてくる。アナタはどう？」

薄々気付いたのだが、これって俗に『罵り責め』ってやつじ  
やないのか？

愛子が責めている方で、俺が責められている方。  
マズい、このままじゃ間違ひ無く、耐えきれなくなつてやつちやつ  
た

みたいなパターンになるじゃねえか！

「シたいんでしょ？ 手に取るよつて分かる、あなたの気持ち」

「シたいんでしょ？ 手に取るよつて分かる、あなたの気持ち」  
言下、再び愛子は顔を近付かせ、

### 「変態」

と、呟いた。途端に俺の中で何かがぱつつと切れて、何故か涙が零れ落ちた。

愛子は会心の笑みを浮かべて「他愛のない人」と聞こえるよつて眩いた後、距離を取り普段は穿かないはずのスカートを捲った後、誘うように語り掛ける。

「そんな変態に朗報、あなたがはつきりと具体的に私とシたいって言つたら、あなたの好きなようにシていいよ。あなた、女の子に誘惑されるのが好きな変態だものね。女の子に誘惑されるとすぐに押し倒して交尾しちゃう盛りの付いた犬つころだもの。早く言わないと、一人でイっちゃうよ？ あなた、一緒にいきたいんでしょう？」  
私と一緒に」

言い切つた後、愛子はニヤリと笑い自らの恥部をショーツの上から優しくなぞる。

軽く嬌声が愛子の口から漏れる、が下唇を噛み締めてじらえているみたいだ。

いかにも△▽にありそうな扇情的な光景に思わず生睡を飲み込んでしまつ。

「聞いたわよ、生睡を飲み込む音。私が欲しいんでしょう？ 早く言いなさい、愛子が欲しいって、じゃないと私、一人でイっちゃぶ

うつー?」

一瞬の出来事だった。愛子が奇声を上げたと思つたら、既に壁のそばでのたうち回つていたり。

そして、俺の両隣には二つの威圧感が……。

「愛子、さつきから聞いてれば、薬の力を借りてんじゃないわよ…。  
それでも大山四天王の一角なの!？」

「解除【ディスペル】! 愛子さん、止めて下さいね。拓真はあくまで二コートラルじゃないといけないから」

「……分かった。」めん

なんか知らないけど、俯く愛子、まるでせつきとは別人みたいだな。

「せうよ、せつきの愛子は魔法薬の作用で生まれた別の人格よ、分からなかつたの? バツカじやないの?」

「もういいでしょ? じゃあ愛子ちゃん、いつものようにおにいちゃんを誘惑しちゃつて!」

愛子は「クリと頷き、再びベッドの上に向かい合いつて座り込む。次いでクルリと半回転し、お尻をこやらしく突き上げた後、スカートを捲りながらシワーッをずり下ろした。

まさか。

「おいで拓真、私が拓真を気持ち良くなしてあげる。私の凍えきつた心はあなたの進る真っ白な愛で解けゆくの。拓真のじやなきやダメなの、受け入れる準備はどうに出来る。拓真の有りつ丈の愛を私に頂戴! そして私に拓真の子供を孕ませて!」

言下、これでトドメだと悟るばかりにむかう……。

「なつ……、何やつてんだー!? 愛子ーー?」

「田を逸らさずに見て、私の口、ひくひくしてゐ……。拓真の事を考えるだけでこの有様なの。ああ、私の口を貫いて、それが拓真の今すべき事!」

そう言つた直後、愛子の秘所から淫らな水が滴り落ちる。その光景を田の当たりにした瞬間、面白いくらいに理性の糸が切れちやつて、気付けば俺は本能のまま愛子達を喰らい尽くした後でした。

俺つて……、流されやすいのかな?

「良いのよ、拓真は、私達の、性奴隸なんだから、これくらい当然なのよ」

はあああああ……。本田一一度田のあからさまな溜め息を吐き、立ち上がる。そして着替えの服を持つて脱衣所へと転移、服もまあ、魔法で消して、扉を開けた途端……。

「あつ……」

紅さんと美由紀さんに出会ってしまった!

もちろん、風呂場であるため、一人ともタオルを纏つただけのあられもない姿であるからして……。

「美由紀、そいつを捕縛しといて。いつでも処刑出来るよう

「そうですね、という事ですので拓真さん、素直に捕まつてくれませんか? 痛くしませんので」

紅さんは凶悪な笑みを浮かべながら近付いてくる、美由紀さんもまた無表情だがゆっくりと近付いてくる。

そして質問の答え。決まっている。答えは

「転移【テレポート】」

逃げるに決まってるだろ！

「あつ待て！ 逃げるな！」

怒る紅、思い切り手を伸ばす……が、伸ばしきる前に転移を終え、難を逃れる。

だが数分後、何故か紅さんが転移先に現れ、急いで一度目の転移、が、またしても数分後に紅が現れ……とかれこれ七日間は安息の時はなかつた。六日目にして魔力が尽き、逃走を余儀なくされたが、何故かいつも先回りされ、七日目にしてついに矢で胸を貫かれ、あえなく冥界送りになりました。

即刻ラグナロクで復活しましたが！

死神の世界編 番外 END

番外編 夜 ロリとレズの危険な化学反応（後書き）

次回、新章突入！ 今度は魔法の世界がロボットに侵略されていくのを拓真達が阻止するお話です。

次回 機械の支配する世界編 プロローグ 時空の狭間

今度はプロットを立ててやつてみようかな……。

プロローグ 時空の狭間（前書き）

おひやです！

久々にシリアスな予感です！

## プロローグ 時空の狭間

「前回までのあらすじ」

優太と健悟達の助けを借り、異次元の歪み、及びルファアの撃退、S級クエストの達成をし、さらにはエリィを始めとするハーピィ三姉妹も仲間にした拓真。

天界でお茶会が開かれたりもして、退屈する日は一日たりとも無かつた。

そんなある日、エクスカリバーが次の扉を見つけたと言つ。そして最後にしたかつた記念撮影を終えた拓真はそれを一枚複製して、それぞれ優太と健悟に渡す。満足した拓真は透明な鍵を使い、長閑で平和な生活に別れを告げ、新たな世界へと旅立つたのだ。

並行世界の脅威を取り除く為に……。

「拓真side」

目の前で、光が収束していく。  
つこさつきまで光の部屋にいたからなのだろう、辺りが真っ暗で何も見えない。

きっと薄暗い所なんだろうなと自己完結するも、10秒経とうが30秒経とうが、1分経つても真っ暗。

とりあえず他の意見、一樹の意見を聞こう。

「なあ一樹、薄々感づいているんだが、ここひいてやっぱり……」

「どうやらのよつだね。僕だけじゃなくて、君まで見えないんじや、こは真っ暗闇なよつだね」

一樹が言い切ったその瞬間、誰かに抱きつかれて少しだけバランスを崩す。

抱きついた誰かはふわあと笑っている。この香りに声、もしかして……。

「ふわあ……」この抱き心地にムラムラさせるフロモソ、間違いなくおにいちやんだあ」「

……稜か。稜はこんなに暗い空間で間違える事なく頬擦りしている。

「えへへ、おにいちやん、ちゅうしうよ」「良いけどさ、分かんの？ 頬の位置とか」「分かるよ、うすらシルエットしか分かんないけど。それで十分だよ。こくよ？ んちゅ～」「

言下、右頬に吸いつかれる感覚。

……本当は見えてないんじゃないのか？

「わざとだよ～、おにいちやんにキスマークを付けたかったんだよね。じゃあ、おにいちやんの大好きな“ちゅうちゅうキッス”しちゃうからね

ちゅうちゅうキッス。それは優太君の世界で編み出した、稜の必殺技。赤子のようにちゅうちゅうと舌を吸いまくる凶悪なキスだ。

……と、説明している間に唇がつ……、いつされても強烈な快楽が脳髄を揺さぶる…

「「」たなこしひやつて……、じゃあ例の如く「やん」「やんしますか

「稜がそう言つた瞬間、絡み付くような風が稜を引っ剥がす。「」の風はまさか……。

「いやー、おにいちゃんにやられたいの！ サリィちゃんが「やんにやんしなくていいの！」

「そう言わないでさあ、私つてば一田一回、たくさんやりーちゃんとにやんにやんしないと眠れないんだ、協力するよね？ うん、ありがと！」

稜が抗議の悲鳴をあげる中、布が引き裂かれる音が聞こえ、嬌声が聞こえてくる。

おそらくサリィが後ろからもにゅもにゅんつて直揉みしてんだろうなあ、途中で嬌声がぐぐもつたからキスされてんだなあと思つたりしている。

何？ 妹があんなことになつてゐるのに助けないのか？  
いや、稜も嫌がつてゐる訳じやないし、サリィもにやんにやんしないと眠れないらしいし……。

何はともあれ、そろそろ光が欲しくなつた為、上空に向かつて持続性の激しく燃える炎球を放つ。結果と言えば、周りの人達（エッチな事してる稜達とか胡座であぐびしてゐる一樹とか後ろで襲い掛かろうとしている香織達とか）が照らし出されただけで、後は真っ黒だつた。本当に底が見えないのだ。

「ははは……、「」は宇宙か何かですか？ 何にも見えないんですけど」

「ふああ……、そだね」

「それより私は拓真を食り

「鼻息が荒いぞ、鎮まれ」

香織を言葉で一蹴し、どつかと腰を下ろし、頬杖をつく。

その時だ、一樹が異変に気づいたのは、一樹は俺の体を揺さぶり視線の先を指差す。

「おい、あれ、何か光つてないか？」

「ん？」

俺は目を凝らして光を探す。頭上の炎も消した。数秒後、確かに光が見えた……、気がする。

「本当だな、おいみんな、あそこに光が見えるだろ？　あそこに向かって走るぞ」

「ちょっと！　私達との暗中セッ！」

「つづさい！　黙つて走れ！　先行くぞ！」

とりあえず、盛りの付いた雌ネコ共を無視して、光の先へ突き進む。速度を上げ、ぐんぐん加速していく。遂には誰も追いつけなくなる速さになつてひたすら光の先へと突き進む。

数秒後、視界が急に真っ白になり、その数秒後には広い空間に出る。

「…………ここは、どういう世界だ？」

「時空の狭間じゃよ」

突然声が聞こえ、思わず戦闘態勢を取る、が直ぐに無害な老人だと知ると戦闘態勢を解く。

「あんた、誰だ？　ここはどこだ？」

「ここは時空の狭間、本来なら何人たりとも立ち入れることが出来ない世界、忘れ去られた虚無の世界じゃ、そしてワシは……名乗るで

もないただのおじこやんじや

「言つてゐることが矛盾だらけだ、特に、“召乗るでもないただのおじさん”なり、こここの世界について詳しい説明は出来ないはず、このオッサン……なんか秘密があるんじや……。

「ほつほつ、連れの方々がお見えになられたよ」  
「あ、紹介は要らんぞ、ワシは全て知つておるから。さて、それそろ全員集まる頃合にじやねつ、どれ、本題に移ろつかの」

「本題つて?」

「うむ、と言ひ謎のおじさんは真剣な顔付きになる。

「今、並行世界全体に何が起つてゐるか……、分かつてゐるかの?」

「各地に異次元の歪みが現れ、各地に影響を与えてゐるんですね」「つむ、そうじや一樹。じゃあなぜ異次元の歪みが現れているか、分かるかの?」

「……、考えた事無いな。エクスカリバーからは仕組みを教えてもらつただけだから……」

「そりが……、異次元の歪みは世界融合【フュージョンワールド】の前触れに過ぎないのじや」

『フュージョンワールド?』

珍しくこの場にいる全員が素つ頓狂な声を上げた。世界が融合するなんてあまりにも非現実的な事に頭がついていけないみたいだ。

「つまりじゃな、無数に点在するパラレルワールド、そのパラレルワールドが一つにまとまつてしまつんじやよ」

「……それは大変な事なのか?」

「そうじやとも、海斗君！ かつて起こつた、恐竜種の絶滅やノアの大洪水はこれが原因なのじゃよ！」

「なつ……！ 下手すりやそのつち人類滅亡、つてワケかよ！」

この、俺の軽率な一言により香織達の間に衝撃が走り、ざわめきが広がる。

「そんな……、私達がそんな規模の大きい事に首を突っ込んでいたなんて……」

「い、怖い……、世界全体がこの手に掛かっているなんて……、考  
えたくないよお、おにいちゃん……」

「まさか、最愛の人について行つたらこんな運命が待つているなん  
て……サリイお姉様……、私……」

「大丈夫、大丈夫！ たくちんやりーやん、かおりん達が頑張つ  
てくれるさ、私達はちょちょいとサポートすればいいんだよ」

老人はうむうむと一度頷き、朗らかな笑顔を見せる。

「そうじや！ 気に病むことはない！ フュージョンワールドは基  
本的に不定期じやが、大体三億年に一回くらいじやからの」

「でも、前兆は既に現れている」

「そうじやの、何者かが外部から並行世界の秩序を乱したからのお、  
今までにない未曾有の出来事じや、だから君達は招集されたのじや」

「うお、かなりデ モンアドベンチャーみたいな展開、選ばれたのか？」

「そうじや、だが今の状態じや主犯格を倒し、並行世界に平和を取り戻す事は不可能に等しい」

「そなんだ……、やっぱり修行だ――！ ……みたいになるのか  
かな？」

「やうじやな。まあ修行も兼ねてこの世界を救つて来ると良から」

老人は踵を返し、後ろの壁に向かい歩き出す。

そして、壁まで歩くと老人はいきなり壁に手を当てる。するとビリ**ン**!  
だろう、老人が手を当てた所を中心にして扉が徐々に姿を成す。  
この世界に来てから驚かされる事ばかりだ。

「これが……次の世界に続く扉なん?」

「そうじや、この世界は既に十中八九異次元の歪みから現れた機械の兵团に侵略されているのじや。このままではこの世界が大きく変わってしまうんじやよ。そこでお前たちにはその侵略網を打ち碎き、兵团の親玉を破壊してきてほしいのじや」

「了解、じゃあ、行こうぜ! みんな!」

俺はみんなを連れて扉を開けるため扉に近付こうとする。しかし、老人は扉の前に立ちはだかった。

「ストップ! 待つのじや!」

「何、だよ! 言い忘れた事があるなら早く言つてくれ!」

「この扉はな、八人までしか受け入れないんじや、八人以上入ったら虚無の空間を永久に彷徨うことになるぞ」

その老人の一言は、俺達を震え上がらせるのには十分過ぎた。  
沈黙が俺達を包み込む。

「……ヤバいな、それ。一樹、どう決めようか?」

「やつぱりじやんけんで決めるほか無いな」

一樹がそう言つたおかげで、女達の肉団子戦法（一斉に全方位から抱き付き、なんだかんだで惱殺させる戦法）を受けずに済んだ。

果てしないあいこの末、俺と稜、一樹に海斗、それと香織、紅音、詩音、楓が行く事になつた。

『…………うう…………』

悲しそうにしている真理亜以下じやんけんで負けた人達八名。見ていてとてもかわいそだ……。

「あー、可能な限りの事なら一つだけしてやらんでもないが?」  
『ホントー?』

子犬のように膝にすがりつくメアリー、ジュディを除く真理亜以下六名。

もし彼女達に尻尾があるのなら、ガンガン振ってるんだろうなあ。一体何をねだつてくれるのや?……。

『行つてらっしゃいのキスをさせて?』

見事なコーラスを奏でる真理亜以下六名。

その内容は俺を震え上がらせるのには十分過ぎた。

『…………舌入れない?』

『入れるー』

「…………はあ、わかったよ。一列に並んで待つてくれ」

一分前とは比べ物にならないくらいに元気になつた真理亜以下六名。

「行つてらつしゃい、ダーリン、半年分の愛情をあげるわ  
「あ、ありがと。俺も半年分の愛情をあ、あげるよ んぐつー?」

.....。

「拓真さん、どうかいい無事で」

「ああ、ありがと んぐつー?」

.....。

「拓真.....んぐつ

「んぐつー? .....ひきわけ

.....。

「行つてらつしゃこませ、タクマ様。どうか無事に帰つてきてトを

いまし」

「ああ、必ず帰る んぐつー?」

.....。

「お力添え出来ず申し訳ないです、タクマさん。私はここであなたの無事を祈つてますから」

「心配せずとも無事に帰るよ んぐつー?」

.....。

「最後はサリィちゃんの番だね、果たしてキスだけで終わるかな

?」

「なつー? サリィちゃん、それはちょっと んぐつー?」

直後、キスされながら押し倒されてTシャツを引き裂かれる。ちよつとおいたが過ぎるんじゃない？

「ぐふ、ぐふふ、たくちんの体、たくちんの体……」

「ぐ、ヘルプミー！」

「……仕方ないなあ、雷撃！」

一樹はサリィに向かつて指を差す。

瞬間、稻妻が迸り、サリィに直撃する。が、それは俺を感電させるのに十分過ぎた。

「ぐああああ……！」

「あ、調整間違えた！」

「バカ兄貴！ いや、最早馬鹿としか……」

ああ、意識に霧が掛かる。そういう唇奪われてばかりだなあ、氣絶したまま次の異世界があ、と思いながら意識を投げ出す、その時ちよづじ水が降つてきて、視界がはつきりしてきた。

「氣絶しちゃダメ、あなたはまだやるべき事がある

愛子の覚醒の雨か。すぐさま飛び起きて扉の前に立つ。

「モテる男はかなりツラいな

「いや、全くだ」

「それよつと、あんた下半身がすこことになつてるわよ、四人のご奉仕を受けちゃう？」

「遠慮しとく。んじやみんな……、行つてくる

『行つてらつしゃこー!』

俺の言葉に素晴らしいハーモニーで答える真理亜以下六人。  
そのハーモニーに送られながら扉のノブに手を掛ける。

「準備はいいな？」

「ええ！」

「うん！」

「勿論！」

「ああ！」

「どんとこい！」

「殺るぜ！」

「いつでも行けますよ？」

ドアノブを回し、扉を開け放つ。  
そして一步、足を踏み入れる。

世界を救う、冒險の扉が再び開かれる

。

## プロローグ 時空の狭間（後書き）

次回、機械の支配する世界本格始動！

ただでさえ女子率高いのにまた更に女の子追加！  
そろそろ男子も出でなきやなあ。活報も覗いて下さいね！

## 第一章 女性の悲鳴（前編）

シコアスが続いてます。

このままギャグもはれみつつシコアスを続けられたなら、と迷つてこます。

## 第一章 女性の悲鳴

光が目前で再び収束していく。

次の世界は優太君の世界のよつた世界らしい。

ガス灯、低い建物、馬……。

一つだけ違う所があるならば、一人たりとも通行者がいないことか。

「見て呉れは優太君の世界と似てるんだね」

「どうやらその様だ、……もしかすると優太の世界から派生した世界なのかも知れんな」

「それにも入つ子一人いなゐわね……つてか、あんたはナニと戯れてんのよ」

「ん？ 猫だよ、可愛いだろ？」

ホレ、と言いながら香織の眼前にせつとまで戯れていた真っ黒な猫を突き出す。香織は直後に不機嫌そうな顔をし、そっぽを向く。

「何よソレ！ 野良猫じやない！ 汚らしい！ どつかにやうなさいよ！」

「ハア、これだからぼんぼんは困るんだよね～、野良には野良の可愛さがあるのにねえ」

「そうそう、おにいちゃんの言つとおりだよ。かわいいねえ。のらちや～ん」

「口にやあ～と猫は鳴き、首を振る。その際、首輪に付けられていたであろう鈴の音が鳴り響き、この猫に飼い主がいることを知る。次に猫はぐるぐるうと嫌そうな鳴き声を聞き、そこで抱っこが嫌いな事を悟る。引っかかるのも難なので即座にして地面に下ろし、

謝罪の念を込めて顎下を撫でた。

猫はにやあ～と媚びるよつに一鳴きし、膚辺りに自分の頬を擦り付ける。

これはマーキングという習性で、これは自分の縄張りだ！ とか、ご主人様大好きいや～……、みたいな時にフェロモンをなすりつける行為らしい。つまり、俺は大層気に入られたらしい。

「さあ、飼い主が心配してたから、飼い主の元へお帰り」

猫は今まで以上に尻尾をピンと立て、器用に自分の唇を俺の唇に押し付けて路地裏の闇に溶けていった。

「まさか、猫に唇を奪われるとはな

そつ言つて笑いあつてゐる最中、女性の悲鳴を耳にする。

その方向へ振り向けば、煌びやかなドレスに身を包んだ黒髪で黒眼、二十歳前後の女性が、悲痛な声を上げながら、彼女の数倍はあるつかと思ひほどの大きさの右手に長剣、左手に拳銃を持った十体の機械の兵士から逃げていた。

「目標発見、目標発見。直チ二排除セヨ」

「嫌！！ 誰か！ 誰か助け きやつ！..」

女性はとても可愛らしい小さな悲鳴を上げ、派手に転んだ。

その際、スカートがめくれ上がり、白いレースの下着が見えたのが、見なかつた事にしてあげよう。

そんなこんな変な事を考へてゐる内に、女性は物の見事に囮まれていた。

機械兵は無慈悲にも、か弱い女性に銃口を向ける。

そして、拳銃の引き金が引かれ、残酷な弾丸が彼女の精神を打ち崩

す……、まさにその時、一筋の炎が一体の機械兵目掛け一直線に突き進み、胸部を貫き、爆破させた。

他の機械兵は一斉にこちらを見るが、一体、また一体と破壊され、五体にまで数を減らす。

「ナ……何者ダ！」

「通りすがりの旅人だああああつ！」

そう言いながら、右手に黄金色の装飾に包まれた、神々しい光さえ放つ【約束された勝利を呼ぶ栄光の剣】エクスカリバーを、左手に殆どが黒の装飾で埋め尽くされた、原始的な恐怖を呼び覚ます【確定された破滅を招く闇黒の刀】ラグナロクを転移させる。

そして、「行くぞおおおおおーー」と雄叫びを上げれば、魔法が頭上を乱れ交う。

時に風の槍が、時に水の鎌が、時に土の鉾が、時に闇の塊が、時に雷の刃が、時に木の矢が、穿ち貫き砕け爆ぜる。ついには、機械兵は一体のみとなり、その機械兵も「ギギギ……」と後退り戦意を完全に失っている。

「イ、急ギ皇帝様マデ連絡セネ」

しかし、俺はそれを許さない。一息で急上昇する機械兵の頭上まで飛び、渾身の力を頭にぶつける。

そのまま機械兵は地面へと急降下を始め、間もなく地面に叩きつけられ爆ぜる。

そして、軽やかに着地しながら一つの剣を粒子に戻す。

「大丈夫か？ 怪我は無いだろうな？」

「はい、大丈夫です。ありがとうございます。……それにしても、よくもまああれほどの高位魔法を放てるものですね、どこの国の育

ちなんですか？」

「……えーっと」

回答に困る質問だ、と思つた。

このまま正直に日本と答えれば、困惑させるだけでなく、もしかしたら怪しまれ、牢獄行きも有り得ないわけではない。

(拓真、何でもイイからテキトーに答えなさいよ)

しかし、彼女も俺達と同じように異世界の住人なら? ……賭けてみる価値はありそうだな。

(さつきからぶつぶつぶつぶつ、何言つてんのよ?)

「日本です」

「日本! ?」

「ちよつとー 私の質問は無視するワケ!」

煌びやかなドレスに身を包んだ女性は、皿をキラキラと輝かせて身を乗り出した。

「ご存知ですか？ 日本の事を」

「知ってるも何も、私の育った国も日本ですの、東京の秋葉原周辺にて、男の子と女の子。2人の子供の面倒を見ていたの、特に男の子の方は……」

言い終えた直後、体をくねらせる女性、びつやから自分の世界に入り込んでしまつたようだ。

「あの~、すいません？ あの~！ すいません！？」

「ハツ！ すいません、弟の事を思い出すといつもこいつなるのです。

紹介が遅れたわね、私はフイリア王国の女王セリーヌ、あなた達の名前を教えていただけないかしら？」

「俺は拓真、で右となりにいるのが妹の稜、反対側が香織、その隣がその義兄であり俺の親友、一樹だ」

「海斗だ。以後お見知り置きを」

「んで、ウチから順に紅音、詩音、楓や。よろしくつな」

「はい！ 宜しくお願ひします！ 早速ですが、私のお城に来てく  
れませんか？」

「ええ、是非行きたいわ」と楓、さすがに今後の拠点は確保したい  
ところだ。

「では、馬車の土人形【ゴーレム】…」

言下、地面の石畳が軟化し、グニャッと浮き出た後、徐々に馬車の塊を成してきた。

恐らく、彼女は土系統の魔法が得意なのだろう。

「完成しました、中はとても広いですでの存分にくつろげるはずで  
す。馬車に乗つて下さい」

そう言いながら、自分の作り出した馬車に乗り込もうとするとい、突然崩れだし、セリーヌを派手に転ばせた。

その際、またしてもスカートが派手に捲れ上がり、純白の下着を見事にさらけ出した。

……俺の見間違いでなければ、少しシミが付いてた気がするが……。  
つてかセリーヌが「見た！？」つて言いたそうに、涙目で睨み付け  
ている。とりあえず首を振つと…。

……つと、そんなこと考えている暇はない、何者かの襲撃を受けた  
んだ、敵はどうかに隠れ、既に第一撃の準備が出来てるはずだ。

「見て、きっとあれが馬車を破壊した犯人よ！」

楓が馬車の残骸の先を指差す。そこにはボウガンにそのまま手足が付いたような機械兵が既に装填した矢をセリーヌに向かつて放っていた。

「チッ！ 伏兵か！」

すかさずセリーヌの前にテレポート、迫つて来る矢をエクスカリバーで叩き落とそうとするが、

「クツ、間に合わ」

瞬間、機械兵が放った矢が吸い込まれるように胸を貫き、叩き落とそうと呼び出したエクスカリバーは再び粒子化してしまう。さらに、先程のボウガン機械兵が呼び寄せたのだろう、次々とボウガン機械兵が上空に現れる。

「い、イヤああああ！」

『拓真……』

「ぐうう……、こんなもの！」

俺は先程胸を貫いたボウガンの矢を無理矢理引っこ抜く。その傷は瞬く間に癒え、服に穴が開くだけとなつた。そして、三度エクスカリバーを装備して、真上に掲げる。

「輝光の雨【シャイニングレイン】！」

瞬間、エクスカリバーから一筋の光が放たれ、弾けて降り注がれる。

その光は次々と上空のボウガン機械兵を破壊していく。

「すゞーー！ 精神力の消耗が激しいから発動を躊躇うあの輝光の雨を躊躇いなく放つなんて！ やっぱりおにいちゃんはすゞーー！」

「ハア……、ハア……」

「流石、の一言だね。あれだけの大群を一蹴するなんて、拓真にしか出来ない荒業だね」

「何を言う、アイツに出来て俺に出来ないことなどない……ってか拓真、なんか顔色が悪くないか」

ドサリとこう音が脳内に響く。多分、俺が地面に崩れ落ちたんだろう。

きっと、致命傷の治癒やさつきの魔法で使い果たしたのだろう。

「ちよつ、ちよつと！ 拓真！ しつかりしなさいよ！ 精神力使い果たしたのね、まったく……情け無いたらありやしないわ！ し、しょうがないから、私のを少し分けてあげるわ！ 感謝しなさい！」

数秒後、しつとじとした柔らかい物が押し当てられる。それが唇だ

という事を理解するにはさほどの苦労もしなかつた。

先程までひどかった頭痛、目眩、吐き気などが嘘のように治まり、数秒後にはぱちくつとまばたきを繰り返し、ぴょこんと飛び起きる。

「いやあ、済まなかつたな、香織。面倒掛けさせちまってよ」

「どうしたことないわよ、あんたの情け無い姿を見たくなかつただけよ」

あんなに（雰囲気に流されたとは言え）淫らに乱れまくってた後も未だ健在なツンデレつ振り。ある意味すげえよ、香織。

「よし、セリーヌさん、城のおおよその座標を思い浮かべてもらいますか？俺が読み取ってなんとかテレポートさせますんで」  
「そんな事が本当に？……分かりました、私はあなたを信じます」

セリーヌはゆっくりと目を瞑る。俺はセリーヌの肩に手を優しく置く。アビリティ『解析【アナライズ】』の効果により、城の座標が頭に流れ込んで来た。

「みんな、俺の肩に手を置いてくれ」

肩に手の温もりと重みが徐々に大きくなっていく。みんなが手を置いたのを確認すると「テレポート！」と叫び、一瞬視界が暗転した後、気付けば城の中庭にいた。

「よし、着いた！ここには機械兵はないな、よつやく一息つけるな」

「ええ、ここは城を中心とした半径30キロメートルに電気信号をめちゃくちゃにする結界と強固な城壁、それを包むように張られている防護結界がありますから、それにしても、あなた達の魔法には不思議な所がいっぱいあるんですね、世界の違いを感じますわ」

「そんな事言われても分からねえよ、早く城ん中入つてぐっすり寝たいんだけどなあ」

「では、入りましょうか、そこで会話を交えながらお茶でもいかがですか？」

「良いわね！早く入りましょう！」

楓はそう言ってセリーヌを押すようにして城内へと入つていった。その後に一樹と海斗が、最後に香織に手を引かれ、俺と香織、その他メイドや執事が城内に入つ

ていく。

この世界に訪れてから最初の戦闘は圧勝といつ素晴らしい形で幕を閉じた。

# 第一章 セリーヌの追憶（前書き）

今回はセリーヌの過去についてのお話です。

拓真に何らかの接点を持つセリーヌの正体とはー?

## 第一章 セリーヌの追憶

「うわー、ヤケに広いなあ、流石は王女の城やな」「ええ、王室の間は特に見られますからね、ここは特に華やかになれば……と父親に言わされましたから」

先程のセリーヌの言葉の通り、ここは王室の間。何処からか濃厚なバラの香りがして、それがこの部屋のやんごとい雰囲気をことそりに引き立てている。しかし、本当にどこにも見られない芳香剤の存在。バラが飾られているわけでもないのに……、この香りはどうじかひ……？

「眞にやるじと無ことわよ、…………ちよつとムラムラするナビね

そう言えば、わざわざから香織の鼻息が荒い。まあ、こつものことだらうと、香織の事だ本心はいつもムラムラしてんだらうと思い、ノータッチで事を進める事にある。

「やう言えば、あなた達はこの世界と違つ世界から来た、と言こましたね？」

「やうとは言つてないが、まあ、そういうな」

そう言つてしまつたら失礼な氣もしないでもないが……、セリーヌも気にしてないらしいし、まいつか。

「では、ここ最近の世情を知らなければならぬですね」「やうね。まずは事の始まりを教えて貰おうじゃないの」

セリーヌは「それは6ヶ月前の出来事だったわ」と、遠く田で話し

始めた。

「その日の朝、まだ日の上り切らない時だったわ、清々しい一日が始まる……そう思った矢先だったの、上空に突如として黒く大きな穴がガラスの割れるような音を伴つて現れたの」

「それが最初の異次元の歪みね」

「え、ええ、その異次元の歪みからまず機械の王様みたいなども大きな人型の機械が現れたわ。その機械は四方八方に機械を散っていたの」

それはセリーヌにとつて思い出すことすら忌々しい光景なのだろう、知らず知らず肩を抱いていた。

稜はセリーヌの様子を敏感に感じ取り、赤子をあやすように背中をさする。

「怖かったの？」

「ええ、怖かったわ。私の騎士が次々と薙ぎ倒され、黒鷹の便りにより隣国が次々と攻め落とされた事を知る。それに捕らわれた国民は先程の巨大な人型機械　自らをガラドボルグと名乗つていたわに機械にされて無理矢理戦わせるわ」

「だから城下町があんなにも閑散としていたのか」

沈黙するセリーヌ。気まずい雰囲気が俺達を包み込む。

「その……、ガラドボルグってヤツを片づければ、万事解決なんだろ？　早く倒しに行こうぜ？」

そう言つた瞬間だった。唐突に誰かの腹の虫が鳴き、調子を狂わせる。

「おい……誰だよ、緊張感に欠ける奴だなあ、全く」

「……、ごめんなさい、三日三晩何も食べてなくて……。まずは昼

「食を取らませんか？」

シにするか」「ええう！？」……まあ、腹が減つてはなんとやらんハシナメ

香織達の口から歓声が上かる。

餌を求めていた。

『いたださね～す!』

明朗な声が辺りに響き渡る。

セリーヌは太つ腹にバイキング形式で食事を用意してくれた。

もひらめくハニカム。

「ウハー、三バカトリオに詩音お姉さま！ ディナーはがつつくものじゃないのよ！」

だつてよお、これ金端うめえんだもん

「あらあら、とても豪快な食べ方ね……、喜んでいるようで私も嬉

がつがつ、  
がつがつ。

他人の迷惑もつゆ知らず、一樹も海斗も鬼の形相で次々と食べ物を

平らげていく。

その勢いに俺も詩音も気圧をれておずおずと席に戻る。その内に何種類もあつたバイキング形式のおかずは全て一人の胃袋に収まってしまった。

「お前ら……、ちと食い過ぎじゃあなからうか?」

「すまない、拓真。お前も食いたかったんだよな」

「謝るならセリーヌさん」謝りなよ、一口も手を付けてねえんだ」

見ればセリーヌのにこやかな笑顔の裏に黒い何かが垣間見えた。

「いえ、お構いなく。一樹さんと海斗さんは少しお仕置き部屋へと行つて貰いますが」

セリーヌがにこやかに笑いながら首を傾げると、一樹、海斗の二人は近衛騎士隊の一人に腕を掴まれ、半ば強引に引きずられる形で退室していった。

数分後、彼らの悲鳴が城内に轟き渡つたのは言つまでもない。

「あの、誰か料理を作れる人はいませんか?」

セリーヌの問い掛けに沈黙する一同。

所詮はボンボンか、召し使いに料理させてるから料理なんか出来ないんだ、ざまあみろ。

俺はちょっと得意気に手を上げる。

「え! 拓真が……料理! ? 考えられないわ……」

「では、拓真さんに任せます」

「分かりました、姫殿下、和食でいいでしょ? つか?」

「お願いするわ」

セリーヌはにこやかな笑みで答えた。  
俺も笑みを返し、調理場に向かった。

### （調理場）

なるほど、現代日本のステンレス製キッチンとは違つて、タイルに包まれた古代西洋のキッチンもなかなか粋なものだな。

この近くに、食材を貯蔵するための空間があつたようだが、今はもぬけの殻だ。何一つとして食材がない。

機械兵が出来始めてから食材が採れなくなつたに違いない。

パチンと指を弾き、食材を違う世界から呼び寄せる。

米、味噌、タマネギ、白菜、揚げ豆腐、茄子、そして魚。秋刀魚にしよう。見る限り水道は通つてないから水もいるな。よし、これでだいたいのモノは作れる。

「さて、ちやつちやと終わらせるか

手近にあつた包丁を取り、本格的な料理を始める。

米をしつかり研いで釜で炊きこむ。

一時間しつかり炊き込めばちゃんとした米飯が炊き上がるが、待たせるわけには行かない。

指をパチンと鳴らして釜の中だけ時を進める。見事に炊き上がり、米飯の完成。

次に魚に下準備を施し、また指をパチンと鳴らす。魚を包むように激しく炎が燃え上がり、皿に盛り付ければ秋刀魚の塩焼き完成。

最後にタマネギと白菜、揚げ豆腐、茄子を適当な大きさに切り、鍋にぶち込む。

水もたっぷり入れて、釜にセツト、指を鳴らし着火。時を進めて味噌を投入。さらに時を進め、味噌汁の完成。

アバウトなんて言つてくれるな、時間がないんだ。

しかし、米飯と味噌汁を多く作り過ぎたな……。

斯くなる上は秋刀魚の塩焼きを複製、次いで茶碗に米飯と味噌汁をよそつて、盆の上にそれらと秋刀魚の塩焼きを乗せる。それを1セツとして考え、フセツト目で味噌汁、米飯共に呑きた。本当に計画通り行くものだな。

さて、これをどうにかして王室の間へと運ばないとな。

とりあえず、機内食を運ぶ際にお馴染みのアレを呼び出し、全部乗せた後再びテレポートする。

みんなの反応が楽しみだ。

（王室の間）

「ん、早かつたわね。まさか王族相手に手抜きしないわよね？」「してねえよ、ただ魔法は使つたがな。待たせるわけにはいかなかつたからな」

「あ、そ。さつさと渡してくれば？」

香織は不機嫌そうにそっぽを向く。直後にお腹の虫が鳴り、頬を染める。仕方ないなあ、と思わせるような溜め息を吐き、指を鳴らして全員（一樹、海斗は未だ帰っていない）に行き渡るようテレポートさせる。

「どうこいつ」となの？」

「ああ、作りすぎちゃつてや、みんなにも食べて欲しいな……って」

「そ、そうだったの。どうしてもつて言つなら仕方なく食べてあげ

るわよー。」

そう言つた直後、腹の虫が再び鳴る。

香織はもうたまらないといった感じで食べ始めた。

「それにしても、拓真さんの料理は美味しいわね、見直したわ」「ホントホント、すげえ美味いぜお前の料理」

「たかが庶民料理と思うてたけど、考えを改めなアカンな」「庶民の味ナメんな。ボンボン。…………お味の程は如何でしょ」

姫殿下」

「うん、ありがとう、とても美味しいわ……」

あれ？ セリーヌが泣いてる……、何故だ？

「そのね、この料理が弟の作る料理と寸分違わずおんなじで、それで少し涙が出たの、ごめんなさい、場を取り乱したみたいで」「氣にするな。それよりも、そのように溺愛する弟とやらがどの様な人間か、教えてくれないか？」

海斗の問いに「ええ」と答え、弟について語り始める。

その目はとても遠くを見ていた。

私の弟は血の繋がつてない義弟なんだけど、それなりに楽しく暮らしていたわ。

彼はどこまでも優しくて、姉妹思いだったわ。

妹とも血が繋がっていないんだけどね。

彼との出会いは雨ふる夜、孤児院のすぐ近くの四つ辻だった。

その時孤児院は何者かに襲われた後で、パトカーが走り去つていく

のと、男の子と女の子が這い出るのを見たわ。

それも、男の子は額に大きな切り傷が刻まれていたわ。

私は直ぐに救急車を呼んだ。程なくして救急車は到着し、2人は搬送されたわ。

手術も無事終わり、数日後には2人とも面会可能になつたの。  
私は毎日2人に会いに行つたわ。

最初は大切な物を失つたみたいで心を閉ざしていたけど、だんだんと心を開いて、たわいない会話が出来るようになつたわ。

数ヶ月後、退院を許され、私は2人を引き取つたわ。

それからは毎日が楽しくて活気付いたものだわ。

そうして早くも5年が経ち、2人とも立派に成長した。

私にしてあげられるのはここまで、と思つた私はここを出て行く事に決めたわ。

妹が寝静まつた夜、弟にこう提案したわ、「最後に心も体も一つになろう」つて。

弟は喜んで飛びついたわ。何も知らずに、ね。

気付けば弟は氣絶しかけていたわ、私のはだけた胸の内には可愛い弟の頭……、淫らに蕩けきつたその瞳は私にキスをしてつせがむように見ていた。

だから私はキスをした。とても濃厚で情熱的なキスを。

弟はぐつたりして私にもたれかかってきたわ、だから私は弟に呴くの、「どんなに離れていても、愛してる」つて。

弟はそれを聞いて安心したように気絶したわ。

その後、私は2人に忘却の呪文をかけた。

余計な悲しさを感じさせないよつにね……。

「そうなのか……。俺の過去とその弟の過去、よく似てるというか、そっくりそのままというか」

「嘘！？ 貴方の名前をもう一度聞かせて！ 名字も… 全部…」

セリーヌはいきなり肩を掴み、ガクガクと揺さぶる。そんな中でどうにかこうにか大原拓真と答えると、揺さぶるの止めて下を向く。

何事かと思い、顔を覗き見よとしたその時。

「たつちやーん！」

と呼ばれ、凄い勢いで抱きついた。

無論、女性には生物学的に男性が惹きつけられる一つのたわわに実った禁断の果実……、胸。

俗称おっぱいが、彼女は世間一般より大きかった。

ドレスの膨らみが景気良べつぶれているため、その様子が嫌と言つほど分かる。

「…………おにいちゃんに抱きついて良いのは私だけなの……」

そんな事を考えていると、不意に稜の叫び声が聞こえる。

セリーヌはふふん、と笑うと稜の方向へと向き直りそのまま抱きついた。

「え！？ ちよつ、まつ」

「あなたも立派に成長したわね稜ちゃん、あなたの記憶も直ぐに戻してあげるから」

慌てて離れようと暴れる稜を意にも介さず、そのまま無理矢理唇を奪う。

最初は抵抗ばかりするも徐々に抵抗を止め、終いには血の匂を押し付ける始末。

数分後、稜はパタリと倒れ、セリーヌはいきなり向き直る。

そして、俺に再び抱きついてくる。

「うふふ、たつちゃん、身構えなくても良いのですよ？」

「稜の身に何が起きたんだ？」

「一度に大量の記憶が流れてきて、稜ちゃんの精神力が耐えきれず氣絶したんだわ」

なるほど、毒が何かの類じやがないんだな。

「そうだよ。じゃあ、目を瞑つて……記憶を取り戻させてあげる」「ちょっとー、私抜きで話を進めないでくれる？」「心配ご無用、たつちゃんの記憶を呼び起こすだけだよ」「そうじゃない！ あんたは私に断りも入れずに拓真にキスするのかって話よー！」

それを聞くと、セリーヌはムツとした顔になり、香織に抗議の声を上げる。

「さつきから、聞いていれば、たつちゃんを私有財産のよつに扱つて、あなたは拓真の何なのよー！」

香織は、よくぞ聞いてくれましたと言わんばかりにない胸をそらし、得意気に語る。

「ふつぶーん、良いこと？ 私はね、そこにいる、デカい乳に挟まれ、鼻の下をでろーんと伸ばし、鼻血だらだら流してるその超バカ犬の飼い主、分かりやすく言うと奴隸。サルでも分かるように言うと婚約者なの、大原拓真の婚約者。だからその腕を離しなさいー！」

言下、香織はセリーヌに対して指差した。

セリーヌはさうこもったとした表情になり、大切なぬいぐるみを放さないかのように、俺の体をぎゅーっと抱き締める。

「嫌です。これは私の男です。たつちゃんの童貞を奪つたのはこの私はです」

部屋にじよめきが走る。

「ふ、ふん！ どうせ一回でしょ？ 私なんか何回もシてるのよー。霧岡さんに流されて、だけどね！」

「嘘ー？ ダーリンは私が“はじめて”だって言つたわ！ そこんとこりどうなの、ダーリンー？」

「いや、現時点の記憶では真理亜が“はじめて”だけ……」

「覚えてないだけで実際は真理亜の前にシてるのよ。それを今から思い出せせて上づらつてこつてゐる。わあ、たつちゃん、唇を出して下をこ」

訳も分からず、俺は唇を突き出す。

が、しかし、香織はシャイニンググワイザード張りの跳び蹴りを繰り出し、思い切り吹き飛ばす。

恐らく、香織は俺の近くの空気を踏み台にしたんだろうが、なぜシャイニンググワイザードなのか。

腕にモロに当たつて、ベキつて鈍い音がしたんだけど。折れたよ、確実に腕の骨が折れましたよ、香織さん。

「……決闘よ、貴方に決闘を申し込むわー！」

香織は再びセリーヌを指差し、声高に叫ぶ。

セリーヌも香織に堂々と向かい合ひ、不敵な笑みを浮かべながら、

香織に語りかける。

「良いですね。弟ラブでも女王の端くれ、貴方達には負けませんわ。条件は何にいたします?」

「ほんとうにムカつくわね、その態度。ナメた口訊いてると本当に後悔するわよ?」

両者の間に火花が散る。

ああ、これが女の戦いつてヤツか、数力月香織達に囮まれて生活したが、一度も見ることの無かつた女の戦いか。

「では、こうしましましょ。もし、万が一に貴方が勝てば、キスは諦めますわ。しかし、私が勝てば、飛びつきり濃厚なキスをさせて貰いますからね」

「臨むところよ! 表に出なさい! ……あんたも何ぼさうとしてんのよ! あんたも外に出るのよ! あんたがいなきやこの決闘は成り立たないんだから

「お、おひ……」

何だか俺が感動に浸つていてる間に話が進んでしまったようだ。遂に武力抗争にまで発展してしまった俺の争奪戦。

お色気攻撃ばかりじや息が詰まつてしまつ。

たまにはこいつのもいいつて思うが、みんなには血を流して欲しくない。

「まつたく……」

俺は複雑な心境のまま、城を後にした。

## 第一章 セリーヌの追憶（後書き）

次回は血湧き肉躍る女のプライドとプライドがぶつかり合つ女の戦い、の予定です。

## 第三章 女の闇 (前書き)

今回は戦闘シーン重視でお送りします。

こつじてこの間にも物語は少しずつ進んでいるんですね。

そして、拓真が軽く暴走します。

あれ? この章の間はピンクくしないって決めてたのに……。

いや、ピンクくはなってないけど。

## 第三章 女の闘い

時は同じく、フイリア王国のとある路地裏、一匹の犬が走っていた。しかし、その犬の表情はとても楽しんでいる顔とは言えず、むしろ恐れに近かつた。

何故ならばその後ろ上空にはセリーヌを追つていたものと同じモーテルの機械兵。しかも犬に負けず劣らずの速さで追つて来る。犬は自らの限界を超えた速さで走らねばすぐに捕まってしまうのだ。

「ハツ……ハツ……ハツ……、今までの機械兵は動物を捕獲しないんじゃなかつたの！？」

犬は嘆きを帶びた声を上げる。この世界の動物の大半は言葉を話すのだ。

犬は夢中になつて路地裏をかける。路地裏は狭いため機械兵が路地に入る事ができない。

そのため機械兵はバーニアを装備し、上空から追いつことしかできない。

大通りに出れば最後、呆氣なく囮まれて殺されるか捕獲されるのを待つだけ、その点路地裏は逃げるのに最適だと言える。

が、油断は許されない。上空からでもレーザービームや捕獲用の網を放つ事は出来る。

だから犬は全速力で走らねばならないのだ。

「ハツ……ハツ……、このままじや撒ききれない！ 何か策を巡らせないと キヤツ！？」

犬は石を思いつきり踏んで、転んでしまう。その際、足を怪我して走ることは愚か動くことすらままならない。

「うぐひ……、こんな時に……」

苦痛に顔を歪める犬に機械兵が追い付く。機械兵は銃口を犬に向けエネルギーを充填し始める。犬は少しでも動こうとするが、右前足が傷付き、まともに動くことが出来ない。そして、無情にもエネルギーの充填が終わり、犬に向けて放たれる。放されたエネルギーは光線の形を成し、犬に着弾した瞬間纏わり付き、跡形もなく焼き消える。

「犬ノ獣人、『ソフュア・ローレン』ノ捕獲完了、残ル上等生物ハ、猫ノ獣人、『ローズ・フィレンヌ』ノミ。マタ、汎用型機械兵E-5062号カラE-5072号マデガ何者カニ破壊サレタ。恐ラク人間ガドコカニ潜ンデイル可能性ガアル。ガラドボルグ様ノ命ニヨリ、ヒトノ形ヲ成スモノヲ一ツ残ラズ捕獲セヨ。ソレ以外ノ下等生物ハ、殺シテシマエ！」

先程レーザー光線を放つた機械兵が他の機械兵に向けて命令する。通常の機械兵の目が青色に対し、よく見るとその機械兵だけ赤色である。恐らく、小隊のリーダーなのだろう。リーダーがそう言うと、他の機械兵はそれぞれバラバラの方向へと飛び去つていった。

「セリース王女サエ殺セバガラドボルグ様ノ計画モ達成サレ、アノ才方ノ計画モ達成サレル……。絶対ニ探シ出シテヤル……」

セリーヌの過去を知り、自分の本当の過去を知るためにセリーヌとキスをしようとしたら、香織に蹴られて「決闘！ 決闘！」と騒ぎ出した。

仕方なくフィリア城の中庭で決闘をする事にしたんだが……。相手は女王、女王は強いと相場が決まっている。このままじやけちよんげちゃんにやられて終了だ。

服装もちゃっかり、煌びやかでいかにも動きにくそうなドレスから、質素で動きやすそうなTシャツにジャージ姿（彼女の希望により仕方なく用意した）

香織には傷付いて欲しくない。香織に説得を試みるが……。

「本当にやるの？ 決闘」

「あつたりまえでしょう？ あそこまでバカにされて黙つていられないわよ」

「でも女王の大半はメチャクチャ強いぜ？」

「私のプライドに関わるの。あなたは黙つて私の応援をしてなさい！」

ダメだこりや……、香織の闘争心に完全に火が点いたよ。

香織の説得を諦め、俺は両者共に傷付かないようなルールを提唱する。

「分かつたよ……。でも俺のルールには従つて貰うからな！ ルールは基本的に何でもありだ。しかし大怪我だけはさせるな。させた瞬間試合を終了させ、大怪我させたヤツの負けにする。それでいいな！！」

「分かつたわ」

「流石はたつちゃん、優しい……。たつちゃん！ 待つてね！ すぐキスするから！」

そつ言いながら投げキッスをたつふりと俺に振り撒く。恥ずかしくなつて、目を逸らしてしまつた。

「媚び売つてんぢやないわよ！」

「弟に何をしようと私の勝手よ」

「いっ、こぞ尋常に……、試合始め！」

『やああああああッ！』

最初に一人は各自武器を作り出し、ぶつけ合つた。

香織は薙刀をセリーヌは一振りの剣を……、つて「刀流！？」

「ふふん、覚えてないだろうけど、たつちゃんに「刀流」を教えたのはこの私なのよ？ ふふふ、67代目宮本流剣技師範、おはらせりな大原芹奈の実力を見せてあげるわ」

師範！？ 僕は確か……、68代師範だから……、前代師範！？

おいおい、俺は一度セリーヌ、もとい芹奈お姉さん（仮名稱）を一度でも負かせた事があるのか！？

宮本道場の師範は現師範が負けた時点で負かせた人が師範となり、負けた人は師範という肩書きを剥奪された上、宮本道場を去らねばならない。

この辻があるから、芹奈お姉さんに本氣で戦うことが出来ないはず……。

「あら、戦闘中に余所見なんてナメしてくれるじゃない……、ほんとうにムカつくわね！ あんた！」

「ふふふ、怒りは視野を狭くするだけよ？ 私が本当の剣技を教えてあげるわ」

すると、芹奈お姉さんは急に後ろへ飛び退き距離を取る。

鍔迫り合いの状態で芹奈お姉さんは飛び退いたものだから、香織はバランスを崩す。芹奈お姉さんはそれを待っていたかのように一瞬で距離を詰めて袈裟斬りを繰り出す。

確か攻式六ノ型、「手の平返し」だつたはず。

しかし、香織も黙つて斬られる程バカじやない。香織は咄嗟に体を氣化し、芹奈お姉さんの後ろで体を再構築、薙刀も装備して芹奈お姉さんを斬りつけた。

「きやあああああっ！」

「おい、バカつ、香織！」

「大丈夫よ、服を斬り裂いただけ、本当に痛くも痒くも無いんでしょ？」

「あれ、バレてました？」

「あのねえ……、当事者が分からぬわけ無いでしょ？　あんたは重度の天然？　それともタダのバカ？」

「言つたわね！！　私はバカでも天然でもないつ！　喰らえ！」

直後、芹奈お姉さんは香織の服を口掛けて一本の剣をX字に振り下ろす。結果、香織の服にインペリアルドランの進化前、パイルドランにジョグレス進化する際の片割れ、エクスブイントみたくX字の切れ込み（スリットと言うべきだろうか？）が入った。

その際、芹奈お姉さんの服から何かが落ちた。

瞬間、芹奈お姉さんの胸のサイズが一回り大きくなつた。

その数秒後、今度は香織の服から何かが落ちて、胸のサイズが一回り小さくなつた。

え？　嘘でしょ？　香織の日々大きくなつていく素晴らしいと信じて止まない胸は実はパットで偽造していて、芹奈お姉さんのちょっと残念だなあと思つてた胸は、実はそれ以上に大きい「バストレボリューション」が無いため無理矢理押し込んだ、現実に顕現した胸革命だつたのだ！

「な……、何よ！ その胸は！ 反則じゃないの！？」

「アナタこそ、その胸は何ですか？ 貧相過ぎて逆に同情したくなりますわ」

「胸……、デッかい胸……、食べたい……、揉みたい……、むしゃぶりつきたい……、メチャクチャに揉み拉きたい！」

香織曰わく、あの時の俺の足取りは夢遊病者のように覚束なく、とても危険な顔だつたらしい。

芹奈お姉さんの胸を見てから香織に疾風の一撃【ウインドブレイク】で吹き飛ばされるまでの記憶が抜けてるため後々香織に聞き、自分が何をしたかを確認したのだ。

その後俺は香織の制止を無視して芹奈お姉さんを押し倒し、服を引き裂いて芹奈お姉さんの胸を揉んだり舐めたり、挙げ句の果てには、芹奈お姉さんの乳首に赤ん坊のように吸い付き、芹奈お姉さんをイカせた後、ズボンを脱いで、行為までしようとしたらしい。香織も流石にいけないと感じ、疾風の一撃を放つたそうだ。

俺は吹き飛ばされて正気を取り戻すと、芹奈お姉さんが倒れている事に気付く。

俺は、「誰がこんな事をしたんだ！」と叫びたかったが、その前に「アンタがイカせたのよ！」と香織の疾風の槍【ウインドスピア】を放つて叫ぶことは出来なかつた。

すぐさま愛子の魔法、覚醒の雨を発動、芹奈お姉さんは頭をさすりながら起き上がりこじらを向くと、ふふふっと口を隠しながら笑う。

「たつちゃんてば……ズボンを脱いで、私にえつちいことして貰いたいのね？ 決闘中なのに……、はん！！ イイ！！ その視線が私を狂わせるつー」

「あ、あ……、うう……」

「ああ……、恥ずかしがるたっちゃんの顔も魅力的い……あ～ん！～ 今すぐその妖しい体を奪い取ってあげるわ！」

そう言つた直後、芹奈お姉さんは思いつきり飛びついてきた。このまま抱きつかれれば、原始の本能が理性をぶつ飛ばして決闘しているのにも関わらず生殖活動をしてしまうだろ。もちろん、それを良しとしない香織は、疾風の一撃で吹き飛ばす。数メートル吹き飛ばされた芹奈お姉さんは怒りのオーラを滲ませながら、それでも冷淡な声で香織に語りかける。

「へえ、私とたっちゃんの恋路を邪魔するんだ……、どうこう事がお分かりになります？」

「『めんあそばせ、アナタの常識は私には通じないみたいです』『私とたっちゃんの恋路を邪魔した人は痛い目にあわせる……、妖魔の幻想曲【ファンタジア】！…』

芹奈お姉さんはさう言つて指を弾く。

次の瞬間、五十体を超える騎士の亡靈が芹奈お姉さんを囮むように配置される。

「さあ、私の騎士よ、彼の者をこじてなんに呪きのめしなさい！」

『つまおおおおお…』

「なんて禍々しい魔力なのよ……、これ。でも負けない。拓真の唇は……つまご、拓真の体は私が全て奪い取る！」

香織の口から何か恐ろしい言葉が聞こえた気がするが、きっと氣のせいだね。つ。

槍を持った三体の乗馬騎士の亡靈は香織に向かつて突進を仕掛ける。香織は空気の弾【エアブレット】を放ち、一体の乗馬騎士の亡靈の心臓部を吹き飛ばし破壊する。

しかし、三体目の騎士の亡靈は弾が逸れて、首にぶち当たり吹っ飛ぶも、それだけだった。

「嘘…？ 首をぶつ飛ばしただけでは消えないの…？」

香織は感嘆しながら横に一閃するも一切通じず、香織の胸には無慈悲にも騎士の亡靈の鋭い一撃。

香織は抵抗する間も無く、心臓を貫かれてしまった。

「がつ……………！？」

「香織…！」

「大丈夫、本当に貫いてないわ」

突き刺さった槍を乱暴に引き抜かれぐつたりと手を付き噎せる香織。その胸は衣服に穴が空いたものの、地面に赤い斑点が落ちる事は無かつた。

「がはつ…！ 『じほつ、『じほつ……………！』何コレ、確かに胸を貫かれたはずなのに……！」

「あなたは本当に貫かれたのかしら？」

「どういうこと…？」

「そもそも、この騎士達は皆実体ではなく虚像。もつと言つと電気信号の塊。これに貫かれると、貫いた箇所に痛みの電気信号を沢山送り込み、あたかも貫かれたかのように激しく痛むの。でもまだまだ序の口よ、警弓兵用意！」

芹奈お姉さんは地面と垂直になるように手を上げる。

香織も「アレしか無いわね」と呟き、静かに精神力を体中に循環させている。

「放てえ！！」

「遅い！」

その瞬間、香織が常人には決して捉えられぬスピードで芹奈お姉さんの眼前に移動し、かめめ波の構えを取った。

「早いつ……！？ 重装歩兵、私を守れ！」

芹奈お姉さんはその一言で分厚い鎧に身を包んだ騎士の亡靈を芹奈お姉さんの真正面に配置し、防御を固めたつもりでいるが、香織は不敵な笑みを見せた。

離れていようが問答無用で引き寄せるような、香織を中心とした空気の流れが生じ、手の内に集められて凝縮されていく。

「無駄よ！！ その程度の壁なんて無いも同然、全て吹き飛ばすわ！ 出力300%！ 風属性最強魔法、風翔爆空砲【エアリアアルバーストフレア】！」

次の瞬間、香織はかはめ波の型に構えた手を突きだし、蓄え凝縮していた空気を球状にして一気に放出する。

重装歩兵はもちろん芹奈お姉さんどころか、周りの全ての騎士の亡靈達をも飲み込んで吹き飛ばした。

今や体中泥まみれで守る障壁も無い芹奈お姉さん。しかし、これだけ絶望的な状況にも関わらず、余裕の表情を崩さない。

「なつ、なによ！？ まだやる気なの？ その表情は何？ 今どん

な状況かわからないとでも言つの？」

「いいえ、分かりますわ、貴方の危機、私の好機が」

「あなたの周りには身を護る物が一つもないのよ？」

「貴方」じゃ、そろそろ虚勢を張るのを止めたらどうです？」

芹奈お姉さんのその一言で、香織の表情が焦りで揺らぐ。

「ど……、どういう事よ！？」

「もう既に精神力はほとんどすっからかんの状態なんでしょう？ 膝がちょっとガクガクしているわ？ 精々薙刀を五分留めるのが精一杯なはずよ？」

「それくらいあれば疾風の一撃【ウインドブレイク】が放てるわ」「無理ですわ、五分留めるのが精一杯と言えば聞こえが良いけど、薙刀を維持するのには精神力なんてさほども必要ないの。薙刀が1として、ウインドなんたちは100は要るの、撃とつとした瞬間、貴方は昏倒するわ」

「…………そうね、確かに私の精神力は風翔爆空砲を放ち、精神力はほとんど残っていないわ。疾風の一撃を唱える事もかなわない。でも五分あれば充分あんたを倒せるわ。仕切り直しと行こうじやない」

「生意気言っちゃって……、お仕置きが必要のようね」

二人は各自得意とする武器を装備する。

一触即発の雰囲気が一人を包み込み、耳が痛くなるほどの沈黙が一人に重い足枷を付ける。

俺が固唾を飲み込むのを合図に、両者は同時に駆け出す。まるで重たい足枷を無理矢理引きちぎったみたいに。

「つおおおおおおお！」

「はあああああああ！」

二人は雄叫びと共に獲物を打ち据える。両者の獲物は激しく打ち据えられたはずなのに刃こぼれ一つなく、未だに現役だと獲物が語り

かけているようにも思える。

「あんた、なかなかやるじゃない。拓真ほどじゃないけど」「貴方こそ、たっちゃんと互角以上の戦いが期待出来ますわね」

二人は同時に飛び退く。香織は着地した瞬間、風の力を少し使って芹奈お姉さんに飛びつき薙刀を振り下ろす。

着地後、刹那の時間が生まれる硬直の時間を狙つたのだ。芹奈お姉さんは驚くが、不敵の笑みを浮かべる。

「でもまだ甘いわ！」

「がつ……、はああああああつ……」

吹き飛ばされた香織は雄叫びを上げながら薙刀を滅茶苦茶に振り回す。

それによつて激しい風の刃がいくつも生まれて芹奈お姉さんを襲う。服が所々派手に切り裂かれる。しかし、付いたのは小さな切り傷だけだった。

お陰で芹奈お姉さんの服から所々肌が露出して……、「うー、鎮まれ俺の息子よ！」

……なんて考えていたら香織も再び接近し、決死の表情で打ち合いを始めた。

芹奈お姉さんが右手の刀を振り下ろし、香織が薙刀の刃の付いている方で受ける。

間髪いれず、芹奈お姉さんが左の刀を振り下ろすも、右手の刀を弾

き返して左の刀も弾く。

逆に香織が攻勢に出れば、芹奈お姉さんが一つの刀で翻弄し、すぐさま右の太刀を喰らわせる。

この繰り返しが延々と繰り返された。

しかし、その繰り返しも突如として終焉を迎えたことになった。

「もうそろそろ決着付けなきゃね」

そう言つて芹奈お姉さんは突然剣を一閃させる。

その衝撃か、風の魔法が発動したかは定かではないが、香織の体が遙か上空に浮かび上がったのは確かなようだ。

「これで……、止めよ……」

「ナメるなあああ！」

芹奈お姉さんは一振りの刀を香織に向ける。その間に激しく爆ぜる閃光が見え始める。

香織も最後の力を振り絞り、空気の槍【エアスピア】を放とうとしたが香織の魔力、精神力、体力共に尽き果てようとしていた。やんぬるかな、香織は間もなく芹奈お姉さんの一降りの剣から放たれし極太のレーザー光線に包まれた。数秒後、香織はドサリと重たい音を出して背中から着地した。気絶しているようだ。

「……勝負あつたな」

「やつたわつ！ たつちゃん！」

王室の間の時と態度があからさまに変わっている。

頬擦りしたり、抱き締めたり、首筋から耳朶まで妖しく舐めたり……。

こんな所を司法卿なんかに見られたら……、懲罰房なんかじゃすまねえよな……。

「その時は司法卿を殺してもたつちゃんを助けてあげるかい」

「これまた、物騒な……」

「これでも本気よ……？　じゃあ、約束のキス。たつちゃんからちゅうちゅうする約束だつたよね？」

そんな約束した覚えねえよ！？　って言ひたかったよ、本当は。でも、芹奈お姉さんの吸い込まれそうな瞳、芹奈お姉さんの頭髪から醸し出される魅惑的な香り、何より、芹奈お姉さんのふつくじとした唇に魅了されていた。

かつて香織とぶつかつた時もこんな感じだった。俗に言ひ、一悶れといつやつだ。

そのため、俺は「……うん」と答へてしまひ。

芹奈お姉さんは頬を朱色に染め唇を突き出して「んっー」と可愛く鳴く。

その動作一つ一つが可愛くて、俺はとてもドキドキしていた。

香織とのキス以来の出来事だ。

鼓動が早くなると共に体中が熱くなり、気付けば香織とキスをしていた。

芹奈お姉さんの時もそうだ。芹奈お姉さんを見ていると、体が熱くなり、知らず知らずの内に唇を近づけていた。そして

「んちゅ……」

静かに唇を重ねた。

その時、脳裏に数多の映像が浮かび上がった。

これは、孤児院だろ？俺の隣には兄貴が倒れていて、正面には憎き元教頭。

額には傷があり、既にぐつたりしている。

元教頭は手に持ったサバイバルナイフを振り上げる。その瞬間、横からの閃光が元教頭を吹き飛ばした。数分後、女の子が入り口から現れ、俺にキスをした。

場面が変わり、これは民家の玄関だろ？俺と当時の俺より小さい女の子、恐らく稜が民家に入るのを躊躇っている。

『どうしたの？』『いじなも、私とたつりちゃんと稜ちゃんの家なのよ。』

『分かってはいるんだけど……、お邪魔しますでいいのかな？』つ

て『違うわ、たつちゃん。我が家に入る時はただいま、よ。』

『じゃあ……、ただいま』

『お帰りなさい！　たつちゃん！…』

俺よりも大きな女の子、恐らく芹奈お姉さんは駆け寄つて来る俺をとてもキツく抱き締めた。

『じゃあ、稜ちゃんも』

『……ただいま！』

『お帰りなさい！　稜ちゃん！』

芹奈お姉さんは俺と同様に稜をキツく抱き締めた。

『いい？　今日からここがあなたたちのお家よ。したいことは遠慮しないでしていいし、欲しい物は何だってあげるから』

『じゃ、じゃあおねえちゃん』

『なあー? たつちゃん?』

『おねえちゃんのキスをちょうどいい?』

『もう! たつちゃんてば甘えんぼちやんなんだからあ…… そんなにせがまなくても、大好きなたつちゃんにはいつぱいキスしちゃうからねつ……』

『やつたあ! おねえちゃん大好きつ……』

やつこつて、俺と芹奈お姉さんはとても濃厚なキスをした。

他にも、砂場でお山を作ったり、公園でキャッチボールをしたり、授業参観にて芹奈お姉さんの前で手を上げたり、それはもつ沢山の思い出が頭に流れ込んできた。

そのどれもが、最終的にはキスをしていた。

「んちゅ……はむちゅ……」

「んく……ペニ……ふあ……、記憶が戻ったのね?」

「うん、ありがとう、おねえちゃん」

俺を甘えたそうな目で見る芹奈お姉さん（以後おねえちゃん）

一つの唇は互いに引き合ひ

「や二歳だよ、一人とも」

香織に止められた。

「あんたら、いつまでチユツチユチユツチユしてんのよ、腹立たしいことこの上ないわ」

「あああ、悪い……、香織」

「ええ!? まだ五年間のブランクは埋まってないわ

そう言いながら再び抱き締めるおねえちゃん。

抱き締められると世間一般よりも大きな胸が派手に潰れる……。

気付けば鼻血をだしていた。

「いやらしい……、で、結局、アンタは拓真の何なの？」

「私はたつちやんの姉よ。姉とは言つても、ヒツチした仲なんだけど」

「おねえちゃんは何でも教えてくれる。勉強も、性の知識も」

「ふーん、そう。私は負けたから今日の所は見逃すけど、拓真に変なコトやつたら、姉弟共々犯し匂くしてやるからね？」

香織はそう言い、「ふん！」と踵を返して城へと戻つていった。

その後ろ姿が妙に嬉しそうだったのは、きっと氣のせいなのだろう。

「じゃあ、邪魔者もいなくなつたし、さつきの続きを……」

「その前に、俺とも戦つてくれないか？」

「え～！？」

明らかな拒否反応、やつぱりか……。俺は使いたくなかったが、条件を付けることにした。

「じゃ、じゃあ、おねえちゃんが勝てばキスだけだった予定にエッチも組み込んであげる。どんなに激しいこともするから。もし俺が勝てば……、メイド服に着替えて、俺にじて奉仕

おねえちゃんの顔が凄く綻んだ。

恐らくエッチで凄い反応したんだと思つ。

「いいわ、やりましょっ、たつちやん。でも何で私と戦いたいと思ったの？」

「力試しだよ。おねえちゃん、俺が勝てなかつた、いや、今は分からぬいけど、香織に勝つちやつたもん、だから、おねえちゃんに力試しを頼もうかなつて」

「ふふふ、手加減は無くていいのよね?」

「うん、おねえちゃん、あの時と変わらずに大好きだよ」

「私はあの時以上に大好きよ、たつちゃん」

おねえちゃんは俺を慈しむように抱き締める。

ヤバい、また息子が暴れだした。鎮まれ！ 我が息子！

「お、おねえちゃんのおっぱい、おっしゃく柔らかくなつたね」

「たつちゃんだつて、アソコがガチガチよ？ あの時よりも逞しくなつちやつて…… いやらしいんだからつ ちゅうしょつ」

そつぱつて、おねえちゃんは俺の唇を無理矢理、獣が獲物を貪るようなキスをしてきやがつた。

ああん、そんなに乱暴なキスをされたら下半身がかなり反応しちゃうじやないか！！

……ヤバい、そろそろヤバい、頭がイかれ始めた。

既に俺のをおねえちゃんのアソコにこすりつけているわけで……、おねえちゃんの顔が朱に染まつていてる。

「んふ、んつ、んんふうつ……ふあ……、いやらしそれ……、ハア

ハア……戦うよりも、エッチしたい……」

「でも、力試しはしたいんだ……、ハア……、ハア……」

「分かつてゐ、おねえちゃん頑張るから、たつちゃんも頑張つて

おねえちゃんはぎゅっと抱き締めると、五メートル離れていた。俺は深呼吸をして心を鎮める。えつこことならこの後いつでもや

れるだろ？ 俺。

「…………心の準備はできたか？」

「…………ええ、いつでもどうからでも掛かってきなさい」

俺は例によつて右手に聖剣エクスカリバーを、左手に魔剣ラグナロクを装備する。

「よう、相棒。久しぶりのねえちやんとのゆづりてきたか？」  
「まあ、狂わされるかと思つたよ」  
「我が主よ、戦に私情は無用。心得てはいるであらう。」  
「戦つてほど大きくはないよ、練習試合だ」  
「意思剣を一本も……流石はたつけやんね……」  
「ありがと、行くよ……おねえちやん！」

俺はおねえちやんに向かつて突進する。

おねえちやんも一本の剣を装備し、迎え撃つ準備をする。

宮本流57代目師範と58代目師範の激しい剣劇の嵐が巻き起つ。

## 第三章 女の闘い（後書き）

次回、機械兵との戦闘再来！！！

拓真が連れてかれる……！？

## 第四章 間魂の田覚め（前書き）

お久しぶりの更新です！

仕事し始めてから時間が無くて……。

ついに拓真が狂います！  
さらにえっちになります！

……いいのかなあ？

## 第四章 間魂の目覚め

結果から言おう、ボロ負けだ。

姉ちゃんの日に見えぬ程の剣劇は反撃を許さず、あっさりと降参。やつぱり姉ちゃんは強い。

うううう、ん……、すずめ……、っぽい何かが爽やかに朝を教えてくれる。

今日は最高の一日になりそうだ。

久々に芹菜姉ちゃんと寝たからか、ぐっすりと眠れた。

久々の行為の後だからというのもあるのか？

溜まりに溜まつたブツを芹菜姉ちゃんと注ぎ込んだからか？

とにかく、やつぱり姉貴がいるのといないので全然違うんだな。

「……っ！ 何だ？」

ああ、芹菜姉ちゃんが寝た振りして俺のアレを握り締めているんだな。あれほどお腹いっぱいあげたのに、まだ足りないというのか？ しようがないなあ、とりあえずこの手を解かせようか、なんとうかアレなんだよな。

俺は自分のアレに手を伸ばし芹菜姉ちゃんの手に触れる。

瞬間、何か湿つたものがべろりと舐めた！

その後も手を放さずにいると、チロチロチロチロと舐めていくのがわかる。

左手で布団を持ち上げると、案の定香織と稜が下着姿で潜んでいた。

俺は芹菜姉ちゃんを起こしめるよう、小さな声で叫ぶ。

「何してんだつ！」

「見て分かるでしょ？ おにいちゃんフルトを食べてるんだよ？ すりすり。ほら、ほむつー！」

はむつ！ つて所で俺のアレを口に含みやがった！ 瞬間、えもいわれぬ快楽が脳天を突き刺し、ぐりつと視界が一瞬黒に染まる。

「れろれろ……、れろれろ……、ちゅ、ちゅ、ちゅ……！」

「舐めるなあつ！ 吸うなあああああつ！ 姉ちゃんに全部あげたがら出ないつて……！」

「嘘ばつかり。おっぱいで包み込んだらガツチガチになつたよ？ 妹だからかな？ 稜に責められるの嬉しい？」

「そりゃあ嬉しくないとつたら嘘になるけど……」

「じゃあいつぱい我慢してね？ とつても濃厚なのを飲みたいから」

」

稜は胸でアレを挟み込んだままひゅうひゅうと舐めながら吸い始めた。

すぐに頭の中をスパークが埋め尽くし、いつ心が折れても不思議じやなかつた。

それでもしじまへりへ耐えていると、稜がニヤリと笑い思い切り吸い上げた。

「そんなん、思い切り吸い上げてんじや……、うあああああ……！」

情けなくて悲痛な叫びと共に脱力感が腰周辺を襲う。こくつ、こくつと音を立てながらナニかを飲み干し、稜が恍惚とした表情になる。

「ふはあ……、とつてもおいしかつたよ、おにこちゃんフルト。肉汁もたつぷり飲めたし……」

「勿論、稜だけにじつくんせるなんて不公平な事、しないよね？」

「もう、好きにしてくれ」

香織はその言葉で喜び勇んでモノにむしゃぶりつく。

ちゅうちゅう吸いまくる香織のスタイルは敏感なモノを容赦なく刺激し、呆気なく一度目の絶頂……、香織は例に漏れず恍惚とした表情になりながらぐいぐい飲み干す。

「ふはあ……、最高……（はあと）、これより美味しい飲み物なんて絶対ないわね」

「そんなに俺のソレは美味しい飲み物なのか？」

「もちろん。疑わしいなら拓真が飲んでみればいいじゃない、拓真の濃厚ミルク（はあと）」

そう言った瞬間、香織は濃厚なティープキスをして来て、粘り気のある何かを舌で押し込まれる。

「どう？ 自分の濃厚ミルクの味は」

「言われてみれば、確かに美味しい……かも」

「くふふ、朝だからこのくらいで自重するわ。ダメねえ、夜のテンションが抜けないわ、これも拓真が中に出さないからね、本当に」「気持ちよかつた？ 梁と香織ちゃんどっちが気持ちよかつた？」

「さ、さあ、朝食を作ろうじゃじゃないか、芹菜姉ちゃん早く起きて、朝ご飯取られちゃうよ？」

俺は芹菜姉ちゃんを振り起こし、パチンと指を鳴らして下着や服を生成、着用後実際にぎこちない動きで厨房へと向かおつとする、が。

「ダメ、おにこちゃんの濃厚ミルク、まだ中にビビュビビュされてないもん。少なくとも二回どぴゅどぴゅしないと離してあげないもーん！」

「ダメよたつちゃん、妹だけにいに気持ちさせひゃ。お姉ちゃんに

もこつぱい注ぎ込んでね？　二回分は欲しいわ（はあと）

「この淫乱使い魔！」

「別に使い魔じやねえよ！？　俺は！」

朝からお盛んな三人に犯され、今日も最悪な一日が始まった。

『『『

明朗な声が王室内に響き渡り、今日も賑やかな朝餉が始まる。喋りながら食べるもの、黙々と田の前にある食べ物を飲み食いするもの、ただがむしゃらにがつつくものなど、食べ物の食べ方も千差万別だな。

「ところで芹菜姉ちゃん、姉ちゃんの魔法って、火、風、水、土の四大元素に当たはまらなければ、火、水、土、木、金の五行の魔術式でもないし、増してや光や闇でも無さそうだけど、姉ちゃんは一体何の属性を使うんだ？」

「さあ？　お姉ちゃん、属性なんて考えた事無いから……。私が使える魔法なんて、ほんの少しの治癒魔法と妖魔の幻想曲【ようまのファンタジー】、それとの武具の輪舞【ぶぐのロンド】だけだも

の』

パチンと指を弾く芹菜姉ちゃん。間もなく華美な装飾が付いてない銀色の細身の剣が現れる。レイピアと呼ばれる類なのだろう。

「あら、良い剣じゃない、護身用に頂けないかしら？」

「ええ、どうぞ。無銘ですが、名剣並みに鋭い光を湛えていますわ

芹菜姉ちゃんは先程呼び出したレイピアに鞄を付け、楓に手渡す。楓は抜刀する動作も見せずレイピアを俺の首筋に押し当てる。

「お、お見事……」

「これでも私、レイピアの扱いも長けているの。一番は二丁拳銃だけど」

納刀しながら楓は自慢げに話す。

もしかしたら俺や芹菜姉ちゃんよりも剣の扱いに長けているのかもしない。

「さて、とみんな食い終わったみたいだな。じゃ、片付けるぜ」

指をパチンと鳴らし、お皿と机を上にいぼれた料理もひとつも一掃する。

最近指パチンで大概の事が出来るようになったのは冥王の魔力が馴染み始めたからなのだろうか？

「ふいー、拓真の料理めちゃくちゃウマイなあ、なんでそんな料理上手いん？」

「本当だよ、拓真君の料理はまさに絶品と呼ぶに相応しい料理だと思うよ。誰に教わったレシピ何ですか？」

「姉ちゃんのレシピを俺なりにカスタムしたんだ。料理の腕は姉ちゃんとに扱かれてできた一級品さ」

その言葉に機嫌を良くしたのか、芹菜姉ちゃんが後ろから抱き付き頬擦りをする。

香織が顔を真っ赤にして戦慄く様子で調子に乗ったのか、首筋をちゅっとキスをし、さらに舌を這わせ耳朶に甘噛みした、その瞬間に轟音が俺の耳をつんざき、激しい揺れがフイリア城を襲う。

「げーげーー、げーげーー、……げーおおおおー!？」

「ちゅうちゅう……、あ、ジリしたのです? カリューナ、変身を解かずに駆け込んで」

突如扉を開けて入ってきたカリューナというカエルがこちらにぴょんぴょん跳ねてくる。

その内にカリューナは人間になり、俺を飛び蹴りで蹴飛ばして芹菜姉ちゃんに抱き付いた。

「おかー……、女王殿下! ジリしてジリの馬とも知らない男の子にちゅーちゅーしてんです! 女王殿下はおとつ……、大原拓真としかちゅーちゅーしないって言つてたじやないですか!」

「カリューナ、さっき蹴ったその男の子じゃ、大原拓真、私達のお父さんよ?」

え、お父さん? 芹菜姉ちゃんの言葉に耳を疑う俺。かなりパニック状態である俺をさらに追い討ちを掛けるように、芹菜姉ちゃんは俺にカリューナを紹介する。

「紹介するわ、この子はカリューナ。もつともカリューナはこの世界での名前で本当の名前は大原佳奈。私とたっちゃんの間に生まれた娘よ。」

「い、いつ妊娠したの?」

「たっちゃんと初めて交わり、この世界に落ちてしまふしたら妊娠した事を知ったわ。私は佳奈を拓真のように愛したわ。愛を有りつ丈注ぎ込んで育てた佳奈はとても純真無垢に育つてくれたわ」

大山四姉妹から黒いオーラが立ち込める、殺氣だ。

「なんでお姉ちゃんだけ子供が出来て、私達には子供が出来ないのかしら？」

「私達は拓真さんの子供なら喜んで孕みたいと思つてこますの」

…

「よーし、今日から俺達全員が孕むまで逆レイプなー。」

「子供が出来ればわいらは一層愛し合える関係になれるはずなんね

…」

黒いオーラが顎門を開いてこよみの幻覚に襲われる。

本当に「めんなさい、今晚からちやんとお相手しますから、許してください。」

そつねガティブに思えてこのと、佳奈が芹菜姉ちゃんから飛び降りてトコトコ、トコトコに向かって走ってきた。

「え？ お父さん。わざわざ「めんなさい……、やの」

佳奈はゆきへつと田を躰る。

これからある事を容易に予測出来るが、あえて何もせず、田を躰つておこひ。

「ちゅう！」

一拍の間を挟み、佳奈の少くとも柔らかい唇が重ねられる。

……まあ、五秒だけだけど。

嗚呼、黒の顎門が頭からがづづつ歯み砕していくような幻覚に襲われる……。

「めんなさい、本当に一つが孕ませるから許してください。」

「今日は緊急事態だから」これでオシマイー。またゆきへつチューし

よしねー、おとうさん！

「今日は緊急事態だから」これでオシマイー。またゆきへつチューし

そつと佳奈は可愛げなウインクをかます。

その瞬間に体中の血液が沸騰するくらいに熱くなり結果的に浮かされてしまつ。

「俺と姉ちゃんの娘はこんなにも可愛いくんだな……」

「浮ついてんじゃないわよ！ 口リコン！」

完全に虚を付かれた上からの一撃に舌を噛んだ。それはもつ景気良くガリッ。

「今ね、リティア大通りにて数体の機械兵が猫ちゃんを追つているの！」

「猫を追う？ 遂にポンコツの奴らも歯車が狂つたか！」

「そんなはずはないわ。ガラドボルグの考へことだから、何か裏があるに違ひないわ。獣人とか」

猫の獣人……、俺は猫耳と尻尾が生えたむちむちの巨乳美少女を想像した。

.....。

「へんな想像しない！ ……で、そこまでどうやって行くの？ 場所的には遠いみたいだけど」

「佳奈が案内します！ 佳奈はある能力を持つていて……、じゃあん！」

言下、佳奈は自らのスカートに手を掛け、そのままめくつ上げる！  
俺と一樹と海斗は固まつて動けなくなつた！

「かつ、か、カエルのプリントが入ったかぼちゃはぱ、パンツがどうしたつて言うんだ？ 佳奈君」

「どきどきしてるー 海斗さんもろりこんなんだねえ、うふふつ！ 佳奈はねえ、このぱんつの動物さんと同じ動物さんに変身する事が出来るんだよ！ スゴいでしょ？ それでカエルさんの姿の能力はあるところとあるところのいつたりきたりする事なの！ ジャあ、行くよー！」

眩い光が佳奈を包み込み、カエルの姿になる。

よく見るとカエルがプリントされた女児パンツを穿いている。カエルの姿になつた佳奈から眩い光が漏れだし、気付けば大通りに出ていた。

目の前には怯えた様子の黒猫。

それを取り囮るように三メートルはあろうかといつ一足歩行の巨大な機械兵十数体が機銃を構えている。その内の一体が奇抜な形のレーザー砲を構える。

「佳奈、身のこなしが良い動物のパンツは持つてないか？」

「うーん、チーターはどう？」

「よし、大至急穿き変えてくれ」

「拓真、レーザーにエネルギーが充填され始めたわ！」

佳奈はカエルがプリントされたパンツを脱ぎ捨て、どこからかチーターがプリントされたパンツを取り出し、足を右左と順に通す。

「穿けた！ で、どうするの？」

「いづるんだ！」

俺はチーターのパンツを穿いた佳奈を抱き上げ、そのまま濃厚なキスをする。

「まさか、佳奈と魂の架け橋【スピリットリンク】をするつもりなのー?」

「ちゅぱつ、出来ないかもしれないけど、迷っている時間はないんだ。父子の絆を俺は信じる!」

「おとうさん……、おとうさんのチューはとってもえっちいね、ろりこんおとうさんだ。でもね、佳奈はそんなりこんおとうさんがとっても大好きなんだよ」

その瞬間、佳奈の体が粒子化し俺の中に取り込まれていく。

魂の架け橋【スピリットリンク】成功だ。

その内に頭とお尻がムズムズして来て間もなく丸い耳が頭から、細長い尻尾がお尻から生えてきた。いずれも黄と黒の斑点模様だ。

「拓真! レーザーのエネルギー充填が終わったわ! 早くしないと撃たれちゃう!」「わかつてゐよ! おりやつ!」

俺は右足に力を込める。チーターの能力のお陰か一瞬で黒猫の田の前に移動し、黒猫をひょいと抱き上げてすぐにその場から離れる。次いで緑色のレーザーが発射されるが、そこには生命体はおらず、光が弾けて消えたのみで終わった。

「ふう、危なかつたなあ、猫ちゃん」「ふにゃあお

黒猫は俺の言葉に反応するかのよつー鳴き声、鼻先をペロペロ舐め始めた。

俺の事を覚えていてくれたようだ。

「ははは、いらっしゃるやめか、くすぐつたいだろー、わづひ……」  
「ここやあ？ ふこやあ？」

本気でくすぐつたいのを知らん顔して舐め続け、遂には首筋をもくろへ口ペロ舐めてきやがつた！

「お、おい！ いらっしゃはダメだつて、ぷあははははは、やめ  
る、やーめーるー！」

「拓真！ 後ろー！」

香織の声に首筋を舐められてることも忘れ、後ろを振り向く。  
そこにはチーンソーの刃を模した刀剣を振りかざした一体の機械  
兵が、今までにその刀剣を振り下ろせつとしていた。

「えここやああああー！？」

猫は迫り来るチーンソーの刃を見て心底驚き、パニック状態に陥  
りじたばた暴れ出した。

それをなだめるのに手間取り、避けるタイミングを逃す。

「マズい、効くかどうかは分からねえけど、牽制するしかない！

火炎【ファイア】

「拓真さんー！」

楓の声と共に幾百もの細かな光が機械兵を包み込む。  
迫り来るチーンソーの刃は額の上30センチで止まり、ギュイイ  
ンとチーンの駆動音を虚しく響かせている。

そのうちに楓が目の前にシユタツと着地、先程貰ったレイピアを鞘  
に納めると、機械兵は見るも無惨に無数の金属片へと化した。

「拓真さん、お怪我はございませんか？」  
「あ、ああ、見ての通りピンピンしてるぜ？」

彼女を怒らせてはならない。

俺の中の生存本能がそう警鐘を鳴らしていた。

大山家の娘達はどれもこれも曲者揃いだよ、全く。

「何者ダ！ 貴様等！」

「猫ノ獣人、ローズ・フレンヌガイマゼン…」

「それがつ！ どうした！」

詩音が最寄りの機械兵に棍棒を振り下ろし、叩き付ける。  
叩きつけられた機械兵は見事に真つ一つとなり、爆ぜ飛ぶ。

「一樹、海斗、猫は任せるぞ」

「え、あ、ああ……、うん」

「大人しくしていてくれよな、え……つとローズ」

「うにゃあお！」

元気よく鳴いて顔に頬擦りをする黒猫、ローズ。

俺は愛おしそうに頬へと軽く唇を押し当てる。

ローズは目を見開き、耳と尻尾をピンと立てる。

「んじや、頼んだぜ」

「うん、責任持つて保護するよ」

ローズを一樹に預け、機械兵の元へと駆ける。

その際、エクスカリバーとラグナロクを両手に装備し、香織の元へ  
と急ぐ。佳奈の能力が幸いしてか一秒で行けたぞ、一秒。

そこでさつきから敵の攻撃を受け止めていた香織がいたので、とりあえず挨拶だけはしておこう。

「待たせたな！」  
「どこに行つてたのよ、穀漬し！」  
「……別に遊んで無いんだけど、猫預けてただけなんだけど、つてか穀漬しつて意味分かつて言つてんの？」  
「つ！ そんなことどうでも良いじゃない！ 早く助太刀なさい！」  
「へいへい、蜥蜴の尻尾【リザードテイル】」

俺の伸ばした手から炎が迸り、機械兵の胸を貫く。  
押し付ける刀身から解放された香織は先程まで受け止めていた薙刀を振り、風の刃で機械兵の頭を跳ね飛ばす。  
そのまま機械兵は機能を停止し、後ろへ倒れる。

「これで三体目だな！」  
「残りも片付けるわよ…」  
「ワイらも忘れたらアカンでえ？ 激流の飛弾【トーレントマホーク】！」

そう聞こえた瞬間、目の前の機械兵が水飛沫と共に砕け散った。水のミサイルで金属が碎けるつてなかなかに異常だと思うぞ。かなりの水量を圧縮しているんだ。

「そうだぜ、いやらぶなお一人さん！ 僕達だって暴れたいんだ！ 少しくらいは残しとけ！」

そつ言いながら詩音は四体の機械兵の頭を叩き壊し、詩音の目の前の機械兵に岩石の爆弾【ロックボム】をお見舞、見事に砕け散った。

「俺様最強！　お前ら全員俺に跪け！」

「バカつ、詩音！　後ろにまだ一体いるぞ！」

は？　と詩音が惚けた声をだす間にも、機械兵は詩音に飛びつき手に持つ剣で切り裂こうとする。

しかし、それも楓の一丁拳銃によつて失敗に終わる。

「では私も一頑張り致しましょう。武具の輪舞【ぶぐのろんじ】、ミステリアブレード！」

芹菜姉ちゃんがそう叫んだ瞬間、機械兵の周りに剣が次々と現れては機械兵に襲いかかつた。

「 NANDA ! ? KONO SHIKI NO TAKIWA HADA ! ? EKI EKI REKISHI ! HADASHI  
クレル！」

一二、三本機械兵に壊されるが、剣が現れる勢いは留まることを知らず、パーツを抉り突き刺さる。

その内に機械兵の動きも鈍くなる。

「今よ！　稜ちゃん！」

「うん！　聖光の泉砲【ホーリーガイザー】！」

言つが早いか機械兵の足元に真っ白な穴が出現し、一瞬の間を経て真っ白な光が機械兵を包む。

数秒後光が収束し、機械兵も何故か消えていた。光に浄化されたんだ、きっと。

「佳奈も活躍したいよおつ！」

「ははは、大丈夫。加奈は俺の中でしつかり活躍してるよ」

「お父さん……」

俺と加奈が精神の中で言葉を交わす中、機械兵は俺達から離れてざわざわと騒ぎ出した。

「ソンナ！ 十体モノ活用型機械兵ヲアンナニモアツサリト破壊シテシマウナンテ！」

「ア、アイツラハ人間ノ皮ヲ被ツタ惡魔ニ違イナイ！」

「ソンナワケガ無イダロウ！ アイツラハ確力二人間ダ、アナライザーニモソウ出テイル」

「イ、イズレニシテモ、コノママデハ全滅デス！ ナニカ対策ヲ！」  
「各員ニ告グ！ 全テノ弾倉ヲ空ニシテモ奴ラヲ駆逐セヨ！ 機械ガ人間如キニ屠ラレルナドアツテハナラナイノダ！」

直後、赤い目をした機械兵以外は機銃を装備し、一斉掃射の隊形に入る。

即座に一対の剣を粒子化し、極炎の城壁【インフェルノランパート】を展開。迫り来る鉛玉を溶かし無力化する戦法を取ることにした。そして銃声が響き渡る。しかし烈火の堅壁を打ち破る鉛玉は一つたりともない。

鉛は鉄に比べて融解点が低い。だから鉄をも溶かす紅蓮の炎を前に鉛玉は蒸発し、跡形も残らない。

「撃テ！ 撃テ！！ 弹倉ガ尽キルマデ撃テ！」

「ウオオオオオオオオ！」

「蜂ノ巣ニシテヤルウウウウ！」

炎の外では相も変わらず銃声が鳴り響く。その中ではぴちや、ぴちやと水の音、そして……、

「ん、ふう、ふう……、んふう、うううう……。」

芹菜姉ちゃんの淫猥な吐息。

極炎の城壁は相当な精神力を要する。

途中で途切れたら蜂の巣になることは避けられないだろ？  
そうならないために芹菜姉ちゃんの脣を吸い、精神力を供給しても  
らっていたのだが、さつきので芹菜姉ちゃんがいつてしまったのだ。  
困ったな、後継ぎがないと一分で炎にムラが出来始めてその三十  
秒後には所々穴が開き始める。蜂の巣確定だ。

「お姉ちゃん、もうダメ……、骨の髓までとけちゃった……」

「つづいて」とは遂に私の出番ね？」

へなへなと座り込み、足元に水溜まりを作る芹菜姉ちゃんと一矢一  
ヤ笑いながら近寄る香織。  
どちらも頬を朱に染めている。

「覚悟なさい？ 私はキスだけでイクような柔な作りしてないから  
「はあ……、はあ……、今日は結構……、積極的なんだな……、香  
織」

「つ！ 勘違いしないで！ あんたがあまりにも妹や姉と反社会的  
交尾してるもんだから……」

「頼むよ……、俺にとつて一秒の遅延さえ死活問題なんだ……」

「あ、ああ、そうね！ 私のキスはストロイわよ？ せいぜい脳みそ  
が溶けちゃわないよう気を付けることね！」

脳みそ溶けるつづりんな感じだと心中で突っ込みながらじつと  
その時を待つ。

「ふむ……うう」

そして唇が重なる。その瞬間に今までの疲れが吹っ飛んでいき、炎の勢いが数段上がる。

ああ、畜生。香織の唇はいつ吸つても柔らかい。なんかドキドキする。えっちいぞ、血重しろ俺。

そう思つたちょうどその時、銃声がパタリと止んだ。極炎の城壁を解除し香織を放して一言、ありがとなと礼を言ひ。香織は再びキスをして、そのまま引き倒す。その瞬間、真横に巨大な槍が突き刺さる。

「無粋な鉄クズ共が……」の上なくいいムードを台無しにして、ただで済むと思わないことだな

「さつきのでスゴくラブな気持ちがシラケちゃつたじゃない……、覚悟は出来ているわね？」

『塵も残らず消し飛べ！』

見事にハモつた声と同時に放たれる赤と白のおめでたいコントラスト。

それは五体全ての機械兵を塵のように吹き飛ばした。

「ふう、拓真。この続きはこの夜にしまじょい？」

「そうだね。……香織」

「拓真……」

「そこまでよ、二人とも」

再びキスをしようとしたら、芹菜姉ちゃんに止められた。

「あらあら、芹菜さん。イフた割りには復活が早いのねえ？」

「いえいえ、貴方も魔力融合もせずに一重詠唱【ハイブリッドスペル】を成功させましたわよね？」

「私達は奥の奥で繋がっているからねえ」「まあ、いやらしいこと」

それから一人は黒い笑みを浮かべながら「ふふふふふ」とか、おほほほほなどと明らかにどす黒いオーラを滲ませる。

俺はとりあえず一人から離れ、魂の架け橋【スピリットリンク】を解除する。

「やつたな！ 拓真！」  
「お見事です！ 拓真さん！」  
「お前ら……、少しほじつけ来いよ」  
「おかあさんたち、怖い……」  
「佳奈はああいう人間に絶対になるなよ？」  
「うん……、わかつたよ、おとうさん」

俺は再び香織達に近づき、間を割つて不気味な睨み合いで止めさせる。

「止める、佳奈が怖がってる」「あらあ、拓真さん。すっかり父親氣分で……、あなたならきっといい父親になりますわよ、おほほほほ……。私の子供なんか産めずには……」

「ああ、ダメだ。完全に卑屈モード全開だ。

こづこづ時は何を話してもマイナスな解答しかしない。暫くそっとしておひづ。

そう思つたその時、胸に小さな赤い点が浮かび上がる。

思考が追い付く間もなく、芹菜姉ちゃんは俺と香織を突き飛ばす。何故芹菜姉ちゃんが俺達を突き飛ばしたか、その真意は次の瞬間、嫌といつ程鮮烈に思い知られる。

芹菜姉ちゃんが撃たれたのだ。

乾いた音と共に芹菜姉ちゃんが吹き飛び、鮮血が俺の頬を濡らす。

「う……そ、姉ちゃん……」

「いやああああああ！ おかあさん！」

「ステルスかつ！ 草花の舞そうかのまい、桜花さくらはな！」

佳奈が叫び、俺がうなだれる中、海斗が叫ぶ。が気にも留めず芹菜姉ちゃんをひたすらに見つめる。

「芹菜姉ちゃん……、せっかく再会出来たのに……、俺なら心臓撃ち抜かれたつて平氣なのに……！」

「弟が危険にさらされているなら、身を捧げてでも、守り抜く。それが、姉の、し、めい……なの」

「もういいよ、喋らないで、直ぐに治癒魔法で

「さ、い」に一つ、だけ誓つて、一人とも。私の、後を追つて、死なないで……」

芹菜姉ちゃんの声は時間が経つほどに掠れていく。最後の一言、「私の分まで生きて」は完全に聞こえず、読唇術で推測するしかなかつた。

「いやだ！ しないで！ しんじやいやだ！ おかあさんつ！」

「許さない……、絶対に許さない……つ！ 壊してやるつ……一つ

残らず！ 全て壊してやる！ 芹菜姉ちゃんの敵を討つんだああああ！」

瞬間、胸に激痛が走る。田の前には先程までいなかつた機械兵が數十体。銃弾が胸を穿つたんだ。

しかし、そこからは真っ赤な鮮血は流れこず、真っ黒な瘴気が流

れ出し、俺を包んでいく。  
気付けば理由も無く笑っていた。

黒い瘴気が顎門を開き、竜の形を成す。その竜が強靭な顎門で俺の体に食らいついた瞬間、意識が闇に墮ちた。

「なんなのよ……、あれ

香織は目の前の状況に愕然としている。

拓真の脇には真っ黒なオリーブが縋れり付き、その拓真は狂ったよろこびに笑っている。

いや、実際狂つているのだ。拓真が声を出して笑う事自体非常に稀なのに、ましてや大声で笑うなど香織達や真理亜達総出で操りでもしない限り有り得ないので。

「黒魂の開花【ダークネススピリット】」

「何か知ってるの!?」  
楓！」

「闇魔法の補助魔法よ、魂の架け橋【スピリットリンク】が誰でも使える光魔法なら、黒魂の開花はごく一部の人しか使えない闇魔法よ。自分の心の闇を強制的に引き出して全ての能力を格段に上げるわ」

「心の闇?」

「そう、スピリットリンクよりも強大な力を得ることが出来るけど、リスクが付きまとつわ」

「リスク……」

楓は普通の楓からは想像も出来ないような真剣な眼差しを香織に向ける。

香織は心臓をバクンと高鳴らせ、拓真にどのような危機が迫っているか、一字一句聞き漏らさんと楓を凝視する。

「まず、闇の人格に呑まれたら一度と元の人格には戻れない。次に効果が長続きしない上、終了後しばらくは精神力も力も殆ど無いような状態になる。でも、それよりも危険なことが……」

「勿体ぶらずに言つて！ 拓真の身に何が起きようとしてるの！」

「怒りや憎しみと言つた、負の感情に捕らわれたまま発動すれば、確実に暴走して敵味方関係なしに無慈悲な程の破壊をもたらすの」

ちょうどその時、獣の雄叫びが香織達の耳をつんざく。

また新たな脅威が自分達を襲うのかと身を強ばらせるが、雄叫びの出どころは意外にも拓真だった。

見てみれば、拓真の体は真っ黒に変色し、多少の獣毛や耳、尻尾まで生えている。いずれも真っ黒だ。

「最悪の事態だわ……」

「どういうことなんや！ 楓！ 説明せな分からへんて！」

「黒魂の開花には七つのカテゴリーと無数のパターンがあつて傲慢、嫉妬、憤怒、怠惰、強欲、暴食、色欲といった『七つの大罪』。それと生存、闘争、破壊、殺人、生殖などの『本能・衝動・欲望』なんかがあるわ。私は心の闇は『強欲・征服』といったもので、サドティックな振る舞いで周囲の人達を一時的に言いなりにすることができるの」

「拓真は！？ 拓真はどのパターンなんだよー」

「拓真さんの心の闇は『憤怒・野生・破壊』。怒りや野生本能のまま、無惨なまでに標的を破壊するの。結果的に魔獸のようになつて

しまったのよ。理性の一欠片もない、ね

楓が喋り終えたと同時に爆発が起る。それは魔獸化した拓真が機械兵を一つ破壊したために起きたものだった。

「始まるわ……、魔獸の宴が」

「グルアアアアアアツ！！」

拓真は再び雄叫びを上げ手に持っていたラグナロクを真上に掲げる。両の手足にもわもわした闇がへばり付き、闇が三つの爪が付いた籠手へと形を変える。

香織達が頭上にクエスチョンマークを浮かべる中、心臓を撃ち抜かれたはずの芹菜が何食わぬ顔で説明を始めた。

「あれは鉤爪ですね。中世日本の忍者が壁などを登るために使われた登器の一つですが……、武器にも使われたようですね」

「何で知ってるの？ ってか何で生きてるの？」

「武器については武具の輪舞が情報をくれるから。何故生きているのかについては……、たつちゃんと奥の奥まで繋がったおかげで、不老不死の体を手にしたのですわ」

芹菜はそう言つて胸の谷間を覗かせた。そこには小さいがとても奇抜で真っ黒な魔法陣が浮かび上がっていた。

「あんたも？ 良かつたじやない、永遠にこやんこやんわんわん出来るんだから」

「おかあさん！ むとうさんがつ……！」

佳奈の叫びで一同は再び拓真に注目する。

拓真は三度雄叫びを上げ、機械兵の首を噛み碎いた。が、体自体は

生身の体であるため、口の周りが血で真っ赤に染まってしまっている。

「おとうさんがへんだよ！ まるでライオンさんだよ！ 佳奈の能力で落ち着かせて」

「ダメよ！！ 今の佳奈ちゃんじゃ捌ききれない！ いや、今の拓真は猛獣師【ビーストマスター】が捌けるようなものじゃないわ！」

「びーすとますたー？」

「佳奈ちゃんの能力よ、今はまだ未熟だからきつかけとなる何かが必要なんだけど、成長すればちゃんと使えるようになるわ」

そう楓と佳奈が喋っている間にも、拓真は次々と和製の武器で機械兵をなぎ倒していく。忍者刀で首を刎ね、鉤爪でボディを引き裂き、手裏剣でコアを貫いては日本刀で一刀両断。さらには辺りの建造物まで漆黒の尖爪【ダークネスクロウ】で破壊したりして今の拓真はまるで壊す事を楽しんでいた。

「アハハハ！ 華麗に散るは穢れた金属片！ ハハハハハ！」

「キヤ、キヤプチャーレーザー充填開始！」

そうして残った最後の一弾が先程ローズに向かつて放ったレーザー砲を充填し始める。

拓真も鉤爪を装備し、真上に掲げて負のエネルギーを貯める。そして……。

「キヤプチャーレーザー発射！」

「漆黒の尖爪【ダークネスクロウ】！」

機械兵は緑のレーザーを、拓真は三本の真っ黒な飛刃で標的を切り裂く漆黒の尖爪を放つ。

2つの攻撃は交わる事無く突き進み、それぞれ互いに命中する。

「ウワア アアアア！」

「グルグアアアア！」

最後の機械兵が爆散し拓真が緑の光に包まれる。

その時、拓真を覆いつつあった黒い体毛や漆黒の耳、尻尾も粒子と化して、数秒の間を経て拓真は奇声ではなくちゃんとした言葉を発する。

「俺は……、一体……」

「……拓真？」

「解析【アナライズ】……。そつか、俺は捕まつたのか

「拓真！？ 拓真なの？ ねえ拓真つてば！」

「……うるせえよ、香織。頭が痛いんだ」

その一言を受け、香織は満開の笑顔を咲かす。が、頬には涙が伝つていた。

「良かつた……、闇に、闇に呑み込まれて無かつたのね？」

「なんだよ、それ。まあいいや、こうなつたら城ががら空きになつちまうな、エクスカリバー！」

「あいよ、ようやくのお目覚めか、……本当にオメエは相棒か？」

「エクスカリバーも疑うのか？ 時間がない、香織を任せんぞ、……

受け取れ！ 香織！」

拓真はそう叫びながらエクスカリバーを放り投げる。エクスカリバーはくるくる回りながら放物線を描き、香織の目前に突き刺さる。

「何するんじゃ！ 相棒！ とっても痛てえじゃねえか！ まあ、

香織を任せることって言つんだからアレなんだろう。あいわかった、  
香織達は責任持つて守つてやらあ！」

「どうこうこと？ エクスカリバーに私達を任せられて、どうこう  
ことなのよ？」

「俺は多分、この後どつか別の所に転送されると思う。でも心配し  
ないでくれ、いつか必ず戻るから。そしたら香織の手料理でも振る  
舞つてくれよ」

そう言つている間にも、拓真に纏わりつく光が輝きを強めていく。  
その時、一樹の腕からするとローズが抜け出し、一心不乱に拓真  
の元へと駆け寄り飛び付いた。

「せうかローズ、あんたもついて行つてくれるのか、これで寂しく  
ないな。……じゃあな香織、行つてくる」

その言葉を最後に、拓真の周りを閃光が包み込み、閃光が消えた頃  
には既に拓真の姿は見えなくなつていた。

「そんな……、イヤ、イヤよ、戻つて来なさいよ……！ 拓真！  
拓真あああああ！」

香織の悲痛な叫びが虚空に吸い込まれていく。

拓真はエクスカリバーを残して何処かへと消えていつてしまつた。

## 第四章 閻魂の田覚め（後書き）

次回は拓真のワイルドな脱獄劇！

猫ちゃんとの濡れ場もあるよー！

## 第五章 獄中の出会い（前書き）

今回は前半かなりエロいです！ つてかあんなにエロいの書いたこと無いくらいスゴいです！

まあ、暴走モード全開で突き進んだ結果つす。

更に新キャラ続々登場で、獄中でもハーレムな拓真… どうなる、彼の精神！？

……とりあえず、『シャイニング・ハーツ』のシャオメイというキャラクターを痛く気に入ったあげく、自分の小説で似たキャラクター（つてか殆どパクったようなもの）に散々なことをさせてしまつたので、セガさんにごめんなさいを言います。

## 第五章 獄中の出会い

気付いたらそこは真っ黒な空間だった。

何かの留置場かと思ったが、それはあり得ない。

なぜなら一筋の明かりすら遠くに見えないし、機械音は疎か周りの人の話し声や呼吸が聞こえないからだ。

もしここが留置場だったとしたら真っ暗という程暗くはないはずだし、微かに人の声が聞こえるはずだ。

冥界だったとしても、もうそろそろ目が順応してくるはずだ。

そう考えを巡らせていると、突如として何処からか挑発的な声が聞こえてきた。

「よう、後付けのオレ！ 10年振りだなあ」

「誰だよ、あんた」

「オレは本能の大原拓真、生まれた時からお前の中にいた本当の大原拓真さ」

その瞬間、目の前に全身が軽く黒ずんだ俺が笑いながら現れる。

「理性というしがらみに絡まれて自由に行動出来ない哀れなオレ、代わってやろうか？」

「アホか、バツと出の人格が代わってやるうかだなんでおこがましいにも程があるんだよ！」

右手に豪火の矢【フレイムアロー】を作り、闇の俺に向かつて投げつける。

豪火の矢は見事に命中し闇の俺を燃やし尽くした。が直後、後ろに氣配を感じて火炎の剣【ファイアソード】を後ろに回りながら斬り掛かると、案の定闇の俺がラグナロクのような真っ黒な剣で受け止

めていた。

「オメエ、なかなかやるじゃねえか、闇に溶け込んでいるオレに斬りかかるなんてなあ」

「気配を辿るくらい造作もねえんだよ、いいから消えろよ、一セモノの俺」

「ハツ！ 調子に乗りやがって！ まあいい、今日の所はこれで勘弁してやるよ、でもなあ覚えておけよ？ これからオメエは闇に侵されていくんだからなあ！」

その直後、視界がボヤケて再び真っ黒に塗り潰される。

その時からかな、少女の声が聞こえてきたのは。

「ねえ、起きてよ。起きてつてば」

そう声を掛けられながら左右に揺さぶられる俺、ゆっくりとその目を開ければ……、

「あつ、起きた。おはよ、気分はどう~、えっと、ディカーニャ……だけ？」

大胆に胸を開けた黄色いフリルのドレスを着た黒髪セミロングに猫耳と尻尾が生えた少女がなんと、俺の股間に跨っていたのだ。

「拓真だ、大原拓真。ディカーニャってなんだよ、元々の名前の面影が全然残ってねえじゃねえか」

「ありや？ ゴメンね、猫の記憶力はかなりえじくて……。私はローズ、ローズ・フィレンヌ。よろしくね」

水色の下着が丸見えつてこと分かつてゐるのかな？ 分かつてないだ

うつなあ……。

「よろしくな。ところで、なんで跨っているんだ？」

「特に意味はないよ。それとも、レディに『重たい』って言いつもりなのかな？ ん？」

「そういうのはないけど……」

さつきからローズが吐息が掛かるくらいに顔を近づけている。  
そのせいでそこそこ大きな胸が……。

……意識しなけりや良かった。

「あれ？ なんか固くなつてない？ それにそそるようないやらしい匂いも……、どうしたの？ そんなに顔を赤くしてさ？」  
「んっ……ぐ、今すぐに俺の股間から降りてくれないか？」  
「どうして？ やっぱり重たいって言いたいの？」  
「やうじやない、そうじやないんだが……、あんたの腰が……」

ローズはその一言を受け、いやらしく振り続ける腰を見た。  
五秒後、また俺の方を向いたけども目の色が違っていた。

「気持ちいい？」

「違うだろ！ 止めよつとしろよ！」

「ふふーん？ ジヤあこひしてみようか」

そう言つてローズはベルトを外して、ズボンを下ろした後、下着を少し下ろして俺のイケナイペットを露わにする。

「ちょっと、なにしてんの！？ 僕がどういう状況で、これからどういう事が起きるのか、分かつてんのか！？」

「ゼーんぶ分かってるよ？ 大丈夫、服は別次元に避難させたから

「い、いつの間に下着姿に…？」

「泥棒猫【シーフキヤット】、まばたきしてる間に私の衣服を異次元に飛ばしちゃった、あなたのも含めて……、ね」

目線を徐々に下げる、自分の素肌。

一瞬の間にここまでするとは彼女の所業は神業と呼ぶに相応しいだろ？

と、ロメントしてゐる間にもローズは腰を動かし、心身共に余裕を奪つていく。

「いけないなあ、刺激を与える度に少しづつ固く、大きく、熱くなつていいくこの物体、こうじう風にこすりつけると……んふう、気持ちいい 拓真も気持ちいいでしょ？ ほら、えいっ、そりや！ にゃん！ ほら、私の胸揉んで！ ……意外と素直なんだねえ、とっても気持ち良いよ！」 拓真

「うひ、ぐう、あぐひ……！ ちょっと待つて、はひひ！ ローズ つ、むにむにさせないでつ、にゅあつ！」

「へんな鳴き声。それだけ切羽詰まつてつ！ 来てるのね？ 私もイきそう、だからさ、一緒にイこ？ 私も！ 本気を！ 出してあげるからさー」「やあああああん！」「ふ、ううう、ローズっ！ ひぎっ、あああああつ！」

絶えず快楽を与え続けるローズの腰使いに堪えきれず、快楽の渦に呑み込まれた俺、真っ白な液体を下腹に吐き出して、目の前が真っ白く染まつていく……。

「どぴゅどぴゅ出たねえ、それほど気持ちよかつたんだ？ アタシの、ア・ソ・ロ えへへへへ。……ん？ まだ泣いちゃダメよ？ まだこれ以上の恥辱を用意してんだから。あ、この白いのおいし

そー」

ニヤリと笑った後、ローズはさつき吐き出した白い液体を飲み始めた。

その姿なんといやらしい事か、またイケナイペシトがぎゃんぎゃん騒ぎ出した。

「どう? ぐにぐにされてマナ……精神力の塊の事ね? を放出させられて、しかも放出させた張本人に飲まれるなんて、とっても恥ずかしいよね?」

「今なら死ねる程だよ。ああ、恥ずかしい」

「へへへ、その割りにはまた固くなってるじゃない? あ、服返すね」

そう言つた瞬間、下着姿だったローズは一瞬で桃色のワンピースを身に纏い、俺の服も元通りに帰つて來た。

「…………んもう、拓真はいけないことをしきやつたわね」

「は?」

「盗賊から物を盗むなんて……どうこう事か分かつて? 盗賊から物を盗んだら同じ物を盗まれるのよ。拓真は私の心を盗んだから私も拓真の心を盗んでやる」

ローズがニヤリと笑う。怖い……とは思わなかつたよ、だがそれでも体が一ミリたりとも動かない……、なんで?

「狩獵猫【ハンティングキャット】、弱者は強者に睨まれると動けなくなるでしょ? このスキルはその現象を強制的に起こさせるスキルなの。……何よ、あなたの唇、見れば見るほど舐めたくなつて

くゐじやない……」

そう言つてローズはゆつくりと顔を吐息の掛かる距離まで近づけて唇を舐める。

主にチロチロ舐めてくるが、たまにベローンと舐めたり細かなキスを織り交ぜながら少しづつだが確実に俺の理性をすり減らしていく。そうしてペロペロ舐めたあと、ローズは次に頭を動かないようしつかりホールドし、舌をねじ込みながら唇を吸い始める。

それはもう、かなり手練れた舌使いで、俺の頭を真っ白に染め上げるのにたゞどの時間も掛からなかつた。

「じゅる……、どう？　私の舌使いは？　他の誰よりも気持ちよかつたでしょ？」

唇を吸われすぎたかな？　ハンパない脱力感に襲われて口が利けない……、とりあえず肯定の意を込めて首を縦に振る。

「えへへ、でしょでしょ？　『褒美としてさ、頭撫でてよ』

強力な脱力感の中、体を動かせつていうのも辛い話だが、辛うじて動く右手を使い、ぎこちない動きで頭を撫でる。

ローズは目を細めて喜び、頬擦りをする。

これは猫の習性……つてのは分かつて、分かつてのど人の状態でされても困る……。

「私、拓真のことが好きになつたの。……交尾しない？」  
「な、何故に？」

「ここに捕られた人間や獣人は直に機械兵にされるの。そうなれば元々の感情を消されて代替えの感情を埋め込まれて何時終わるか分からぬ生涯をガラドボルグに服従しながら生きていかなきゃな

らないの。だから……、私が私である最後の時までに出来る」とはしておきたいの」

「……分かった。でもな、これが最後だなんて軽々しく口にするなよ。」そのままじゅ絶対に終わらせない。俺達はここを抜け出すんだからな」

「うん、分かった……。だから……わ、優しくして?」

そう言いながら、ローズは足をこやらしく床に広げ、下着をぎりぎりつけて誘惑する。

俺はゆっくつと近づき、それにむしゃぶりついた。

「ふにゃああああん! すい、スゴく貯持ちいい!」

「……まあ、とつあえず弱点はイヤと言ひほど教え込まれたから…」

…

ぴちゃつ、ぴちゃつ、……そこからじこ水の音がローズの嬌声と相俟つて更にいやらしく聞こえる。

香織には無いいやらしさが……、なんとかなあ?

「ひゅつ、ふりゅ、あつー、わ、わたつ、私も、拓真の準備したいつ……ひゅつ!」

「ん? 俺の準備? 何をするのや?」

「とととと、とつあえず舐めるの止め、少し離れて、もうしないと私がつ……、ひにゃあああああん!」

甘ったるい叫び声を上げた瞬間、ローズがのけぞりビクビクッと震え、目の前からちゅっと白く濁った水が噴き出す。

その水からはいやらしいフロロモンがふんふん匂つてきて、今すぐにも飛びかかって種を蒼きたい衝動に駆られそうになるがせつかくローズが準備してくれるんだ、ここはじつと我慢して一時の快樂を

楽しも「うじやないか。

「もひ、拓真のばか。気持ち良すぎて頭が変になりかけたじやない。すーはー……、気を取り直して、私とキスした時拓真はどう思った？」

「なんか舌がやけにザラザラしてるなあ……つて」

「そう、正解よ拓真。猫の舌ってなかなかザラザラしてるモノな よ。そんな舌でこの先つちょを舐めたら拓真はどうなるのかなあ？」

意地悪な、あるいは勝ち誇ったような笑みを浮かべ、楽しそうな声 音で話し掛けるローズ。

知ってるよ、その答えは痛いくらいに分かるよ。

「分かる、分かるよ！ 拓真の思考回路がショートしてるのが！ 実演してあげるから、しつかりとそのダメダメ海馬に刻みつけてお くのよ？」

そう嘯くローズに突き飛ばされ、態勢を完全に崩した俺は、見事に 尻餅をついて両足をばたーんと上に向ける。それを待ち望んでいた かのようにローズは手早く動き、両腕で両足をがっちりホールドし て満足げな笑みを浮かべる。

ローズの眼前にはパンパンに腫れ上がった我が半身、それを慈しむ かの如く頬擦りをし、目を細めて喜ぶ。

「不用意に女盗賊の心を奪いつと、困るのはあんたの方なのよ？ 大 原拓真くん。さあ、盗賊の誇りにかけて甘美な報復をしてあげる。 拓真は私の魅力に負けて私のモノになるの」

語り終えると同時に半身の先つちょを舐め上げるローズ。

その瞬間に背筋が焼け付いたと幻覚する程の刺激を感じて思わずの

けぞる。

それを見て満足したローズはさりげなく口舐めて俺を悶えさせた。

「ふああっ！ ローズっ！ マズい！ それはかなりマズい！ 出  
ちやうつー！」

「出しちゃダメ。男の子ならそれぐらいガマンしなさい」

満面の笑みを浮かべ、ローズはさりげなく腫れ上がった半身にちゅうちゅう吸い付く。既に視界の焦点が定まらなくなつて周りがボヤケて見える……。

「イキセツ？ 止めて欲しい？」

「はあっ、ぐ……ちょっと待つて！ ストップ！ また出そうなん  
だけど！ 気が変になりそうだ！」

「……ふーん？ はい、止めた」

「……へ？」

それはあまりにも突然の事だった。今までちゅうちゅうと吸い上げていたローズがいきなり唇を放し、んんっと四つん這いで猫のよくな欠伸をする。

その時見たのは、かなり濡れそぼつた下着とか、ローズの挑発じみた笑みだった。

俺はすべてを悟った。ああローズ、すべては君の手の平の上だった訳か……。

その瞬間、なんとも言えない感情が込み上げてきて、全身がゾクゾクと身震いした。

「どうしたの？ 私の下半身をじつとみて……？ 分かった、私が  
欲しいんでしょ。分かるわ、あなたも私と同じ発情期の肉食獣の目  
をしてるのが。あなたの心に潜む肉食獣を開放しちゃって私を貰い

てみなさい？『私はローズの事が大好きなイケナイ雄猫です！』つて言いながらね

そんなことを囁きながら、四つん這いの状態でお尻を「ひり」に向かながら下着を横にズラすローズ。……そうだよな。遠回しに求めるんだよな。

「……私はローズのことが大好きなイケナイ雄猫です。……これでいいのか？」

「へへへ、お顔真っ赤にしてえ、かわいい！　いいよ、私のお腹で気持ち良くなしてあげる。だから……キテ？」

下着をズラして丸見えのアレをさらにもぐらでこれでもかと誘惑する。俺はゆづくりと近づき……。

ブツンと小さな音がしてローズはのけぞり絶叫を上げる。

「ひああああ、あ、ひにゃあ、んふう、スゴイ、予想外の肉食つぶり、ひやあ、アタマ、アタマがヘンになる、にゃあつ！」

「う、はあ、ゆ、油断したつ……！　こんな、こんな気持ちいいものなんて！」

パチュッ、パチュッといやらしい音が俺の理性を徐々に壊していく。理性を捨てたらただの盛りのついた犬だぞ、俺。

「はあ、はあ、い、いの、野性味溢れるよ、そんな感じがスゴく良いの！　もつと、もつと激しくして良いんだよ！　私ならもう大丈夫、だからさー！」

「う、ローズがそう言つなら……、本気だすからな！　後悔するなよー。」

「ひにゃああああー、拓真の、拓真の暴れん坊にーー、めちゅくぢやこむるうつづー。」

ローズとの交尾は時間という概念を忘れるくらいで気持ちよべ、夢中で快楽を貪り続けた。

気付けば一人とも顔を真っ赤にして喘いでいた。

「もつと奥までー！ 突き上げていいんだよー！？ むしろ突き上げて欲しいー！ ひやあん！」

「い、こんな感じか？」

「最高つ、にゃー！ あんー、こいつそのこと、子宮まで貫いて子作りする、にやあー！」

「わらしたいのは、あぐつ……、もう、ダメー、気持ち良すぎて頭が痺ってきたー！」

「それならなおさらー！ 奥の奥で出しつ、もつと気持ち良くなろうよー、そこを、つあー！ 貫くだけなんだからあー！」

肌と肌がぶつかり合い放つ音も俺にはいやらしく聞こえてしまつ。

……ここまで来たらもう何も考えられなかつた。

我慢の限界に達した俺は蠢く何かの中に突き入れた後、ゾワゾワと下半身が痺れ盛大に種、あるいはマナを注ぎ込んだ。

「つにゃあああー！ お腹の中がズゴク熱いよー！ 好きー、拓真大好きー！ ひああああー！」

……ローズも「満悦のよつで何よりだ。

つづく、今までの精神的ダメージが積もり積もつて目の前が真っ黒だ。

俺は無理に起きるーとを考えず、ただただ眠りについた。

頬にむずがゆさを覚え、重たい瞼を再び開ける。

最初に見たのはローズの情欲した顔、呆れるのと同時に軽く目眩がした。

「おはよ、拓真……。ゴメンね、私発情期真っ盛りだから……。

頭、大丈夫？」

「ああ、なんとかな」

頭よりも顔の方がヒリヒリするんだけど……。

ふと手鏡を作り出して自分の顔を見てみれば、顔中ローズが付けたキスマークで赤くなっていた。

尚も抱き付き吸い付こうとするローズを引き離し周りを確認、めぼしいものは黄緑色の電気が流れていそうな光の帯、恐らくは現実世界の檻があるだけ。後は鉄かプラスチックかよくわからない材質の壁が残り三方と床や天井を囲んでいるだけの監視カメラも便所もない、完全に人間様をバカにしている造りだ。

檻の向こうにも機銃どころか警報装置すら伺えず、機械の連中は人間様をナメきつている様子である。

「過去に脱獄したとかの情報は聞いてないのか？」

「よく分からぬけど、脱獄は絶対不可能らしいよ。ほら、目の前にある電気の檻があるでしょ？ それがあるから脱獄は絶対に出来ないんだって。なぜならフォトンを分解して魔法の効力を殺すから

」

「いや、フォトンって何だよ！？」

「え！？ 知らないの！？ これ、魔法使いの常識なんだけど……」

「知ってる前提で話を進めないでくれよ、この世界の常識はまだ分からぬから！」

その瞬間、ローズはハツと口を手で押さえて驚く素振りを見せる。記憶力の乏しさは本物らしい。

「そうだった！ 拓真は別世界から来た異世界人だった！」

「そうだよ、だからフォトンについて分かり易く説明してくれ」「分かった。魔粒子と書いてフォトンは空氣中にふわふわと漂っていて、誰かが魔力を集中するとサーチと集合してそれに応じた魔法に変換される。魔法を放つほんのちょびっと前で、一瞬何か丸っこいものを見なかつた？」

「たまに蜥蜴の尻尾【リザードテイル】を放つ時に少し見るなあ」

初めて落ちた魔法の世界ではもちろん見たし、ロームラルカ（死神の世界編もしくは EDEXさんの作品、黒き翼+BLACK WING+参照）でも見た。

さらには魔法なんて使えるはずもない、元々暮らしていた世界でも赤い丸っこい物体が確認出来たのだ。

前々から気になつてはいたのだが、香織に聞くのも野暮と言つものなので聞かないで放つておいていたらこれほどまでに重要な役割を果たしていたとは……。

このことを香織は知つてんのかな？

「どんな世界にも魔法使いの一人や二人はいるものよ。魔粒子は魔力を持つ人間が呼吸をする事で放出される。魔粒子は一つが數百万なんかに分裂したりするから、魔粒子不足で魔法が使えなくなるなんて事はあり得ないわね」

「待て待て、それじゃ空氣中魔粒子だらけになるじゃねえか！ 特に魔法が世間的に認知されてない世界なんか消費も追い付かないんじゃ……！？」

「さあ？ そもそも魔粒子の出どころも諸説あるわけだし、消費さ

れなくとも三日で自然消滅するらしいし……。まあ、人畜無害なわけだからそちらへんは気にしなくてもいいんじゃない？」

「あ……、と曖昧な返事をして今からぶち破る檻と向き合つ。どうにか壊せないか……、そう思いながら蜥蜴の尻尾を放つべく手を檻に向かつて突き出す。しかし、肝心の炎が小さい。しかも大きくなるペースがカメ並みに遅いとなれば、放つ氣にもなれねえ。

炎を消してその場にどつかと座り込み、盛大に溜め息を吐いた。

「……遅え」

「仕方ないよ、あの檻は完全じゃないけど外からの魔粒子も殺しちやうんだもん。ま、それをものともしない桁外れな精神力があればどうにかなるかもね」

精神力があ……、そこそこ自信はあつたんだけどな……、まだ足りねえか。

……となると、取る行動は一つ。

「ローズ、ちょっと手伝ってくれ。とつても簡単なことだからさ」「なになに、私の助けがいるの？ ちなみに、私は潜入専門だから攻撃魔法は全然ダメだし、防御魔法も必要最低限しか覚えてないから

「だと思つたよ。大丈夫。女に肉体労働をさせるほど鬼じゃないから。その、あれだ。キス……、してほしいんだよ……ね」

そう言つた瞬間、ローズの顔が怖いくらいに綻び、まるでネズミでも見つけたかのような威圧感ある笑みだつた。

「私に？ キス？ ふふーん、まさか拓真から心を差し出してくれ

るなんてね

「どうこと?」

「私はね、キスのイメージだけは毎日欠かさずにしてるんだ」

言下、認識しきれない速さですぐそばまで近づき、頬を胸元に当てる。

それだけならまだしも、上目使いで挑発的に見つめたり、軽く胸が当たつてたりと色々と頭が痛くなる要素ばかりだ。

「アキドキしてるね？ 拓真って分かりやすいんだよね。でも……」

ローズは軽くにやけておもむろに上着を脱がすと、唾液で濡らした指を使って胸元にハートマークを描き、その中心を強く吸い上げた。どこまでも挑発的で扇情的なローズの行動に胸のあたりがキュンと痛み出す。

「またアキドキしちゃって……」れじやあ拓真の心、保たないかもよ？ 衝動に駆られて、にゃんにゃん、わんわん

「つ、しねえよ！ とにかくここを抜け出すために必要なんだよ！」

……キスが

「ふーん？ キスがねえ……、仕方ないなあ、してあげるよ」

そう言つた瞬間、ローズ頭をがっちりホールドしてそのまま唇を押し付ける。

それだけではなく、舌を無理矢理ねじ込まれて口内を蹂躪し始めた。少し下ではむにゅんと推定Eカップのそこそこ大きな胸が派手に潰れて、頭がヘンになりそうだ。

「ちゅ、くちゅ……、ぷあ……、どうしたの？ 拓真、顔が真っ赤だよ？ まさか、キスだけでかなり興奮してるわけじゃないよね？」

「う、うつせ！……ローズの舌使いが上手すぎるんだよ……」「えっへへ！ 嬉しい事言うじゃない 嬉しいから、もうひとつあげようかな！ んちゅっ！」

そう言つてローズは再び口内を蹂躪し始める。

力が湧いてくるのは確かに……が、何か奪われている氣もしなくてない……。なにを吸われているんだ？

「ふあ……。『うちやうさま まみみひやうじ』 最つ高においしかったよ、拓真の風。ついでにハートも貰つちゃつたし…」

「なつ！？ あ、ああ……、そりやどうも、そんじやあ離れてくれ。危ないから」

「いや。このままギュッとしてたい」

「いや、危ないから……、ね？」

「むう……、ばかあ」

ローズは可愛らしく頬を膨らました後、首筋に軽く噛みついた。まあ、猫の歯は鋭いからそれだけでもかなり痛いけどね。そのまま数秒間静止、その後、すぐ上に強く吸い付いて離れていった。

どこまでも挑発的な猫耳娘だよ、全く。おかげでドキドキしてきやがつた。

「見てるよ、ローズ。これが俺の魔法だ！」

両手を眼前に突き出し、そのまま両手をかめはめ波の要領で後ろへ持つて行く。

次の瞬間、赤い粒子が次々と両手に集まり、あとと黙つ間に両手から溢れんばかりの大きさに膨れ上がる。

「古より伝説として伝えられし炎の蜥蜴よ、今こそ我に全てを燃やし尽くす尻尾を『えよ！』

溢れんばかりの炎の粒子は詠唱終了と共に大小様々な無数の魔法陣に変わり、ぐるぐるとその場で回り続いている。

### 「蜥蜴の尻尾【リザードテイル】！」

両手を突き出した瞬間、ぐるぐると回っていた無数の魔法陣は一つの巨大な魔法陣と化し、真紅に光り輝き膨大な量の炎を吐き出す。しかし、檻を破壊するにはまだ力不足らしい、バチバチとスパークしながらなおも原型を保っている。

「ローズ！ どうにかならないのか！」

「ならないことは無いけど……」

「なんでもいい！ とにかくコイツを攻撃してくれ！」

「ええい！ イチかバチか！ コピーキャット複写猫！ 蜥蜴の尻尾【リザードテイル】！」

ローズは先程の俺と全く同じ動作を繰り返し、少し小さい蜥蜴の尻尾【リザードテイル】を繰り出した。

ローズの蜥蜴の尻尾は俺の蜥蜴の尻尾と混じり合い威力を高め、その結果として檻をぶち破った。

威力を増した蜥蜴の尻尾はなおも壁を破りつつ突き進み、ついには見えなくなってしまった。

「うわあ、ハンパないね、蜥蜴の尻尾【リザードテイル】って」

「ああ、俺の世界じゃ最高クラスの攻撃魔法さ」

俺とローズは再び向き合い頬を朱に染める。

そして再び、キスをしようとした瞬間……、

「これ以上ローズ様に近づくなれば、命の保証はせんぞ」

殺意の籠もつた迅風を引き連れて、鋭き刃の切つ先が首筋に押し当てられた。

すぐさま飛び退き、鈍く輝く閃光から逃れると、ラグナロク（v e

「・忍者刀）を装備して身構える。

「遅い！」

「見えた！」

ジャツキィイイイン！ 金属音が響き渡る。だが一対の切つ先が触れることはなく、大柄の獣人が一対の切つ先を掴んでいた。

「二人とも、これ以上続けるなら剣を折るよ？」

そう言つて大柄な熊の耳を生やした獣人は一対の剣を突き飛ばし、俺と犬耳の獣人を吹き飛ばす。犬耳の獣人は剣を鞘に収め、ローズの側へと駆け寄る。

よく見たら左目にドクロの眼帯を付けているが、左目の視力が悪いのだろうか？

とりあえず、俺もラグナロクを粒子化しよう。

「ほらほら、二人とも殺氣立っちゃダメだよお、ソフィアちゃんも眼帯を取つてえ」

「う、うわ、何を！？ 止めろ！ 止めてくれ！」

ソフィアと呼ばれた獣人は熊の獣人に無理矢理ドクロの眼帯を外される。

その瞬間に先程までの鋭い眼光が嘘のように円らになり、欠伸をしたあと目を「じごじこ」すつてぺこりと頭を下げる。

「「めんなさい！　争う気はなかつたんだけど、あまりにローズ様といちやいぢやしてたから……、それにいやらしい匂いが一人の局所から漂ってきたのであなたがローズ様を手込めにしたのかと……」

犬ならではのとんだ勘違いだな。

黒髪ロングで犬耳生やした着物姿の大和撫子はスレンダーな体躯で乳もペつたらなわりには妄想は激しいらしい。

俺より少し背が高くてスタイルのいい、谷間を強調したカウガールルックの熊耳茶短髪少女はニヤニヤ笑つてるし……、とりあえず紹介だけでも……。

「お、俺は大原拓真、アンタ達は？」

「ジュリア・コレット、ツキノワグマの獣人だよ。で、ローズの近くにいるのが」

「ローズ様の右腕にして護衛役、ソフィア・デュヴァリエだ」

「それは、違うでしょ、ラブラドールの獣人ソフィア・ローレンでしょって、いつの間にか眼帯まで着けてるじゃないのぉ、外してよ仕事じゃないんだからあ！」

何をする！　止める！　とか、かわいくないから外してえ！　などと騒ぎながら押し合いへし合いを繰り返す。

楽しそうだな。そう思つたとき、不意に後ろから声がした。

「お前が大原拓真か！　なるほど、確かに尻に敷きやすそうだな」「め、メロディアちゃん！　そんな事言つちや、拓真さんに失礼でしょ！」

振り向いてみれば、メイド服を着た、黒髪ショートの兔耳に赤色の目をしたそこそく肉付きのよい四肢に真理亞並みの胸をした女性が幼い女の子を肩車していた。

「私はウサギの獣人のシルヴィア・コレットです、メロディアちゃんのメイドです」

「メロディア・ベアトリス・ド・リシテアだ。私はこのフイリア王国より西のリシテア王国の王位継承者なんだぞ、頭が高い！」

メロディアはシルヴィアから飛び降りて声高に言い放つ。

俺は「そんなの国が潰れれば意味ないもんなあ」とみんなに同意を求めるために辺りを見回したら、みんながみんなメロディアに跪いていた。

「あ、あれ？ みんな？」

「さあ、拓真も跪くと良い。我がメロディア親衛隊の仲間に入れて上げようじゃないか」

何が跪くと良いだ、バカじやねえの？

俺はこうこう偉ぶるだけで何も出来ねえヤローが大嫌いなんだよな！

「やなこつた、人に物を頼むときはそれなりの態度を見せやがれってんだ」

「な、拓真！？ メロディアを怒らせちゃダメだつて！」

「そうだよお！ メロディアちゃんは、拓真ちゃんが思つているほど非力じやないよお！」

「ふふ、ふふふ。そうか、そなたは私の命令には従わぬと言つのか、なら！」

そう言うと、メロディアは俺の肩に飛びつき肩車の体勢を取った後に俺の頬に吸い付いた。

幼い……、つてかまんま幼女の可愛さを利用したおねだりかと思つたがまるで見当違ひのよつだ。

ちろつと舌で頬を撫でられた瞬間、常人なら軽く気絶しかねない程に激しい電撃が体全体を揺さぶり、なおもちゅうちゅう吸い続ける唇に体全体がゾクゾクと身震いするのだ。

決して興奮しているわけじゃねえからな！」

「おまえ、何が何だかわからん。おまえの口は、ふむ、上出来だな！」

卷之三

「そなたが命令に従わぬから、そなたの頬に忠誠の印を刻ませて貰つた。いわゆるキスマークだ。これでそなたは私が思うがままなのだ！」  
「によほほほほ！」

思うがままだと？ ふざけるな！

「てめつ、調子に乗るのもいい加減にしゃが  
うるさい、大人しく跪いて」

その瞬間、メロディアを掴み掛かろうとした体は直立、硬直して数秒間の間を経てゆっくりと跪いた。自らの意志関係なしにだ。

「によほほほほ！ これが私のスキル、絶対命令【コマンド・オブ・アブソリューション】なのだ！ 私が付けた忠誠の印から微量の電気を流して電気信号を操り私の思うがままに操る、ヒレクトネズミ専用のスキルであると同時に王族である私にふさわしいスキルなのだ！ によほほほほ！」

エレクトロズミって何！？ ピ チュウ！？

しかしまいったな、意志と関係なしに体を自由に操るスキルか……。

「どうやら、あんたをちと見くびっていたようだな」

「当然よ、私だって自己防衛の仕方は心得てるわ。だが今のご時世それでも足りないのだから、ローズ達の仲間になつて足りない分を補つてもらつているのよ」

「威張り散らすだけのわがまま姫つてわけじゃ無かったのか……。わかつた、俺もメロディア親衛隊に入隊してやるよ。それがアンタの望みなんだろ？」

「えええええ！？」

俺がそう言つた瞬間、周りが一気にガヤガヤ騒がしくなつた。俺がメロディア親衛隊に入ることがそんなにマズい事なのかよ。

「意外、わがままメロディアに進んで忠誠を誓う人がいるなんて……、私達以外にはいないと思つたのに」

「すごい決断です、拓真さんは凄い人です」

まあ、その半分がメロディアに向けての中傷だつたが……。

「俺は自分ではない、権力だけを振るつて自分の思い通りに人を操る形だけの偉いヤツが大嫌いなんだ。あんたもそういう人間かと思ったが、……あんたは違うみたいだな」

「当然でしょう！ 今や世界の危機に女王も能動的に動かねばならない時代なのですから！ ……では、忠誠の口付けをしようか。私と口付けを交わせるなんて世界一の幸せ者なんだからな！」

メロディアはにやつと笑つた後、目を瞑つて軽く顎を上げた。これ

が意味する」とは一つ……、だよな。

「そのままの状態で一、二質問に答えてくれ」

「うん」

「一つ、王族の口付けって普通手の甲じゃないのか？ 二つ、もしそれがリシシアの口付けだったとして、同性同士としてもそうするのか？ 三つ、大好きになったから舌入れていい？」

「その一とその二は、拓真とだからキスなのよ。いつも手の甲にするのよ。その三については、私とケツコソしてくれるなら入れても良いよ」

ひとしきり言い終えた後、メロディアは再び目を瞑り軽く顎を上げた状態で静止する。

その姿はとても可愛らしくまるでそこに天使がいるかのような佇まいだつた。

見とれて動けずにして俺を急かすように見つめる蒼碧の瞳は何処までも穢れない光を湛え、覗き込むことさえ罪とならん生まれながらの高貴さを物語るようだつた。

俺はそれを壊さぬようゆっくり慎重に唇を重ねて少しずつ舌を入れようと思つたのだが、メロディアは唇が重なった瞬間に両腕で頭をがっちり掴んで乱暴なぐらいに舌を入れてくちやくちやといやらしい音を立てながら見せ付けるように口内をなぶつしていく。

それから何分だつただろうか、満足したメロディアは俺を突き飛ばし、尻餅を付いた俺に間髪入れず抱きついた。

その拍子にメロディアの腰まで掛かる長い黄金色のストレートヘア一が顔に少しあたり、ふわっと甘い香りを醸し出して俺の鼓動をドキンと高鳴らす。

……俺は重度のロココンなんだな、きっと。

「初めてにして濃厚なディープキス、婚約成立だね

ふふふ、し

あわせ　たくまだあいすき（はあと）……おほん。今、我がメロディア親衛隊に一人の同士が生まれたわ！　名を大原拓真、みんな意地悪やイジメのないよう迎え入れてあげること…」

一同、はあいと無氣力な返事をメロディアに返すんだけど、俺の体の安全は守られるのか？

「尚、拓真はなかなかの男の子だから、欲求不満のないよう一滴も残らず搾り取るようにして…」

えええええ！　今天国から地獄へと突き落とされた気分だよ！　何？　意地悪やイジメは無いけど、無理矢理や無限地獄は大ありつてヤツか！　うわー、やっぱ入らなければ良かつた！　ってかみんな既に頬を真っ赤に染めながらにじりよつて来るんだけど！……と、ひとしきり心の叫びを並べ終えた、まさにその時激しい爆音と振動が俺やローズ達を襲い、直後照明が全て爆ぜて周りを一瞬で真っ黒に塗り潰す。

「なつ、何！？　爆発？　地震？」

「みんな！　メロディア殿を守りながらローズ様を守れ！」

「おー！」

「ねえ、普通逆じやない？　ローズを守りながら私を守るんじゃないの？　ねえ、無視しないでよ…」

「きやああああ！　助けて下さい！　拓真さん！」

「わーっ！　だからって後ろから抱きつくな！　分かったから胸を押し付けるなあ！　ってか大きくてむにむにしてて幸せ……」

きつと、俺とローズの蜥蜴の尻尾がコントロールルーム辺りで炸裂したんだろう。

各々が混乱に陥り、口々に叫ぶ中、突然に頭が痛み出す。

「ぐつ……！ あ、頭が！」

「！」の感じはあ、あの口が助けに来てくれたんだねえ

「たーくーまーさーまー！」

頭痛だけでなく耳鳴りまでしてきたな、と思った途端に強烈な衝撃と共に引っ付いていたメロディアとシリヴィアが吹き飛び、俺も何者かに抱き付かれて壁まで吹き飛んだ。

「恋する暗殺者<sup>ラヴアーベースアサシン</sup>、フランシア・ダークネス！ よもや生きる伝説殿が我らが義賊団《黒猫の舞》に所属していようとは……」

へえ、ローズを初めとするこの場にいる獣人はみんな義賊団《黒猫の舞》に所属しているのか……、って俺は義賊団に入団しちまったのか！？

「そつか、ソフィアは入団してからあまり日が経たないから分かないよね、後で紹介するね。それよりも、ヤツホー！ お久しぶりだね、フランちゃん この周辺地形はバツチリ頭に入ってるよね？」

「ええ、脱出経路までこの頭の中にインプットされてますわ。ああ、愛しの拓真様、お怪我はございませんか？」

自分から猛烈に突っ込んで来てよく由々と怪我は無いかつて訊けるよな、大丈夫な訳ねえだろバカヤロー。

「まあ！ 肘を擦りむいていらっしゃるじゃありませんか！ 一体誰がこの様な無礼な事を！」

「アンタだよ、アンタが突っ込んでさえいなけりや怪我なんかしなかつたよ

「流石は天然少女フランだよねえ」

「お黙りなさい！ 次言いましたらあなたの血液を一滴残らず吸い尽くしますわよ！ それよりも愛しの拓真様、せめて私めが傷を舐めて消毒だけでも……」

「いいよいよ！ こんな傷睡でも付けてりや治るかひ つたたたたあつー？」

「こいつ……、人の話をまるつきり聞いてねえ！」

しかも目が爛々と輝いてるし、めぢやくぢやに舐めまわしていくし、これじゃあ傷口を抉つていいようなもんじゃねえか！

「わかったわかった！ 舐めてもいいからせつ少し優しく舐めてくれ！ つたたたた！」

「はっ！？ 「ごめんなさい、私一応コウモリの獣人ですので、血を見たら興奮のあまりむしゃぶりついてしまうのですよー！」

と、鼻息荒く雄弁するフランシア。尚もベロベロむしゃぶりつくのは一種のイジメだろうか？

そう思つた瞬間、爆ぜ落ちたはずの照明が光を取り戻し、眼前には吐き気がするほどにおびただしい数の汎用型機械兵が待ち受けるように毒めいていた。

「フランシア！ 後ろ！ 機械兵が！」

「ペちゅや、ペちゅや、ペちゅ……。ん？ アレは……、愛しの拓真様の命を脅かす不届きな機械兵！ 成敗しますー！」

「その前に離そつな、右腕を。危険だから」

こんな状況に陥つても右腕を離そつとしないその根性は賞賛に値すると思つたが。

「愛しの拓真様がそう言つなら……」

「んー、さて拓真どうする?」

「とりあえず蜥蜴の尻尾で突破口を開く、後はなんとか囮まれないよう牽制し続けてくれ」

「そのような適当に見繕つたような作戦で大丈夫なのだろうか?」「ソフィアちゃん、囮された時はねえ、作戦よりも純粋に力が強い方が勝つんだよ?」

「むー、奴らは私の電撃が効かんからキライじゃ」

「あ、あの、私達はどうすれば……いい……んですか? 私達じやあの機械兵達には太刀打ち出来ません……」

「……お前らくらいおぶつてやるよ」

そう言つた瞬間にシルヴィアは背中に抱きつき、その肩にメロディアが跨つた。

シルヴィアの胸はスレンダーな癖に真理亜並みに大きいから、おんぶしたら健康的な四肢に絡まれながら魔性の果実が派手に潰れて……男の夢だよな! うん!

「脱出経路は私めにお任せを! 愛しの拓真様!」

「よし! 役者は揃つたことだし、プリズン・ブレイクといきますか! 蜥蜴の尻尾【リザードテイル】!」

一筋の炎が機械兵を包み込み、次々と爆ぜゆき、目の前の通路が開かれて俺達はただひたすらに走り抜ける。

目指すは牢獄の出口、生半可な覚悟じや決してたどり着けようのない場所。

しかも、今の俺はシルヴィアとメロディアを背負つてゐる、かなりのハンデになるはずだ。庇わなきやいけないし。

だがそれを差し引いても余りあるのが頼りがいのあるローズを始めとする義賊団『黒猫の舞』の皆さんと、何よりもシルヴィアの胸!

この胸の感触を知つたら、死ぬわけにはいかない！　いつかシリ  
ヴィアの大きな胸に抱かれるために！

……まあ、ローズ達とシリヴィアの大きな胸があれば、何が来ても

負ける気がしないもんね。

覚悟と希望とほんの少しの邪心を胸に秘めてシリヴィアの胸に酔い  
しれながらも、俺とローズ達『黒猫の舞』のメンバーは長い長い脱  
獄への第一歩を踏みしめる。

## 第五章 獄中の出会い（後書き）

次回、ホントのホントに脱獄劇を見せる拓真！  
ただ、道中に思いがけない出会いをする事になります！  
そして、義賊団黒猫の舞の実力や如何に！

## 第六章 脱獄と再会、そして惨状（前書き）

今回は拓真が脱獄するお話をなつております。

出口直前にして待ち伏せ、絶体絶命の拓真達が見たものとは！？

バトル、バトルの第六章（通算第39話）です。

## 第六章 脱獄と再会、そして惨状

「蜥蜴の尻尾【リザードテイル】！……くつ！」

「わわわ、きやあー、きゅ、急にしゃがみ込まないでくださいよお、

拓真さん……」

「またマナ切れか……、」これで二度目だぞ。全く、拓真の精神力の回復方法がキスだなんて……性のケダモノ。で、次は誰がキスをするんだ？」

非常に困った事になつた。この牢獄、名を『ティシア第一留置場は迷路のように入り組んでいて長いため、例え電気の檻をぶち破つたとしても心身の疲弊と迫り来る機械兵が脱走者を死に至らしめるという。

いつもならフランシアが間違つことなく出口までの最短ルートを機械兵に出会うことなく突き進めたのだが、盲田のフランシアを哀れんで視力を与えたのがいけなかつたのか、フランシアは最短ルートが分からなくなり、結果として迷い込むことに繋がつたのだ。

「『めんなさい、私が最短ルートを見失つたために愛しの拓真様を疲弊させてしまふなんて……、やはり私が視力を求めたから……』

「気にするなつて。出口は俺に任せて、フランは今日に見える世界を堪能しなよ」

「ああ、なんと御心の広い愛しの拓真様。これからは拓真様のお顔だけを見て、拓真様の唇だけに愛の接吻を捧げ続けますわ」

そう言つて田を瞑り唇を近づけるフランシア。

さつきからフランシアのことをフランと呼んでるのは、やつ呼ばないと歎みつかれるからである。

つてか、フランシアはさつきから鬼気迫る勢いで田をギラギラと輝

かせて近付いているんだけど……。

そんなフランシアに気圧されて俺もキスしようとした唇を近づけようとすると、慌ててローズが制止した。

「あわわわ、だつ、ダメよフラン！ あなたとキスしたら間違い無く拓真は眠るから！ ま、それはそれとしてさー、バカ正直に正面突破しても、得るものは少ないでしょう？ ま、拓真にキス出来るんだからこれ以上なんにも言わないけどね」

「いけません！ ローズ様！ ローズ様の唇は何時如何なる時も私のものと口が酸っぱくなるほど申しているはず！」

抱き付こうとしたローズをムリヤリ引っ剥がして抱き締めるソフィア。

「『』、ゴメンね、私そういう趣味は 』

「異性も同性も偉大なる愛の前では等しく同じです！ 彼のようなく賤な男と接吻なさる前に私と激しい愛の接吻を！」

「いや、だからそういう趣味は ふううん！？」

ソフィアは抗議するローズの唇を無理矢理奪つて、頬を真っ赤に染める。

本物のレズビアン、ガチレズだ。

「……ハア、ハア、なんと柔らかい唇でしじうローズ様の唇は」

「あ、いや……、うん、それよりも拓真、キスしようよ！ キス！」

恍惚な表情をして立ち去くしていいる隙にソフィアから離れるローズ。そのまま抱き付き眼前で舌なめずりした後に桃色の柔らかな唇を押し付けた。

やつぱり可愛いよ、ローズ。俺は黒猫の舞のメンバーみんな好

きだけど、やつぱりローズが一番大好きだ！

「私の極上キッスで元気出た？」

「ああ、大好きだよローズ！」

「えへへ……私も好き、かな。拓真」

「うわあ！ 敵がうじやうじや出てきたよお！」

その声と共にガシャガシャと音を立てて、砲台にそのまま足の付いたような機械兵が前から後ろから次々と現れる。

「脱獄者発見！ 直チニ始末セヨ！」

「作戦コードニ、一斉掃射ニテ目標ヲ駆逐セヨ。我等局地防衛型機械兵ノ実力ヲ見せ付ケテヤロウゾ」

小隊長の局地防衛型機械兵の命令と同時に照準を合わせてエネルギーを貯め始める。

このままでは四方八方からバズーカ砲を撃たれて、俺やローズはともかく他のメンバーは呆氣なく吹き飛んでしまう。

「拓真！ オマエの力、見せつけてやれ！」

「了解、俺から離れるなよ！ 詩音、アンタの魔法借りるぜ。大地の巨壁【ガイアウオール】！」

右手に茶色の粒子が集まる。そのまま右手を地面に叩きつければ前後にいる機械兵の目前に鉄製の床から鉄の壁が盛り上がる。ただただ床を盛り上げた訳じやない、土の魔力を練り込み強化した鋼鉄の壁！

無論、それを貫ける弾丸は存在せず、大地の巨壁に挟まれたこの空間は完全に安全地帯となつたわけだ、かなりうるさいけど。

「す、凄い！　お前、少し見直したぞ！」

「そうか？　全員いるな？　……よし、じゃあ機械兵のヤツらを撒くとしますか」

「天井に穴を開けるのね！？　義賊らしいわよ！　拓真」「義賊らしさって……。あとにかくこの狭苦しい空間じゃ直ぐに酸素なくなつてみんなお陀仏だからな。上に穴開けて脱出する、フランも分からぬなりに階段見つけては上へ上へと上がつて行ったからな。上に上がれば脱出ルートも見つかるだろ？」

言い終わる頃には天井の一部分を消滅させて上階に上がるよつて浮遊の魔法陣を描き終えていた。

「よし、俺にくつつけ、魔法陣からはみ出るなよ色々と面倒だからなあ」

「はーい！」

「……だからといって抱きつくなよ、胸が当たつてむにーつてなつてんだけど、ワザとなの？」

「そうだよ？　分からぬの？　……おお、力タくなつてますねえ」「触るな！　俺を男として見てるか？　俺を思春期の青年として見てるか？」

「思春期は動物で言う発情期だと聞いたのだが、私達と同じようにムラムラしてしうがないと聞いたのだが」

「それただの変態の戯言！　サラツと聞き流しちまえよ！　つか、お前ら全員発情期かよ！？　……だつああ！　だから触るなつてソコー！」

大小様々な胸をむにーつて押し付けられ、いろんな所で熱く濡れた感触を味わい、ハアハアとねつとりした吐息を浴びせられながら上階へと上がつていく。

……早くローズ達の発情期終わらないかなあ、と思いながら。

「俺の服が……、濡れ鼠なんだけど」「発情期だから……とつても濡れやすいんです。許してくれませんか？」

「いいよ、俺も幸せだつたし」「拓真つてえつちい」「つるせえ、加害者が語るな」

辺りを見回すと、エタノール臭漂う白ベースの部屋に様々な色をした液体の入ったフラスコが大小様々に幾つかの棚に飾られていた。恐らくは研究室か実験室なんだろう。

部屋の中央には実験台、その側にはこれまた白ベースの機械兵の残骸。実験台の上の人でも改造してたのだろう。上階に上がった瞬間、人をいじくっていたから壊してやつたわ。

「愛しの拓真様！ 実験台の上に人間の男がタオル一枚で気絶していますわ！」

「分かつてゐる。……いや、やつぱりコイツビつかで見た顔だな」「知り合いなのか？ 拓真」

「そんな氣がするだけ。ただの他人の空似かも知れないし……、起こして確かめてみるか。覚醒の火炎【ウェイクファイア】」

左手に火炎弾を作り実験台の上の人に向かつて投げつける。実験台の上的人はビクンと小さく跳ねたあとに一瞬赤く輝いて、ゆっくりとその臉を上げた。

「うう……、ここは？ お前……もしかして……」

「大原拓真」

「そう！ 拓真！ 覚えていないのか？ 小学六年まで一緒に過ごした龍ちゃんだよ！」

「龍ちゃん……？ ああ！ 龍之介か！ メカニック担当の龍ちゃんか！」

そう、思い出した。アイツは小学生時代の友達、伊藤龍之介<sup>いとうりゅうじやく</sup>先生達の大事な機械をことある度にバラしては改造する、学校で一一を争う問題児だつたつけな。

そんな龍之介も卒業寸前に行方知れずとなつたが、まさか別の世界に飛ばされていたなんてな……、しかも龍之介の四肢はなんか機械になつてるし……、さっきの機械兵にでも改造されたのだろう可哀想に。

「覚えてくれていたか！ あつはつは！ と、それよりもここはなんか寒いなあ、……うおあ！ いつの間にこんな姿に！ すまないが拓真、なにか服を貸してくれないか？ あ、そこにいる奥様方は後ろ向いててくれないか？ さすがに男の裸なんて見たくないだろ？」

そういう龍之介に黒のワイシャツと青いジーンズを投げ渡した。龍之介は衣類を宙に投げると一瞬でその衣類に身を包んだ。龍之介は仮面レスター顔負けの早着替え名人だつけなあ。

「で、さつきから気になつてはいたが、この両腕両足は何なんだ？ ん？ 右の手のひらに発射口らしき穴があつて腕の部分に可動部分があるが……」

始まつたよ、メカオタク龍ちゃんの機械解析。この状態になつたら自分が満足するまで機械を弄くり回すぞ、例え自分の体の一部でもな。

「ねえ、龍之介って人、なんかブツブツ言つてるんだけど、いいのかしら?」

「気の済むまで言わせてやれば良いと思つよ」

「拓真、なんか弾丸みたいななのないか? バズーカ砲の弾丸みたいな」

「こんなの?」

「そう、それだ。これを可動部分の内部にセットして、可動部分を閉じる……、で前に腕を構えて、放つ!」

次の瞬間、轟音と共に扉が吹き飛び近くにいた機械兵をも誘爆させて消し飛ばした。大した威力だよ全く。

「うわあ……。ハンパないな、そのバズーカ砲」

「ああ、機械の軍団に捕まつた時はどうなることかと思つたが、こんな凄いものを付けてくれるとは! おっと、空になつた弾薬を装填部から取り出してつと、不思議と違和感もないシコイツをバラして内部構造を見てみたいぜ!」

「そんな暇はない! いつ追撃が来るか知れぬからな! とにかく今はここを脱出する事を最優先に考えるべきだ!」

「脱出ルートは分かるか? 龍之介」

「ああ、ここに運ばれる時うつらうつらはしてたが出入口の位置は把握してる。さつき壊した扉を抜けてまつすぐ行けばすぐだ。しかし、月日が流れれば呼び方も変わるものなんだな、虚しいぜ……」

ははは、と切なげに笑う龍之介。しかし切り替えが早い龍之介、すぐに扉をまっすぐ見据え、「やつとの自由があ!」と拳を打ち合わせて氣合いを入れ直す。あの様子じや両腕の痛覚は完全に消え去っているのだろう。

「ああ、牢獄なんて息の詰まる場所、俺には似合わねえよ！」

「お、随分やる気だな、拓真。まるで小学生時代とは別人だな」

「小学生時代はどんな人だったのさあ、龍ちゃん」

「かなりの根暗シャイボーイだったよ、昔の拓真是。あの惨劇の後じや仕方ないか」

十年前の惨劇が脳裏にフラッシュバックする。

口内に広がらんとする胃液をなんとか飲み込み、ラグナロク（↙e ↘・日本刀）を右手に装備するが、その瞬間に激しい激痛が右手を貫いてラグナロクを取りこぼす。

「どうした！ 拓真！」

「ゼエ、ハア、いや……、何ともない、痛みは収まった」

痛みに耐えかねついた膝を再び上げて、先程取りこぼしたラグナロクを拾い上げた後に腰に出来た漆黒の鞘に納める。

「拓真、何事も体が資本なんだぜ、もっと体をいたわりなよ」

「そんな時間がありや良いんだけどな。行こうぜ、出口はすぐそこだ」

「無理は禁物だぞ。捕獲される危険性がない今、私達だって戦力になるんだ。無理だと思つたら遠慮せずに私達を頼れ」

「肝に命じておくよ」

ラグナロクを再び抜き、警戒しながら壊された扉に近付く。  
異常がない事を確認するとローズ達を手招きし、再び警戒しながら歩を進めていく。

「凄いねえ、足取りや仕草はまるでプロの傭兵さんだね」

「愛しの拓真様に守られる……、ああー、今最高に幸せですー！」

「モテモテだな、拓真様」

「もうこの件については余り語らないでくれ、頭が痛い」

そうして歩を進めていく内に、俺達は広間らしき天井の高い大部屋に辿り着いた。

「見ろ！ あそこが出口だ！」

「ふええ、拓真さん……。歩いてないのにへトへトですぅ」

「もうちょっとじだ、辛抱してくれ。負担の無いように駆け抜けるから」

「はい、『迷惑かけてすいません』……」

右足に力を込めて地面を蹴り、風を搔き分けひたすら出口へと走る。ローズ達も後を追いかけ、俺が広間の中腹へと差し掛かった瞬間、来た道と出口を塞がれ、周りに様々なタイプの機械兵が現れる。

「まんまと敵の思惑に乗せられたってわけか」

「仕方ないな、ヤツらを風漬しに壊していくか！ シルヴィア、すぐ終わるからちょっと降りてくれない？」

「分かりました。頑張って下さい、拓真さん……、その、キスしませんか？」

「え、あ、よろしく頼む、シルヴィア」

先刻のようにシルヴィアを落としてしまひとのないよつよつくりと腰を下ろし、シルヴィアを何事も無く降ろす。

そしてゆっくりと立ち上がりながら振り向き既に立つて目を瞑つているシルヴィアの唇を奪う。

その際、両手でシルヴィアのメロンを包み込みよつて掴んで、優し

くしつかりともみもみ。

すごく幸せな気分になり、シルヴィアの吐息にもいやらしさが見え始める。

「ん、ふう、くちゅ、ふむ、ぷあ……。そんな、拓真さんつ……、感じちゃうじゃないですかつ、ああん……」

「あ、その、『メン』

「下着が濡れちゃいましたよう、責任……取ってくれますよね？」  
「お楽しみの所悪いが二人とも、今置かれている立場をもう一度考えてみよくな」

おっと、シルヴィアとのお楽しみは機械兵を全滅させてからだな。  
精神力も回復したし始めますか。

俺はまず始めて無数の小さな火種を作り、正面の機械兵にぶつける。  
素早い火種の連撃、火炎の銃弾【ファイアバレット】だ。

正面の機械兵は見事に爆裂し、周りの機械兵は次々と戦闘準備に入る。

そんな機械兵を嘲笑うように俺は次の手を、そこそこ大きな火炎弾を真上に放り投げて爆散させることで周囲360度の機械兵を爆散した火炎弾片で吹き飛ばす。

烈火爆散弾【プラスチブレイズ】だ。

これで機械兵の大半が塵と化しているはずなのだが何故だろう、一  
体たりとも破壊出来てない。

「なによつ、大規模な魔法繰り出したくせに一體も壊れて無いじや  
ない」

「いや、残骸が散らばっているから壊れてないはずはないんだが…

…」

「無駄口を叩くより身構えろ！ 反撃が来るぞ！」

龍之介のその言葉と同時に次々と大小種類様々な銃弾が視界を埋め尽くす程に乱れ飛ぶ。

あんなに銃弾が乱れ飛んでいたらどんなに躲そうとしてもどれか一つは必ず当たるぞ……！

「こJの程度の弾幕なら……！ 超電磁防御壁【エレクトロニックシールド】」

数多の弾丸が俺達に迫る中、メロディアのか細い声が辺りを優しく包み込んだかと思ったら、黄色い稻妻の網が俺達を取り囲んで迫り来る弾丸を相殺し始めたのだ。

爆音が耳をつんざくも体への被ダメージは一切ない、……これがメロディアの実力、小さいくせになかなかの使い手だな。

「いやああああ！ ……あれえ？ 生きてる？」

「Hラい！ エラいよメロディア！」

「そうでしょ！ もつと褒めていいのよ？ でも、想像以上にすごい弾幕、一分保つかどうか分からぬいわ」

「それで充分だよ、ありがとなメロディア。非弾丸領域【アンチバレットファイールド】」

右腕を真上に掲げて紫の粒子を大量に集めて一気に放出、一つ一つが微細な重力となり弾丸に纏わり付いて地面に引きずり落とす。いつしか爆音も静まり返り、超電磁防御壁を解除した時、そこには無数の弾丸が地面に釘付けにされている様子が見て取れた。

俺は指を弾くことでそれを放ったヤツの真上にテレポートさせる。非弾丸領域は弾丸をただ地面に縛り付けるだけで、推進力や爆散性能を削ぎ取らない。

だから弾丸を真下に向け、非弾丸領域を解除すれば……。

「ナツ……！ バカナアアアア！」

「理解不能！ グアアアア！」

銃弾は推進力のまま機械兵の心臓部を貫き、榴弾は炸裂し機械兵を木つ端微塵に破壊する。

ま、軽く本気出したらこんなものさ。

「凄いですわ！ 愛しの拓真様！ たった一手であれほど多くの機械兵を破壊するなんて！」

「ゼエ、ハア……、くつー、うぐううううー、がああっ……！」

「拓真！ おい、拓真やつぱりなんか調子が変だぞ！」

「大丈夫だ、痛みは直に収まる……っく！」

「これからはテメエを闇が蝕んでいくんだからな！」

闇属性の魔法。それだけじゃなく闇に関連するもの、ラグナロクとかまだ分からぬけど暗闇とか、眠るために瞼を瞑つたとしても浸蝕されていくのだろう……。

ただ、ラグナロクを三度掘んで闇属性の魔法を使つてもまだ表面上に現れないことから、浸蝕のスピードは極めて遅いんだろうな。

「拓真、機械兵のヤツらは壊した後から次々とテレポートで補充されていくようだぞ」

「ああ、だからさつき一体も壊されてなかつたように見えたのね」

「関係ねえ！ だつたらそれも壊すまでだ！」

俺はラグナロクを鞘に納めたまま一番近くの機械兵に接近、武器を構える間も与えずに抜刀逆袈裟斬りで一刀両断。

それでも武器を構え、切り裂き、殴打し、貫こうとする機械兵の攻撃をひらりと軽く躰し、次々と切り裂いていく。

「くそ！ 埼が明かねえ！ ……くつ！ 蜥蜴の尻尾【リザードテイル】！」

「きやあああ！」

シルヴィアに機械兵の凶刃が迫る、対する俺は蜥蜴の尻尾を放ったばかりでシルヴィアのいる方向に蜥蜴の尻尾を放てない。

迂闊だつた、目の前の機械兵を殲滅する事に熱を入れすぎたがために後方のローズ達を疎かにしちまつた、情けねえぜ。

凶刃がシルヴィアの眼前まで迫りもうダメだと思った、その次の瞬間、刃が機械兵ごと爆ぜ飛ぶ。

「女の子達は俺に任せな！ あんたは気にせず一体でも多く機械兵をやつっけてくれ！」

ありがとう龍之介！ そう言つた瞬間、胸から黒い刀が飛び出る。次いで乾いた銃声が俺の体に無数の穴を開けたかと思えば、機械兵が次々と突つ込み剣を突き刺して爆発。

当然、俺の体は完全に吹き飛び塵も残らず、その爆風はローズ達や龍之介に及び、ローズ達を天井近くまでブツ飛ばした。

「ぐつ……、う、拓真！」

「拓真が……死んだ？」

「いやああああ！ 拓真さあああん！」

「勝手に殺すな、生きてるから。まあ体が吹き飛んじゃ誰だつて死んだなつて思うだらうけどさ」

そつ言い終わる頃には黒い粒子がローズの近くで人の形を成し、俺の体が形成されていく。

「拓真！ 生きてたのね！？」

「だから死んでないってば。死ぬかとは思つたけどな。しつかし、本当に埒が明かないな。壊しても壊しても次から次へと現れる。この猛攻じや精神力回復もままならないし、これじゃあ全滅は時間の問題だぞ」

「くそ、何かこの状況を打破する一手はないのか……！」

「ふふふ……、なら私たちに任せなさい！」

突如として上空から謎の声がする。何事かと思つが早いか、どこかで聞いた音楽と共に、氷槍や炎弾、さらには岩塊が降り注がれた。

「な、なんだ？ ここの怒涛の魔法攻撃は……、夢でも見ているのか？」

「すうじい……、拓真でも手こずった機械兵の軍団をいとも簡単に……」

「ここの魔法は間違いない！ アイツらだ！」

「ダーリン！ 助太刀に来たわよ！」

聞き慣れした声にこの呼び方、間違いない！ 真理亜が助けに來てくれたんだ！ 愛子も桜もいる！ ……いずれもなんか凄い露出度の高い衣装を身に纏つているが……。

「みんな、あの決め台詞いくわよ！ ……燃え盛る魅惑の赤い情熱！ ローズレッド！」

「ここの服装にあんなポーズ……、恥ずかしすぎる。でも拓真のため……。い、凍てつく蠱惑の青い神秘！ コスマスブルー！」

「真理亜さん、この衣装はスレンダーな私と愛子さんを侮辱しているんですか？ 真理亜さんはスリングショットで最大限に魅力を引き出しているし、愛子さんはブルーのビキニだからまだいいものの、私は白のスクール水着ですよ！？ 魅力の一欠片もありませんじや

ないですか！ でも拓真さんのためなら仕方ないですよね……。純潔無垢の白い純情！ リリー・ホワイト！」

これまた聞いたことがある決め台詞を口にし、いやもう俺、殆ど分かつちまつたんだけどね。

「ふたりはグラビア！」

ほら、どうりで見たことある服装だと思った訳だ。

あれは十年もの間変わらない人気を誇り、今も女児アニメの定番として君臨している、『ふたりはグラビア』シリーズ第一作目の「スプレなんだな。

奥様方からは非難中傷が耐えないと、それでも数多くの人気とその面白さから未だに打ち切られてないのだが、あんな過激な服装でどうして日曜の早朝7時30分からはじまるアルティメットヒーロータイムとして仮面レスラーシリーズやハイパー軍隊シリーズと同じ枠内に君臨出来ているのが分からないのは、俺だけじゃ無いはずだ。ってか、愛子が顔を真っ赤にしてまともなポーズ取れてないぞ。

「大丈夫？ 怪我はないわね？ ダーリン」

「ああ、こつちは大丈夫だ、それよりも愛子の心配をしたらどうだ。精神に大怪我してるぞ。大丈夫か？ 愛子」

「ダメ！ …… こつち見ないで、こんなフリルが付いた水着なんて恥ずかしすぎる」

「拓真さん！ …… 私の水着姿はどうでしょうか？」

「……ゴメン、コメントのしようがない」「すじいショックです！」

そんなやり取りを交わす間にも大量の機械兵が飛び付き様々な武器を振りかざす。

こんな危機的状況にもかかわらず、真理亞達は落ち着き払つて呪文を唱え始める。

そんな慌てない程の自信が……、ビート?

「劫火よ、全てを貫き焼き尽くす槍となれ！」

「猛る雪風より具現せし、凍てつく刃の乱舞を」

「大地より現れよ！ 全てを打ち碎く巨大な大砲！」

機械兵が眼前に迫る、このままじや間に合わない！

俺は急いで稜の防御魔法、光の聖域【ホーリーサンクチュアリ】の呪文を唱えようとする。

呪文を唱え終え、後は光の聖域を発動するだけとなつた、次の瞬間に驚くべき出来事が起きたのだ。

「爆穿槍炎！」  
「氷刃霜雨！」  
「巨岩戦砲！」

三つの魔法が合わさつて一つの巨大な弾丸となつて近くの機械兵に着弾して炸裂、飛びかかる機械兵を一掃したのだ。

「す、すげえ……、これが真理亞達の実力。あんなに手こずった機械兵を一蹴しやがった！」

「なんと『テタラメな力なんだ……、敵に回したらかなり厄介な相手になる事は間違いない！』

「ヒ、怯ムナ！ ナントシテモ討チ取ルノダ！」

「もう、粘着質な殿方は嫌われますわよ！ みんな！ 例の必殺技やるわよ！」

「気が進まない……、でも、やる」

「アレですね！ 了解です！」

真理亜達は互いにアイコンタクトを取った後、真理亜の右手は愛子の左手を、愛子の右手は桜の左手を、桜の右手は真理亜の右手を握り締め、互いがしっかりと握ったのを確認するとそれを天に向けて掲げた。

何か巨大なものを受け止めるには一人足りないぞ。

「拓真あ、今から何やるのかな？」  
「知ってるような、知らないような？」  
「穢れし魂に縛られた肉体よ！」  
「今、聖なる光に照らされその呪縛を解放せん！」  
「今、咲き誇れ浄化の花！」  
『グラビアドリームズブルーム！』

真理亜達が決め台詞と共に必殺技を放った時、その足元に赤、青、白が規則的に並んだ花弁が現れて次々と機械兵を飲み込んでいく。遂には機械兵も現れなくなり、機械兵は完全に消滅して広場には俺とローズ達と龍之介、それと『ふたりはグラビア』のコスプレに身を包んでいる真理亜達だけとなつた。

「……嘘でしょ？ 拓真ですら手こぎつた機械兵を全滅させるなんて……」  
「すげえよみんな……、真理亜はすげく魅力的だし、愛子はすげく素敵……。桜は、とっても可愛いよ」  
「ありがとうございます！ 拓真さん！ では、あの邪魔な岩、壊しますね」

壊せるのか？ と訊ねる前に桜は両手を前に出し、そのまま黙つていると岩がひとりでに崩れていった。

「さ、行きましょっか」

「お、おひ……」

斯くして、機械兵の襲撃を真理亜達の協力を得て潜り抜けた。  
……が、なんであんな過激な服装で現れたのか理解が出来ないのは  
俺だけじゃ無いはずだ。

「へえ！ そのコスプレにはそんな能力があるのか！？」

「ええ、ダーリンの情欲を刺激して何度も私の中にどっぴゅんでき  
きる能力が！」

「違う。魔力と精神力を増強するパワードスーツ」

出口に通じている廊下にて、俺は真理亜達に今着ている水着の事を  
レクチャーしてもらつている。

真理亜が言うには世紀の発明家にして、大山財閥の近未来的技術を  
支えているらしい平賀源之介の伯父である発明の父と名高い平賀奇  
跡が作り上げた欲情刺激装置だと、愛子が言うには平賀源之介が紅  
音の協力を得て作り上げた筋力や魔力、精神力の増強装置だと言う。  
眞偽の程は彼女達にしか分からぬ。

まあ、きっと真理亜の言つてることはデータラメなんだろうな。  
紅音が協力してるならこんな過激なデザインになるのも頷ける。

こんな戦場のド真ん中に水着というド派手な服装で助けにきたのも、  
これで納得がいく。

……ただ、俺のいた場所が戦場のド真ん中だったということを知ら  
なかつただけかもしないけど。

「おひ、そろそろ出口みたいだぜ」

龍之介の言葉に安堵した俺は抱き付こうとする真理亜を振り払い前方に見える光へとひたすら突き進む。その先で見たものは

「ああ！ やつと出口だ！ つて……、んだよ。……」  
「待つてダーリン！ ……ふふふ、捕まえたわよ！ さあ、二人の熱いアバンチュールを……、つて言つてられないわよね」「おーい、拓真あ！ はあ、はあ……急に走り出してどうしたんだ？」  
「うつ、わー……、噂には聞いてたけど、想像以上にヤバい感じなのねえ」

そびえ立つ鉄の城、その周りには同じく鉄製の建物、そこから人が出てきては機械兵により惨殺される。  
眼下は一面血の海と化していた。

「うつ……、真理亜、離れて」「え、あ、分かつたわ」「そんな……、このような事が……、現実に……」「まさしく地獄絵図」

十年前の惨劇が脳裏にありありと思い出される。  
腹を抉られた死体、四肢を切り取られた死体。  
陵辱の果てに望まぬ子を孕まされ、人生を狂わされた人もいれば、全く楽しめないからと言つだけで見るのも厭わしいような骸に変えてしまつたりと、いつしか周りは死体が散乱して今と変わらないような惨状だった。  
ムナクソ悪いぜ、胃袋をひっくり返された気分だ。

「大丈夫か？ 拓真？ 何か忌まわしいものでも見たような勢いで

吐いてるな

「大丈夫、心配には及ばないから。優しいんだな、メロディアは」「部門の管理は上に立つものの義務だからな」

「どうやら昔の事を思い出しちまつたみたいだな。無理するなよ、拓真。見るに耐えない物なら田を逸らしてもいい、どんなにすごいヒーローでも全てを救うことは出来ないんだからさ、力があるからつて全て背負い込む必要はないんだよ」

「……ダーリン」

水の入ったペットボトルを作成して開封、少量の水を口に含んで口を軽く漱ぐ。

そんな俺を真理亜は優しく立たせて優しく抱き締める。

「あなたにどんな過去があつたかなんて私には分からない。でも、私はあなたにどんな過去があつてもこゝやつて抱きしめてあげるから」

「真理亜……」

「帰りましょう、香織の所へ」

俺は感慨のあまり目を瞑る。

次に目を開けた瞬間、そこにはいたのは真理亜ではなく、ローズだった。

「え？ ローズ？」

「真理亜達には助けてもらつて悪いんだけど、拓真はもう少し借りてくれ」

「どういふことよー、ちゃんと説明して！」

「今の義賊も、こいつ機械兵を倒せる戦力が欲しいのよね。しかもカッコいいしなかなかの肉食だし」

「うんうん、機械兵に殺されたらお宝をゲットしても意味がないか

らねえ

「突然ムラムラしだしても、拓真がいれば安心つてわけね！ ローズ！」

「そうよ、ソフィア！ 眼帯外したアンタは良いこと言ひござない！ ……ま、とにかく拓真には道中の護衛役として働いて貰おうかなって考えてるのよね。フラン、拓真にぶちゅうといつちやつといわよ！」

少し前にフランシアがキスしようとしたら慌てて止めたばかりじゃないのか？ そう思う間にもフランシアは頬を赤らめて抱きついてきた。

この世界にはブラジヤーという概念が無いらしい。興奮しきったフランシアの胸の先っぽがモロに当たつてとても生々しい。

「あなたに接吻できる」の時を首を長くして待ち望んでいましたのよ。さあ、今度こそ愛の接吻を！」

「拓真から離れて！ 氷連槍ひょうれんそう」

「ジュリア、頼むわよ」

「了解。滅魔の咆哮【アンマジカル・シャウト】！」

愛子は自分の身長くらいの氷で作られた槍を三つ作り、まとめてフランシアへと投げつける。

一方、ジュリアは決して慌てることをせずにただがおー、と威圧感のまるつきりない雄叫びをあげただけだ。

これほどに勝敗の見え透いた勝負が他にあるだろか、あらうはずもない。なぜなら愛子は害をなすモノを排除するのに何の躊躇もないからであり、フランシアには悪いが串刺し決定だろつ。

しかし、結果は予想を180度裏切つて見せたのだ。

複数本の氷槍はフランシアの数メートル前で爆碎し、その破片すら飛来しない。

さつき発動した滅魔の咆哮が働いたのだらう、ジユリアの滅魔の咆

哮【アンマジカル・シャウト】恐るべし。

愛子に命を狙われたフランシアは爆碎する氷槍を氣怠げに見て、関係ないという風にこちらに向き直り、まるで愛に飢えた狼のように食らいつくようなキスをする。

舌をねじ込まれたりしている内に抗いようもない睡魔が襲いかかる、まるでクロロホルムでも嗅がされたみたいな。

「あ、あれ……、どういう……事だ？ 力が、入らない……？」

「ごめんなさい、愛しの拓真様。私は嘘をついていましたの、確かに大きなカテーテリーの中では私はコウモリの獣人です。しかしながら、厳密に言えば私は一般的なコウモリとは似て非なる存在、獲物の生き血を一滴残らず吸い尽くす為に体内にクロロホルムの生成器官が作られたクルムコウモリの獣人です。そのため熱い接吻の際に交わした私の吐息の大半は、クロロホルムで出来ていますの」

どうりで……、時間経過と共に力が抜けていくわけだよ。

フランシアとのキスはクロロホルムの入った瓶を直接嗅ぐようなものなのだから。ローズがあの時フランシアを制止したのもいまでは分かる。

ヤバいな、こう考えている内に意識が混濁してきた……。思考能力もかなり低下してゐるだろう。

「大原拓真は私たち黒猫の舞が確かに頂戴したわ。『きげんよう、黒猫に翻弄されちゃつた哀れな子鼠ちゃん』

ローズがそう言い終えた瞬間に俺の意識は完全に闇へと落ちていった。

俺、今度はどこに連れて行かれるんだろう……、せっかく龍之介や真理亜達と再会出来たのに……。

香織のいる所へ戻るのはまだ先そうだな……、うん、頑張りつ。

## 第六章 脱獄と再会、そして惨状（後書き）

次回！ 拓真がローズ達にさらわれて、手ぶらのまま香織達の所へ向かうが……。

そして、ローズ達にさらわれた拓真の命運は……！？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0573m/>

Doors To The Another World

2011年10月7日00時43分発行